欲望の王と無限の空

間上 通

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
欲望の王と無限の空

【Ｎコード】
Ｎ３９７７Ｖ

【作者名】
間上　通

【あらすじ】
　グリードとの戦いを終えた少年、火野英治。彼はある日異世界に飛ばされる。その世界は女尊男卑の女性にしか使えない兵器、ＩＳが存在する。英治はその世界で何をみるのだろうか。
（この小説はＩＳと平成ライダーのクロス物でオリ主ものです）

異世界と学園とＩＳ（前書き）

頑張ってこの小説こそ完結させたい。

異世界と学園とＩＳ

「ん……ここはどこだ？」

いきなりだけど、俺、火野英治は気が付けば知らない場所にいた。全てのグリードを倒し、オーズの力も封印して旅に出たんだ。でも、旅の途中に謎の光に飲まれるとここにいたんだ。

「う～ん、ここはどこなんだ？　ん、どうしてこれが！！　それにこっちは何だろう？」

ポケットに入っていたのは３枚のメダル。もう目にすることはないと思っていたもの、コアメダル。タカとトラとバッタがあった。だが、オーズドライバーはなくて、代わりに見たことのないブレスレットをつけていた。全然心当りがないんだよな、これに。

「そこの男、ここで何をしている」

不意に後ろから声がした。声の主は黒いスーツを着た美人で、緑色の髪をした中学生くらいと思う人を連れていた。

「えっと、何をしているってゆうか、気がついたらここにいたんです。それよりここはどこなんですか？」

「ここはＩＳ学園だ」

怪訝な顔をして答えられた。ＩＳ学園？　何だろう、それは？

「ＩＳ学園って何ですか？」

「何？　どうやら面倒なことになっているようだ。詳しく話を聞かせてもうおう」

「織斑先生！！　彼が腕につけているのはＩＳでは！？」

ＩＳって何？　そのことを聞くと、何を言っているんだって顔をされた。これでも世界を旅しているから色々と知っているつもりなんだけどなあ。

◆◆◆

『ＩＳ』、正式名称『インフィニット・ストラトス』。宇宙空間での活動を目的として開発されたマルチフォーム・スーツ。

しかし、本来の目的である宇宙進出は全く進展がなく、ＩＳはその高いスペックを持て余していたそうだ。そのスペックにより、ＩＳは兵器として使われることとなったんだけど、各国の思惑から、ＩＳはスポーツとして使われるようになった。結局の所、ＩＳは飛べるパワードスーツに落ち着いたみたい。

しかし、ＩＳは大きな欠点を抱えていたんだ、『ＩＳは女にしか使えない』ということ。そうなると、世界はＩＳを使える女性が偉いという風潮になる。いわゆる、女尊男卑ということになる。

「これがＩＳだ。まさか、異世界の人間と会うことになるとはな」

ＩＳの説明を聞いた後、俺は何度も何度も自分ですら分かっていない現状を説明した。取り調べをした織斑千冬さんはいい人で、俺の目を見て「嘘をついている目ではないな」と言ってくれた。まあ、１番の決めたになったのは俺の免許だった。俺は１６歳だけど、すぐにバイクの免許を取ったんだ。そこに書かれている日付とここの日付は違う。この免許が偽物ではないことが照明されたからかな、話を信じてもらえたのは。

「織斑先生！！　やっぱり彼が持っていたのはＩＳです。それも登録されていないコアの」

部屋に飛び込んできたのは最初に織斑さんと一緒にいた山田真耶さん。中学生じゃなくて、ここの教師だったんですね。ごめんなさい。山田さんは俺が持っていたブレスレットの解析をしていたみたいで……って、それＩＳだったの！？

「火野。どうしてお前はＩＳを持っていたんだ？」

「わからないです。気が付いたらそれを持っていたんで……」

「あと、このＩＳの名前は『ライドオーズ』で、操縦者には火野君が登録されています」

「えっと、ＩＳって女性しか使えないはずなんじゃ？」

そう聞くと、織斑さんはため息をついて一言。

「あいにくだが、私の弟もＩＳを起動させてしまった。例外がないわけではないようだ」

結局、俺はこのＩＳを起動させてみることとなってしまった。どうなるんだろ、俺？

◆◆◆

アリーナに連れてこられた俺は、ＩＳの展開のイメージの説明を受けていた。俺がこれを起動させれるか、どうかで俺の扱いが変わってしまうみたい。どっちになっても怖いなあ。

「さて、やってみますか。ライドオーズ、起動」

俺の体に粒子が集まっていくようで、それが体を包むアーマーを形成していく。何秒かかかったけど、俺は濃いグレーの装甲を身に纏っていた。装甲が展開されたのは肩、胸、腕、腰、脚に頭。名前にオーズってあったからカラフルかと思ったけど、そうでもないようだ。

「起動したか。火野、武装を確認してみろ」

武装は…ここか、一覧にあったのは剣が1本。名前は『オーズカリバー』で、斬撃も飛ばせるみたい。

「武装の展開はできるか？　最初だから声にだして呼んでみたほうがいいかもしれないな」

「そうですか。来い、オーズカリバー！」

ＩＳが展開されるように光の粒子が集まり、剣の形となる。これがオーズカリバーって、メダジャリバーじゃん。

「ふむ、次は飛んでみろ。ああ、こっちのイメージは…」

「大丈夫です。そっちはなんとなくイメージできますから」

イメージするのは赤い翼。炎を纏い、空を舞う不死鳥を。次の瞬間、俺は宙に浮かんでいた。そして自由に飛ぶ。

「火野君は凄いですね。初めてなのにあんなに自由に空を飛べるなんて」

「ああ、だが妙でもあるな。あるで火野は何かで飛んだことがあるようだな」

織斑さん達が話している間も俺は飛ぶのを続けていた。オーズとは違い、直接、肌で風を感じるのは心地よかったから。

「火野、最後だ。お前のＩＳの適正を見る。山田先生、お願いします」

「え！！　私ですか…はぁ、わかりました。準備してきます」

しばらく待つと、山田さんが緑の装甲を纏って現れた。データによると、山田先生が使っているのは『ラファール・リヴァイヴ』というものらしい。それがどんな機体なのかわからないけど。

「火野君、よろしくお願いしますね」

山田さんは微笑みをこちらに向けてくる。こちらも「お手柔らかにお願いします」と返しておいた。

「それでは、始めろ」

「いきます」

織斑さんの掛け声とともに、山田さんは真剣な目付きになって、アサルトライフルをこちらに向けてくる。それをかわして切りかかるが、よけられる。正直、ズレを感じるっていうか、思考と反応にタイムラグがあるっていうのかな。

だが、そんなものを気にしている余裕はなく、山田先生は攻撃を続けてくる。投擲されたグレネードをよけると、そこにはアサルトライフルを構えた山田さんが。

「しまっ――――――――」

ドンッドンッ！

アサルトライフルの直撃を貰い、バランスを崩して地面に激突する。

こっちのシールドエネルギー、ようするにＨＰみたいなものは残り少ない。いちかばちか、オーズカリバーの斬撃にかけてみるか。

「はぁぁあああああ」

構えるこちらを警戒しながら、一定の距離を保つ山田さん。彼女は銃口を向けてくる。

「セイヤーーーー！！」

俺が剣を振るのと、引き金が引かれたのは同時だった。

鳴り響くブザー。結論から言うと、俺の負けだった。俺の最後の一撃は当たって、大ダメージを与えることに成功したがシールドエネルギーを０にするには至らなかったということだった。

「火野、お前はＩＳ学園に入学することになった。お前が何であれ、上は男でＩＳを使える者のデータが欲しいようだ」

ＩＳ学園は寮のため、寝る場所はあるし、入学するとある程度の資金援助はあるそうだ。行き場がない俺にとっては断る理由もないため、受け入れることにしたんだ。

ただ、問題は織斑さん改め織斑先生の弟以外は女子だ、ということ。色んな意味で大丈夫かな。不安になってきた。ちなみに入学式は１週間後で、それまでにＩＳの基礎知識を叩き込まれることになって、泣きそうになったのは別の話だ。

◆◆◆

入学式当日。俺はイレギュラーであるため、クラスへの合流は自己紹介の時間からになった。まあ、下手に混ざれば大変なことになるんだろうな。で、俺は織斑先生と一緒に教室に向かっていた。俺

のクラスは織斑先生が担任で、山田先生が副担任の1年1組。織斑先生の弟、織斑一夏も同じクラスなので正直、ホッとしている。男子1人っていうのは絶対辛いよな。

「私が呼んだら入ってこい」

教室に着くなり、織斑先生はそう言い残して入っていった。織斑先生が入っていくと、「げぇっ、関羽!?」と何かを叩いた音が聞こえてきた。関羽って言ったのは織斑先生の弟だろうけど、その後の叩いた音は何だろう？　知りたいけど、何か怖いな。

今度は「キャーーーーーーー」だの、「お姉さまに憧れて来たんです」とか、「お姉さまのためなら死ねます」とか聞こえてきたから、さらに不安になってきた。大丈夫…だよね？

「都合上、入学式にこれなかったやつが1人いる。火野、入ってこい」

闇魔大王のお呼びがかかった。怖いよ、マジで。こういう時は、あれを言えば良いんだったかな。

「逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ、逃げなきゃダメだ…って違う!!」

こうして教室の扉開ける。一斉に注目される俺。そして一言。

「……間違えました」

扉を閉じる。ふう、危なかった、俺は学校に来んだ。動物園に来たんじゃないからね……

ガシッ、スパーン！！
あぁぁぁあああああ、頭が割れる。そして引きずられた俺はもう1度、大量の視線にさらされた。
「いい加減にしろ。お前は普通に自己紹介ができないのか」
「さ、サーイエッサー」
有無を言わさない口調、そして、視線。とどめとばかりに手にする凶器（出席簿）。ダメだ、勝てる気がしない……
「え～と、火野英治です。一応、ＩＳが使えるということで入学することとなってしまいました。えっと、よろしくお願いします」
自己紹介が終わると同時に響きわたる黄色い悲鳴。耳が痛い……
「静かにしろ！　全くはしゃぐのは勝手だが、時と場所を考えろ。火野の席は織斑の隣だ」
俺が席に着くと同時に始まる授業。この学校生活に不安を感じながら、どこか楽しみにしている俺がいるのも事実だった。

異世界と学園とＩＳ（後書き）

誤字・脱字、設定上のミス、疑問点、感想お待ちしております。

ポニテと金ドリと推薦（前書き）

ＣＯＵＮＴ　ＴＨＥ　ＭＥＤＡＬＳ

英治が持っているメダルは……

タカ

トラ

バッタ

「ん～。終わったぁ」

1時間目が終わって背伸びをしている俺は隣を見て固まった。

「あー……」

隣の席の織斑一夏がとても深刻な顔をして悩んでいたからだ。これって話しかけていいのかな？　あ、でも早いうちに仲良くなっておきたいからね。

「えっと、大丈夫？」

「ん、ああ、悪い。えっと火野だったな。知ってると思うけど織斑一夏だ。よろしくな」

「英治でいいよ。よろしく一夏」

「それにしても英治がいてくれて良かったよ。男1人っていうのはキツイしな」

早速仲良くなれた一夏と話している最中、周囲の女子は「男の友情…ハァハァ」、「織斑君×火野君ね」とか聞こえてきた。色んな意味で大丈夫なのかな、クラスメイトは？

「……ちょっといいか」

「……箒？」

俺達を珍獣のように見ている女子の中、１人話しかけてくる人がいた。ポニーテールの人だけど、一夏と知り合いみたいだな。あの感じから、久しぶりに会ったって感じだな。

「悪い、俺ちょっと行ってくる」

ポニーテールの人に連れられてどっかに行った一夏。感動の再開を邪魔するつもりはないけど、俺を１人にしないで。

キーンコーンカーンコーン

２時間目の始まりを知らせるチャイムが鳴った。授業が始まるから、と言って自分の席、教室に戻っていく女子。勉強は好きじゃないのに、それに助けられたってのは微妙だ。

パアンッ！！

何かが叩かれた音がした。この音は織斑先生が出席簿を振り下ろした音だな。

「とっとと席に付け、織斑」

「……ご指導ありがとうございます、織斑先生」

案の定、誰か、それも一夏が叩かれていた。さっさと座らないからだよ。

「――――――――であるからにして、ＩＳの基本的な運用は――――

―――」

教壇に立つのは山田先生。周りを見ると1人を除いて、皆はスラスラと板書していく。俺は1週間で叩き込まれたものがあるから、何とかついていけてる状態だ。

「英治、これわかるか？」

「うん、まあ、何とかってとこかな」

「……マジかよ」

「織斑君、何かわからないところがありますか？」

ソワソワしている一夏に気づいたんだろう。山田先生が一夏に尋ねる。一夏の様子からだと、全くわからないんじゃないかな。

「全くわかりません」

「……え！？」

自信満々に答える一夏に、固まる山田先生。一夏、そこは自信満々に答えるとこじゃないでしょ。ほら、山田先生が戸惑っているし。

「え、えっと、織斑君以外にここまででわからないところがある人はいますか？」

シーン……。

誰も手を挙げないから、顔が青くなっていく一夏。あの参考

書を読めば何とかなると思うんだけど。

「……織斑、入学前の参考書は読んだか？」

「電話帳と間違えて捨てました」

パアンッ！！

また降り下ろされる出席簿。というか、あれは必読じゃなかったの？　俺はＩＳの知識を身につけさせるためのものかなぁ、と思っていたんだけど。

「再発行してやるから１週間で覚えろ」

「い、１週間であの厚さはちょっと……」

「やれと言っている。それに火野は１週間である程度だが覚えたぞ」

そう言って俺を指す織斑先生。まあ事実だけど。

話が進んでいくと、山田先生が放課後、一夏の補修をすることになった。

「あ、でも織斑先生がお義姉さんっていうのは……」

えっと、どうやったら補修からそんな話になるのかな。え～と、頑張ってください。

「あー、んんっ！　山田先生、授業を」

妄想が暴走していそうな山田先生は正気に戻ったようで、授業が

再開された。山田先生、ＩＳに乗ってるときはしっかりしているのに……

◆◆◆

「ちょっとよろしくて？」

「ん？　何か用？」

「へ？」

２時間目終了後、いきなり話しかけてくる人がいた。金髪ロールで、俺達を見下しているような視線だった。これがこの世界の「いまどきの女子」なのかな？

「まあ！　なんていう反応ですの。わたくしに話しかけられるんですの、それ相応の態度があるのではないかしら？」

本当に偉そうにしている人だな。こういうのはあまり熱しないように軽く対応するのがいいのかな。

「えっと、オルコットさんだよね？　さっきも聞いたけど何の用かな？」

一夏は何故かわからないけど、余計なことを言いそうだから、俺が対処しないと。

「ふん、まあいいですわ。イギリスの代表候補生にして、入試主席のわたくしですもの。その位の態度で許してあげますわ」

答えになってないよ。俺は何の用か聞いたんだけど。

「なあ、質問いいか。代表候補生って何？　それに俺は君が誰だか知らないし」

「あ、あ、あ、貴方、本気でおっしゃってますの？」

一夏！！　何で余計なことを言ってるの？　というか、代表候補生なんか文字通りだよ。オルコットさんはショックで何かブツブツ言い始めたし。

「えっと、代表候補生は国のＩＳの操縦者の候補生のことだよ。文字通りの意味だよ」

「なるほど、エリートみたいなものか」

「そう。エリートなのですわ」

あ、何か復活した。でもあくまで候補だからね。絶対的に偉いってわけじゃないと思うな。

「あ、貴方もわたくしを侮辱しますの？」

何か不機嫌な顔でこっちを見るオルコットさん。まさか、俺の心を読んだ？

「いや、普通に声にでていたけど」

あ、そうなの。

「ふん。本来ならわたくしのような人間とクラスを共にできるのはとても幸運なことですのよ。その現実を理解していてだける？」

「そうか。それはラッキーだ」

うん、さすがに俺も一夏の反応をとるかもな。人を見下しすぎだ。

「……馬鹿にしていますの？」

いや、君が幸運だと言ったんだけど。

「大体、よくＩＳの知識がないのに入学できましたわね。唯一の、いえ、今は２人の男のＩＳ操縦者だからもう少し知的な人物かと思っていましたけど、期待はずれですわね」

「オルコットさん。１ついいかな。男はＩＳに関わりをもたない人が大多数なんだ。それなのにＩＳの知識がないからってあだ、こうだ言うのはどうかと思うよ。貴族の振る舞いはそういうものじゃないと思うけど」

キーンコーンカーンコーン。

言い切る同時になるチャイム。

「っ……！　また後で来ますわ！　逃げないことね、よくって！？」

捨て台詞を残してオルコットさんは席に戻っていった。ああ、完全に敵視されたな……

◆◆◆

「3時限目を始める前に、クラス代表を決めないとな」

教壇に立った織斑先生が告げる。クラス代表とは要するにクラス長のようなものらしい。クラス対抗戦に出るとかすることもあるけど。何か嫌な予感がするなぁ。

「はいっ。織斑君を推薦します」

「私もそれがいいと思います」

「俺もそれがいいと思います」

次々とあがる一夏がいいって声。俺に来ないように一夏に誘導しないと。

「え、お、俺？　って何で英治も推薦してんだよ！　だったら俺は英治を推薦します」

え〝？

「確かに火野君でもいいかもね」

「私は火野君の方がいいな～」

一夏の一言をきっかけに俺の名前も言われ始める。なんてことをするんだ。

「では候補者は織斑に火野。他にはいないか？　自薦他薦は問わないぞ。言っておくが2人共、他薦された者に拒否権はないぞ」

うん、この世界に神なんていない。

「待ってください！　納得がいきませんわ！」

音をたてて立ち上がったのはオルコットさん。「男なんかが――」とか「屈辱的」とか言っているけど、まあ、やってくれるのなら言わせておくかな。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなければいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で――――――」

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

日本の侮辱まではじめたオルコットさんに一夏は怒った。俺もさすがに不愉快だな違う世界とはいえ、自分の生まれた国を馬鹿にされて。

「なっ……私の国を侮辱しますの？　極東の猿のくせに」

もう我慢できないや。自分のことなら我慢できるけど、友達を馬

鹿にされて黙っていられるほどできた人間じゃないから。

「何でオルコットさんはこっちに来たの？　わざわざ苦痛な日本に。それに国にはその国のいいところがあるんだ。一夏がイギリスを馬鹿にしたようなことを言ったのは謝るよ。でも、君だって日本を侮辱している。それで自分が被害者面するのがイギリスの礼儀なの？」

「も、もういいですわ。決闘ですわ」

「おう、いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

「言っておきますけど、わざと負けましたらわたくしの奴隷にしますわよ」

「真剣勝負で手をぬくほど腐っちゃいない」

気が付けば一夏とオルコットさんで白熱した状況になってる。忘れられているんじゃないかな、俺？

「ハンデはどれくらいつける？」

一夏のその発言にオルコットさんは嘲笑を浮かべ、クラスの皆は笑い出す。この世界の常識は女子より男子が強いだもんな。強いのはＩＳだろうに。

「一夏、君は初心者なんだからハンデとかは考えなくていいよ。大体、真剣勝負だからね」

「え～火野君も何言ってるの？　男が強かったのはずっと前の話だよ」

「それはＩＳが強いからじゃないかな。ＩＳが使える男子が女子より弱いってことは決まってないと思うよ」

そう言うと黙り込むクラス。多分、皆の中では女子＝ＩＳ＞男子ってなっていたんじゃないかな？

「さて、話は纏まったな。それでは勝負は１週間後の月曜。放課後、第３アリーナで行う。織斑、オルコット、それに火野は用意をしておくように。それでは授業を始める」

結局、俺も戦うことになったのか。どうせやるんだったら頑張ろうかな。クラス代表はやりたくないけど、オルコットさんには負けたくないから。

ポニテと金ドリと推薦（後書き）

意見、感想。その他お待ちしております。

とても私事な疑問ですけど、オーズで一番好きなコンボは皆さん何なのでしょうか。自分はタジャドルですけど、フィギュアーツの影響でガタトラバも気に入ったんですけどね。あ、ガタトラバはコンボじゃないか（笑）

放課後と管理者と説明（前書き）

Ｃｏｕｎｔ　ｔｈｅ　ｍｅｄａｌｓ

英治が持ってるメダルは……

タカ

トラ

バッタ

放課後と管理者と説明

放課後、部活とかに入るわけでもなく、補修もない俺は寮の自室へ戻ることにした。１０２６号室、それが俺の部屋だ。２人部屋だから一夏が来るのかな。

あれこれ考えているうちに自室へとたどりついた。とりあえずＩＳの参考書を読んでおくかな。一夏より先に覚えないと織斑先生にボコボコにされそうだしね。

「えっと、今日はＰＩＣについて…と」

『……ズ、…なたに……伝……こと……』

参考書を読んで数分。頭に声が響いてきた気がした瞬間、俺の意識はブラックアウトした。

◆◆◆

「ん、俺、寝ちゃったのか…って、ここどこ？」

目が覚めた俺に見えた光景はビルが見える夜の公園みたいな場所

で、マフラーを巻いた人が立っていた。

「気がつきましたか。火野英治、いや、異世界の仮面ライダーオーズ」

「っ！！　どうしてそれを？　それに仮面ライダーって…」

俺は目の前の人が言ったことに絶句した。俺がオーズであることを知っている、それを知っているのはごく一部のはずなのに。

「警戒しなくていいですよ。僕の名前は紅渡。貴方に伝えることがあって来ました。貴方ならわかると思いますが数多くの世界があります。いわゆるパラレルワールドですね」

紅さんが何かをしたのだろうか。辺りには沢山の地球が浮かんでいた。

「それぞれの世界には戦士が生まれました。それを仮面ライダーといいます。人類の進化である存在や時を護る存在、一言に言っても仮面ライダーは沢山います。そして貴方のオーズも仮面ライダーの1つです」

「そうなんですか。でも、俺はもうオーズの力は……」

そうオーズの力はもうない。俺の世界のグリードを倒したときに同時に封印した。この世界に来たときに何故か3枚のメダルは持っていたけど。

「そのことに関しても聞いてください。貴方がこの世界に来たのは異世界、つまり貴方とは違うオーズが関係しています」

「俺とは違うオーズ……？」

「実際に見てもらった方が早いですから」

紅さんが見せたものは異世界のオーズがイマジンと呼ばれる怪人と戦うところから始まった。異世界のオーズはアンクと組んでいたんだ。

オーズの戦いの途中に現れた紺色の仮面ライダー、電王。イマジンは近くにいた少年を使って過去に飛んだ。イマジンと戦う役目を持つ電王は時を越える能力を持っていた。強欲なアンクは過去に飛んで、その時代のコアメダルを手に入れようと電王の時を越えるための力、デンライナーに乗り込んだ。それを止めるためにオーズもデンライナーに乗り込んだ。

でも、オーズやアンクが勝手なことをすると過去が変わってしまう。デンライナーのオーナーにデンライナーから出るな、と厳重な注意を受けていた。

結論からいくと、アンクは勝手な行動をして、セルメダルを過去に落としてしまった。それに気づかずに現代に戻ってきたオーズ。しかし、現代は変わっていた。過去にいた組織、ショッカーがセルメダルと独自に作ったコアメダルで新たなグリードを生み出した。

そのグリードはその時代の仮面ライダーを倒し、自分達、ショッカーの駒とした。ショッカーを倒せる者が居なくなったため、それ以降の仮面ライダーは誕生しなくなる。そして人類はショッカーの手に征服された。

「で、これのどこが俺がこの世界に来た理由に？」

「話はまだ続きます」

現代に帰ってきたオーズ。過去を修正しようとしたが、失敗してデンライナーと相棒を失った電王はショッカーに敗北し、捉えられた。

誰もが絶望したとき、とある科学者によって洗脳を解かれた仮面ライダー1号、2号。助けられたオーズ、電王。人々の思いにより復活したそれ以降の仮面ライダー達。彼らの総力戦により、ショッカーは倒された。

役目を終え、去っていくライダー達。別れを告げ、去っていく電王。めでたしめでたし、という感じで終わったのだ。

「異世界でこんなことがあったのはわかりましたけど、一体これのどこに問題が？」

「まず、最初のイマジンと契約した少年です。なぜ彼は４０年前の時間に関わりを持っているのか。そして彼はデンライナーについて行き、４０年前に置き去りにされました。彼は洗脳された仮面ライダーを救い、現代では彼の親友の父親となっていました」

「？？？」

何が問題なのか全くわからない……

「つまりです。同じ世界なのに違う時間軸が生まれている。これだけならいいのですがオーズは電王といたために時間の影響を受けません。２つの時間軸があるにも関わらずオーズは１人だけ。簡単に修復できなくなった時間を修復した弊害として当時オーズが使えたメダルが別の世界、つまり貴方がいるＩＳの世界に流れたんです」

コアメダルの扱いはオーズが一番いい。だから戦いが終わっている俺が呼ばれたってことなのかな。

「僕が貴方に頼みたいのはコアメダルの回収及び管理です。封印する手段、場所がない以上、誰か信用に値する人物に頼みたかったんです。後はこれを」

渡されたのはオーズドライバーと、カマキリ、チーター、ゴリラのコアメダル。

「これが必要とされるってことは怪人がいるんですね」

「ええ。まず風都という街がその世界にあります。そこにはドーパントと呼ばれる怪人と仮面ライダーWがいます。それにコアメダルから作られたグリードのようなものも誕生してしまいました。クワガタのメダルからならクワガタの怪人が生まれ、クジャクならクジャクの」

どうやらコアメダルで生み出されたヤミーと考えればいい感じみたい。コンボはタトバしかなれないけど、使いやすいメダルがあるから充分戦えるだろう。

「僕達の役目は世界の管理であるためにむやみに世界に干渉はできません。ですから」

サポートしかできない、と続ける紅さん。

「そういえば、俺のＩＳ、ライドオーズって？」

「あれは貴方がこの世界で行動をしやすいように僕が与えたＩＳで

す。それでは頼みましたよ、仮面ライダーオーズ」

紅さんがそう言うと同時に俺は元いた場所、寮の自室に帰ったきた。

やらなければいけないことがあるけど、俺しかできないし、後悔はしたくない。だから俺の手が届く場所でやってみよう。

決意を新たにしたところで、ご飯を食べようと思った。隣の１０２５室の扉がボロボロだったけど何かあったのかな。

◆◆◆

翌朝。

結局、一夏が来なかったので男子は１人部屋だと思って食堂に来ると、不機嫌そうなポニーテールの人と一緒にいる一夏がいた。

「おはよう、一夏。一夏も１人部屋？」

「いや、何故か箒と同室だった。てっきり英治とかと思ってたんだけど」

「そういや一夏はその子、えっと、篠ノ之さんと親しそうだけど、どんな関係なの？」

「俺と箒は幼馴染だけど」

幼馴染か。俺にはそういう人がいないな。親に連れ回されて色んな国に行ったからね。

「知ってると思うけど、俺は火野英治。よろしく、篠ノ之さん」

「ああ」

「あ、隣いいよね」

「おう、いいぜ」

それにしてもここの学食はメニューが多いなぁ。やっぱ色んな国から人が来るのが理由かな。ちなみに俺の朝ごはんはパンにスープ、サラダにスクランブルエッグの洋食セット。和食セットか迷ったけど、気分でこっちに決めた。

「ところでさ、一夏って何号室なの？」

「１０２５号室だけど。それがどうかしたか？」

「……一体、昨日は何してたの？　俺は１０２６で、何かの音がよく聞こえたんだけど？」

「それは……」

言いよどむ一夏。何かやましいことでもあったのかな？

「いやいや、そんなことあるわけないだろ」

そう聞くと、必死で否定された。何かあったんじゃないかな。ま

あ、人の恋路にを邪魔する奴はなんたらかんたらって言うから、あまり突っ込まない方がいいか。俺は恋愛は苦手だから。

「いつまで食べている！　食事は迅速に効率よく取れ！　遅刻したらグラウンド十周させるぞ」

一夏達と雑談を交わしながら食べているけど現れた1年生寮の寮長こと織斑先生。食事はゆっくり食べたいけど、グラウンドを走らさせられるのも嫌だからなぁ。

放課後と管理者と説明（後書き）

今回からライダー色がかなり強くなってきます。
次回はクラス代表決定戦の話と英治とライドオーズの設定を載せたいと考えています。
感想、意見、誤字脱字報告、お待ちしております。

Ｒｅｇｒｅｔ　ｎｏｔｈｉｎｇ　~ Ｔｉｇｈｔｅｎ　Ｕｐ ~（前書き）

Ｃｏｕｎｔ　ｔｈｅ　ｍｅｄａｌｓ
オーズが使えるメダルは……

タカ
カマキリ
バッタ
トラ
チーター
ゴリラ

Ｒｅｇｒｅｔ　ｎｏｔｈｉｎｇ　~ Ｔｉｇｈｔｅｎ　Ｕｐ ~

早くもあれから1週間。代表決定戦当日。ＩＳそのものについて詳しくなかった俺は何とか勉強して、何回かアリーナで練習しておいた。元々は一夏と一緒に練習しようと思ったんだけど、何故か剣道の練習ばっかりしていたからやめておいた。ＩＳの勝負をするんじゃなかったのかな。

話を戻そう。今回の決定戦はくじ引きの末、1回戦が一夏とオルコットさん。それで勝った方が俺と戦うことになった。

一夏のＩＳ『白式』はさっき届いたばっかりのもので、結局一夏はずっと剣道の練習をしていたらしい。大丈夫なのかな？

「じゃあ、箒、英治。行ってくる」

「あ……ああ。行ってこい」

「頑張れ」

首を縦に振った一夏は、ゲートから発進して行った。そしてオルコットさんのＩＳ『ブルー・ティアーズ』と対峙する。

「あら、逃げずに来ましたのね。いいですわ。まずは貴方から倒して差し上げますわ」

「そうかよ」

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・

ティアーズの奏でる円舞曲で」

そう言うやいな、オルコットさんは大型のライフル≪スターライトｍｋ？≫のトリガーを引いた。放たれるレーザーが開戦の合図となった。

オルコットさんの連射を何とかよけ続けている一夏。中にはかすっているのが多く、さらに白式の武器は近接ブレードしかない。経験、射程とどれをとっても一夏が不利なのは一目瞭然だった。

そこから畳み掛けるようにオルコットさんのＩＳからは青いフィン状のパーツを飛ばしてくる。あの武装の名前が≪ブルー・ティアーズ≫らしいんだけど、どう見てもファンネルにしか見えない。さらに細かく言うと、自由の名前をもつやつの後継機が、翼から飛ばすやつだな。

最初はオールレンジ攻撃に苦戦していた一夏だけど、攻略のきっかけをつかめたのか、少しずつだけど、かわせるようになっていた。

「２７分。もった方ですわね褒めて差し上げますわ」

「そりゃどうも……」

オルコットさんが言ったように試合開始から２７分が経過した。一夏の動きは段々良くなっていくんだけど、追い詰められていることをシールドエネルギーが語っていた。俺ならどうやってあのビットに対応しようか？　ライドオーズも斬撃が飛ばせる位しか白式と違わないし。いや、機動性で負けているか。

「うぉおおおおおお」

雄叫びをあげた一夏はビットを１つ破壊した。そこから次々とビ

ットを破壊してく。一夏なりの攻略方を見つけたんだね。
そして４つのビットを壊した一夏はそのままオルコットさんに突進していった。これで決めれるのかな？
だが、その瞬間、オルコットさんの口が上がった気がした。

「かかりましたわ」

その言葉とともに放たれたのはビットではなくてミサイル。接近していた一夏にはかわす余裕もなく、黒煙に包まれた。

「一夏っ……！」

隣で見ていた篠ノ之さんは心配そうに声をあげた。でも織斑先生はそれとは反対に鼻を鳴らしていた。

「ふん、機体に救われたな、馬鹿者め」

煙が晴れると、そこには先ほどまで纏っていたＩＳの形が変わっている一夏がいた。百式の名にふさわしく、より白い装甲に。そして手にしたブレードも形を変えていた。日本刀のような≪雪片弐型≫へと。

「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ。とりあえず今は千冬姉の名前を守るさ」

「貴方はさっきから何を？」

オルコットさんの疑問も構わずに、加速する一夏。そしてその剣が振り降ろされるとき、ブザーは鳴った。

『勝者、セシリア・オルコット』

「「「え？」」」

誰もが思った、どうしてこうなった、と。もちろん、俺も。
どう見ても一夏が攻撃を当てようとしたところで終わった。オルコットさんがその隙に攻撃したわけでもなさそうだし。

「さて、次は火野とオルコットの試合だ。オルコットの休憩と補給が完了次第始める」

一夏の決着の理由は後で聞こう。今は前を見ていなければ。

「火野、準備はいいか」

「大丈夫です」

今度は俺が出撃する番だ。

「一夏。仇はとるよ」

「頼んだぜ、セシリアに一泡ふかせてやろうぜ」

さて、行きますか。一夏に頷いて俺は出撃した。

◆◆◆

「今度こそ、圧倒的な差で勝ってみせますわ」

一夏との決着のつき方に納得がいっていないのか、オルコットさんは俺を睨んできた。

『それでは試合を始めろ』

試合開始の合図とともにオーズカリバーを展開し、構える。下手に突っ込むのは危険だと思ったからだ。

「貴方も近接用の武器しかないですの。わたくしを馬鹿にしていますの」

「そうは言われても！！」

同時に剣を振り、斬撃を飛ばす。これはシールドエネルギーを多少消費するが、ないよりはマシだから。

「なっ！！」

そんな攻撃が来るとは思わなかったのか、驚いた声をあげていたがよけられた。

「まあ、いいですわ。わたくしが勝ちますので」

そう言ってビットを展開するオルコットさん。俺にも一夏と同じようにじわじわとダメージを与えていく。頭でこうしなきゃ、とかはわかるのに、思うようにかわせない。直撃はもらってないけど。

「くっ！　先程の方よりはやれる様ですわね」

上手く隙をつけて何回かは攻撃できたが、こちらが不利なのは変わらなかった。やっぱり差は射程と経験だなぁ。こっちはＩＳを動かして２週間くらい。でも、オルコットさんはその何十倍もあるはずだ。

どうやらオルコットさんはビットを制御しながらライフルを撃つことはできないようだが、一夏のときより嫌な場所を狙ってくる。俺が動く場所を読んで、そこに一撃というスタンスを取っている。自分の欠点を一夏との戦いで直そうと思ったんだろう。俺にとっては困ることだけど。

「これで墜ちなさい」

ビットに囲まれて逃げ場を失った。しまった！！　そう思ったころには遅く、俺はミサイルの餌食となってしまった。負けたくないなぁ。煙に包まれながら、俺はそう思った。

≪単一仕様能力　オースキャン発動≫

これは何だ？　そう思っている俺の頭に流れ込んでくる使い方。成程、だからコイツもオーズなのか。迷わずに３枚のメダルを取出し、スキャンする。

『タカ！　トラ！　バッタ！　タ・ト・バ　タトバ　タ・ト・バ！！』

「なんですの今の歌は……ッ！！」

「歌は気にしないで」

赤いヘッドギアにトラのような爪を装備したアーム。そして緑色の脚。オーズタトバコンボをＩＳにしたようなものを俺はまとっていた。

「何かパワーが体の中に溜まってくる」

使い慣れたものだからか、今なら勝てる気がしてきた。さて、反撃開始だ。

「くっ！！　貴方が何をしようとわたくしは勝たなければいけないですの！」

やっぱりビットは厄介だな。だったら。

『タカ！　カマキリ！　チーター！』

「はぁ！！」

チーターのスピードを生かし、ビットに近づく。次はカマキリの腕についたカマキリソードでビットを切る。やっぱりカマキリは使いやすいなぁ。

縦横無尽に飛び、ビットを切り裂いていく。当たりそうなレーザーは弾きながら。

そのまま全てのビットを壊した俺はミサイルを警戒しながら、タカキリーターで攻めていた。すれ違いざまに一閃。反転して連続キック。

「くっ！　『インターセプター』！！」

ショートブレードを展開したオルコットさん。接近戦には慣れていないんだろう。こっちのカマキリでの連撃にはついてこれないようだ。

「そろそろ決めるか」

『タカ！　トラ！　バッタ！　タ・ト・バ　タトバ　タ・ト・バ！！』

決着をつけるチャンスを見つけた俺はもう1度、タトバコンボになり、メダルをスキャンする。

『スキャニングチャージ！！』

「はぁぁぁあああああ、セイヤーーー」

赤、黄、緑の輪を通りぬけて放つキック、タトバキックはオルコットさんに直撃してシールドエネルギーをゼロにした。初めてタトバキックが成功した気が……

『勝者、火野英治』

よし、勝てた……って、このままじゃ俺がクラス代表？　それは嫌だな。よし、敗者に権利はないってことで一夏にやってもらおうかな。

『火野、勝利の余韻に浸っているのはいいが、聞きたいことがある。

戻ってきたら話を聞かせてもらうぞ』

有無を言わさないような口調の織斑先生。え～と、俺何かしたかな？　う～ん、何だろう？

Ｒｅｇｒｅｔ　ｎｏｔｈｉｎｇ　~ Ｔｉｇｈｔｅｎ　Ｕｐ ~（後書き）

次回はクラス代表決定戦の後日談＋αなので、明日に投降したいと思っています。そろそろ変身させたいなぁ。

オリキャラ・オリＩＳ設定？（前書き）

軽いネタバレを含むので、それが嫌な人は見ないことをオススメします。あと、先に４話を見ておくことも推奨します。

オリキャラ・オリＩＳ設定？

キャラ設定
・火野英治
主人公で１６歳の少年（今年で１７のため、実は一夏達より１つ上）。
海外旅行した先で、家族を失う。その後、旅人である伊藤明郎に拾われ、共に世界をまわる。明郎から勉強をそれなりに教えて貰ったが、中学は行ってない↑オイ！
１年前に帰国、その後オーズとして戦うことに。火野映司とは違い、自分の欲望を持ち、それを制御した。紫のメダルも取り込んでおらず、無理矢理従えたが、全く影響がないわけでもない。
性格としては火野映司より多少クールというかドライな感じ。

ＩＳ設定
・ライドオーズ
英治がこの世界で活動しやすいように与えられたＩＳ。コアは紅渡達と関わりがある異世界の篠ノ之束が作ったコアが使用されている。
基本装備はメダジャリバー似の剣『オーズカリバー』だけ。
＜オーズカリバー＞
メダジャリバー似の剣。能力としてはシールドエネルギー消費で斬撃を飛ばせること。時空は切れない。

『ディアクティブモード』
メダルをスキャンしていない状態で、グレーの装甲をしている。モチーフとしては「ガンダムＳＥＥＤ」等のガンダムのディアクティブモード。スペックはＩＳの第２世代くらい。

『スキャニングモード』
単一使用能力「オースキャン」発動時にメダルをスキャンすることによってそれに対応した力を得る。タカならレーダーの強化、カマキリならカマキリソードの装備などなど。単一使用能力自体はそれほど凄いものではないが、コンボを成立させると恐ろしい程のスペックを出すことが可能。

＜タトバコンボ＞
タカ、トラ、バッタのスキャンにより展開される。この姿が一番、オーズカリバーの性能を引き出せる（斬撃を飛ばすのの燃費がいい）。スペックとしては第3世代ぐらい。必殺技は3色の輪をくぐりながら放つタトバキック。余談だが、オーズとして戦っていた時、英治はグリードはおろかヤミーにすら当てることはできなかった。

メダル設定
・タカ…上述の通り、視力に関する能力が上がる。元々ハイパーセンサーを積むＩＳのため、能力を本気で使うと……。
・カマキリ…カマキリソードの装備。
・トラ…トラクローの装備。テレビ本編と違って優遇されるのだろうか。
・ゴリラ…ゴリバゴーンを使えるようになるパワー系のアーム。正直、スピードバトルのＩＳバトルでは使いにくいところが……。
・バッタ…跳躍力、キック力を上げる。普段飛んでるため、跳躍力は意味あるのだろうか。
・チーター…いわゆる加速装置。飛んでるのにどうしてチーターで速くなるのか、と野暮なことは聞いてはいけない。

オリキャラ・オリＩＳ設定？（後書き）

？ってやったけど？とか？は作るのだろうか、俺？

尋問とクラス代表とミルク缶（前書き）

Ｃｏｕｎｔ　ｔｈｅ　ｍｅｄａｌｓ
オーズが使えるメダルは……

タカ
カマキリ
バッタ
トラ
チーター
ゴリラ

尋問とクラス代表とミルク缶

「さて、火野。お前に聞きたいのはお前のＩＳの色が変わったときに使ったメダルのようなものだ。あれは一体何だ？」

試合後、織斑先生に呼び出された俺は、コアメダルについて聞かれていた。いくら異世界から来た、と言ってもなぁ。変身して怪人と戦っていましたって言っても、信じてもらえないだろうし。何かいい言い訳はないかな。

『この世界にも怪人はいます』

不意に思い出した紅さんの言葉。あの人がそう言ってたことが本当なら……

「織斑先生。俺がこのメダルを使って怪人と戦っていた、と言ったら信じますか」

「怪人だと。どうやらお前がいた世界にも怪人がいるようだな。で、そのメダルがどうした？」

「信じてくれるんですか？」

「目を見ればわかるさ。それに火野は嘘をつきたい訳ではないのだろう」

信じてもらえると確信した俺はオーズについて話した。コアメダルのこと、コンボのこと、何故かライドオーズでもメダルが使える

ということ。そして手元にあるオーズドライバーも見せた。

「ふむ、どうやらこの世界にいる怪人とは違うようだな。ここにいる怪人はガイアメモリと呼ばれる物を使って人間が変化するドーパントだ。風都という街によく出回るものだ」

「火野君が仮面ライダーだったなんて、私、思いもしませんでしたよ。そういえば風都って街にも仮面ライダーがいますよね」

「ああ、そうだな」

山田先生の問いかけに織斑先生は何かを懐かしむようだった。その風都の仮面ライダーと関わりがあったのかな？　俺もその仮面ライダーに会ってみたいなぁ。

「あ。織斑先生。ちょっと相談が……」

聞きたいことは2つ。1つはその風都の仮面ライダー。そしてもう1つは……

◆◆◆

「では、1年1組代表は織斑一夏君に決定です。あ、1繋がりでいい感じですね」

翌日のHR。山田先生が告げた結果に、ある1人を除いてクラスは盛り上がっていた。結局、一夏になったんだ。俺は降りたんだけ

ど、まさかオルコットさんまで降りるとは思わなかったな。

「先生、質問があります」

ある1人こと、織斑一夏は納得のいかない表情だった。勝ったのは俺で、その次はオルコットさん。最下位であった自分がなるなんて、夢にも思わなかっただろうなぁ。

「俺は最下位であったのに、何でクラス代表になってるんでしょうか？」

「それは……」

「それはわたくしが辞退したからですわ！」

音を立てて立ち上がったオルコットさんは今までとは違う目で一夏を見ていた。きっと見直したんだろうな。その後も理由を喋っていくオルコットさん。大人げなく怒ったことを反省しているようだけど、プライドが高いのは変わってないみたい。「わたくしが勝つのは当然のこと」って。前よりは憎めない感じだけどね。

「それで“一夏さん”にクラス代表を譲ることにしましたわ」

あ、一夏のことを名前で呼んだ。やっぱり一夏に対しての印象がプラスの方向に変わったみたい。まあ、学校生活は楽しい方がいいから、仲良くなるのはいいことだね。

周りの女子は「セシリアわかってるね～」とか「情報が売れる」って情報は駄目でしょ。ＩＳが使える男子が珍しくて担ぎあげたい気持ちはわからない訳ではないけど。

そんな周りが浮かれている中、一夏は浮かない顔だった。

「セシリアが降りた理由はわかったんですけど、英治が降りた理由がわかりません」

あらら、結局俺が降りた理由を聞いてくるんだ。

「それは、俺のＩＳはＩＳではない物も使うからＩＳで戦うクラス代表にはふさわしくないと思って辞退したんだ。一応、このメダルがその力ね」

３枚のコアメダルを見せる。多くの人は頭に「？」を浮かべているけど、いいか。一夏もそれは何だよって顔してる。

「……俺はメダルのせいで代表になるのかよ」

クラスの皆は男子が代表をやれば良かったみたいで、メダルにも大した興味を示さずに、一夏についての話に戻った。本人はなんかブツブツ言ってるけど。

バシン！！

「今はＨＲ中だ。ブツブツ言ってないで周りの話を聞け」

「痛！！　何すんだよ千冬ｎ」

バシン！！

再び叩かれる一夏。かわいそうに思えてきた。

「織斑先生だ。何度言ったらわかるのか」

「す、すみませんでした。織斑先生」

「そ、それでですね」

そわそわした様子のオルコットさん。何か大事な発表でもあるのかな。

「わたくしのように優秀でエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間がＩＳの操縦を教えてあげますわ。そうすれば……」

バン！　机を叩いて立ち上がった篠ノ之さん。何か異様に殺気だっているけど、どうかしたのかな？

「あいにくだが、一夏の教官は足りている。“私が”直接頼まれたからな」

「私が」をヤケに強調した篠ノ之さんはオルコットさんを睨んでいた。２人って仲が悪かったみたいじゃなかったし、どうしたんだろ。

「あら、貴方はランクＣの篠ノ之さん。Ａランクのわたくしに何か？」

２人の間に散る火花。よくわからないけど、この対立の中心にいるのは一夏みたいだから俺は大丈夫かな。

バシン！　バシン！

「座れ、馬鹿共」

オルコットさんと篠ノ之さｎの頭を叩いた千冬さんは続けた。

「お前達のランクなどゴミだ。私からしたらどれもひよっこだ。その段階で優劣をつけようとするな。それにだオルコット。完璧な人間などどこにもいない。簡単にパーフェクトなど使うな」

簡単にパーフェクトなど使うな、か。完璧な人間はどこにもいない。当たり前のことなのに織斑先生が言ったことは重かったっていうか、心に残った。まるで本人がそのことを身を持って知ったかのように。

「代表候補生でも一から勉強してもらうと前に言っただろう。くだらん揉め事は十代の特権だが、あいにく今は私の管轄時間だ。自重しろ」

バシン！

不意に一夏が頭を叩かれた。特に何もやってないはずだけど。

「今、失礼なことを考えただろう」

「そんなことは全くありません」

「ほう」

バシンバシン！！

「すみませんでした」

「わかればいい」

ああ、姉弟って凄いんだな。心を読むなんて。でも、ちょっと横暴じゃないかな。そんなことを考えたら絶対叩かれるだろうから表情にださないように気をつけないと。

「クラス代表は織斑一夏。依存はないな」

『はーい』

クラスの意思は再度1つとなった。けど、やっぱり一夏には嬉しくない結果だろう。え～と、頑張って。俺にはそれしか言えないんだ。

◆◆◆

放課後、一夏が篠ノ之さんとオルコットさんに連れられてどっかに行っちゃったから暇になった俺は部屋に戻ってきていた。

「あー、昼（？）寝でもしようかな」

バタンッ！！

ベットにダイブしたはずの俺はアスファルトにダイブしていた。

「イタタタ。一体今度は何？」

「タイミングが悪かったようですね」

気が付けば夜の公園みたいな場所にいて、紅さんがいた。

「えっと、今度はなんです？　コアメダルを狙うやつが現れたんですか？」

「いえ、貴方に届ける物があったので」

紅さんが出したのはミルク缶と細長い箱。缶には大量のセルメダル、箱にはメダジャリバーが入っていた。

「これはどうしたんですか？」

「貴方が戦うのに必要となるものなので渡します。あと、ライドベンダーもＩＳ学園の敷地内に置いておきますので」

ライドベンダーがあるのは便利だけど、ＩＳ学園の中に勝手に置いておいていいのかな？

「えっと、ありがとうございます

「いえ、僕達も色々とあってこれ以上の直接接触は難しいようです。その内貴方の味方となる人物を送りますので世界をお願いしますね」

それを最後に俺は元の部屋に戻ってきた。オーズの力はすぐに必要になる。そんな気が俺にはしているんだ。

尋問とクラス代表とミルク缶（後書き）

次回、変身！！

ところでアンケートを取りたいのですがバースをどうしましょうか？
？英治がいた世界から来る。この場合、伊達さん的なキャラか後藤さん的な性格の　どちらがいいかも
？バースのツールだけだしてＩＳキャラが変身
？全く別のところからバースが来る。例、オーズ本編から伊達さんが来る、とか。
？バースは出なくていい。

訓練と敵襲と変身（前書き）

Ｃｏｕｎｔ　ｔｈｅ　ｍｅｄａｌｓ
オーズが使えるメダルは……

タカ
カマキリ
バッタ
トラ
チーター
ゴリラ

訓練と敵襲と変身

４月も下旬となった今、俺達１年１組は織斑先生の指導のもと、ＩＳの訓練をしていた。それにしてもいい天気だなぁ。

現在は飛行訓練で、実践するのは俺、一夏、オルコットさん改めセシリアの専用機持ち組。クラス代表決定戦から俺のこともを見直したみたいで名前で呼び合う仲くらいには慣れた。誰とでも仲良くやれる方がいいしね。あ、でもオルコットさんは一夏が好きなのかな。素振りからはそんな気がするんだけど、恋愛は苦手だからよくわからないし。

「では、これよりＩＳの基本的操縦をしてもらう。織斑、火野、オルコット。試しに飛んでみせろ」

織斑先生に言われてＩＳを展開する。特訓の成果だろうか、セシリア程とまではいかないけど、中々早く展開できるようになった。

隣を見ると、一夏もワンテンポ遅れて展開できていた。一夏の篠ノ之さんやセシリアとの特訓の成果かな。

メダル無しのライドオーズ、ディアクティブモードを展開した俺はメダルもスキャンするかどうか考えていた。ＩＳだけの訓練なら必要ないのだが、こいつはメダルをスキャンしてこそ完成するものだからなぁ。

「よし、飛べ」

織斑先生の合図で飛び上がるセシリア。少し遅れて、遅いスピードで上昇する一夏。気になったこともあるしタトバになるか。

『タカ！　トラ！　バッタ！　タ・ト・バ　タトバ　タ・ト・バ！！』

クラスの皆は「変な歌～」とか聞こえてくるけど、もう慣れたしね。さてと、ＰＩＣを使わずに跳んでみるか。

脚部に力を貯める。さすがに脚がバッタのようにはならないけど、力がみなぎるのはわかる。そして俺はそのまま大地を蹴った。

「「「え？」」」

みるみるうちに一夏、セシリアまでも追い越し、ＩＳ学園も小さく見える高さに。この高さなら人がゴミのように見えるなぁ……なんだろうな、この落ちていく感覚は……あ、ただジャンプしただけだったからか。

墜落する気は全くないので、ＰＩＣを起動させその場で静止。気付かなかったら大変なことになってたろうな。ＩＳには絶対防御があるけど、この高さから落下したら無事とは思えないし。

一夏とセシリアが話している所まで、下降する。２人ともライドオーズの跳躍力に驚いているけど、びっくりしたのは俺も同じだから。

「いつも思うんだけどさ、英治のＩＳって動きやそうだよな」

「確かにそうですわね。英治さんのＩＳは大抵のＩＳよりも体にフィットしている感じですし、非固定浮遊部位もないですし、おまけに謎のメダルで形を変えますし……本当に謎のＩＳですわ」

「いやー、謎って言われても俺もコイツについてはよくわからないし」

本当はこれがなんなのかは分かっているけど不用意に人に教えるわけにはいかないからね。それにしてもさっきから嫌な予感がする。何だろう？　そう思うけど集中してなければ織斑先生に叩かれるだろうからあんまり気にしない方がいいかな。

「そういや、英治。英治は飛ぶイメージはどうしてるんだ？　セシリアとも話したんだけど、どうもイメージがつかめなくて」

「俺のイメージは、なんていうかなぁ、こう、俺に翼ができたイメージかな」

「いや、よくわからないんだけど、それ」

う～ん、そうだよね。俺は別な方法で飛んだことがあるからイメージしやすいだけだからなぁ。

「でも一夏さんイメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を見つけた方がいいですわ」

「そう言っても空を飛ぶ感覚自体があやふやなんだよな。何で浮いているんだ、コレ？」

「気になるのは分かるけどあまり気にしない方がいいよ。正直俺も何となく理解している感じだしね。理論が気になるんだったらセシリアに聞いた方がいいよ」

「そうですわね。反重力力翼と流動波干渉の話になりますもの。それでよければ説明しますわ」

「わかった。説明はいい」

うん、俺も聞きたいとは思わないから。聞いてもチンプンカンプンだろうから。

「ふふっ、残念ですわ」

本当にセシリアは変わったなぁ。彼女の屈託のない笑みを見てそう思った。先日までのいざこざが嘘だと思うほどに。

そういえばあの試合以降、俺と一夏、セシリアは篠ノ之さんと一緒にＩＳの練習をしている。大抵は一夏が教えてもらっている形だけどね。

「一夏っ！　いつまでそんなところにいる！　早く降りてこい！」

いきなり通信回線から響く声。声の主を見ると、篠ノ之さんが山田先生からインカムを奪っていた。オタオタする山田先生。しっかりしてください。

俺が山田先生に同情している間、隣ではＩＳのハイパーセンサーについて話していた。視力とか聴力が優れるのは変身ではよくあることなのであんまり俺は驚くことはないけど。それにしてもセシリアの説明は役立つなぁ。言っちゃ悪いんだろうけど、篠ノ之さんの指導は一夏曰く全くわからないものらしいし。確か擬音だらけなんだっけ。

「織斑、オルコット、火野。急降下と完全停止をやってみせろ。目標は地表から十センチだ」

「了解です。では一夏さん、英治さん、お先に」

セシリアはすぐに行動を起こし難なくクリアしていた。次は、と。

「英治、どっちから行く？」

「一夏が先でいいよ」

一夏は軽く返事をし、地面に向かって加速していった……え、加速？　確かに急降下も課題だけどそれは加速しすぎじゃ。

ズドォォォン！！

やっぱり。一夏は墜落し、クレーターを作っていた。俺の目に映るのは２つのクレーター。あれ、２つ？

「メダルゥーーーー」

煙が晴れるとそこにいたのは前に戦ったことのあるクワガタのヤミーそっくりの怪人だった。

それを見た俺はとにかくクワガタに向かって加速していた。ＩＳがあれと戦えるのかどうかしらないけど、俺が戦わなければいけない相手だから。きっとコイツが嫌な予感の正体だろう。

◆◆◆

「なんだよ、アレは」

一夏は突然現れた怪人を見て呟いた。彼が小さい頃にお世話になった探偵が戦ったのとは違うのを直感的に感じていた。

「来い、白式」

悲鳴をあげ、パニックになるクラスメイトを見た彼が出した結論は力がある自分が皆を守ることだった。自身のＩＳを纏い、剣を構える。今にも飛び出しそうな彼の耳には届く言葉があった。

「馬鹿者。お前に何ができる。大人しく全員下がっていろ」

「じゃあ千冬姉はどうするんだよ。相手はドーパントとは違う気がするけど怪人なんだ！！」

「安心しろ、アレの相手をするのは私でも山田先生でもない」

瞬間、３色のＩＳが怪人を蹴り飛ばしていた。

◆◆◆

クワガタの怪人、ヤミーもどき？　コアメダルを使っているからグリードもどきか。とりあえずＩＧ（Ｉｍｉｔａｔｉｏｎ　Ｇｒｅｄ）と呼ぶことにしよう。

それを蹴り飛ばして俺はＩＳを解除した。

「英治！！　何やってるんだよ！！　お前も逃げろ！！」

「そうですわ。ＩＳをを解除するなんて無謀すぎますわ！！」

一夏やセシリアの他にもクラスの皆から心配や説得の声が聞こえる。こう思ってもらえるほど、馴染めていたんだな。だからこそ皆は俺が守る。

「大丈夫だから。まあ、見ていてよ」

オーズドライバーを装着する。まずは赤いメダルと緑のを入れる。最後に黄色のいれ、右腰のオースキャナーでスキャンする。

そしてスキャンとともにあの言葉を叫ぶ。

「変身！！」

『タカ！　トラ！　バッタ！　タ・ト・バ　タトバ　タ・ト・バ！！』

歌が流れている最中、俺の周りは色とりどりのメダルが回っていて、俺の前には赤、黄色、緑のメダルが浮かぶ。

そして俺はもう１つの姿になる。欲望の王とも言われる存在、オーズに。

皆が息を呑むのが聞こえる。誰もこうなるとは思っていないはずだから当然かな。

「英治、お前、仮面ライダーだったのか」

「そうなるね。オーズ、仮面ライダーオーズだ」

「……オーズ（もしかして千冬姉は英治が仮面ライダーだって知っていたのか）」

「さてと…皆は俺が守る！」

構えをとった俺はクワガタＩＧへと駆け出した。相手も俺に対して走ってくる。

突き出された拳をよけて、ボディーブロー。そのままトラクローを展開し、２、３回切る。飛び散るメダル。

「こいつもセルメダルを落とすんだ。でもどうやって作るんだ？グリードだって復活したにはセルメダルは必要なのに……おっと」

考えているうちに敵は攻撃をしてきた。クワガタのアゴのような武器を振り回してくる……って、危ない危ない。バッタの跳躍力をいかし、後ろに跳ぶ。

「メダル、メダルヲヨコセ！！」

セルかコアかわからないけど俺のメダルを狙ってくる相手。どっちにしろ取り込んで強くなるつもりなんだろうな。させないけど。

「ハァァ！！」

今度は脚に力をこめ、跳び上がる。バタ足のように蹴るたびにこぼれ落ちるセルメダル。ヤミーやグリードと比べると少ない量だけど。

「ガァアアアアア！！」

怒りに身を任せるかのように敵の攻撃が激しくなる。腕を掴まれて、武器で切られる。結構痛い。

「くっ…うわっ」

火花をあげながら後ろに転がる俺。リーチが問題ならこの前貰ったこれで。そう思った俺はメダジャリバーを構えた。周りから「どこから出したんだ、それ？」って聞こえたけど気にしないでおこう。

「ハァアアア」

反撃の隙を与えないようにメダジャリバーを振るう。相手がダメージをくらっている証拠か、そのたびにセルメダルが落ちていく。

「そろそろ決めるよ」

敵がダウンしたのを確認し、セルメダルを3枚メダジャリバーに入れる。

『トリプル　スキャニングチャージ！！』

「ハァアアアアア……セイヤーーーー」

「おいおい、何だよアレ？」

「なんですの。あの技は！！」

「信じられん、空間を切るとは……」

俺が剣を振った方に空間はズレていた。そして元に戻る。皆が驚くのもうなずけるものだしね。

「グァアアアア」

空間が元に戻ると爆散するＩＧ。セルメダル十数枚とクワガタのコアメダルが落ちていた。

これで緑のコンボができるのか……使う機会は無い方がいいけど。

でも、予感はする。力を使わなきゃいけない日が来るような気が。

訓練と敵襲と変身（後書き）

実家に帰省したため、パソコンが使えないｏｒｚ
ストックが多少、携帯で作製もしますが、遅くなる可能性が……
感想、意見、誤字脱字報告等、お待ちしております。

逃走と整備室とインタビュー（前書き）

Ｃｏｕｎｔ　ｔｈｅ　ｍｅｄａｌｓ
オーズが使えるメダルは……

タカ
クワガタ
カマキリ
バッタ
トラ
チーター
ゴリラ

逃走と整備室とインタビュー

女子の情報網は恐ろしい。たったの数時間たっただけで俺がオーズであることは学園中に広まっていた。繰り返される質問の応酬から逃げ出した俺は安心できる場所を探していた。どこに行っても女子がいるから、そのたびに逃げる。コンボを使ったときより疲れたよ。

「疲れた～。ホントにあの勢いだけはついていけないや……ッ！！」

「こっちに火野君が行ったって情報があったのに」

「おかしいね。どこに行ったのかな？」

「じゃああっちに行こうよ。それにしても火野君、人間離れした逃げ足だよね」

女子の声、しかも明らかに俺を探しているのが聞こえてきたため、物陰に隠れる。先程の集団はいなくなったようだけど、次の集団が近づいてくるのが聞こえた。見つかって質問攻めが嫌だったから近くの部屋に逃げ込むことにした。人の気配はしないようだしね。

女子達が近づく前に俺はドアを開けてその部屋に飛び込んだ。ここが更衣室とかじゃないことを願って。

「ここは……整備室かな？」

目の前に広がる光景は、パソコン数台にＩＳのパーツや武器だろうものがあった。いかにも整備室って感じの場所だった。

「ふぅ。しばらくはここに隠れているかな」

「だ、誰かいるの？」

声がした方を向くと水色の髪にメガネをかけた子がいた。

「ゴメン！　追われているからここに匿ってくれないかな」

「え、……別にいいけど……」

「ありがとう～」

隠れる場所が見つかったという安堵から座り込む。はぁ、疲れた。

「ね、ねぇ……あなたが仮面ライダー……？」

「あ、うん。そうだけど」

俺がオーズであることにこの子も興味があるようだけど、匿ってくれるお礼にと、周りの皆のようなしつこさが無かったから聞かれたことに答えることにした。

饒舌ではない彼女と話している途中、俺は大事なことに気がついた。

「そういえばさ、君、名前は何て言うの？」

そう、文だと大した長さではないがって何だこの電波？　まあ、とにかく名前を聞いていなかったんだ。いつまでも「君」とか「あなた」じゃ失礼だしね。

「更識簪」

「更識さんね。今更だけど俺は火野英治。よろしくね」

「名字で、呼ばないで。その…好きじゃないから」

「え～と、簪でいいかな」

静かに首を縦に振る簪。どうやら本人の許可は得たようだ。

「簪はここで何してたの？」

「私のＩＳ、完成してないから……」

「そうなんだ。って言っても俺はＩＳが作れるほどわかっていないけどね」

私のＩＳってことは専用機持ちってことだよね。そういえば「更識」ってこの学園のどこかで聞いた気がするんだよな。

「まあ、何もできないかもしれないけど手伝えることがあったら言ってよ」

「別に、いい」

「そんなことは言わないで、ね。何かあったら手伝うからさ」

「どうしてそういうことをする気になるの……？」

どうして、か。う〜ん。

「人は助け合いだからね。「人」って字はさ、支え合って出来ているから。それに手が届くのに手を伸ばさなかったら、後悔する。それは嫌だし」

「そう……なんだ……ロー…たい」

「何か言った？　最後の方、聞こえなかったけど」

「べ、別に何でも、ない……」

そうか。本人が違うって言ってるから俺は追求しないことにしよ。ふと外を見ると、日が沈み始めていた。そろそろ帰ることにしますか。

「俺はそろそろ行くよ。匿ってくれてアリガトね。また来てもいいかな？」

コク、と簪が頷いたのを見てからこの部屋を出た。この部屋は第二整備室か。

◆◆◆

英治が帰ったあと、整備室に残っていた簪は彼のことを考えていた。自分が憧れるヒーロー。元々、都市伝説である仮面ライダーで

あったことから彼に多少は興味があったのだが、実際に話してみると、彼女が好きなヒーローのようだった。
英治には聞こえなかった「そう……なんだ……ロー…たい」。これは「そう……なんだ…ヒーローみたい」と言っていた。

（初対面なのに結構話した……）

ここでは語る理由ではないが、彼女の家系の問題で簪は心を閉ざしていった。そんな中、自分に笑顔を向けながら手をさし伸ばしてくれた英治は彼女にとって新鮮な存在だった。

（火野……英治……）

よくわからない気持ちだが、彼女は英治ともっと話してみたいと感じた。

「……いけない。早く完成させなきゃ」

気持ちを切り替えて彼女はディスプレイと向き合った。

◆◆◆

「ふうん。ここがそうなんだ……」

英治が簪と別れた頃、ＩＳ学園のゲートにはボストンバックを持った少女がいた。風になびく彼女のツインテール。

「総合事務受付ってどこにあんのよ」

案内が書いてある紙をくしゃくしゃにしてポケットに突っ込む。目的地がわからない彼女のイライラは少しずつたまっていった。

ＩＳで飛んで探すか、とも考えたが自分が属する国、中国の政府高官の情けない顔を思い出した。それと同時にその高官が言っていた問題を起こさないでくれってことも。

（ふっふーん。あたしは重要人物だからねー。自重しないとねー）

そんな彼女はとある目的のためにこの学園に来た。元々、彼女はＩＳ学園に興味は無かった。だが、ある日見たニュースは彼女の興味をＩＳ学園に向けた。

（そういえば、アイツ元気かな）

とある少年を思い浮かべる。彼こそが彼女をＩＳ学園に入学させる原因であった。

「だから、そのイメージがわからないんだよ」

不意に聞こえた懐かしい声。その声の主、織斑一夏こそがその理由の張本人である。

少女はすぐに駆け寄ろうとする。だが、一夏の隣には見知らぬ女子がいた。しかも一夏と親しそうである。

（誰、あの女？）

冷たい感情を浮かべた彼女はそのままその場を去った。その後す

ぐに受付は見つかった。だが、彼女の気持ちは晴れることがなかった。

「――――説明は以上です。ＩＳ学園にようこそ、鳳鈴音（ファン・リンイン）さん」

彼女は怒りの感情を持ちながら晴れてＩＳ学園の生徒となった。

「待ってなさいよ、一夏」

◆◆◆

さらに場所を変えること、ここは例の夜の公園。マフラーを巻いた青年、紅渡の前にスーツを着た長身の男が現れた。

「渡、調べた結果だが、やはりあの世界は変化を始めている。新たにいくつかの仮面ライダーがあの世界に誕生する。それに門矢士とは違うディケイドもあの世界を訪れるだろう」

男、剣崎一真は自分が調べたことを伝える。

「そうですか。あの世界が消滅することは？」

「それはない。ディケイドはもう破壊者としての役目を終えている。それは他のディケイドも同じだ。ただ、ライダーが新たに誕生した場合の混沌は確実だな」

「それは彼に任せましょう。ところで生まれるであろうライダーは？」

「それは……だ」

「それならオーズでも充分戦えますね」

「ああ。俺はまだやることがあるから行くぞ」

「ええ。お願いします」

剣崎はオーロラをこえ、どこかに去っていった。それを見送る渡。

「事態は予想以上に厄介なことになっているようですね。オーズへの助っ人は誰がいいのでしょうか」

◆◆◆

「ふぅ。帰ってくるのは遅くなったな」

簪と別れた後、女子に遭遇。獲物を見つけたような顔してたから逃げたのはいいんだけど、寮とは逆の方向へ。

その後はどこかの蛇のようにダンボールに隠れたりしながら寮に向かった。夕方に出たはずなのに寮に着いたころには既に夜であった。もう、ヤダ。

さすがにこの時間にはもう俺を狙ってくる人はいないようで、さ

っさと部屋に戻ることにした。トボトボと自室に戻る途中、食堂の近くを通ったら、

「あー！！　火野君発見！！」

クラスメイトに見つかった。とゆうかクラスメイトがほとんどいて、「織斑一夏クラス代表就任パーティー」なるものをやっていた。パーティーが嫌いな訳じゃないけど、俺のライフはボドボドだから参加はやめておくよ。しかし、世の中は無情である。すぐさま捕獲されて会場に拉致された俺は乾いた笑みさえも浮かべる気力はないんだ。

「英治、今までどこにいたんだよ……って大丈夫か、おい、しっかりしろ」

「一夏、何を大げさなことを言ってるのだ……火野、大丈夫か？」

「あら、英治さんがどうかしたのですか……って大丈夫ですの？」

３人とも大丈夫じゃないから。この疲労感に比べたら、一度に全コンボやれって方が楽な気がする…よ…

「はいは～い、新聞部でーす。もう１つの話題である仮面ライダーこと火野英治君にもインタビューを……ってこれじゃ無理そうね。仕方ない捏造するからやめとくか」

捏造はしないでください。ああ、声を出す気力すらない。

「だから俺の分も含めて捏造しないでください！！」

「じゃあ織斑君。なにか皆に受けるコメントを」

そんな会話をよそに俺は眠りにおちた。ああ、明日辺りに織斑先生に助けを求めよう。先生の力ならこの鬼ごっこもなくなるはずだから……ＺＺＺ

逃走と整備室とインタビュー（後書き）

早くも簪登場。原作でヒーローとか言ってた彼女なら絡ませやすいかなと思って。でも彼女のＩＳを早く完成させるかどうかは考え中。

前回のバースのアンケートが全くないにも関わらず、次のアンケート（笑）。

クウガ～ディケイドで出演してほしいライダーを募集します。サブでも悪役でもＯＫ。できれば変身者の立ち位置も。

それでは感想、意見等お待ちしております。

宣戦布告とラーメンとライオン（前書き）

Ｃｏｕｎｔ　ｔｈｅ　ｍｅｄａｌｓ
オーズが使えるメダルは……

タカ
クワガタ
カマキリ
バッタ
トラ
チーター
ゴリラ

宣戦布告とラーメンとライオン

「火野君、おはよー。ねえねえ、転校生の噂聞いた？」

早めに教室に着いた俺は女子から話しかけられた。転校生？　どんな人が来るのかな。

「それってうちのクラスに来るの？」

「なんだか2組に来るんだって。で、その人は中国の代表候補生らしいの」

「へえ。そうなんだ。教えてくれてありがとね」

中国の代表候補生か。どんな人なのかな。

「あ、織斑君だ。織斑君にも教えてあげよーっと」

そう言ってクラスメイトは一夏の方へ言った。

一夏達が話しているけど、俺は眠いから先生が来るまで寝てよう。

それじゃ、おやｓ「その情報、古いよ」……ん、誰だ？　声がした方にはツインテールの女の子がいた。

「2組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

「鈴……？　お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たってわ

け」

え～と、一夏の知り合いかな。仲良さそうだし。あ、篠ノ之さんとセシリアが機嫌悪そうになった。うん、確実にあの2人は一夏が好きなんだ。恋愛が苦手な俺でもわかるんだから一夏も気づいているはず。

そう思っていたが、一夏がかなりの鈍感で、全く誰かからの好意に気づかないと知るのは後のことだった。

「何格好付けてるんだ？　すげえ似合わないぞ」

鈴と呼ばれた女の子は腕を組み、片膝を立ててドアにもたれていた。確かに彼女の雰囲気からだと似合わない気がしないでもないなぁ。

「な！？　なんてこと言うのよ、アンタは！」

やっぱり今の喋り方が素みたいだ。こういう性格の人には確かにさっきのポーズは似合わないと気が……。

「おい」

「なによ！？」

後ろから声がしたので強気な態度で振り向く、え～と、鳳さん。……ってその人にその反応は……。

バシンッ！！

聞きなれた音が響く、愛刀（？）『狩吊世鬼墓』を振り下ろした

我らが担任、織斑先生がいた。

「火野、今、変なことを考えただろ」

「……違います」

「2度目はないぞ」

「わかりました」

織斑先生は読心術を使えるから心を無に。

――ドクン――

今、何か違和感が……。ま、いいか。

この違和感がアレを引き起こすことになるとは誰も思わなかった。

ってモノローグを入れるとどうなるんだろう？

「よし、ＳＨＲを始める」

気が付けば鳳さんは自分の教室に戻ったみたいで、織斑先生が教卓に立っていた。

◆◆◆

パシーン！！

本日何度目の音だろうか。叩けれているのは俺でも一夏でもない

篠ノ之さんとセシリアである。篠ノ之さんは授業を聞いていなくて叩かれ、セシリアは独り言をブツブツ言って叩かれる。

織斑先生の授業でそんなことをしてるなんて自殺行為みたいなものだけど、どうしたんだろ？　昨日は何も変わりがなかったから、原因は今日のはず。

となると鳳さんが原因かな？　嫉妬？　何か違うな？　このことも後で考えよ。

「「あなた（お前）のせいですわ（だ）！！」」

午前の授業が終わり、いきなり2人は一夏に告げた。それは理不尽だと思うんだけど。

それは自分の好きな男が取られるって思ったんですよ。嫉妬みたいなものです」

へえ、そうなんだ。嫉妬ねえ。女心がわからないからとかどうか以前に、一夏のせいにするのは理不尽だと思うけど。

「英治、飯食いに行こうぜ」

「ああ、わかった」

一夏に誘われて食堂へ。今日は何食べようかな。

「待ってたわよ、一夏！」

食堂に着くなり鳳さんが現れて、そう言った。鳳さん、そこにいると皆の邪魔になるよ。

「鈴、通行の邪魔になってるぞ」

「な、いきなり何言うのよ！！　それにアンタを待ってたのよ」

一夏も同じことを思ってたようで、指摘されると怒る鳳さん。ラーメンを持ちながら。

「それにラーメン伸びるぞ」

「ぐっ……」

なんだか一触即発の雰囲気に。俺が止めないといけないみたい……

「まあまあ、２人とも落ち着いて」

「アンタは黙ってなさい……ってアンタが噂の火野英治？」

「一応聞くけど、噂って？」

「それはアンタっが仮面ライダーだっていう」

「まあ、そうだけど……」

隠す理由も必要もなくなっので素直に頷く。ああ、早くご飯にしたい。

「ふーん、そうなんだ」

このまま雑談を交わしてる訳にもいかないので、注文をとり、席に着く。

「一夏、そろそろどういう関係なのか説明して欲しいのだが」

「そうですわ！　一夏さん、まさかこの方と付き合ってらっしゃるの！？」

一夏と鳳さんが話してる途中に、２人は無理矢理割って入った。

俺も気になってたんだよね。

周りの皆も気になっていたのか頷いて、こちらに視線を向けてくる。

正直に言うと居心地がよくない。

「べ、べべ、別にあたしは付き合ってるわけじゃ……」

「そうだぞ。なんでそんな話になるんだ。ただの幼馴染だよ」

あ、鳳さんが一夏を睨んでいる。というか、鳳さんとも幼馴染って言ってるけど、篠ノ之さんとは面識がないみたいだけど？

「幼馴染……？」

怪訝そうな声で答える篠ノ之さん。まるで幼馴染は自分だろって顔で。

一夏いわく、篠ノ之さんは小４までのファースト幼馴染で、鳳さんは小５から中２までのセカンド幼馴染。幼馴染ってファーストとかセカンドってつけるものだっけ？

「初めまして。これからよろしくね」

「ああ。こちらこそ」

文だけ見ると友好的に見えるが、実際は声は相手を威圧するものだし、２人の間には火花が散っている。どう考えても初対面の人にする対応じゃないよね。

「ンンンッ！　わたくしを忘れてもらっては困りますわ。中国代表候補生、鳳鈴音さん？」

そうか、代表候補生同士なら知り合っている可能性も……。

「……誰？」

あれ？

「わ、わたくしをご存知ない。イギリス代表候補生、セシリア・オルコットを？」

「うん。あたし他の国とか興味ないし」

絶句して固まるセシリア。あ、顔が赤くなってきた。

話が進み、現在は誰が一夏にＩＳの操縦を教えるかになっていた。「幼馴染」だの「同じクラス」だの言ってるけど、一夏の意思を完璧に無視してる。なんか険悪な雰囲気になってきたから止めた方がいいよね。

「さ、３人ともいくら一夏がすｋ…ムグッ」

結果、口を抑えられました。呼吸が段々苦しくなってきた。あ、死んだじいちゃんが見える。

◆◆◆

パシーン！

誰かが叩かれた音で目を覚ました。場所は食堂、時間はさっきからあまりたってないみたいだ。目の前には正座の3人、篠ノ之さん、セシリア、鳳さん。そしてそれを叱る織斑先生。

そういえば、俺、あの3人に口をふさがれたせいで呼吸が苦しくなって倒れたんだっけ。

「死ぬかと思った」

「もうすぐ授業だ。遅れるなよ。ああ、火野は気分がすぐれなかったら保健室で休んでいていいぞ。どこぞの馬鹿共のせいだからな」

「「「う…」」」

まあ、俺は大丈夫だけど。

「大丈夫か、英治？　全く箒達もやめろよな。息を止められてポックリいきましたなんて笑えないからな」

一夏の説得には素直に応じる3人娘。一夏に言われなくてもやめてよ。

「さてと、教室に戻ろうか」

そろそろ昼休みが終わる時間だ。織斑先生に叩かれたくないから早めに戻らないと。　3人娘も立ち上がろうとしたが、ふらつくセシリア。日本に住んでた2人とは違って正座に慣れていないからかな。

結局、セシリアは一夏に支えられて教室に戻ることができた。篠ノ之さんと鳳さんがずっと羨ましそうな顔だったけど。

あ、あと、鳳さんを鈴と呼ぶようになりました。

◆◆◆

放課後、一夏達はアリーナに特訓に、翼は山田先生に呼ばれて職員室へ。結果、暇となった俺はさっさと寮に戻ることにした。いつまでも教室にいるとこの前みたいに質問攻めにあうからね。

ん、グランドの方から何か違和感がするな……言ってみるかな。

prrrrr

「はい、火野です」

『火野か。今、グランドの方で怪人が出てきた。行ってくれるか』

「わかりました」

電話を切る。偶然にもそこにいた生徒はいなくて、被害者は0らしい。暴れだす前に倒さなくちゃ。　とりあえずＩＧの足止めとしてタカカンを3つ開ける。

「俺が着くまでよろしくね」

タカカン達は頷いて（？）飛んでいった。さて、俺も急ぎますか。

現場に着くと、ライオンみたいなやつがタカカン達に翻弄されていた。じゃあ、俺も戦いますか。

オーズドライバーにいつものメダルを入れて、スキャン。

「変身！！」

『タカ！　トラ！　バッタ！　タ・ト・バ　タトバ　タ・ト・バ！』

走りながら変身した俺はそのままライオンＩＧに飛びかかる。パンチがあたり、転がるＩＧ、もちろんセルメダルを落としながら。

「オーズゥ」

恨みがましく立ち上がったＩＧはクローを展開して、切りかかってくる。

「うわぁ！」

予想外の攻撃に対応が遅れ、回避できずに転がる。イタタタ。だ

ったらこっちもリーチを、と。

『タカ！　カマキリ！　バッタ！』

ガキン！！

相手のクローを両腕のカマキリソードで抑え、相手の腹に思いっきり蹴り込む。相手がよろめいてるうちに右、左と、カマキリソードを振るう。

「ガァアアア」

ビカッ！！

「くっ、目が……うわぁあああ」

相手がライオンのコアの力を持っていることを忘れていたため、ライオディアスのような光に目をやられる。そして、相手はお返しとばかりにクローで攻撃してくる。目がちゃんと見えない俺はかわすこともできずにマトモに直撃してしまう。

「う……がっ……くっ…」

転がってる俺に容赦なく蹴りこんでくるＩＧ。そのまま、容赦なく俺を踏みけてきた。かなり痛い。

目が少しづつ慣れてきたから、目を開けると、ＩＧは俺の首めがけてクローを振り下ろそうとしていた。やられてたまるか！！

「うぉおおおおお」

脚に力をこめて、敵を蹴り飛ばす。バッタレッグは脚の中で一番のキック力を誇るため、直撃したＩＧはかなり吹っ飛んでいった。

「ふう、危なかった。じゃあ反撃させてもらうよ」

『クワガタ！　カマキリ！　チーター！』

頭部をこの前手に入れたクワガタに変え、亜種コンボ、ガタキリーターとなる。クワガタヘッドはとあるリスクと引き換えに電撃を放つことができる。ホントはあんまり使いたくないけど、ああだこうだ言ってる場合じゃないからね。

駆け出してくるＩＧに電撃を浴びせ、怯んだところをチーターの加速を乗せたカマキリソードで切る。

火花をあげ、よろめくＩＧ。今がチャンスだ。

「これで決める」

『スキャニングチャージ！！』

クワガタの電撃を放ちながら、チーターで加速、そしてカマキリで一閃。

「ガァアアアア！！」

断末魔をあげ、爆散するＩＳ。ライオンのコアメダルを回収した俺は変身を解いて一息つく。ＩＧは何が目的なんだ？　俺が持ってるコアメダル？

考えても答えは出そうにないな。でも、とにかく誰かが傷つく前には回収しなきゃ。

宣戦布告とラーメンとライオン（後書き）

アンケートや感想等お待ちしています。

次回は英治ＶＳ一夏の予定です。

ああ、簪を早く出してもＩＳのストーリーに絡めるいい方法が思いつかないｏｒｚ

奪い合いと禁句と特訓（前書き）

Ｃｏｕｎｔ　ｔｈｅ　ｍｅｄａｌｓ
オーズが使えるメダルは……

タカ
クワガタ
カマキリ
バッタ
ライオン
トラ
チーター
ゴリラ

奪い合いと禁句と特訓

５月。特に変わったこともなく、毎日を過ごしていた。授業を受けて、放課後にＩＳの訓練をすることがあったり、と。ああ、そういえば、鈴と一夏の仲がよくなかったなぁ。何があったんだろ？

で、来週クラス対抗戦を控えた今日から俺と翼も一夏の特訓につきあうことになった。というか１ヶ月あったのに一夏と訓練するのは初めてな気が……べ、別に篠ノ之さんとかセシリアが怖かったからじゃないから。

そんなことはさてより、さっさとアリーナに行こうと、と俺は思っている。なぜかって？

「中距離射撃型の戦闘法が役に立つものか。一夏のＩＳには射撃武器がないからな」

「それをいうなら篠ノ之さんの剣術訓練も同じでしょう。ＩＳを使用しない訓練なんて時間の無駄ですわ」

「な、何を言うか！　剣の道はすなわち見という言葉を知らぬのか。見とはすなわち――」

「一夏さん、今日は無反動旋回のおさらいから始めましょう」

「ええい、このっ！　聞け、一夏！」

「俺は聞いてるって！」

これって訓練になるのかな？　教官がまず仲悪いし、言ってることもバラバラだし。一夏が強くなってるのか不思議だなぁ。

「待ってたわよ、一夏！」

かなりの時間がかかり、アリーナにたどり着くと、鈴がいた。

「貴様、どうやってここに」

いや、普通に入口からだと思いますよ、篠ノ之さん。

「ここは関係者以外立ち入り禁止ですわ」

セシリア、そんなことは決まってないから。

「あたしは関係者よ。一夏関係者。だから問題なしね」

鈴、その理屈はなんかおかしい気が……。

あ、一夏の反応に食ってかかる篠ノ之さんとセシリア。一夏が軽く怯えているのは気のせいじゃないはず。

いつになったら一夏の訓練が始まるんだろ。

ドガァァンッ

「言ったわね……。言ってはならないことを、言ったわね！」

一夏が何を言ったのか知らないけど、ＩＳを展開させて怒りに震える鈴。

危険に巻き込まれたくなかったから、俺はあのグループから距離を取る。だが、予想外にも鈴はすぐに帰っていった。なんかもう呆れに呆れてどうでもよくなってきたよ。

「ンンッ！　気を取り直して、訓練を始めるぞ、一夏」

「そうですわ。わたくし達の貴重な時間を使用してるんですもの。しっかりとやってもらいますわ」

「「セシリア（篠ノ之さん）は引っ込んでいろ（いてください）」」

ホントにいつになったらはじまるのかなぁ。

はぁ、仕方ないけど俺がどうにかしなくちゃ。

「ねえ、箒とセシリアは何がしたいの？　一夏の特訓？　それとも一夏の独占？」

「な、何を言っている。私はただ同門が弱いのが我慢ならないだけだ」

「わ、わたくしはクラス代表にはしっかりとしてもらわくてはいけないと思いまして」

「つまり、一夏が強くなればいいんだよね？」

「「勿論だ／そうですわ」」

「だったら俺みたいに近接戦ができるＩＳを使う人が特訓した方がいいんじゃ」

俺がそう言うと、一夏は期待をこめた視線を俺に送ってきた。まあ、これもデザートｔ……一夏のためだからね。

「い、いや、私は一夏がどうしても、と言うから相手をしているの

だ」

「そうですわ。本人の意思を無視するのは良くなくて」

「いや、俺は訓練してくれるのはありがたいけどさ、どうしてもって言ってないぞ」

何この意見の食い違い？　そして固まる2人。まあ、2人は大丈夫だろうし、始めるかな。

「じゃあ一夏、始めるよ」

「おう」

さてと、まずはこれかな。

『タカ！　トラ！　バッタ！　タ・ト・バ　タトバ　タ・ト・バ！』

「こっちからいくよ」

オーズカリバーを構え、一夏に向かって加速する。すかさず一夏も雪片で対抗してきて鍔ぜり合いになる。

「くっ……」

「一夏、まだまだだよ！」

一夏を押し、よろめいたところで距離をとる。一夏は接近戦用のブレードしかないなら、これを使ってみるかな。

『タカ！　ゴリラ！　バッタ！』

トラをゴリラに変える。スピードは遅くなるが、パワーは上がる。一夏は突っ込まなきゃ攻撃はできない。だったらカウンター狙いでやってみるかな。

「腕を変えた……見るからにパワーがありそうだな。でも鈴もパワータイプらしいんだ。いい練習になるな」

そう言って一夏は加速してくる。雪片の一激を肩で耐え、右腕を振るう。

「うわぁあああああ」

ドガァンッ！

ゴリラアームの一撃を食らった一夏は地面に叩きつけられ、土煙があがる。でも、一夏のシールドエネルギーがなくなったって情報が流れないため、油断はできないな。そう思ってタカの能力である視力の強化をする。…一夏はあそこだな。
だったら煙が晴れたら勝負だね。じゃあメダルはこれに。

『ライオン！　カマキリ！　チーター！』

ラキリーターとなり、土煙が晴れるのを待つ。一夏は突っ込んでくると思うから視力を潰す。そこから攻める、それが今回の作戦だ。

土煙が晴れる。俺の予想とは別に一夏は俺と距離をとった。それもジグザグの軌道で。多分、オーズカリバーを警戒したんだ。予想外の冷静な対応に篠ノ之さんとセシリアとの特訓は無駄じゃなかっ

たんだと思い、ちょっと安心した。
だったらこっちから攻めるかな。チーターの加速からカマキリソードを振るう。だが、一夏は避けずに、上手い体勢でこちらの攻撃を最低限のダメージに押さえた。

「え、これを止めるのはちょっと予想外」

「英治、さっきのお返しだぜ」

一夏の攻撃が直撃し、シールドエネルギーが減る。ほぼ不意打ちであるため、かなりのシールドエネルギーを持ってかれた。今度はこっちが地面に落ちた。

「ふん、特訓の成果がでているようだな」

「そうですわね。何もできずにやられていたら困りますわね」

え、いつの間に復活したの2人とも？　さっきまで固まってたよね？

ドガァァンッ

すぐに気を取り直して一夏の追撃をかわす。
こうなったら切り札を使うか。

《ライオディアス発動》

俺に黒いバイザーが装着され、その後に輝く。

「くそっ、目が……」

「今だ！」

『スキャニングチャージ！』

一夏が止まってる隙に加速。そのままカマキリソードでＸ字に斬る。

そして一夏は落下。シールドエネルギーはゼロに。

下を見ると、白式が解除された一夏が大の字になっていた。

「思ったより強いよ。鈴の実力がわからないけど、まあまあ戦えるんじゃない。まあ俺もＩＳはそんなに強いわけじゃないけどね」

「そ、そうか？」

一夏が確認をしてる途中、篠ノ之さんとセシリアは物凄い形相で俺を睨んでいた。はぁ、俺が悪いの。

「サンキューな英治。やっぱり接近戦型の相手の方が練習した気になるぜ。次も頼む」

「ははは、まあ、いいけど」

自分達が呼ばれないことに不満を感じてる２人から視線が刺さる中、俺は一夏に答えた。

クラス対抗戦組み合わせ、１回戦、１組代表織斑一夏ＶＳ２組代

表鳳鈴音

この戦いがああなるとは今の俺は思いもしなかった。

奪い合いと禁句と特訓（後書き）

突然ですが、アンケートの締め切りを原作1巻終了予定の8月30日までとします。そうしないとキャラを出すタイミングがなくなるので……

ちなみにバースは伊達さん、参戦ライダーは龍騎が1位となっています。投票して下さった方に感謝です。

クラス対抗戦と衝撃砲と瞬時加速（前書き）

Ｃｏｕｎｔ　ｔｈｅ　ｍｅｄａｌｓ
オーズが使えるメダルは……

タカ
クワガタ
カマキリ
バッタ
ライオン
トラ
チーター
ゴリラ

クラス対抗戦と衝撃砲と瞬時加速

クラス対抗戦当日。対戦カードは一夏と鈴。そういえば、一夏は織斑先生から何か教わったみたいだったけど、なんだろ？

一夏と親しいから俺、篠ノ之さん、セシリアは織斑先生、山田先生とピットから見ていた。期待の新入生同士の戦いだからか、アリーナは全席満席で、あちらこちらでモニターで見る人がでるほど、注目の的となっている。

「そろそろ、はじまるのかな」

フィールドでは、一夏と鈴が睨みあうように立っている。鈴のISは『甲龍』と書いて、シェンロンと呼ぶ。特に目を引くのは、非固定浮遊部位と、２本の青龍刀≪双天牙月≫。何とも攻撃的なデザインなことで。

『それでは両者、指定の位置まで移動してください』

アナウンスに促された２人は指定の位置へ。２人の距離、５メートルが少ないと思うのは俺だけだろうか？

「一夏、今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルをさげてあげるわよ」

「雀の涙くらいだろ。そんなのいらねえよ。全力で来い」

バトル開始前から舌戦ですかい。まあ、俺が口を出すべき問題ではないから、本人達の気が済むようにやればいいと思う。

「一応言っておくけど、ＩＳの絶対防御も完璧じゃないのよ。シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体に貫通させられる」

あの言い方、鈴にはそれができる武装があるってことか。

そして、戦い開始のブザーが鳴る。さて、どちらが勝つのかな。

ガギィンッ！！

一夏は展開した雪片で、見えない何かをはじくが、体制を崩す。

それなりの威力はあるようだ。まあ、一夏はすぐに、セシリアから教わった機動、え～と、名前は忘れた、で鈴の正面に行く。

「ふうん。初撃を防ぐなんてやるじゃない。けど」

そう言うと鈴は双天牙月をバトンのようにくるくる回しながら、一夏に切りかかる。様々な角度からの斬撃をいなすだけで、一夏は精一杯のようだった。あの鮮やかな動きを刀１本でいなせるだけ、俺は凄いと思うんだけどな。

（まずい。このままじゃ消耗戦になるだけだ。１度距離をとって）

「甘いっ！！」

「ッ！！」

鈴が叫ぶと同時に、一夏は吹き飛んだ。肩から、何かを撃ったようだけど……。

「今のはジャブだからね」

不敵な笑みを浮かべた鈴は、体制を立て直している一夏にもう１

度何かを撃ち込んだ。一夏は痛そうな悲鳴をあげている。きっとこれが、最初に言ってた武器なのだろう、あの見えない砲撃が。

「なんだあれは……？」

篠ノ之さんが呟く。俺も仕組みがわからないから、何だ、って思っている。

「『衝撃砲』ですわね。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余乗で生じる衝撃を打ち出す。ブルー・ティアーズと同じだい3世代ですわ」

解説ありがとう、セシリア。要するに、威力が桁違いに高いダンボール砲って感じかな。篠ノ之さんは今の説明を聞いていなかったみたいだけど。大切な人が辛そうな表情でいるのだから。

（……一夏）

篠ノ之さんはこの激しい戦闘を目の当たりにして、ただただ、一夏の無事を願っていた。

「心配なのはわかるけどさ、一夏の勝利を願ってあげるべきだと思うよ。信じる方が大事だからね」

「……ああ、そうだな」

頑張れよ、一夏。こんな美人が心配してくれているんだから。

「よくかわすじゃない。衝撃砲≪龍砲≫は砲身も砲弾も見えないのが特徴なのに」

見えない鈴の攻撃に防戦一方になる一夏。弾が飛んできてからよけるのは多分無理。だったら、銃口を見て、あらかじめ射線から逃げるのが有効だけど、銃口すら見えないからなぁ。

でも、一夏のＩＳなら相手の攻撃をよけつづけるより、一瞬の隙をついた奇襲の一撃必殺がむいているはずだ。あいつの雪片なら、それが可能だ。

一夏は織斑先生から何かを教えて貰った後、近接戦闘と急加速急停止に力を注いでいた。それが勝利の鍵だろうな。

◆◆◆

（練習なら、できることをやったけど、ＩＳの経験はどう考えても鈴の方が上なんだ。だから、俺ができるのは、気持ちで負けないってくらいだな）

一夏はそう考えて、鈴を見つめた。

「鈴」

「なによ？」

「本気で行くからな」

「な、なによ……そんなこと、当たり前じゃない……。とっ、とにかくっ、格の違いってのを見せてあげるわよ！」

鈴は再度、双天牙月をバトンのように回し構え直す。対する一夏は衝撃砲を警戒し、その前にどうにかしようと加速体制に入った。

『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』。この1週間で一夏が身に付けた技術、そして切り札（カード）。この奇襲は1度限りだろう。これが、この勝負の鍵である。

「うおおおおっ！」

そして、一夏は飛ぶ。刃が鈴に届きそうになったとき、それは起こった。

ズドォォォォンッ！！

大きな衝撃がアリーナを襲い、遮断シールドに穴が空く。穴はすぐに修復されるが、煙ははれない。

「な、なんだ？　何が起こって……」

迷う一夏に鈴からプライベート・チャンネルが繋がる。

『一夏、試合は中止よ！　すぐにピットに戻って！』

何を言い出すのか？、と考える一夏を現実の戻したのはＩＳの緊急通告だった。

―ステージ中央に熱源。所属不明のＩＳと断定。ロックされています―

「なっ！」

アリーナの遮断シールドはＩＳと同じもので作られている。つま

り、それを貫通するほどの攻撃力を持った機体が現れた、ということだ。おまけに一夏も鈴もエネルギーを消耗している。ようするに、ピンチということだ。

『一夏、早く！』

「お前はどうするんだよ！？」

「あたしが時間を稼ぐから、その間に逃げなさいよ！」

自分が囮になるから、その隙に逃げるように言う鈴と、そんなことはできない一夏。平行線である２人の意見の対立に終止符を打ったのは敵の攻撃だった。

「あぶねえ！！」

間一髪、鈴を抱えて、敵の攻撃、ビーム砲をよける一夏。その威力は彼の友人、セシリアのそれを上回っていたのだった。

そのまま、敵は２，３発と一夏達を狙う。それをかわすと、煙がようやく晴れ、敵の姿がわかった。

「なんなんだ、こいつ……」

そこにいたのは異形だった。ＩＳには珍しい『全身装甲（フル・スキン）』。バランスの悪い図体。そして並みのＩＳより、巨大である。

『織斑君！　鳳さん！　今すぐアリーナから脱出してください！すぐに先生達がＩＳで制圧に行きます！』

山田先生は２人に逃げるように言う。だが、一夏達は戻らないよ

うだ。きっと彼にもわかったんだろう。誰かが相手をしないと、観客席にいる人達が危ないということを。

結局、山田先生の説得むなしく、2人は謎の敵に立ち向かっていった。武器の都合上、一夏が前衛、鈴が後衛という形で。

◆◆◆

「もしもし!?　織斑君聞いてます!?　鳳さんも!　聞いてますー!?」

山田先生がいくら呼んでも返事は来ない。戦いに夢中なのか、それとも、通信不可能だからか。

「本人達がやると言っているんだ。やらせてみてもいいだろう」

「お、お、お、織斑先生!　何を呑気なことを言っているんですか!?」

「落ち着け。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」

さすが織斑先生。落ち着いていっらっしゃる。でも、コーヒーって糖分だっけ?

「……あの、織斑先生。それ塩ですけど……」

「……」

前言撤回。やはり、織斑先生も人の子。弟のピンチには動揺しているようだ。

「あっ！　やっぱり弟さんのことが心配なんですね！？　だからそんなミスを……」

「……」

気まずい沈黙。山田先生、地雷踏んだな。

「山田先生。コーヒーをどうぞ」

「へ？　それって、塩が入ってるやつじゃ……」

「どうぞ」

有無を言わさぬ口調。さよなら、山田先生。あなたのことは忘れません。

「い、いただきます」

「熱いので一気にいくといい」

ああ、山田先生が何とも言えない微妙な表情を。とりあえず、織斑先生を弟のことでいじってはいけない。例え、ブラコンであることが事実だとしても。

「ほう、火野。お前もコーヒーを飲みたいのか」

「いえ、いいです。それよりも……」

「先生！　私にＩＳの使用許可を！　すぐに出撃できますわ！」

ありがとうセシリア。君のおかげで命びろいできたよ。

「そうしたいところだが、……これを見ろ」

「遮断シールドがレベル４に設定……？　しかも、扉がすべてロックされて……あのＩＳの仕業ですの！？」

「つまり、避難も救援もできないってことか」

強いシールドに囲まれている。突破には高い火力が必要なのか……だったら。

「そのようだ。今、３年の精鋭がシステムクラックを続行中だ。それが完了次第。すぐに、部隊を……どうした、火野？」

「先生、ちょっといいですか？」

「何だ？」

「遮断シールドをどうにかできればいいんですよね」

「「？」」

肯定する織斑先生に話が読めていないセシリアと山田先生。あれ、篠ノ之さんはどこ？

「そうだがどうする気だ？」

「まあ、任せてください。とっておきの方法があるので」

「本来なら生徒にこんなことはさせたくないのだがな、事が事だ。出撃を許可する。だが、戻ってきたら色々と方法とか聞かせてもらうぞ」

「織斑先生、でしたらわたくしも行きますわ」

「仕方ないな。本来お前のＩＳは多対１に向いてはいないのだが、勝手な行動をされる方が困るな。出撃を許可する」

「ありがとうございます」

ピットを飛び出してきたのは遮断シールドの目の前。

さてと、じゃあコンボ、いってみようか。

クラス対抗戦と衝撃砲と瞬時加速（後書き）

次回はあのコンボが登場。コンボは2つ使えるけど、どちらかは感のいい人ならお分かりでしょう。

感想等お待ちしております。それでは次回。

Got to keep it real（前書き）

Count the medals
オーズが使えるメダルは……

タカ
クワガタ
カマキリ
バッタ
ライオン
トラ
チーター
ゴリラ

「くっ……！」

一夏が放つ斬撃はいとも簡単に襲撃者にかわされてしまう。これで４回目のチャンスを逃している。敵はありえないほどの回避能力を持っていた。死角をつこうが、どんなに速い攻撃をしても、だ。おまけに、鈴も一夏も連戦とあって、シールドエネルギーが残り少なかった。

（参ったな……。これじゃ、バリアー無効化攻撃はあと１発だせるかどうか……）

「一夏っ、離脱！」

鈴の警告が一夏の思考を現実に戻す。さっきまで、一夏がいた場所をビームが通り過ぎる。白式のエネルギー残量から考えると、１撃くらえば、御陀仏だろう。

「ああもうっ、めんどくさいわねコイツ！」

鈴も衝撃砲を撃つが、敵の長い腕にはじかれる。残りエネルギーを考えると、速攻で決着をつけたがそうはいかなかった。なら、できるでけ早く勝負を、と考えてもそうはいかない相手だった。

「ちょっと、厳しいわね……。現在の火力でアイツのシールドを突破して機能停止させるのは確率的にひと桁台ってところじゃない」

ドンッ！　２人の頭上からは何かがぶつかる音がする。

「ゼロじゃないだけましだけど、確かに厳しいな……」

ドン、ドンッ！

音は強くなるばかり。

対策を考えているうちに意識を敵からそらしたのがいけなかった。敵は腕を向け、ビームのチャージを始める。一夏が気づいたときはもう遅く、回避はできない状況だった。

「一夏！！」

鈴が叫ぶが、彼はどうあがいてもよけられない体制であった。誰もがもう駄目だと思ったとき、その音が聞こえてきた。

ガシャァァンッ！

遮断シールドを突き破り現れた十機近くの緑のＩＳは襲撃者を蹴り飛ばし、着地する。

「ふう、危ないところだったね」

「２人とも大丈夫でして？」

「英治にセシリア。助けに来てくれたのか」

「って、アンタ達どうやって入ってきたのよ！　遮断シールドは解除されたないのよ」

「まあ、切り札があったからね」

いつもの3色のタトバではなく、緑一色の装甲を纏っていた英治が答える。

「それに、なんなのよ、この大量のアンタそっくりのＩＳは！？」

「まあちょっとね……」

◆◆◆

ここで時間を戻して、突入する前の英治達にスポットを当てよう。

「さてと、じゃあ、今は」

取り出すのは3枚の緑のコアメダル。

「同じ色のメダル3枚で、何か起こるんですの？」

「まあね。ＩＳだとどんな力かはわからないけれど……」

『クワガタ！　カマキリ！　バッタ！　ガ～タガタガタキリッバガタキリバ！』

ライドオーズの姿はとてつもない力を発揮する姿、ガタキリバコンボとなる。

「うぉおおおおおおお」

雄叫びとともに展開される十機位のガタキリバに似たＩＳ。

「な！？　なんですのそれは！」

「う～ん、セシリアのビットの人型バージョンかな」

セシリアの顔は驚愕の色に染まる。彼女は４機の誘導兵器の制御に苦労するのに英治が展開するのは１０機。それも人型である。彼女が、いや、ＩＳを知る者なら誰もが驚くであろう光景だった。

「さてと、一点突破でいきますか」

『スキャニングチャージ！』

飛び上がるガタキリバ達は空中で１回転し、足を突き出す。

「うぉおおおお、セイヤーーー！」

◆◆◆

「説明は後で。だから今は目の前だけに集中して」

ＩＳからの警告で人型ビットの展開はシールドエネルギーを大量に消費すると言われ、展開を解除する。敵の目的がわからない以上、持久戦はできるようにしないと。

「一夏！」

「お、おう！」

鈴の警告に応え、一夏はその場から離れる。数テンポ遅れてその場をビームが通り過ぎる。一夏が回避したのを確認した後、すぐに敵に切りかかる。だが、敵はビームを撃った後の体制にも関わらず、簡単にカマキリソードの一撃をかわしてみせた。とてもじゃないけど、人間がこんな動きはできないと思うんだけど。

「英治さん、援護しますわ」

セシリアの援護射撃も簡単にかわし、俺に殴りかかってくる敵。それを後ろに跳んでかわし、一夏達と合流する。

「なあ、アイツの動き、機械じみてないか？」

「ＩＳは機械よ」

「そう言うことじゃなくて……俺が言いたいのは、あれって本当に人が乗っているのか？」

「人が乗ってないＩＳなんて聞いたことがありませんわ。確かに動きは不自然ですが……」

俺は、あれは無人、もしくは人あらざるものが乗っていると考え

るのが妥当な気がする。でも、あれは怪人が使っているわけではない。何だかそんな気がする。

「2人とも何言ってんのよ。でも、確かに不自然なとこは多いわね。でも、無人機だったら何？」

「そりゃ、遠慮なしに攻撃しても大丈夫だろ」

確かに搭乗者のことを考えなずにボコボコにしても無人機なら問題はないはずだ。

「一夏、どうしたらいい？　何でも手伝うわよ」

「頼む。英治とセシリアはアイツの隙を作ってくれ」

「了解」

「わかりましたわ」

セシリアのレーザーが足止めをしているうちに切り掛かる。スピード、パワーともに高い相手ならゴリラやチーターがいいんだろうけど、下手な亜種にするよりはコンボのガタキリバの方が強い。人型ビットを展開できるタイムは残り３０秒。確実に決めるタイミングで使わないと。

「はぁあああ」

相手の拳をカマキリソードでいなし、バッタの脚力で距離をとりながら、クワガタの電撃を放つ。ダメージはそれなりには通るみたい。一夏はそろそろかなぁ。

「一夏、まだ!?」

「わかった。じゃあ鈴、たのm」

『一夏ぁっ!』

早速、一夏が準備しようとしたときに聞こえてきたハウリング。その発生源は中継室で審判とナレーターを殴り倒した篠ノ之さんからだった。そんなことしてる場合じゃないでしょ!!

『男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする!』

再びハウリングを起こし、叫ぶ篠ノ之さん。彼女の表情は真剣なものだが、あくまで彼女にとってのだ。そんなことはお構いなしに無人機は銃口のついた腕を篠ノ之さんに向ける。

「っ、箒!!」

一夏が飛び出したのと、引き金が引かれたのは同時だった。一夏は白式の単一使用能力、『零落百夜』を発動させるが、白式のシールドエネルギーは残り少なく、ビームを相殺すると同時に一夏は倒れた。

「一夏っ!!」

鈴が叫ぶが一夏は気を失っているのか反応はしない。容赦なしに無人機はその腕を一夏に向ける。でも、そんなことはさせない!!

そう心に思い、ビットを展開させる。悪いけど、倒すから。

再び展開されるビット。チャンスは３０秒だけだからすぐにきめる！

『スキャニングチャージ！』

遮断シールドを破壊した時と同じように全機跳び上がり、空中で１回転。そのまま足を突き出す。

ドガァアンッ！　ドガァアンッ！

１機、２機と次々に蹴り込むと同時に、煙をあげ、無人機はその原型をなくしていく。

「はぁあああああ、セイヤーーーーー！」

最後に本体である俺のキックが無人機を貫く。

「ふう。やっぱりコンボは疲れるなぁ」

爆発を背に、着地した俺は呟いた。実際のオーズのコンボよりは疲労を感じないけどね。さて、一夏は大丈夫かな。

「２人とも、一夏は？」

「ただの気絶ですわ。何にしろ大事に至らなくてよかったですわ」

一夏が大したことのないことに安心。よかった～。さてと、問題はこの無人機が誰からの刺客なのか、ということと、ね。そう思って中継室に目をやる。いくら一夏のためになりたかったからって、そう認められることじゃないしね。

『火野君、オルコットさん、鳳さん、大丈夫ですか？　今、遮断シールドが解除できましたので戻ってきてください』

山田先生からの放送を聞き、ピットに戻る。詳しい事後処理は俺達がやることじゃないから。

Ｇｏｔ　ｔｏ　ｋｅｅｐ　ｉｔ　ｒｅａｌ（後書き）

オーズが終わった……私は何を生きがいにすればいいのでしょうか。

そんなことはさておき、次回は今回の後日談なので翌日に投稿します。

感想等お待ちしております。アンケートも明日までですので。

説教と仲直りと約束（ただし一方通行）（前書き）

Ｃｏｕｎｔ　ｔｈｅ　ｍｅｄａｌｓ
オーズが使えるメダルは……

タカ
クワガタ
カマキリ
バッタ
ライオン
トラ
チーター
ゴリラ

説教と仲直りと約束（ただし一方通行）

ピットに戻ってきた俺達はすぐに一夏を保健室に運び、一夏が目を覚ましてから今回の事件についての連絡がある、と聞き、すぐに解散となった。でも、俺は今回の事件でどうしても解決しなければいけないと思うことがあった。だから、すぐさま一夏の元へ向かおうとする篠ノ之さんを呼び止める。

「何故止めるんだ？　火野は一夏が心配ではないのか！？」

「心配だよ。でも、こうなったのは篠ノ之さんのせいでもあるんだよ。どうしてあんなことをしたの」

「そ、それは……」

「自分が狙われないことを考えなかったの？　中継室で篠ノ之さんが気絶させた人達も傷つく可能性があることを考えなかったの？」

「……」

篠ノ之さんは黙ったまま。それでも俺は続ける。だれが伝えないと、またこんなことが起こる気がするから。

「もしかすると一夏は篠ノ之さんがあのタイミングで出てこなければ怪我しなかったのかもしれない。正直に言うと、あの時の篠ノ之さんは足手纏いだったから。俺が言いたかったことはこれだけだから」

「……わ、私はっ……」

うつむく篠ノ乃さん。その表情は見えないが雰囲気から自分のミスに気づいてる気がする。

「言い方が悪かったかもしれないけど、人の命に関わることだから。何より失った命は帰ってこないから」

そう言って脳裏に浮かぶのは守れなかった人達。自分に力があれば助けれたかもしれない人、オーズの力があるのに間に合わず助けれなかった人……

自分でも表情が暗くなっているのがわかるほど俺は今でも後悔をしているんだ。だから後悔しない生き方を探しているんだ。

「火野……そうだな。私が悪かった。あの時は一夏のためになるってことしか考えていなかった……すまないな。お前のおかげで大事なことに気がついた」

「わかってくれればいいよ。俺は先生達と話があるから先に一夏のところに行ってて」

「ああ」

そう言って篠ノ之さんは一夏のところに向かった。これでこの事件は解決かな。

「すまないな、火野」

後ろから織斑先生の声がする。その顔はいつもの凛とした表情ではなく、少し戸惑いのある気がした。

「本来は篠ノ之にああ伝えるのは教師の役目なのだがな、山田先生は優しすぎるし、私は感情的になってしまいそうだからな」

「別にいいですよ。俺だって気になりましたから。それに……」

一夏本人は優しいからこのことを咎めすらしないだろうから。もし誰も何も言わなかったら大事なものが無くなりそうな気がしたから。

「……そうか」

「じゃあ俺はこれで」

そう言って、俺は保健室に向かった。一夏がどうなってるかな。

◆◆◆

英治と箒が話している頃、早くも目を覚ました一夏とそれを鈴はというと、夕日がさす保健室で話していた。

「あー、そういえば試合、無効だってな」

「まあ、そりゃそうでしょうね」

「あ、そういやさ、勝負の決着ってどうする？　次の再試合って決

まってないんだよな？」

負けたほうがなんでも言うことを聞くという賭け。彼は鈴との約束のことで気になったのだ。

「そのことなら、別にもういいわよ」

「え？　なんで？」

「い、いいからいいのよ！」

顔を赤くする鈴。元々の発端は、鈴が中国に帰るときに一夏とした約束「あたしの料理の腕が上がったら、毎日あたしの酢豚を食べてくれる？」の内容を一夏がただ飯を食わせてもらえると勘違いした所から始まったのだ。鈴の真意は日本でいう味噌汁の話、いわゆるプロポーズのものだったのだが、相手は歩く唐変木、織斑一夏。見事に誤解していたのであった。

「鈴。その……悪かったよ。色々とすまん」

一夏は素直に頭を下げた。鈴はそんな一夏に面を食らったような顔をしたが、すぐに戻った。

「ま、まあ。あたしもムキになってたし……。いいわよ、もう」

ここで終わればいいのだが、一夏は正確な約束を思い出し、それが味噌汁がどうのこうのとか言ったときは鈴は固まって、動揺していた。

「そういえば、また店やるのか？　鈴の親父さんの料理、うまいも

んな。また食べたいぜ」

「あ……。その、お店はもうしないんだ。あたしの両親、離婚しちゃったから……」

場の空気が重くなった。鈴の両親が仲が良かったのを知っている一夏は冗談じゃないのか、とも思ったが、鈴の表情を見て、冗談ではないのをさとり、何を言うべきなのかわからなかった。何より一番辛いのは鈴なのだ。理由は確かに気になるが、そんなのは訊いていい話ではないのだ。彼女の心の傷をえぐってしまうから。

「家族って、難しいよね」

その問いに一夏は答えられなかった。彼自身も家族に問題があった。一夏と千冬は捨てられた。さらに、一夏は両親の顔を知らない。だから、何も答えれなかった。

「なあ鈴」

「ん、何？」

「今度どっか遊びに行くか」

「え！？　それって、そのデー――――――」

「弾も呼ぼうぜ。久しぶりに3人で集まるか」

「……」

何かが砕け散る音がした。よく自分から突き落として、上げる。

それが異性に好印象を与える方法と耳にすることがあるが、彼はまさに逆のことをやってのけたのだ。夜中に刺されても文句は言えないだろう。

「あんたと2人っきりなら、行ってあげなくも――――――」

「一夏さん、こんな所でなにをやっていますの？」

「なんでアンタがここに」

突如、2人の間に火花が散る。その後、クラスだの、戦闘スタイルだので、一夏のコーチは自分だ、だの言い争いが始まった。一夏にとって幸いなことは箒がいないことだろう。幼馴染は自分だ、だので余計に騒がしくなるだろう。

（ああ、早く部屋に帰って休みたい……。ていうか風呂に入りたい……）

「「一夏（さん）！！」」

少年の願いは当分、叶わないようだ。だが、諦めてしまったら、そこが終点になってしまう。

◆◆◆

学園の地下。千冬と真耶はレベル４権限者しか入れない場所で無

人機の解析を行なっていた。無人機はすぐさまその場に運ばれていた。真耶が解析してる間、千冬はアリーナでの戦闘記録を何度も見ていた。

「やはり、登録されてないコアだったか」

真耶からの報告を聞き、千冬はあることを思い出した。

（そういえば、火野と門矢のＩＳも登録されていないコアだったな。だが、何者も手出しができないように仕組まれている）

すぐさま友人の顔を思い出し、聞き出してみたいと思った。

「織斑先生、どうかしましたか？」

「いや、このコアについて考えていただけだ」

「ということは心当りがあるんですか？」

「いや、ない。今は、まだ」

千冬は携帯に登録されているある番号を見つめる。それが答えに一番近づく方法だから。だが……。

（山田先生もいるしな。後でかけるか）

彼女は視線をディスプレイに戻す。世界最強まで上り詰めた彼女の瞳には何が映るのだろうか。

◆◆◆

「結局、コンボを使わなきゃいけなかったか。でも……」

一夏がいつもの3人に振り回されているのを見た、俺は自室で休んでいた。緑のコンボ、あれがこの世界の常識を超えているものだったら、絶対、誰かが狙ってくる。

あの戦いだって、無人機はあまり高く飛ばなかったし、ガタキリバの物量でどうにかなった部分が大きい。ＩＳでの戦いはまだまだだから強くならなきゃ。

そして黄色のメダルに目を落とす。現段階でできるもう1つのコンボ。あのコンボはＩＳだとどうなるのだろうか。それに残りのメダルも集めなくちゃいけない。

「強くならなきゃな」

そう思ったあと、気分転換に外の空気、というか購買に行こうと思って部屋を出た。そして適当にジュース、パンを買って部屋に戻る途中、のほほんさんがいた。

「何してるの、のほほんさん?」

「あ、ひのひの。今ね、おりむーの部屋の前で面白そうなことになってるのだ～」

ひのひのってポケットなモンスターと旅するゲームの2作目のキャラの鳴き声みたい。で、面白いことって?　そう思って見ると、

篠ノ之さんが一夏の部屋の前で何やら話していた。

「つ、付き合ってもらう！」

そう言い残して篠ノ之さんは去っていった。

「のほほんさん、コレどういうこと？」

「う～ん、今度の学園別トーナメントで優勝したらおりむーと付き合えるかな～」

「へぇ、そうなんだ。何か大変なことになりそう……」

「ひのひのとも優勝すれば付き合える～？」

「いや、付き合えないけど。一夏達で決めたルールでしょ。優勝したら一夏と付き合えるって？」

一夏がこんな約束するとは予想外かな。

「じゃあ俺、部屋に戻るから」

「うん、おやすみ～」

説教と仲直りと約束（ただし一方通行）（後書き）

アンケートは本日０時までです。次回はそのアンケートで決まったキャラを出すための話にするため、一から作るので遅れる可能性があることを御了承ください。

オーズの最終回見たらアンクを出したいとも思ったけど、出しても収集がつかなくなりそうなので悩み中。

簪とドーパントとバース（前書き）

英治が全く出てこないので「Ｃｏｕｎｔ～」はお休みです。アンケート結果発表バース編みたいなものです。

簪とドーパントとバース

「帰ったら…これを見よ」

授業のない土曜日。簪は用事（お気に入りのアニメのＤＶＤをアニ○イトに買いに行く）を済ませ、街を歩いていた。これ以上、ここに用事もなかったため、すぐに帰るつもりだった。

（私のＩＳ、どうしよう？）

道中、彼女はそのことを考えだした。代理が出たクラス対抗戦はともかく、今度行われる学年別のトーナメントにはこのままでは間に合わないからだ。

（…英治は自分のデータを使ってもいいって言ってた。……でもあの子にはライドオーズのデータは、ちょっと……）

クラス対抗戦で見せた人型ビット。あれがあれば戦いは有利だろう。だが、彼女が元々作ろうとしてたのはマルチロックオンシステム。それで苦戦中なのだからそれよりも難しい人型ビットは論外である。それを作るきっかけとなったのは蒼い翼を持つ自由ではないと思いたい。

好きなアニメの技が使えたらいいなあ、とも簪は考えているが、それを再現するためのヒントとかがないため不可能である。

（アニメの武器か……ドリルかな……天を突くみたいな感じ…）

彼女の脳内にはとあるロボットが思い浮かんだ。

（こ、これは無理……な、何か別の……）

さすがに道理は蹴っ飛ばせなかったのだろう。簪はふるふると首を振った。他にも赤く輝き3倍の性能を発揮するシステムや月面まで伸びるパンチ等々考えたが、彼女個人ではどう考えても再現不可だったので考え直した。

そんなことを考えてるときに事件は起こった。

ドガァンッ！！

その爆音は彼女が銀行の近くを通ったときに聞こえてきた。

「な、何？」

辺りでは悲鳴があがり、逃げ惑う人々が大勢いる。爆音の中心となった建物からは煙が上がり、そこから人型のシルエットが歩いていた。

「ヒャハハハハ、楽勝じゃねぇか。ここには厄介な仮面ライダーもいないし、俺に勝てるやつはいねえぞ！」

異形の怪人、アームズドーパントはそう言いながら駆けつけてきた警官を蹴り飛ばした。カエルが潰れたような声をあげ、警官は転がっていった。

（ど、どうしよう。英治に連絡したってここからＩＳ学園は結構距離あるし……）

彼女が思考の渦の中にいる最中も次々と警官は駆けつけ、包囲する。

「貴様は包囲されている。大人しく投降するんだ！」

「ああ、んなことするわけねーだろ！」

アームズドーパントは右腕を銃に変え、発砲する。だが、その１撃は脅しとばかりに警官達を狙わず、付近のパトカーを破壊した。

それをきっかけに警官隊は拳銃で攻撃をしかけるが、ドーパントには大したダメージは与えられず、１人また１人と倒れていく。

（早く英治に連絡を……っ！）

少し離れた物陰に隠れて、英治に連絡をとろうと思った彼女の目の前に映ったのは怪我をしていて動けない女の子だった。近くにはパトカーの残骸が見えるため、それで足を怪我したのだろう。

（助けなきゃ……）

そう思って簪は少女のもとへ急ぐ。幸いにもドーパントは警官達を相手にしているようでこちらに気づいていないようだった。

「……大丈夫？　早くここから……」

「いい獲物がいるじゃねぇか。なぶりがいのありそうなやつらだ」

女の子を背負い、逃げようとした簪に後ろから声がかかる。そこですぐさま走りだせば違う未来になったかもしれない。だが、簪は怪人が自分に向ける殺気に恐怖し、立ち止まってしまった。

（せ、せめて…この子だけでも守らないと……）

自分より震えている少女を見て、簪はそう思った。しかしドーパントはそんな彼女の考えも気にせず、着実に近づいてくる。

「あばよ、お嬢ちゃん達」

バンッ、バンッ！

彼女達めがけてドーパントが腕を振り下ろそうとしたとき、銃声が響いた。

「がぁあああああ」

警官の持つ拳銃とは威力が桁外れのそれに煙をあげ、よろめくドーパント。

「貴様ぁ！」

ドーパントが怒りをこめて目を向けた先には体格がよく、髪を短く刈った男がいた。年は３０くらいであろう。だが、何より目を引くのは背負っているミルク缶だろう。

「いけねぇよ、自分の欲望を満たすためにそんなことをするのはよ」

ま、俺も欲望まみれだけどな。そう男は続ける。

「貴様、タダじゃすまねぇぞ」

男はドーパントの敵意をさほど気にせず、悠々としている。

「さて、異世界での初仕事。いっちょがんばりますか」

男はベルトを巻き、メダルをはじく。宙を舞うメダルを掴み、一言。

「変身！」

メダルをベルトにいれ、ハンドルを回す。カポーン、そういう音と共に、男の姿は変わる。仮面ライダーの姿に。

「か、仮面ライダーだと！？」

ドーパントは狼狽する。ここは違う街、風都で手に入れたガイアメモリで男がわざわざこっちに来て暴れたのは自分達の天敵とも言える仮面ライダーを警戒してのことだった。

「そうなるな。じゃあ仮面ライダーバースだな」

「バースだろうがどうでもいい。貴様を倒せばいいんだよ！」

アームズドーパントは右腕を剣に変え、バースに切りかかる。

「うおっと。危ねえな…っと、お返しだ！」

体勢を低くして剣戟をよけ、膝蹴りをする。よろめくドーパントにそのまま追撃にパンチをする。

「こっちも武器を使うか」

再度、メダルをベルトにいれ、ガチャガチャのように回す。

『ドリルアーム』

「もいっちょオマケだ！」

『キャタピラレッグ』

右腕と両足の周りにいくつもの部品が展開され、それが名前通りの形となる。

「おりゃぁあああああ」

キャタピラで前進し、ドリルアームを振り回す。火花を上げ、よろめくドーパントに今度はキャタピラレッグで蹴りこむ。

「がぁあああああああああ」

キャタピラの回転に巻き込まれ、痛みに悲鳴を上げるドーパント。

「く、くそっ」

実力の差を知ったのかアームズドーパントは背を向け走り出す。

「逃がすかよ！」

バースは何枚かのメダルをベルトにいれ、回す。

『ブレストキャノン』

『セルバースト』

「ブレストキャノン、シュート！！」

走り出すドーパントを光の奔流が飲み込み、爆発させる。煙が晴れたそこには気絶した男と砕けたメモリがあった。

「さて、お仕事完了。嬢ちゃん達、大丈夫だったか？」

変身を解いた男は簪の方へ近づいてくる。

「私は大丈夫。でもこの子が……」

簪は怪我をしてる子に目を向ける。

「どれ、見せてくれ。う～ん、安心しな。ただの打撲だ。少し休めば大丈夫だ」

そういって男は簡単な処置を施す。

「ヒナ、どこ？　返事をして？」

「あ、お母さんだ。お姉ちゃん、おじちゃん。ありがとう」

母親に連れられて女の子は帰っていった。母親に背負われながらその子はずっと手を振っていた。

「さあて、嬢ちゃん、１ついいか？」

「は、はい」

「ここからＩＳ学園に行くにはどうすればいいんだ？　俺、今度そこの保健室で働くことになったんだな」

「え？　あ、私、ＩＳ学園の生徒です。よかったら一緒に行きますか」

「お、そいつはありがたいな。頼むぜ。俺は、え～と、こういうやつだ」

男は１冊のマニュアルを取り出した。

「……伊達明。で、仮面ライダーバース……」

マニュアルを受け取った簪はペラペラとページをめくる。そこにはバースの武器、ＣＬＡＷｓが書かれていた。

（すごい。もしかするとこれなら……）

「嬢ちゃん、どうしたんだ？　そのマニュアル気に入ったのか？」

静かに頷く簪。

「そうか。そういや嬢ちゃん名前は？」

「……更識簪」

「じゃあ、簪はこういうの整備できるのか？」

「ま、まあ、少しは……」

「お。じゃあ、もしかすると頼むことがあるかもしれないな。ソレ、貸すからヨロシクな」

「あ、はい」

簪の案内の元、伊達明はＩＳ学園に向かう。そこで英治達にどういう影響を与えるのだろうか。

「じゃあＩＳ学園に向かうか」

そう言って伊達は歩き出した。

「あ、あの駅はそっちじゃない……あっち」

「何？」

大雑把な人だな。会ってそうそうなのに簪は伊達の性格がわかった気がした。

簪とドーパントとバース（後書き）

文句が着そうな簪魔改造計画。
言い訳をするならバースのＩＳ化をしたかったからです。
ちなみに参戦希望ライダーは龍騎とカブト（天道総司で）の同率一位でした。すぐにとはいきませんが、出番をお待ち下さい。天道をどのタイミングで介入させるかが難しい……

アンケートに協力してくださった皆様、ありがとうございました。

おでんと噂と転校生（前書き）

今回はつなぎみたいなものなので短いです。

Ｃｏｕｎｔ　ｔｈｅ　ｍｅｄａｌｓ
オーズが使えるメダルは……

タカ
クワガタ
カマキリ
バッタ
ライオン
トラ
チーター
ゴリラ

おでんと噂と転校生

とある日曜日。簪に呼ばれた俺は保健室に来ていた。俺に会わせたい人がいるからしいけど、誰だろ？

「失礼します。火野ですけど……」

「…英治、来た」

「おう、来たか。お前が火野英治だな」

「あ、はい、そうですけど」

保健室には簪と知らない体格のいい男の人がいた。男の人は鍋で何かやってるけど。

「俺はこういうやつだ。ヨロシクな、火野」

そう言って渡されたマニュアルを見る。そこには「バース装着者伊達明」って書かれていた……って、バース!?

「おう。紅渡に頼まれて来た、お前の助っ人だな。しっかし、お前本当に俺の知ってる火野とそっくりだな」

「「？」」

同時に「？」を浮かべる俺と簪。どうやら伊達さんは俺とは違うオーズの世界から来たみたい。その世界のオーズは俺とそっくりだが、グリードの1人、アンクと仲間だったらしい。俺がいた世界じ

ゃ、皆敵だったもんな。そうか、グリードととも仲良くなれる可能性だってあるのか。

「ま、俺は医者だから普段ココにいるから困ったときは俺のとこに来な」

「はい。ありがとうございます」

「何か聞きたいことはあるか？」

聞きたいことか……。じゃあ1つ。

「その鍋は何作ってるんですか？」

そう聞いた途端、箸が「え……それ？」って呟いたけど気にしない。だってお腹すいたから。

「お、これに目をつけるか。こいつはおでんだ。食うか？」

「あ、いただきます」

「……しかも食べるの……？」

箸が突っ込むけど、これも気にしないで箸を伸ばす。あ、ちくわ。

「コレおいしいよ。箸も食べたら」

「…じゃあ、私も……」

このときは気にしなかったけど、保健室で3人がおでんを食べて

るって異様な光景だったんだろうな。

◆◆◆

「ふぅ、食べた食べた」

「結局……ずっと、食べてた……」

おでんを食べた後、俺達は戻ることにした。簪は伊達さんのマニュアルを持ってたけど、どうするんだろ？

バースに変身するのかな？

まあ、それにしても伊達さんみたいな人が来てくれてよかった～。ここＩＳ学園は一部の職員を除き、全員が女性。ああいう頼れる大人って憧れるしね。

その後すぐ、簪と別れ、俺は寮へ。といっても特にやることはないんだけどね。

◆◆◆

英治達が戻った後、伊達は１人、考え事をしていた。

「紅はコイツを使うときが来るって言ってたな」

取り出したのはバースドライバー。だが、彼の元にはもう1本、バースドライバーがある。

感のいい人ならお分かりだろうが、これはプロトバースドライバーとでも呼ぶのがいいであろうものだ。紅渡は伊達にこれも渡していたのだ。

自分がいた世界でもバースを後藤慎太郎に託し、自分は手術のために旅立った。その後、プロトバースとして復帰したのである。

「ま、あんまり考えていても変わらないか」

この世界には英治のオーズ、伊達のバース。そしてまだ見ぬ仮面ライダーがいる。それでも危機に陥らない可能性が無いわけではない。

「コイツを渡すやつ、探しといた方がいいかもな」

プロトバースのベルトを見ながら、伊達は呟いた。

◆◆◆

夕方、自由気ままに過ごした後、ご飯を食べに食堂に来ていた。

「ねえ、聞いた?」

「聞いた聞いたー」

「え、何の話？」

女子の集団が何か盛り上がっているな。何かあったのかな？　聞いてみよう。

「ねえ、何かあったの？　凄い盛り上がっているけど」「ひのひの。この前のおりむーのことだよー」

一夏の？　ああ、あの優勝したら付き合えるってやつか。

「なるほど。優勝すれば一夏と付き合えるから盛り上がっているのか。思ったんだけど俺が優勝したらどうなるの？」

まさか俺が一夏と……絶対そんなことはないはず。

「今年のネタになるわ」

「むしろそれがいいかも」

「って！！　ちょ、冗談じゃないよ」

何が悲しくて男と付き合わなきゃいけないの！？

「ところで火野君とは付き合えないの？」

「そりゃそうだよ。優勝したら付き合うって約束したのは一夏でしょ。残念だけど俺は違うよ」

「そうなんだ～残念」

「残念ってなんかあったのか？」

「あ、一夏。帰ってきてたんだ」

鈴と一緒に一夏が現れることによって慌てる女子達。隠す必要あるのかな？　ま、いっか。

ちなみに一夏は中学の友達の家に遊びに行ってきたらしい。

「まあ、一夏はあんまり気にしなくていいと思うよ」

「そうか。まあ、いいや。それより英治も一緒に食わないか？」

「いや、先約があるからやめとくよ」

そう言って鈴を見る。彼女はホッとした表情だった。多分、一夏と2人きりがよかったんだろう。俺が邪魔するのは悪いはず。さてと、何食べようかな。

◆◆◆

「諸君、おはよう」

翌朝。織斑先生の登場によって一気に静かになる教室。まあ叩か

れたくないからね。先生の威厳は軍隊でも通用するんじゃないかな。

「今日から本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるがＩＳを使用しての授業になるので各人気を引き締めるように」

その後、ＩＳスーツを忘れたものは水着、それすら忘れた人は下着で、って。思春期男子としては気になる光景だけど、駄目でしょ。ちなみに誰が狙ったのか、ここ指定の水着は旧型のスクール水着で体操着はブルマ、と。

「では山田先生、ＨＲを」

「は、はいっ」

そんなことを考えているうちに始まるＨＲ。今日は何かあるのかな。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します。しかも2名です」

「「「ええええっ!?」」」

え？　転校生？　2人も同じクラスに？　分散させないの？　こちらの疑問にも関わらず、開くドア。どんな人が来るのかな？

「失礼します」

「……」

礼儀正しく入ってくるブロンドの髪の人と、黙って入ってくる銀

髪の人。でも驚くことはブロンドの髪の人は“男”だったことだった。

おでんと噂と転校生（後書き）

やっとで原作2巻突入。2巻が終われば大体のキャラが揃うから、その後の展開がやりやすいのに。何が言いたいのかというと、ライダーの出番が未だに少ないってことです。

フォーゼって宇宙関係と学園ものってことでＩＳと絡ませやすそうな気がしますね。フォーゼを出す予定は無いですけど。

金髪と銀髪と山田先生の実力（前書き）

Ｃｏｕｎｔ　ｔｈｅ　Ｍｅｄａｌｓ
オーズが使えるメダルは……

タカ
クワガタ
カマキリ
バッタ
ライオン
トラ
チーター
ゴリラ

金髪と銀髪と山田先生の実力

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いですが、よろしくお願いします」

にこやかな表情で告げるデュノアさん。そんな彼とは逆に俺達クラスメイトはあっけに取られていた。

「お、男？」

クラスの誰かが呟く。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を――――」

「きゃ……」

「はい？」

「きゃあああああああーーー！」

クラス中に響き渡る換気の叫び。耳が痛い。織斑先生もやれやれって顔してるし。

「男子、３人目の男子」

「守ってあげたくなるタイプね」

「地球にうまれてよかったー」

次々と聞こえてくる喜びの声。最後の人は大げさだと思うけど……

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

「み、皆さんお静かに。まだもう1人の自己紹介が終わってませんから～」

織斑先生、山田先生に言われて静かになるクラス。そして大量の視線はもう1人の転校生に。銀髪の彼女は綺麗な髪をしているが、何より目を引くのは左目を隠す眼帯である。デュノアさんと違ってその雰囲気はまるで軍人って感じで、冷たい印象だった。

「……」

黙ったままの転校生。本人はまるで周囲に興味がないような表情だった。

「挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

織斑先生に言われて姿勢を変える転校生。織斑先生を「教官」って呼んだけど、何か関係があるのか？

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

「もう教官ではない」に「ここでは」か。昔何かあったってことだよね。後で一夏に聞いてみるかな。

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

その短すぎる自己紹介に固まるクラス。そしてこの空気にいたたまれなさそうな顔の山田先生。

「あ、あの以上…ですか」

「以上だ」

ばっさりと切り捨てられ泣きそうな山田先生。ボーデヴィッヒさんもボーデヴィッヒさんだけど、山田先生もしっかりしてください。先生は一応、年上ですよね。

ボーデヴィッヒさんは一夏と目があったかと思うと、一夏の方へ近寄る。

バシンッ！

そしていきなり一夏を殴った。え、一夏は何もしてないよね。

「私は認めない、貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

「いきなり何しやがる！」

「ふん……」

一夏の抗議も鼻にかけずに戻っていくボーデヴィッヒさん。俺を含め、クラス中はポカンとしていた。一夏は何か心当りがあるようだけど。

「あー、ゴホンゴホン！　ではＨＲを終える。各人はすぐに着替えて第２グラウンドに集合。今日は２組と合同でＩＳ模擬戦闘を行う。解散！」

手を叩きながら織斑先生は指示を出す。それによって一夏とボーデヴィッヒさんの事件で固まっていたクラスは動き出した。

「織斑と火野はデュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう」

その指示がでてすぐに一夏と目をあわせ、頷く。

「君達が織斑君に火野君だよね。僕は――」

「ごめん、デュノアさん。このままだと大変だから！」

すぐさまデュノアさんの手を取り、走り出す。こうしないと大変なことになるから。

「とりあえず男子は空いてるアリーナ更衣室で着替え。これから実習の度にそこまで行くから慣れてくれ」

「う、うん」

走りながら一夏が説明する。デュノアさんは落ち着かなさそうだけど、今は気にしてる場合じゃないか。

「ああっ！　転校生発見！」

「それに火野君と手をつないでる」

どんどん辺りに集まってくる女子達。「者ども出会え出会えい」ってここは江戸時代じゃないから。

「きゃああ、生まれてきてよかった。お母さん、今年は母の日は河原の花以外のをあげるね」

そこ、家族は大事にしようよ！

「な、なに？　何で皆騒いでるの？」

「そりゃ、男子が俺達だけだからだろ」

「……？」

わからないって顔のデュノアさん。一夏が説明しようとしてるけど、もう行き場がないよ。

「しまった。英治、どうする？」

「どうするって囮作戦か、それとも」

チラッと窓を見る。この高さなら俺は変身しなくても何とかなるかな。

「一夏、ゴメン」

「「「え？」」」

一夏、デュノアさん、その他の皆が驚く。窓を開けただけなのに。

「一夏、織斑先生にフォローは入れとくから」

「おい、英治、待ってくれ」

一夏が何か言ってるけど気にしないで、デュノアさんを抱えて飛び降りる。

「キャアーーーーーー」

やけに高い悲鳴をあげるデュノアさんが気になったけど、時間が大変だから、そのまま走り出す。

「ね、ねえ、降ろしてくれないかな？」

「あ、ゴメン。まあ、改めてよろしく、俺は火野英治。英治でいいよ」

「うん、よろしく英治。僕もシャルルでいいよ」

そのまま更衣室に到着。一夏は一々着替えるけど、俺は面倒だからって理由でＩＳスーツは中に着ている。だから制服を脱いで着替え完了。上着をいきなり脱いだとき、シャルルが驚いていたけど何かあったのかな？

まあ、そんなこんなで無事、時間通りに俺とシャルルは授業に間に合った。でも、何か忘れているような……？

「英治さん。間に合いったみたいですわね。……ところで一夏さんは？」

「あ！」

◆◆◆

スパァンン！！

響きわたる出席簿が振り下ろされた音。結局遅れてきた一夏は叩かれた。ゴメン、一夏。フォローするのも忘れてた。

「ずいぶんゆっくりでしたわね」

「英治に囮にされて女子に囲まれてたんだよ。くっそー、英治のやつ」

「女子に囲まれてずいぶんお楽しみのようですわね。そんなですから女子に叩かれるのですわ」

少々刺のある口調のセシリア。今回ばかりは一夏、ホントにゴメン。

「何？　アンタまた何かやったの？」

「こちらの一夏さん。転校生に会っていきなりはたかれましたの」

「はあ！？　一夏。アンタ何でそうバカなの！？」

「安心しろ。バカは私の前に2名いる」

バシーン！！×2

セシリアと鈴が反応するよりも先に降りおろされる出席簿。いったい今日はどのくらいあれが降り下ろされるのかな？

◆◆◆

気を取り直して始まる授業。鈴とセシリアは叩かれたことを根にもっているのかブツブツと何か呟いていた。そんなことしてると、また叩かれるよ。

「今日は戦闘を実演してもらおう。ちょうど活力が溢れんばかりの十代女子もいることだしな。――鳳！　オルコット！」

織斑先生の指名に不満の声を上げる2人。諦めた方がいいと思うけど。

「お前ら少しはやる気をだせ。――――アイツにいいとこを見せられるぞ」

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！」

「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね！　専用機持ちの！」

織斑先生が何か言ったと思ったら途端にやる気を出す2人。先生、何言ったんですか。

ドガーン！！

突如響いた音の方向を向き、俺達は絶句した。なんと、一夏が山田先生を押し倒していたんだ。

「驚いたよ。まさか一夏が好きな人が山田先生だったとは……どうりで篠ノ之さん達に振り向かなかったのか、納得納得。あ、でもこんなとこで押し倒すのもどうかと……」

「いや、英治、違うから！　これはただの事故だ！　皆も何か言ってくれ」

「そう言われても……その体制じゃ……」

どんな体制かと言うと、一夏の手は山田先生のメロンのとこだね。いわゆるラッキースケベってやつ。

「ハッ！」

刹那、一夏は山田先生から離れる。そして一夏がいた位置をレーザーが通り抜ける。

「ホホホホホ……残念です。外してしまいましたわ……」

顔は笑っているセシリアはライフルを再度構える。って止めなきゃまずいんじゃ！！

「うおおおっ！」

俺がそう思ってる間にも双天牙月を連結させ、ためらいもなく投げる鈴。あ、あれは当たるな～。そう思っていたが、間一髪、一夏はそれをかわした。すごいな……って一夏、後ろ！

体制を崩してる一夏を襲うのはブーメランのように戻ってきた双点牙月。あれは冗談抜きでマズイって。

ドンッドンッ！

そう思ったのもつかの間。山田先生は両手でマウントしたアサルトライフルで双点牙月の軌道を変えたのだ。あの山田先生とは思えない行動だ、というかいつもからあれくらいしっかりしてればいいのに。

「山田先生はああ見えて元代表候補生だからな。今くらいの射撃は造作もない」

「む、昔のことですよ。それに代表候補生止まりでしたし……」

照れたように答える山田先生。まあ俺だって自分の過去のことで褒められることがあれば照れくさくなるけど。それにしても代表候補生ってことはセシリアや鈴達と同じかそれよりは強いってことになるよなぁ、そう考えると山田先生が凄く思えてくる。ゴメンナサイ、先生。頼りにならないとか思っちゃったりして。

それよりもよく考えれば俺の試験の相手は山田先生で、負けたんだった……

「さて小娘どもいつまで惚けている。さっさとはじめるぞ」

「え？　あの、２対１で……？」

「いや、さすがにそれは……」

「安心しろ。今のお前たちならすぐ負ける」

セシリアと鈴が物言いたそうな顔で言うが、織斑先生の一言に火がついたのか、急に闘志を燃やす。

「では、はじめ！」

「手加減はしませんわ！」

「さっきのは本気じゃなかったしね！」

「い、行きます！」

号令と共に飛び出す３者。専用機があり、数でも勝ってる２人の方が有利だと思うんだけど……。

「さて、今の間に……そうだな。ちょうどいい。デュノア、山田先生が使っているＩＳの解説をしてみせろ」

「あ、はい」

山田先生が使っているのは確かラファール・リヴァイブだったな。俺の試験のときにも使ってたやつだし。シャルルの説明を程々に聞きながら、俺は3人の戦闘を見ていた。

セシリアがレーザーを撃つが、簡単にかわされて反撃をもらう。この隙に鈴が攻撃すればいいんだろうけど、鈴は鈴で攻撃をしてかわされ、反撃をくらう。

「ちょっ！　セシリア邪魔よ！」

「り、鈴さんこそ、わたくしの邪魔ですわ」

しまいにはお互いがお互いの邪魔になっている始末。そこ、ちゃんと協力しようよ。お互いに足を引っ張っているせいか、山田先生はノーダメージだった。あ、セシリアそっちに動いたら鈴とぶつかるよ……って、遅かったか。鈴と激突したセシリアはそのまま動きを止め、2人まとめてグレネードでやられた。目をまわしながら落下する2人。結局、山田先生の完全勝利だった。性能が戦力の決定的差でないことがよくわかる戦いだったな。まあ、2人の連携が悪かったのが一番の要因だったけどね。

で、結局今日の授業は何するの？

金髪と銀髪と山田先生の実力（後書き）

我ながら中途半端なとこで話を終わらせたな……
次回は授業の続き＋αの予定です。

感想や要望等お待ちしております。

実習と貴公子と屋上（前書き）

Ｃｏｕｎｔ　ｔｈｅ　ｍｅｄａｌｓ
オーズが使えるメダルは……

タカ
クワガタ
カマキリ
バッタ
ライオン
トラ
チーター
ゴリラ

実習と貴公子と屋上

「ぐぐぐぐっ……！」

「ぎぎぎぎっ……！」

山田先生との模擬戦の後、ずっとにらみ合ったままのセシリアと鈴。お互いに相手が悪いって言ってるけどどっちもどっちだったからな……

それにいつまでも話してると、ほら。

パシーンッ！

「いつまでにらみ合っている、馬鹿どもが」

頭を抑えてうずくまる2人。まあ、自業自得って言えばそうだけど……

「さて、これで諸君にもＩＳ学園教員の実力は理解できただろう。以後は敬意を持って接するように」

セシリア達をにおかまいなく、パンパンと手を叩き織斑先生は続ける。

「専用機持ちは織斑、火野、オルコット、デュノア、ボーデヴィッヒ、それに鳳だな。では８人グループとなって実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな？　では分かれろ」

織斑先生がそう言うやいな、女子が一斉に俺達男子の方に来る。

「織斑君、一緒にがんばろう！」

「火野君、わからないとこ教えて～」

「デュノア君の操縦技術見たいなぁ」

予想通りかな、やっぱり女子達は俺達を囲むように、いや、もう囲んでるか。シャルルはこうなるのを予測してなかったのかずっと「ふぇ！」だの「え！」とか言ってる。なんか、女子に流されていきそうな気がするんだけど……

そんな男子の状況を見かねたのか、織斑先生は面倒そうに低い声で告げる。

「この馬鹿どもが……。出席番号順に1人ずつ各グループに入れ！順番はさっき言ったとおり。もたつくようなやつはＩＳを背負ってグラウンド百週させるからな！」

途端に女子達は一目散に自分のグループに行く。多分、このグループになるのに2分もかかってないんじゃないかな。

自分のグループのメンバー（テンションが高い）を確認した後、俺は周りを見てみると、俺や一夏、シャルルの班になれて喜ぶ声、さっきの模擬戦のせいか、がっかりの声があがるセシリアや鈴の班。そして何も会話がないボーデヴィッヒさんの班、という状況になっていた。あそこの班、気まずそう……

「ええと、いいですかーみなさん。これから訓練機を1班1体取りに来てください。数は『打鉄』、『リヴァイブ』ともに3機です。好きな方にしてくださいね。あ、早い者勝ちですよー」

いつもよりしっかりした山田先生が告げる。さっきの模擬戦で自信でもついたのかな。

「火野君、ラファールのほうがいいな」

「うんうん、私もそう思う」

山田先生の戦いでの印象がよかったのか、うちの班では満場一致でラファールを使うことになった。じゃあ、さっさと持ってくるか。

「さてと、誰からやる？　やることは装着と歩くとか簡単な動作をすることだけど」

「じゃあ、わたしからー」

最初はのほほんさんからか。えーと、確か装着の手伝いをしろ、とも言ってたな。

「主席番号1番！　相川清香！　ハンドボール部所属！　趣味はスポーツ観戦とジョギングだよ！」

「お、おう。ていうかなぜ自己紹介を……」

隣の一夏の班から聞こえてきた自己紹介。何で？

「おりむー、人気だねー」

「まあ、数少ない男子だからね。って俺もだけど。じゃあ、やることやっちゃおうか」

「わかったー」

とりあえず自分もＩＳを展開しておくかな。そっちの方が色々と便利だろうし。

『タカ！　トラ！　バッタ！　タ・ト・バ　タトバ　タ・ト・バ！！』

「じゃあのほほんさんはどこまでできる？」

「んー、大体はできるかなー」

「じゃあ、やってｍ「「「お願いしますっ！」」」って何？」

声の方を見ると女子に言い寄られているシャルルが戸惑っていた。助け舟出した方がいいのかな。あ、織斑先生が向かった。じゃあ大丈夫かな。

スパーンッ！×３

「「「いったああっっ」」」

「ああはなりたくないから、皆、がんばろ」

俺がそう言うとグループの皆はコクコクと頷いた。見ると一夏の班もまじめに行動しだした。ちなみにセシリアや鈴の班は着々と進んでいた。騒ぐこともないからかなぁ。逆にボーデヴィッヒさんの班は静かすぎて進んでいない。あ、山田先生が向かった。

「あ、織斑君の班、いいなー」

「一夏がどうかしたの？」

見てみると、一夏の班はＩＳを立たせたまま解除してしまったため、一夏が抱えていた。

「うらやましいかもしれないけど、あんなことしないでよ」

「「「うっ、善処します」」」

その後、なんとか実習を切り抜けた俺はＩＳを片付けることになった。ちなみに一夏の班は一夏任せで、シャルルの班は女子達が「デュノア君にそんなことさせられない」とか言われて、女子が運んでいた。俺は女の子に力仕事をさせるのはどうかなって思ったから自分でやることにしたんだ。

「じゃあ、こういうときはこれだな」

『タカ！　ゴリラ！　バッタ！』

ＩＳを使えば元々楽なのにさらにパワー型のタカゴリバであるために大した苦もなかった。

「あー。あんなに重いとは……」

俺が訓練機の置き場に来ると俺より結構先にＩＳを運んでいた一夏が座り込んでいた。

「一夏、どうかした？」

「いや、これってすっげぇ重いな……って…」

俺を見て声が小さくなっていく一夏。なんか「ＩＳを展開すればよかったのか」とかブツブツ言ってるし。

「まさかとは思うけど、そのままカートを引いてたの？」

「おう、てっきりそんなものかと思ってたからな……」

「ハハ。ま、まあ昼休みだし、さっさと着替えてご飯にしようよ」

「そうだな。英治、今日は屋上で飯にしようぜ。シャルルも誘って」

「うん、いいけど」

なんか一夏は今日弁当があるらしい。じゃあ俺は購買行ってから行くかな、シャルルと。

「お、シャルルだ。おーい、シャルル。着替えに行こうぜ。俺達アリーナの更衣室まで行かなきゃいけないしよ」

「え、ええっと……僕はＩＳの調整をしてから行くから。時間がかかるかもしれないから先に行ってて」

「いや、別に待つのは慣れてるから大丈夫だぞ」

「い、いいからいいから！　僕が平気じゃないから。ね？　先に教室で待ってて」

シャルルの妙な気迫に押されて一夏は頷いた。シャルルのあわてっぷりはなんか不自然だけど、ま、いっか。

「じゃあ、シャルル後で」

「う、うん」

◆◆◆

「お待たせ。あれ、一夏は？」

昼休み、アリーナから戻ってきたシャルルがそう告げる。

「一夏は先に屋上に行ってるって。じゃあ俺達も早く行こうか」

「うん」

「ねえねえ、あの子だよ。今日来た男子ってのは」

「え、ホントだ～」

さっそく購買に向かう俺達だけど、第３の男子ということだろうか、周りの女子達の視線が怖い……

「ねえ、私達とお昼食べよ」

「あ、ずるーい。私達と食べようよ」

……予想通りなのかな。争奪戦とばかりに集まってくる女子達。先約があるからって断ってもキリがないなぁ……。俺がそう困っているとき、不意に聞こえてきたのが……

「僕のようなもののために咲き誇る花の一時を奪うことはできません。こうして甘い芳香に包まれているだけで、もうすでに酔ってしまいそうなのですから」

声の主であるシャルルは、何て言うかな、そう、お世辞っぽくない感じだった。まるで本心からみたいに。一方シャルルにそんなことを言われた人達は、というと……って、流血!?　血を流しながら倒れてる人がいっぱい……。リボンの色からだと大半は3年生みたいだけど、何があったんだ。

「ちょ、大丈夫ですか!?」

一番近くに倒れていた人に呼びかけてみる。もしかして新手の病気か何かかもしれない。

「…う～ん、幸せ……」

そういい残し、幸せそうな顔で気絶した。他の人もそうだけど流れている血は鼻血で、シャルルの一言に興奮したみたいだった。気絶してない女子達は今の一言に恥ずかしそうな表情で引き上げていった。

「シャルル、凄いね。ああいうこと言えて。俺にはできそうにないよ」

「……予想以上に効いちゃったけどね」

気を取り直して購買でお昼を買って、屋上に向かう俺達。そこで目にしたものは……修羅場だった。どういう状況かというと、篠ノ之さん、セシリア、鈴が自作の弁当を持って一夏に迫っている光景だった。

「ねえ、英治。僕達、ここに来てよかったのかな？」

「う～ん、確かにそんな気はするけど……まあ、一夏が誘ってくれたんだから、行くだけ行ってみない？」

「英治、シャルル。思ったより遅かったな。何かあったのか？」

「いや、シャルル珍しさに女子が集まってきただけだよ」

そう言うと、一夏は納得した顔で頷いた。一夏も最初はそうだったから思うことがあるんだろう。俺もだけど。

「……どういうことだ」

「ん？　篠ノ之さん、何か言った？」

「い、いや、何でもない」

何か言ってたけど、本人が何でもないって言うならいいか。そんなこんなで雑談、というか、篠ノ之さん達から文句を言われる一夏

を見ながら昼休みを過ごした。わかったことと言えば、篠ノ之さんと鈴は料理ができて、セシリアは……

「さてと、じゃあ英治、シャルル。次の授業の準備に行こうぜ。今度は第１アリーナに行かなきゃないけないからな」

次の授業はかなりの距離を移動しなきゃいけないから、そろそろ行かなくちゃ。そう思って立ち上がった瞬間、携帯が鳴り響いた。

「はい、火野です」

「私だ、織斑だ。突然だが、お前に頼みたいことがあるんだが、いいか？」

「はい」と答え、話を聞く。どうやらＩＳ学園付近で怪人がでたみたい。で、それの調査をして欲しいらしい。断る理由もない俺は返事をした。

「一夏、ちょっと俺は用事ができたから」

「え、ああ。授業はどうするんだよ！？」

「大丈夫だよ、織斑先生からの頼みだから」

一夏にそう告げた俺はライドベンダーの所に行く。目撃現場は少し距離があるみたいだから。

実習と貴公子と屋上（後書き）

次回から仮面ライダー的な展開が多くなる予定です。まあ、グリードではないですが、メダル争奪戦をしようかなということで。そのために『W』をクロスさせているのですから。

罠と指揮官と野獣（前書き）

Ｃｏｕｎｔ　ｔｈｅ　ｍａｄａｌｓ
オーズが使えるメダルは……

タカ
クワガタ
カマキリ
バッタ
ライオン
トラ
チーター
ゴリラ

「……ここか、怪人を見たって人がいるのは……」

特に変わったところはなさそうだな。とりあえず、怪人を見たって人がこの辺りにいるらしいから、その人から色々と聞くのがよさそうだな。そう思って歩くこと少し、４０歳くらいのスーツを着た男性を見かけた。多分、あの人だろうな。

「すいません、この辺りに怪人を見たって話があったんですけど、何か知ってますか？」

「ん、ああ。怪人なら確かに私は見た。この近くにはＩＳ学園があるから、そこを狙ってるかもしれなかったからね」

男の人の言い方はまるで一夏が狙われているような口調だった。確かに一夏は世界的に有名な織斑先生の弟で、ＩＳが使える男。狙われる可能性は十分にあるはず。学園に戻った方がいいのかもしれないな。

「そうですか。じゃあ俺はこれで」

「ふむ。ところで少年。この世界をどう思うかね？」

「……どう、とは？」

「力を持たない、いや、力を持つことができない男が虐げられ、ごく一部しか力を持つ者はいないのに偉そうにできる女。ＩＳとは必

要なものなのか、ということだよ。力を持つ少年」

ＩＳは必要なものなのか、か。この世界に来てみてそれなりに経ったけど、そんなこと考えたことはなかったな。

「……今のは忘れてくれて構わんさ。そろそろ本題に入ろう。火野英治君」

刹那、身構える俺。この人の雰囲気から何か大変なことを起こそうとしているのがわかる。

「率直に言うと、君に協力してほしいのだよ。我々財団は君の持つメダルに興味を抱いていてね、それを提供してほしいのだよ」

狙いはメダルか。もしかすると俺を呼ぶために敢えて嘘の怪人の情報を流したのかもしれない。

「お断りします。貴方達のような人にこのメダルは渡せませんから」

「フフ、予想通りの回答だ。だが、本来の我々の目的は織斑一夏の生け捕り。私の任務としては君を織斑一夏から引き離すことなのだよ」

その答えを聞き終える前に走り出そうとする。だが、俺はすぐにここから離れられない理由ができてしまったのだった。

『ＣＯＭＭＡＮＤＥＲ』

その音声と共に、男はＵＳＢメモリみたいなものを腕に挿し込んだ。瞬間、みるみるうちに男の姿は異形の怪物に変わっていく。

「いいのかな。私のような怪人を放っておいて」

周りを人質に取られた俺はこの怪人を放っておくわけにはいかなかったから。

「くっ、やるしかないのか。変身！！」

『タカ！　トラ！　バッタ！　タ・ト・バ　タトバ　タ・ト・バ！！』

構えを取ると同時に走り出す。相手の右ストレートをはらい、左拳を繰り出すが、つかまれる。

「はぁあああああああ」

膠着も束の間、バッタレッグに力をこめ、蹴り飛ばす。相手が転がると同時に後ろに跳び、距離を取る。

「やはり君は厄介な存在のようだな。財団としてはガイアメモリからは手を引いたのだが、君やＩＳを相手にするとなると必要になるものだな」

怪人、コマンダードーパントはそう言い、左腕にある円形のディスプレイのようなものに手をかざす。その瞬間、ドーパントを囲むように兵士のような怪人が数体、姿を表す。仮面兵士達は警棒を取り出し、こちらに走り出してくる。それに対して俺はメダジャリバーを構える。

「はぁ、セイッ！」

正面から来る敵を袈裟懸けに斬り、次に来たのを蹴り飛ばす。仮面兵士は1体1体は大した強さじゃないけれど、数が多い。しかもドーパントは無限に召喚できるから、この状況が続けば、絶対にこっちがやられる。どうにかしないと。そう思った俺は、メダルを変えることにした。

『タカ！　カマキリ！　チーター！』

タカキリーターとなって、兵士達の間をすれ違いざまに切りながら駆ける。火花をあげながら転がる兵士達は消滅するけど、そっちには目もくれずに、怪人へと一直線。両腕の刃で、その体を切り裂いた。

「くっ。やはり一筋縄じゃいきませんね。こちらも切り札を使う必要ありですか。それに向こうにもそろそろ到着した頃でしょう」

口元を拭うような動作をしながら、ドーパントは立ち上がる。そして、小型の機械を取り出した。

「先程までのように思わない方がいいですよ」

『ＣＯＭＭＡＮＤＥＲ　ＵＰＧＲＡＤＥ』

その何かを自身のガイアメモリに取り付けたとき、背中には機械的な輪が装備された。

「では、これでも」

背中から放たれた大量のミサイルがオーズを狙う。俺はそれをよ

けようとしたけど、行動を起こすのが遅かった。ミサイルは広範囲に撃たれていて、チーターの速さでも安全圏には逃げ切ることはできなかった。

「ぐわぁあああああああ」

◆◆◆

英治が調査に行った後、ＩＳ学園では授業が行われていた。それは反対意見があったものの、余計な不安を与えないための措置だった。

「ねぇ、一夏。英治ってどこに行ったの？」

「さあ。千冬姉の頼みがあるってどっかに行ったけど、俺も詳しくは聞いてないな」

一夏とシャルルは格納庫で話していた。午後の受業はＩＳの整備。専用機をもたない生徒達は午前中に使った学園のＩＳの整備を行なっていく。専用機持ちである彼らは学園のものだけでなく、自分のＩＳも見るように言われていたが、自身の愛機のことは自分が分かっているし、慣れた作業でもあるため一夏以外は余裕ができたのだった。

「英治さんのことですから、その、仮面ライダー絡みのことでなくて？」

「ああ。そうかもしれないな。だとすると、英治は大丈夫か」

昼休みに出てってから戻らない英治の行方を気になっていた一夏はセシリアの一言に納得の声をあげる。

「大丈夫じゃない？　あたしは英治が変身したの見たことないけど」

会話に鈴も加わる。この受業は2組と合同のため、彼女もいるのだ。この場所にいない英治、一夏達と親しくないラウラ以外の専用機持ちはこの場に集まっていたのだ。ただ1人、会話の内容についていけない者がいたが……

「ええっ！？　英治って日本で有名な都市伝説の仮面ライダーなの！？」

会話についていけないでいたシャルルが声を荒らげる。その声を聞いた銀髪軍人が部下にそんなことを言ってたやつがいるな、と思ったがくだらないと思い、一蹴した。

「お、おう。英治は仮面ライダーだぞ。というか、仮面ライダーって外国でも有名な話だったのか……」

「ええ、わたくしも噂くらいは聞いたことがありますわ。確か、どこかの街によく出るとかって」

「ああ、それ風都よ。あたしが日本にいたとき、一夏と行ったことがあるのよ」

鈴の発言を聞き、一夏はそのことを思い出す。

（中２の夏休みに花火を見に行ったんだよな鈴の両親が連れてってくれるって言ったから千冬姉もＯＫしてくれたんだったな）

そう思ったのも束の間、シャルルのアドバイスの元、白式の整備を進めていく。

「では、ＩＳの整備はここまでとする。諸君は教室に戻るように」

各グループがノルマを達成したのを確認した千冬は指示を出す。それを皮切りに次々と教室に向かう。一夏達も教室に戻ろうと、歩き出したのだった。

「お、織斑君！　早く逃げてください！　ＩＳ学園内に怪人が！」

後ろから来たのは息も絶え絶えの山田先生。一夏は状況もちゃんと理解する間もなく、山田先生に手を引かれていく。そしてそれについていくシャルル達。

「怪人ってどういうことですか！？」

走りながら一夏は聞く。山田先生は教えるべきかどうか、少し考えて後、告げることにした。

「つい、さっき、学園内に侵入者が出たんです。先生達が何人か向かったのですが、侵入者は怪人に姿を変えて逃げ出したんです」

教員達は学園のＩＳを使用して追撃をしたが、大したダメージも与えることもできず、野獣のごとき動きに次々と撃墜されていったのだった。

「おい、ガキ。友達の命が惜しければ大人しくこっちに来な」

突如、壁をぶち破って現れた怪人は一夏を見て言う。それを見たセシリア、鈴、シャルルはすぐさまＩＳを展開して攻撃を仕掛ける。ブルー・ティアーズのスターライトＭｋ－？、甲龍の龍砲、シャルルのＩＳ『ラファール・リバイブ・カスタム？』のアサルトライフル≪ヴェント≫が火を吹いた。それぞれの銃弾は怪人にまっすぐ当たり、爆発を起こす。

「やったのか！？」

遅れて白式を展開した一夏は呟いた。そんな様子の一夏とは違い、代表候補生３人はこれで倒しきったとは思わず、真剣な眼差しで煙の中を見ていた。

「はっ、少しは効いたじゃねぇか。まあ、嬢ちゃん達に用はないんだ。そこの織斑一夏を引き渡せば素直に帰ってやるぞ」

煙からでてきた怪人、ビーストドーパントは傷だらけではあったが、瞬時に傷を治し、セシリア達と向き合う。

「な、マジかよ……」

「傷を一瞬で治したっての、コイツは！？」

「とにかくやるしかないですわ。一夏さん、ここは私達が時間を稼ぎますわ」

「うん、だから一夏は早く逃げて！」

「デュノア君に、オルコットさん、鳳さん、危険過ぎます。早く逃げてください！！」

山田先生は戦う意思を見せる3人を説得するが、聞く気はなかったようだ。

「何言ってんだ！！　アイツが俺を狙うってなら、俺が残るから皆こそ早く逃げろ」

全員の意見が行き違う中、痺れを切らしたビーストドーパントは爪を突き立てた。

「俺は織斑一夏を連れて帰れればいいんだ。全員でかかって来てもいいんだぜ」

そう言ってビーストドーパントは駆け出した。

「「させませんわ！／やらせないよっ！」」

シャルルとセシリアはすぐさま銃の引き金を引く。レーザーと実弾、2種類の弾丸がビーストドーパントに直撃するが、相手はビクともしないで、一夏に向かって前進を続ける。

「だからやらせないって言ってるでしょうが！」

爪と青龍刀、つばぜり合いになる鈴とビーストドーパント。だが、ドーパントは甲龍のパワーをものともせず、そのまま押していく。

「なんてパワーなのよ、コイツは！」

弾かれた鈴はそのまま距離を取る。その間にもビーストは一夏に近づいていく。

「このままでは不利ですわね。一夏さん、壁を壊して外に！」

屋内であるここではＩＳの利点、飛べることが活かせないため、３人はビーストが入ってきた箇所から外に行く。セシリアの忠告に頷いた一夏も近くの壁を壊し、セシリア達と上空で合流する。

「で、どうするのよ？　肝心な時に英治がいないみたいだし……」

「アイツの狙いは俺なんだ。だから俺がここに残って奴の気を引くのが一番だろ」

「一夏、何言ってるの！　一夏を放っておくわけにはいかないよ」

「そうですわ。それにわたくし達がここから逃げると、他の皆さんが狙われる可能性がありますわ」

話し合いの末、折れたのは一夏であり、皆でビーストと戦うことになった。そうは言っても、一夏の白式はブレードしか武装がないため、セシリア、鈴、シャルルが作った隙に攻撃をし、距離を取るヒット＆アウェイの戦法を取ることにした。

◆◆◆

「ぐわぁあああああああ」

コマンダー同様に強化された仮面兵士の警棒が突きたたる。それから流れ出す電流に俺は苦しんだ。変身が解除されて、膝をつく。結構、ヤバいなぁ……

「くっ、何だ、こっちも急に強くなって……」

あのミサイルの後、立ち上がった俺を待ち構えていたのは、また召喚された兵士達だった。でも、召喚主が強くなっていたからか、兵士達も強くなっていて、俺は苦戦していたんだ。

「そろそろ、君のトドメといこうか。君が倒れた後、そのメダルは有効に使わせてもらうよ」

「まだ、諦めるもんか……手が届くのに伸ばさなかったら後悔する、だから、できる限りでもいい、俺は、諦めない」

敵の数が多いなら、コレしかないな。手にした3枚のメダルを見て、俺はそう思った。それに、俺がここで倒れても学園には仮面ライダーはもう1人いるから。

ドライバーの両端に緑色のメダルを入れて、真ん中にも緑のメダルを入れる。そしてオースキャナーを手に取る。

◆◆◆

「うわぁあああああ」

「一夏っ！」

同時刻、一夏達もビーストに苦戦していた。連携でビーストを追い詰めるところまではよかった。だが、ビーストの回復力を上回る攻撃がないのが決定的となってしまった。ＩＳが相手なら最大の攻撃力を誇る白式もドーパント相手では十分に力を発揮できなかったのだ。一夏の一撃は簡単に掴まれ、お返しにと重い一撃を食らったのだ。解除される白式。倒れ込む一夏。彼に少しずつ近づいていくビースト。

「くそっ、ここまでなのかよ」

「そんなことはないぜ」

「「「「！！」」」」

その場にいた誰もが、新たに現れた声の主の方を向いた。

「よっ、助っ人ってわけだな。後は俺に任せな」

見たことのない男の登場に誰もが不思議な顔をする。だが、男はそんなのを気にした様子もなく、ビーストの方を向く。

「あ、アンタは、誰なんだ？」

「ま、火野の仲間みたいなやつだな」

男、伊達明は慣れた手つきでドライバーを装着、右腕で弾いたメ

ダルを掴む。

「「変身!!」」

『クワガタ！　カマキリ！　バッタ！　ガ～タガタガタキリッバ！
ガタキリバ!!』

違う場所にいるはずなのに2人の変身は同じタイミングだった。
英治は歌と共に、昆虫系グリードのコアメダルによるコンボ、オーズガタキリバコンボに。
伊達はカポーンという音と共に、セルメダルの力で戦う、バースとなる。

2人のメダルの戦士がここに参上した。彼らは自分の守りたいものを守ることはできるのだろうか。

罠と指揮官と野獣（後書き）

次回、ガタキリバ無双の気が……（笑）

黒幕的ポジションが財団Ｘだっていうのは、Ｗ最終回付近で、ファンサービス的に出てきたコアメダルが理由ってのは口が裂けても言えないゼ。まぁ、財団はＩＳのあの企業とも上手く絡めれると思ったのもありますけど。

感想、意見等お待ちしております、いや、ください（笑）

数の暴力と足止めと弟子入り（前書き）

Ｃｏｕｎｔ　ｔｈｅ　ｍｅｄａｌｓ
オーズが使えるメダルは……

タカ
クワガタ
カマキリ
バッタ
ライオン
トラ
チーター
ゴリラ

数の暴力と足止めと弟子入り

「うぉおおおおおおお！！」

雄叫びを上げる、俺。やっぱコンボは体に力が溜まってくるなぁ。

「ふん、今更姿を変えようともこの数には勝てまい」

そう言って相手は数十体の仮面兵士を召喚してくる。でも、このコンボなら数では負ける気がしないな。近寄ってくる仮面兵士に向かって俺も走りだす。進む度に1人、また1人と俺は分身していく。

「はぁ！！」

降りおろされた警棒ごと敵を切り裂くものもいれば……

「セイヤッ！！」

相手が攻撃する前に先手必勝とばかりにミドルキックを放つやつもいる。

「ば、バカな……こんな情報、聞いてないぞ」

唖然とするコマンダーをよそに、ガタキリバと仮面兵士の乱戦は熾烈を極めていた。あちこちで繰り広げられる攻撃の応酬。火花が飛び散り、殴られ、蹴り飛ばされ宙を舞う仮面兵士達。ものの数分もしないうちに仮面兵士の数はかなり減っていた。

「くっ、これでどうだ！！」

ドンッ、ドンッ！！

放たれたミサイルはあちこちに着弾し、黒煙をあげる。分身も何体か吹っ飛ばされたけど、まだ、大丈夫。

「うぉおおおお」

煙の中から走り出す影は３つ。１人目、２人目は両腕の刃で相手を切り裂き、３人目はよろめいた隙に飛び蹴りを当てた。そしてコマンダーが転がっていった方に残された仮面兵士も吹き飛ばされてく。

「くそっ、まだだ、まだ終わらんよ！！」

そう言うコマンダー。だけど、かなりのダメージを受けたようで、何度も立とうともがくけど、立つことはできなかった。

「悪いけど、これできめるから」

何十もいるガタキリバはコマンダー達を囲み、一斉にオースキャナーを手にする。

『スキャニングチャージ！！』

「はぁあああああああああああ」

何重にも重なった電子音声と一緒に飛び上がるガタキリバ。

「セイヤーーーーーー！！」

相手に断末魔をあげさせることもなく流星群のように、ガタキリバキックが叩き込まれていく。自分でもやりすぎかもしれないと思うけど、友達のピンチだから。

爆発を背に1人に戻るガタキリバ。ちゃんと1人に戻った。

「さてと、一夏のとこに……」

フラッ、そういう感じによろめく俺。久々にこれやったからかなぁ、座り込む。最初に使ったときは倒れたんだっけ。

「…って、昔を思い出してる場合じゃないでしょ」

そう思ったから、ライドベンダーを一端自販機の方にして、赤い缶と緑の缶をいくつか出す。プルタブを開けると、赤いのはタカに、緑はバッタのになる。

「じゃあ、一夏と伊達さん、それから織斑先生のとこによろしくね」

通信器として使えるバッタカンをタカカンに運ばせる。もちろん、自分の手元にも1つバッタカンを残すのを忘れないで。

「じゃ、俺も急がないと」

ライドベンダーをバイクの形態にして、アクセルを切る。皆、無事でいてくれよ。

◆◆◆

「仮面…ライダー？」

伊達が変身したバースを見て一夏は呟いた。

「おう。仮面ライダーバース。ヨロシク」

一夏に向かってサムズアップをした後、バースはビーストと向き合う。

「さぁて、いっちょ始めますか」

構えたバースバスターの引き金を引くが、相手はそれをよけ続ける。

「もらったぁ！」

「おおっと」

ビーストの一撃を転がってかわし、バースバスターを撃つ。怪人と戦うための武装であるためか、与えたダメージはＩＳのものより大きいのは一目瞭然だった。

「がっ……少しは効いたぜ。だがよ、この程度！」

すぐさま回復するビースト。バースは「げっ！」と声をあげるが、すぐに気を取り直して銃を構える。

「これでもくらってな！」

再度、連射するが、楽に回復できるダメージだとわかったビーストはそのまま前進してバースバスターを弾き飛ばした。

「コイツ、すげぇパワーだな」

「って、何呑気なこと言ってるんですか！！」

関心したような口調のバースにすかさず突っ込みを入れる一夏。バースは「わりい、わりい」と謝るような仕草をするのだった。

「コイツで頼むぜ」

『ショベルアーム』

バースの左腕に装着されたそれは、バースの武器の中で最大のパワーを誇るため、怪力のビーストに対しては最も適した装備なのであった。

「フン、何を使ったって無駄だぜ」

そうとも知らずにビーストはバースに接近。拳を繰り出そうとするが、ショベルアームのクローに掴まれる。

「おりゃぁあああああああ」

そのまま掴んだ腕を軸にビーストを振り回すバース。そして、そのままビーストを地面に思いっきり叩きつけるのであった。さすがにコレは効いたのか、空気を吐き出すビースト。だが、持ち前の生

命力によって再び立ち上がるのであった。

「こりゃ、もうアレしかないな。おーい、嬢ちゃん達！　とっておき使うからコイツの足止めしといてくれ」

「「「え！？」」」

「頼んだぜ」

セシリア達の返答を聞く間もなく、バースはメダルをベルトに入れていく。

『ブレストキャノン』

『セルバースト』

「もういっちょ！」

『セルバースト』

「ああ、もう！　やるしかないわね」

「わかりましたわ。シャルルさんもよろしいですわね？」

「うん、大丈夫」

シャルル達はすぐさま、銃の引き金を引き、次々とビーストに銃弾を浴びせていく。レーザーがかすめ、衝撃砲が相手を弾き飛ばす。追撃にと、アサルトライフルが浴びせられる。

「ぐ、がっ！」

与えれるダメージは大したことはないのだが、連続攻撃に回復に専念してしまうビースト。

「まだまだぁ！」

『セルバースト』

鈴達が攻撃を浴びせていく間もバースはセルメダルを入れ続ける。そんな様子を見た一夏はＩＳが解除されている自分にもできることはないのか周りを見回す。

「あれは！」

一夏の目に映ったのはすぐ近くに飛ばされていたバースバスター。皆を守りたいと願う彼はすぐさまそれを手に取り、引き金を引く。

「うわぁあ！」

「ん、がぁああ！」

反動に弾き飛ばされる一夏だが、放たれた弾丸はビーストの顔面に命中し、その動きを妨げるのに充分に役に立ったのだ。

「よし、サンキューな」

セルメダルを何枚も入れて、かなりのエネルギーを貯めたブレストキャノンを向ける。ビーストは一夏の一撃の当たりどころが悪かったのか、足を止めていた。

「ブレストキャノン、シュート！」

「ん、がぁあああああああああ」

バースが後ろに押される程のエネルギーの流れに飲み込まれたビーストは断末魔をあげ、爆散する。

「ふう、終わった～。お！」

変身を解いた伊達の元に飛んでくるタカカン。タカカンは上空で旋回して、伊達の手元にバッタカンを落とす。

『伊達さん！　そっちに怪人が出ませんでしたか！？』

「おう、そいつなら今さっき倒したとこだ。見たところ皆無事のようだぜ」

『そうですか。よかったぁ～』

伊達と英治が話している頃、一夏の元にもタカカンが来たが、一夏はバッタカンの使い方が分からず四苦八苦していたのだった。

◆◆◆

「改めて、、バース装着者兼ここの保健室の先生の伊達明だ。ヨロ

シクな」

「「「「はぁ」」」」

戸惑う一夏達をよそに伊達は話を続ける。英治も合流して一行は保健室に来ていた。

「一夏ちゃんだっけ？　お前も相当な無茶するやつだな。いきなりそれを使うなんて」

「あ、アハハハ……すみません」

「ま、気にすんなよ。おかげで相手に好きができたからな」

伊達はそう言ってその時のことを思い出す。皆を守ろうとして行動する姿勢、目。行動が無茶であると言えばそうだが、誰かがしっかりと鍛えればまっすぐ育つ。伊達はそう思った。

「お前ならコイツを託してもいいかもしんねえな」

「コイツ、ですか？」

「おう、一夏ちゃん。俺が鍛えてやろうか。ＩＳじゃないけれどな」

伊達は続ける。お前は怪人にも狙われる可能性もある。今回は自分がいてよかったけど、いつもそうとは限らない。一夏自身が怪人に対抗できる力があった方がいい、と。

「……お願いします！　俺を鍛えてください」

少しの間の後、一夏は答えた。誰にも傷ついて欲しくない。英治と同じような願いを持つ一夏は自分のせいで誰かが傷つくのは嫌だったからであろう。

「OK。じゃあまずはコレからだな」

取り出したのはバースバスター。

「それって伊達さんの武器じゃ？」

「気にするな、一夏ちゃん」

伊達の武器がなくなる。そう思って一夏は聞くが、首を横に振られた。

「伊達さん、まさか……」

「おう。火野の思ってる通りだ。コイツもベルトも2つあるからな」

「ベルトが2つってことは一夏さんも変身するんですの？」

「え、一夏が……」

セシリアと鈴。一夏に恋する少女はその光景を思い浮かべる。自分がピンチになったときに颯爽と現れ、敵を倒し自分を守ってくれるヒーローを。

「「……はふぅ／／／」」

「ど、どうしたんだ、2人とも」

「さぁ。急に悶え出したけど、何を考えたんだろう？」

「まぁ、そっちは大丈夫だ。じゃあ一夏ちゃん、今日はゆっくり休みな。特訓のことは後で教えてやる」

「はい！」

気のいい返事をした一夏は皆と一緒に寮に戻ることに。今回の件の報告等は本人達の疲労も考えて後日に回されたのだ。保健室にいたのも念のための診断だったからもある。

途中でセシリアと鈴と別れた一夏、英治、シャルルは自室に戻る途中だった。ちなみにシャルルは英治がいる方の部屋が割り当てられたのだった。

「う～ん、皆を守りたいと思うけど、俺にできるのか？」

「大丈夫だよ。一夏が皆を守りたいって想いをなくさない限りは」

「僕もそう思うよ。それに初めから後ろ向きじゃできることもできないよ」

「英治、シャルル。ありがとな。俺、頑張るよ」

頑張れよ、一夏の欲望（ねがい）は一夏にしか叶えられないから。

数の暴力と足止めと弟子入り（後書き）

自分で書いていて、これがＩＳとのクロスものと忘れそうな回だった（笑）

とりあえず、伊達さんと一夏が接触。これがやりたかったことの１つですね。まぁ、伊達さんを出すにあたり、後藤さんポジが欲しかったからもありますけど。今後の一夏は予測がつくと思いますが、念のために『バースはずっと伊達さんでいきますから』

意見、感想等お待ちしております。

シャルル先生と挑発と危ない疑惑（前書き）

Ｃｏｕｎｔ　ｔｈｅ　ｍｅｄａｌｓ
オーズが使えるメダルは……

タカ
クワガタ
カマキリ
バッタ
ライオン
トラ
チーター
ゴリラ

シャルル先生と挑発と危ない疑惑

シャルルが転校してきてから、数日。シャルルも一夏のＩＳの特訓に付き合うようになっていた。一夏の動きは日に日によくなっていくのがよくわかる程だった。多分、シャルルのわかりやすい説明と、伊達さんとの特訓により体力がかなりついてきたのが理由だと思うんだ。まぁ、そんなこんなで今日もＩＳの特訓ってことでアリーナに来ていた。

「ええとね、一夏がオルコットさんや鳳さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握していないからだよ」

「そ、そうなのか？　一応わかってるつもりだったし、伊達さんは感覚でやっていけって言ってたんだけど……」

今日もシャルル先生の講義が開かれていた。俺も一夏も射撃武器はないからね。どうしても把握できないところはあるからな。厳密に言うと、遠距離攻撃（クワガタの電撃ｅｔｃ）が可能な武器はあるけど、銃火器じゃないからわからないんだろうな。

「瞬時加速の場合は方向を変えない方がいいよ、最悪の場合は――――――」

シャルルのレクチャーは続く。一夏が言うにはシャルルの教え方が一番わかりやすいんだって。まぁ、擬音だらけの篠ノ之さん、理路整然とはしているんだけど、イメージしづらいセシリア、「何となく」とか「感覚で」等の鈴。それと比べてｍ……比べなくても教え方は上手だな。あの３人もシャルルの教え方は上手いって認めているんじゃないかな？

「ふん。私のアドバイスをちゃんと聞かないからだ」

「あんなにわかりやすく教えてやったのに、なによ」

「わたくしの理路整然とした説明の何が不満だと言うのかしら？」

あれ、すっごく納得していないって顔だよ。一夏もわからないならはっきりそう言った方がいい時だってあるのに。

「一夏め。どうして幼馴染の私ではなく、デュノアなんだ」

「ちょっと待ちなさいよ！　一夏の幼馴染はあたしよ！」

「お、幼馴染だからって一夏さんのコーチになる理由はありませんわよ！」

気が付けば、打鉄ＶＳブルー・ティアーズＶＳ甲龍に……って、こんな人が多い場所じゃ戦っちゃ駄目でしょ！　俺、一夏、シャルル、と男子３人見たさで来てる人が多いんだから。一夏なんてさっきから何回も周りの人とぶつかってるんだし。

「ちょっと、ちょっと、３人とも、落ち着いてよ！」

「む、英治か。なぜ止める？」

「そうですわ、邪魔しないでくださるかしら？」

「邪魔するんだったらあんたも相手にしてあげるわよ」

視線だけで人が殺せる世界だったら何人も殺せそうな目で俺を見てくる3人。だから落ちついてって言ってるでしょ！

何とか説得の末、3人の正面衝突は避けれたんだけど、問題が1つできたんだ。それは……

「こうなったら誰が一番一夏さんのコーチに適しているのか英治さんに選んでもらいましょう」

「いいわ。あたしが勝つに決まってるんだもの」

「そんなわけはないだろう。私が一番だ。一夏との訓練も一番長くやってるからな」

自分が一番だと思い込んでる3人娘。これってはっきり言っていい場合だよね……。

「俺はシャルルの教え方が一番上手いと思ってるけど……」

「「「な!?」」」

絶句する3人。すぐに再起動して「それはどういうことだ」とか「納得のいく説明を要求しますわ」等言いながら俺を揺さぶってくる。ブンブンって音がするほど振られたからかなぁ、気持ち悪くなってきた。ウプッ……。

「そ、そんなこと言うならお互いの説明を聞きあってよ。そ、それから……そろそろ離してくれないかな……」

「「「あ」」」

バタンッ！

ゲホゲホ、死ぬかと思った。とりあえずお互いの説明を聞きあっていた篠ノ之さん達は再度衝突していた。

「箒さん、あなたの擬音だらけの説明では全くわからないですわ！」

「そういうセシリアのだって、具体的過ぎてイメージしづらいのよ」

「だったら鈴のだって、感覚だの、で伝わらないぞ」

いつの間にか名前で呼び合う仲になってたみたいだけど、こうなったらどうしようもないや。そう思っていた俺に話しかけてきたのはシャルルだった。

「ねえ、英治。英治のライドオーズにも射撃武器は無いんでしょ。使用承諾（アンロック）したから英治もやってみて」

「わかった」

そう言って渡されたアサルトライフルを構えてみる。オーズの時も銃持ったのはあのコンボだけで、しかも必殺技のときしか使わなかったからかな。慣れない感じだ。

「構えはいいね。じゃあ撃ってみて」

だれもいない方に向けて、引き金を引く。「バンッ！！」って音がしたけど、思った程の反動じゃなかったなぁ。続けて2発、3発と撃つ。うん、こんなもんかな。銃の感覚を掴めた気がしたからシ

ャルルに銃を渡す。ライドオーズも後付武装がないし。

「どう？」

「ん～、まあ、思ったより反動がないっていうかな。そんな感じだよ」

「ＩＳで撃つからじゃないかな。どうしてそんなことを思ったの？」

高威力のバズーカを使ってたから、とはさすがに言えないよなぁ。そう思ってここは言葉を適当に濁しておくことにした。

「ねえ、ちょっとアレ……」

「ウソっ、ドイツの第３世代機だ」

「まだ本国でのトライアル段階だって聞いていたけど……」

銃の話からシャルルのＩＳについて話していたとき、急にアリーナが騒がしくなったんだ。何があったのか気になって、女子達の視線の先を見ると、黒いＩＳを纏っているボーデヴィッヒさんだった。

「おい、貴様も専用機持ちだすだな。ならば話は早い。私と戦え」

俺も含めた周りの人間は眼中にないって感じに一夏に告げるボーデヴィッヒさん。一夏は理由がないから断っている。

「貴様にはなくても私にはある」

一夏を睨みながらボーデヴィッヒさんは言った。理由があるのか、どんな理由だろ？

「貴様がいなければ教官が大会2連覇の異形をなしえただろうことは安易に存在できる。だから、私は貴様を――貴様の存在を認めない」

ボーデヴィッヒさんの言う教官って織斑先生のことだよね。大会2連覇は一夏がいたからできなかった。ってことは一夏に何かがあったからその大会で優勝できなかった。でも、それがどうしてボーデヴィッヒさんが一夏の存在を認めない理由になるんだ？　一夏本人なら何か心当りがあると思って見てみると、何か心当りはあるみたいだった。けれど、俺が簡単に踏み入っていいことでもないのもわかった。一体、何があったんだ。

「また今度な」

ボーデヴィッヒさんの挑発には乗らず、あくまで理由がないとする一夏。でも、ボーデヴィッヒさんはその態度が気に入らなかったのか、左肩に大砲を展開する。

「ふん、ならば――戦わざるを得ないようにしてやる」

そう言うなり、引き金を引く。俺も、一夏もそれに反応できなかったけど、1人は違った。

ゴカギンッ！

鈍い音をたてたのは割り込んできたシャルルのシールドだった。

「……こんな密集空間でいきなり戦闘を始めようとするなんて、ドイツの人はずいぶん沸点が低いんだね。ビールだけでなく頭もホットなのかな？」

「貴様……フランスの第２世代型（アンティーク）ごときで私の前に立ちふさがるとはな」

「未だに量産化の目処が立たないドイツの第３世代型（ルーキー）よりは動けるだろうからね」

アサルトカノン≪ガルム≫を向けたままシャルルは挑発する。お互いに涼しい顔をしたままの睨み合いが続く。シャルルの武器の展開の速さには驚いたんだけど、今はそれを気にしてるときじゃないから。いつでも動ける準備をしておく。多分、シャルルはここで戦うつもりはないんだろうけど、もしものためにね。

『そこの生徒！　何をやっている！　学年とクラス、出席番号を言え！』

騒ぎを聞きつけて現れた先生の声が響く。相手が教師だったからなのか、ボーデヴィッヒさんは興を削がれたように帰っていった。

「一夏、大丈夫？」

「あ、ああ。助かったよ」

さっきの睨み合いのときとはうって変わり人懐っこい顔でシャルルは一夏の無事を確認する。時間も時間だから、今日は終わろうってことになってアリーナに戻ることにしたんだけど……

「たまには一緒に着替えようぜ」

一夏のこの一言がまた騒動の原因になったのだった。確かにシャルルは人前で着替えるのを嫌がってるけど、誰かと一緒に着替える必要もないと思うんだけど。あ、そう言えば寮の部屋でシャワー上がりにパンツだけで過ごしていたら顔を赤くして目をそらされたなぁ。他にも不自然っていうか違和感を感じることもあったけど、ま、いっか。

「ぼ、僕はＩＳの点検があるから先に行っててていいよ」

「そのくらいなら待つさ。一緒に着替えに行こうぜ」

「い、イヤだよ。というかどうして一夏はそんなに僕と着替えたがるの？」

「じゃあ何でシャルルは俺達と着替えるのが嫌なんだ？」

あれ、一夏ってあっち系の人だったの？　どう見てもそうにしか見えないんだけど……。まさか、俺とシャルルが同室になったのは一夏がそっち系だったからなのか！？

その後も一夏のしつこいアプローチは続く。周りからは「織斑君ってそっちの趣味だったんだ……」とか「どうりで篠ノ之さんやオルコットさんのアプローチを気にしないわけね」、「今年のネタは織斑君×……」と言われたい放題で、正直一夏から距離を取ったほうがいいのかなと思うくらいだった。そんなことはさておき、そろそろ助け舟出した方がいいよな。

「ところでさ一夏、周りを見てみた方がいいよ。ひどいことになっ

てるから」

「周りって何かあるのか……」

ここで始めて一夏は自分にＢＬ疑惑がかかっているのに気づいた。慌てて否定する一夏だけど、もう遅い気が……「今年のネタは……」って言ってた人は「インスピレーションキターーーーー！」って宇宙服みたいなライダーの真似してどっか行っちゃったし……。ドンマイ、一夏。落ち込む一夏を引きずりながら更衣室に向かった俺だけど、山田先生から大浴場が使えるって聞いて復活した一夏に引いたのは余談かな。

続く。

シャルル先生と挑発と危ない疑惑（後書き）

原作のこの部分でも一夏ってホの字かと思い込んだ時期が１時期ありました。果たして一夏は汚名返上できるのか！？　え、できない。

メダルを手に入れるタイミングが中々見つからなくてシャウタとかサゴーゾを出すタイミングが見つからないｏｒｚ　一夏達との模擬戦が初登場ってことだけは避けたいと思っている今日この頃。後、今さらですが前書きの部分に「前回までの３つの～」ってあった方がいいでしょうか？

それでは意見、感想等お待ちしております。

データと真実と自分のやりたいこと（前書き）

Ｃｏｕｎｔ　ｔｈｅ　ｍｅｄａｌｓ
オーズが使えるメダルは……

タカ
クワガタ
カマキリ
バッタ
ライオン
トラ
チーター
ゴリラ

データと真実と自分のやりたいこと

「英治、ちょっと、いい……？」

山田先生からの大浴場が使えるようになったという知らせを受けた俺達は寮に戻ろうとした。けど、一夏は何か書かなくちゃいけない大事な書類があるって連れて行かれたんだ。

で、シャルルも中々更衣室に来る気配も無かったから寮に帰ろうとしたところ、簪に呼び止められたんだけど、何だろ？

「いいけど、何かあるの？」

コクリと頷く簪。どうやら簪は自分のＩＳを作るためにライドオーズの稼働データが欲しいみたいなんだけど、何に使うんだろ？

「……伊達さんの、バースをＩＳにしたい……だから、英治のＩＳが一番参考になる」

「いいけど。バースってことはドリルとか作るってことなの？」

「……うん。今度の学年別トーナメントには、間に合わないかもしれないけど……」

「わかった。で、いつデータを渡せばいいの？」

「英治がいいんだったら……今すぐが、いい」

今か……特に断る理由もないし、それでいいかな。そう伝えて、

早速簪に着いていく。

「あれ、英治、何かあるの？　それにそっちの子は？」

途中シャルルとすれ違う。どうやら今から部屋に行くみたい。

「うん、ちょっとね。こっちは更識簪」

「よろしくね。簪」

「……よろしく」

「じゃあ俺達は行くから。後でね」

シャルルと別れ、整備室に向かう。さてと、どのくらいかかるのかな？

◆◆◆

「で、俺は何をすればいいのかな？」

作業を始めた簪に聞く。俺がやったのはライドオーズを見せただけだし。話を聞くと、ＩＳの素体はできているけど、武器、それにバースを再現したときの立ち回りの参考となるデータがないんだって。立ち回りは伊達さんに聞いた方がいいと思ったんだけど、伊達さんに聞くと仮面ライダーバースとしての立ち回りでＩＳには参考

にならない可能性があるんだって。それ以前に大雑把な伊達さんに聞いて必要な情報が手に入るのか疑問だけど……。それで、仮面ライダーでもありＩＳも使える俺のデータが欲しいってことになったのか。

「で、何かわかった？」

カタカタとキーボードを打つ簪に聞く。簪は暇そうな俺にとある画面を見せてきた。

「……これ。まだ、使ってない頭が４つ、腕は４つ、脚は５……どういうこと？」

簪が見せたのはライドオーズのパーツ一覧の表だった。使ってないメダルのものはシルエットだけで何もわからないけど。ん、おかしいな使ってない頭はサイにシャチにプテラ。腕はクジャク、ウナギ、トリケラ。脚はゾウ、コンドル、タコ、ティラノのはずなんだけど、１個多いぞ。俺が知らないメダルでもあるのか？　でも、紅さんは赤、黄、緑、白、青のコアメダルがこの世界に流れてきたって言ってたけど。

「そのデータはオーズの他のメダルのやつだけど、俺が持ってないやつだね。と言っても、存在を知らなかったのがあるみたいだけど……」

「組み合わせは７×７×７の、３４３通り……？」

「違うよ。１つは他の色のメダルとは組み合わせれないのがある。知らないメダルが他の色のと組み合わせれるんだったら２１７、組み合わせれなかったら１２７通りだね」

「……多過ぎ」

「あはは、確かにね。オーズでも使わなかった組み合わせがあるからね」

「……よく使ったのが、その、コンボ？」

「そうだね、反動で結構疲れるけど」

作業自体は簡単に済むみたいだから、雑談をしながら進めていく。30分くらい経つと、データのコピーも終わったのでお開きとなった。

◆◆◆

英治とシャルルの部屋ではシャルルが1人いた。英治が簪とどこかに行くのを見て、自室に戻ってきたわけだが、特にやることもなく一息つくだけだった。

「英治は遅くなるみたいだし、シャワー浴びよう」

一休みを終えたシャルルは着替えを手に取ってシャワー室に入った。

（そういえば、昨日、英治がシャワーについて何か言ってた気がしたけど……いいや）

◆◆◆

「ただいまー」

自室に戻ってくると、そこにシャルルの姿はなかった。あれ、いないのか？　そう思って周りを見るとシャワー室から水音がするのに気がついた。あれ、そういえば石鹸が切れていたよね。まぁ、伝えたから大丈夫かな。そう思った俺はベッドに飛び込んだ。「んー」と背伸びしながら心地よさを堪能する。さすがに汗をかいた後に寝る気にならないし、夜ご飯もまだだから眠りはしないけど。

ガチャ

ドアが開く音がした。多分シャルルだな。そう思って体を起こす。

「ん？　シャルル上がった……の……？」

「え、え、英治……？」

出てきたのはタオルを体に巻いたシャルルだった。でも、男ならふくらむはずのない部分がふくらんでいる状態で。あ、綺麗な肌だな～、って、そうじゃなくて。

「えぇえええええええええええええ！！」

「え、英治。お、お、落ち着いて！！」

なぜか大声で叫んだのは俺だった。慌てた様子で俺の口に手を当てるシャルル。ちょ、どういうこと、これ？　誰か答えて……アレ、息が…って、前もこんなことなかったっけ？　もう限界。バタンッ！

「え、英治～！」

それから俺が意識を取り戻したのは３０分くらい後のことだった。

◆◆◆

「で、一体どういうことだったの？　シャルルが男装していたってことはわかったけど、いいんだったらどうしてそうしていたのか教えてくれない？」

「それは、その……実家からそうしろって言われて……」

「実家っていうと、デュノア社だっけ？」

「そう。そこの社長が僕の父。その人からの命令なんだよ」

命令？　どうして家族がそんなことを？　それにどうしてシャルルは家のことを話すと表情が暗くなっていくんだ？

「どうして家族が命令なんかするの？」

「僕はね、愛人の子なんだよ」

「……」

その瞬間、俺はシャルルになんて言えばいいのかわからなかった。同情して慰める？　違う。シャルルは同情して欲しいとは思ってないはず。じゃあ、元気づける？　それも違う気がする。元気づけようと言葉をかけても、それは軽いものにしか見えない気がするから。

「引き取られたのが2年前。ちょうどお母さんが亡くなったときにね、父の部下がやってきたの。それで色々と検査をする内にＩＳ適性が高いことがわかって、非公式だけどデュノア社のテストパイロットをやってたんだ」

その後もシャルルの話は続く。父と会った回数が少ないこと。父の本妻と会ったときの衝突。そしてデュノア社が経営危機になったから広告塔、そして俺と一夏のＩＳデータを得るためにＩＳ学園に来たこと。淡々と乾いた口調で話すシャルルだったけど、俺は煮え切らない思いで聞いていた。俺が簡単に口を出せることじゃないのはわかってるけど。

「とまあ、そんなところかな。でも、英治にばれちゃったから僕は本国に呼び戻されて、デュノア社は他の企業の傘下になるか、……倒産だろうね。どのみち今までのようにいかないけど、僕にはもうどうでもいいことかな」

「……」

「話したら気が楽になったよ。それに、今までウソついててゴメン」

深々と頭を下げるシャルル。でも、俺はそんな態度にモヤモヤした感情が浮かんでいたんだ。

「本当にそれでいいの？」

「え……？」

「だからそれでよかったの、そう聞いているんだ。ただ親の言うことを聞いて、ウソがばれたからどうでもいいや。それでいいの？」

「え、英治？」

戸惑う様子のシャルル。彼女のそんな様子に構わず俺は続ける。

「親が言ってたからそうしなくちゃ駄目なの？　シャルルはそれでよかったの？」

「僕にはどうしようもないから、いいも悪いもないよ。どうせ僕がどうなるのかも時間の問題だろうし……」

「じゃあシャルルの欲望は何？　どうしたかったの？　父親の言いなりがよかったの？　それがいいなら俺は何も言わないさ」

「よくわけないだろ！！　でも、僕には、どうしようもなかったんだ！！」

目に涙を浮かべながらシャルルは叫ぶ。溜めていた思いが溢れてきたのか、その涙は止まる気配はなかった。

「大丈夫。今ならどうしようもあるさ。ここＩＳ学園はあらゆる国家や組織の影響は受けない。だから時間は卒業するまである。それに俺でよかったら力を貸すよ」

「いいの？　僕は英治を騙していたんだよ」

「誰かを助けるのに理屈はいらないさ。それに俺は自分の手が届くんだったら手を伸ばす。届かなかったら誰かと手を繋いで伸ばす。とにかく後悔だけはしたくない性格だからね」

「ははっ、何それ。でも、元気がでたよ。ありがとう」

そう言ってほほ笑むシャルル。さっきまでとは違って本心から笑えてるみたい。

「やっとで笑ったね。そっちの方が可愛いと思うよ」

「え……／／／」

可愛いって言われたからか、顔を赤くするシャルル。その反応を見ると、言った自分も気恥ずかしくなったくる。

「ま、まあ、どうするかはシャルル次第だからね」

「う、うん。そうするよ」

妙な気まずさが襲う。こういうときってどうしたらいいんだ？

コンコン

「「！？」」

「英治、シャルル。飯食いに行こうぜ」

いきなりのノックに慌てる俺達。

「入るぜー」

「えええええ英治、どどどどどうしよう？」

「おおお落ち着いて、まずは身を隠して……って、クローゼットじゃないって！　ベッドの方がいいよ！　それで布団をかぶってて。後は俺が何とかするから」

ガチャ

ドアが開く音がする。俺は先手必勝とばかりにドアの近くに行く。

「一夏、ご飯だけどシャルルの調子が悪いみたいだから俺は後で行くよ。ゴメンね。俺達に構わず先に行ってて」

「お、おう。わかった。シャルルによろしく言っといてくれ」

「うん。じゃあ後で」

一夏が去っていくのを見送ってドアを閉める。ふう、何とかなったな。俺もそろそろお腹がすいたな。シャルル、ご飯食べに行こう……って、俺が具合悪いことにしちゃったんだった。シャルルが迂闊に部屋を出るわけにいかなくなったな……

「ゴメン、そういうわけで何か取ってくるよ。何がいい？」

「何でもいいよ」

何でもいいが1番困るんだけどな。そう思って部屋を後にした。

◆◆◆

「ただいまー」

「あ、おかえり」

部屋に戻ってくるなり、シャルルに焼き魚定食が乗ったトレイを渡す。

「ありがとう」

にっこり笑って受け取るシャルルだったけど、トレイを見るなり固まった。何かあったのか？

「どうしたの？　嫌いなものでもあった？」

「べ、別にそうじゃないんだけど……。い、いただきます」

ぎこちない表情で箸を持つ。魚をほぐす、そこまではよかったんだけど……

ぽろ、ぽろっ

「あっ……」

どうやらシャルルは箸が使えないみたいだった。そういえば、シャルルが箸を使ってるの初めて見る気がするし……

「ゴメン、　スプーンでも持ってくるよ」

「ええっ！　悪いよ、そんな。これで頑張ってみるから……」

「別に気にしなくていいよ。それで食べるの難しいでしょ？」

俺の問いに答えを詰まらせるシャルル。そんなに気を使うこともないのに……

「それにさ、シャルルはもっと誰かを頼った方がいいと思うよ。甘えることでも何でもいいからさ」

「ううっ……じゃあ、英治……」

ためらいを見せた後、シャルルが出した答えは俺を驚愕させるのに充分だった。

「え、えっとね……英治が食べさせて」

上目遣いで俺を見てくるシャルル。あ、まつげ長いな……って、そんなことを考えてる場合じゃなくて……俺がシャルルに食べさせる？

「だ、ダメかな……？」

まぁ、誰かに甘えるとか言ったのは俺だけどさ……。それにこの上目遣いは反則だと思うんだけど……

「……わかったよ」

結局折れたのは俺だった。箸でご飯をつまむ。

「じゃ、じゃあ、あーん」

「あ、あーん」

もぐもぐと口を動かすシャルル。食べてる様子を見て小動物みたいだな、とか思ったけど段々と気まずくなってきたから口数は減っていった。すっごく恥ずかしい／／／

お互いに気恥ずかしかったのか、その後は口数も少なく眠りについた。

データと真実と自分のやりたいこと（後書き）

えぇ～、次回からかなり原作をぶっ飛ばした展開になる予定です。まぁ、新キャラがでます。オリジナルの。というか、次回の話自体がぶっ飛んでる展開になる気がするんです。まぁ、そこは新キャラに頑張ってもらうとしましょう。

それでは、意見、感想等お待ちしております。

Ride on Right time（前書き）

Count the medals
オーズが使えるメダルは……

タカ
クワガタ
カマキリ
バッタ
ライオン
トラ
チーター
ゴリラ

Ride on Right time

（……どうしてこうなったのだ）

ある日の朝、箒は窓際の席でそう思い悩んでいた。諸君は覚えているだろうか、箒が一夏に「付き合ってもらう！」。そう宣戦布告（？）したのを。そしてそれが布仏本音に知られ曲解の末、今度の学年別トーナメントで優勝した人が一夏と付き合えるってなったのを。その噂の真相をするため、セシリア、鈴はおろか別クラス、他学年から次々と１－１に押し寄せてきたのだ。鈴も別クラスでだけど……

「なぁ、英治。さっきから俺の名前がちらほら聞こえてくるけど、何だろうな。聞こうとしても女子にはぐらかされるし……」

「いや、そうは言われても。俺の予想の範疇を超えていたっていうか……正直、俺にもよくわからないんだけど……」

「僕にも何が何だか……」

クラスを見回すと篠ノ之さんが何かに耐えるように震えていた。何にだろ？　考えてもどうしようもないので席に着く。今日の受業は何だったかな。

◆◆◆

放課後。一夏は今日も特訓があるみたいでアリーナに行こうとしていたけど、それを呼び止める。大事な話があるからね。

「ゴメンね、一夏。話があるのは僕なんだ」

シャルルを含めた3人で、寮の自室に来る。ここならそうそう誰かに聞かれる心配はないだろうからね。

「話ってなんだ？　そんなにかしこまらなくても……」

「いいから聞いて。僕はね、一夏達に大きなウソをついてたんだ。僕はね、女なんだよ」

「え？」

シャルルは俺にしたのと同じ話をする。違うのは俺にしたときより悲観的でないこと。話を聞く一夏の表情が重くなり、握った拳が震え出す。

「謝ってすむことじゃないのはわかってるけど、ホントにゴメンなさい」

頭を深く下げるシャルルに対して一夏の答えは……

「いいよ、そんなこと。シャルルはそのことを悪いって思ってるんだろ。なら、俺は何も言わないさ。ま、どうしようもなかったと、か、どうでもいいってまだ言うんだったら黙っちゃいなかったかもしれないけどな」

「……一夏」

「困ったことがあるなら俺にも言ってくれよ。友達を助けるのに理由はいらないからな」

一夏がそう言うと「ふふっ」ってシャルルが笑った。

「え、どうして笑うの？」

「だってね、英治と同じこと言うんだから」

一夏にも謝ったからか、スッキリした表情でシャルルは言った。一夏はホントにいい奴だな。だから皆惹かれていくんじゃないかな。

その後、シャルルが女子だってバラすわけにもいかないから皆で協力して隠すことにした。この後は時間もあるし、一夏の特訓をすることになった。まぁ、俺も特訓しなきゃ怪しいけどね……

◆◆◆

「「あ」」

鈴とセシリア、2人揃って間の抜けた声を出してしまう。2人がいるのは第3アリーナ。大方、今度の学年別トーナメントに向けての特訓だろう。

「奇遇ね。あたしはこれから月末の学年別トーナメントに向けて特訓するんだけど」

「奇遇ですわね。わたくしも全く同じですわ」

火花を散らす2人。学年別トーナメントでも、一夏を巡る戦いでも2人はライバル（？）なのだ。強敵と書いて友と読む。そんな言葉があるが、2人に、いやこの場にいない箒も含めれば3人か。とにかくその言葉を否定するであろう。周りから見ればお前ら、仲いいだろってなるが……

「ちょうどいいわね。この前の実習のこともあるし、どっちが上かはっきりさせようじゃない」

「あら、珍しく意見が一致しましたわね。どちらがより強く、より優雅であるかはっきりさせようじゃありませんか」

メインウェポンを呼び出し、構える2人。少しの静寂の後、動き出そうとした2人に邪魔をするものが現れた。

ドンッ

「「！？」」

いきなり飛んできたのは1発の弾丸。緊急回避の後、鈴とセシリアが見たのは漆黒にＩＳだった。

機体名『シュヴァルツェア・レーゲン』。登録操縦者……ラウラ・ボーデヴィッヒ。

「……どういうつもり？　いきなりぶっ放すなんていい度胸してるじゃない」

連結した双天牙月を肩に掛けながら、鈴は言った。セシリアも同様にいつでも戦闘に入れるような大勢をとっていた。

「中国の『甲龍』にイギリスの『ブルー・ティアーズ』か。……ふん、データで見たときの方がまだ強そうではあったな」

挑発的な物言いに来るものがあるセシリアと鈴。ラウラの物言いは自身から来ているものが2人にはわかったのだった、だからこそ2人はその鼻っつらを折ってやりたいとも思っていたのだ。

「何？　やるの？　わざわざドイツからくんだりからやってきてボコられたいなんて大したマゾっぷりね。それともジャガイモ農場じゃそういうのが流行ってんの？」

「あらあら鈴さん。こちらの方はどうも言語をお持ちではないようですから、あまりいじめるのは可哀想ですわよ？　犬だってまだワンと言いますのに」

「はっ……口は一人前のようだな。だが、2人がかりで量産機に負ける程度の実力しか持たぬものが専用機持ちとはな。よっぽど人材不足とも見える。数くらいしか能のない国と、古いだけが取り柄の国はな」

ぶちっ！！

挑発が逆にし返され、2人はついにキレた。自国をバカにされて黙っているわけにもいかないし、何よりこの2人はラウラ・ボーデ

ヴィッヒという人物が気に入らなかったからだ。

「……セシリア、どっちが先にやるかジャンケンしよ」

「ええ。そうですわね。わたくしとしてはどちらでもいいのですが……」

「はっ！　そんな下らないことなんて決めずに2人がかりで来たらどうだ？　下らん種馬を取り合うようなメスにこの私が負けるものか」

「「は」」

この場にいない者、一夏を罵倒されて2人は我慢の限界だった。そんなセシリアと鈴の様子も気にせずラウラは「来い」とだけ告げる。

「「上等！」」

こうして第3アリーナでの戦いの火蓋は切って落ろされた。

◆◆◆

「あぅ……」

「くっ、何なのよあの装備……」

アリーナにたどり着いた俺達が見た光景は想像を越えるものだった。セシリアと鈴とボーデヴィッヒさんが模擬戦をしている。これだけならよかった。でも、現状はセシリアと鈴が完全にボコボコにされているところだった。シールドエネルギーが０になったみたいでＩＳが解除される２人。それに対して、ボーデヴィッヒさんは大したダメージを受けていないみたい……。鈴とセシリアの相性が悪いからってココまでになるものなのか。

「口程にもない奴らだ。お前達にもう用はない」

ジャキンと銃を２人に構える。ＩＳを展開していない人にそんなことするなんて……。冗談にすらなんないよ。この行為は止めなくちゃ、そう思ってＩＳを展開しようとする俺の隣を何かが通りすぎっていった。

「おおおおっ！」

零落百夜を発動させた一夏の白式がボーデヴィッヒさんのシュヴァルツェア・レーゲンに肉薄する。アレはＩＳに対しては絶大な威力を発揮する。ボーデヴィッヒさんも避ける様子もないから、必ず当たる。皆そう思っていたはず。でも、一夏は何もない場所で止まっていたんだ。

「な、なんだ!?　体が、くそっ……」

「やはり敵ではないな。この私とシュヴァルツェア・レーゲンの前では、貴様も有象無象の１つでしかない。……消えろ」

冷たく言い放ったボーデヴィッヒさんはその大型カノンを一夏に

向ける。俺とシャルルが何らかの行動を起こそうとしたとき、引き金は引かれた。

「ぐぁあああああ」

零落百夜の長時間の発動、今の直撃で元々のシールドエネルギーが少なかった白式は解除されて、一夏は鈴達が倒れている方に転がる。

「くそっ……」

「ふん、やはり私は認めるわけにはいかない。貴様が教官の弟であることを。そこの2人もろとも、消えろ」

再度、大型カノンを向ける。今の状態でそんなことされたら、命が危ないじゃないか。でも、そんなこと……

「させてたまるかぁあああ！」

『タカ！　トラ！　バッタ！　タ・ト・バ　タトバ　タ・ト・バ！！』

「がっ……き、貴様」

不意をつけてのか、飛び蹴りを当てることに成功した。何とか照準をずらすことに成功した俺はそのまま構えを取る。

「これ以上やるなら、俺が相手になるよ」

「ふん、今更1人増えようと、何も変わらない」

「僕もいるよ」

アサルトライフルを構えたシャルルも英治の隣に来る。でも……

「シャルル、ここは悪いけど俺に任せて3人を守っていてくれないかな？　見たところ大した怪我はしてないみたいだけど、ＩＳは展開できないだろうから」

「そんなこと言って大丈夫なの！？　相手は動きを止めることができるんだよ。多分、アレは認識した標的を止めるものだから2人でいった方がいいよ！」

認識でか……だったら尚更大丈夫だな。ホントは対人では使いたくなかったけど、ボーデヴィッヒさんの目を覚まさせてやりたいからね。

「大丈夫、切り札はあるから」

俺の目を見たからか、シャルルは頷いて一夏達の方へ下がった。

それを確認した俺の手には2枚のメダルが……

「1人でいいのか？　あのブロンドのやつが言ったように2人がかりならどうにかできたかもしれないが？」

「ま、見ていてよ。君の間違った強さを止めてみせるから」

「ッ！　私の強さが間違っているだと？　そこまで言うなら見せてもらおう。貴様の実力とやらを」

予想外にも少し同様したボーデヴィッヒさん。彼女に対抗するために俺はタカとバッタのメダルを変える。

「いくよ！」

『ライオン！　トラ！　チーター！　ラッタラッタラトラーター！！』

「あれは……」

「コンボですの……？」

「あの時の緑のとは違うみたいよね」

「コンボって……？」

「ふん、色が変わったところで何が……ぐっ」

ボーデヴィッヒさんが言い終わる前に、トラクローで切りつける。ヒット&アウェイ。認識したものを止めるんだったら、認識できないスピードで動けばいい。これが対策その1。

「は、速い。あれが英治のＩＳの力なのか……」

「変な歌は相変わらずみたいね」

「いつものがタトバ、この前のがガタキリバですと、今のはラトラーター……？」

「だからコンボって何！？」

離れたところで話している一夏達。でも、シャルルだけは話についていけないみたいで、ずっと説明を求めていた。無視というか、気づいて貰えてないみたいだけど……

「くっ、がっ……」

その間も俺の攻撃は止まない。一撃、一撃の威力は大して高くないが、反撃を許さない分、十分こっちに勝機はある。右から、左からと振り回されるボーデヴィッヒさん。でも、彼女は何かを狙ってるみたいで、目を閉じていた。

「どんなに速かろうと、対処できないわけではないっ！」

俺が突っ込んでくるタイミングを計っていたみたいで、彼女が手を突き出した途端、俺は静止した。そのまま肩の大型カノンを向けてくるけど、手はまだあるから。

『ライオディアス発動』

黒いバイザーが展開されて、ライドオーズは輝きだす。

「何っ！」

その眩しさから、目をつぶってしまうボーデヴィッヒさん。その瞬間、俺の行動は自由になる。

『スキャニングチャージ！！』

「ハッ、しまった！」

ボーデヴィッヒさんが目を開けたころには、もう遅かった。３つの黄色い光の輪。それをくぐる度に加速していくラトラーターを止めることはできなくて、両腕のクローでＸの字に切り裂いた。

「まだだ！　まだ私は負けでない！」

一瞬で急所だけは外せたのか、未だに健在のボーデヴィッヒさん。でも、ダメージは少なからず与えられたみたいで装甲には多くの傷がついていた。

「行くぞ……！」

ガキンッ！

響き渡る金属音。ボーデヴィッヒさんの攻撃を受け止めたのは……織斑先生だった。

「……やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」

「千冬姉！？」

驚きの声を上げる一夏。そんな一夏も気にしないで、織斑先生は続ける。

「模擬戦をやるのは構わん。だが、こうも被害が多くでるのは教師として黙認しかねる。この戦いの決着は今度のトーナメントでつけてもらおうか」

「……教官がそうおっしゃるのなら」

不満気ではあったけど、相手が織斑先生だったからか、ボーデヴィッヒさんは頷いて去っていった。

「火野や、織斑達もそれでいいな？」

「わかりました」

俺達も頷く。その後、この事態は織斑先生によってあずけられ、今後はトーナメントまで私闘は禁止という状況になった。

◆◆◆

「あいつ、中々面白そうだなァ。潰しがいがあるぜェ」

「……好きにすればいい」

ＩＳ学園、第３アリーナを遠くから見つめる者が２人いた。どちらも異形の姿をしており、狂気を振り撒くのは茶色がかったオレンジの蛇のような異形。一方の興味なさそうなのは紫色の恐竜みたいな異形だった。

「早速あの女でヤミーを作ってくるぜェ。祭りの始まりだァ」

「……ワース、程々にしろ」

「わァってるよォ、ギル」

2体の欲望の化身はその姿を消した。ワースと呼ばれたグリードの視線の先にいたのは先程英治に負けそうになったラウラであった。

Ｒｉｄｅ　ｏｎ　Ｒｉｇｈｔ　ｔｉｍｅ（後書き）

怒られそうですが、オリジナルのグリードで、爬虫類と恐竜（幻獣？）を出しました。ぶっちゃけ最近思いついたので、この後どうなることや……

というか、シャウタ、サゴーゾ、タジャドル出さずにプトティラ出たら物語が……未だにそれに対応したＩＧがどのタイミングで出るか半分未定なのに……

それでは、感想、意見等お待ちしております。

設定集？（前書き）

これを閲覧する前に２２話を見ることをオススメします。
９／２８訂正。ラトラーターの技名を教えてくださったゲート
ー様、ありがとうございました。勝手ながらこの場を使ってお礼を
させていただきます。

設定集？

・ライドオーズ『ガタキリバ』

イメージはそのまま、ガタキリバのＩＳ化。わかりやすいチート。能力はクワガタの電撃、カマキリソード、バッタレッグの脚力だが、コンボの特殊能力として無人機操作がある（イメージはガンダムＸのＧビット）。武装はガタキリバと同じ、操作も意識を集中させることもなく使えるが、シールドエネルギーの発生源は１つしかないため、展開できる時間には制限がある。まぁ、よっぽどのことがない限り、大抵の相手は時間内に倒せるが……

必殺技は人型ビット含めた全機で繰り出すガタキリバキック。こんなの試合で使ったら大半は操縦者へのダイレクトアタックになると思われる。

・ライドオーズ『ラトラーター』

ＡＩＣ、いや、ラウラに対するチート（？）。ライオディアスに高速移動で相手に認識させる感がゼロである。だが、その点からいくとビットの制御に集中力を使うセシリアキラーにもなると思われる。ガタキリバと違い、特筆する能力はない。だってＩＳはバイクに乗らないもんｏｒｚ

というか、コンボって大概チートになるが、誰かキラーにもなりそう。シールドバリア関係なしに堅いのや、水を操るのがあるし……

必殺技は黄色い光の輪をくぐりながら、的を両腕のクローで切り裂く「ガッシュクロス」。

・メダル設定

クワガタ……電撃を放てるようになる。中距離攻撃の獲得。

ライオン……ライオディアスが使用可能。要するに強力なめくらまし。

・オリジナルグリード設定。

『ワース』

爬虫類型のグリード。属性をつけるなら『地』だろうか。本来はガメルが大地らしいが、重力を操る描写しかなかったため、砂等を操れることでいきます。メインの動物のモデルはコブラ。そのため、性格は龍騎の朝倉威をモデルとしてる。名前の由来は朝倉↓暴れる↓壊す↓ワース。

『ギル』

結局オーズ本編でははっきりしなかったグリード。本小説ではオリジナルのグリードとして使わせてもらった。属性か『氷』。ドクターのモデルがティラノ、映司がトリケラらしいので、モデルはプテラ。朝倉がワースなので、北岡をモデルにしようと思ったけど、カザリとかぶる気がしたから性格はよりクールで無口に、そうなった。

このグリードだけ、存在している理由は昔はこのＩＳの世界にもコアメダルはあった。しかし、ギルによって残りのコアは全て砕かれた。その後、ギルとワースは相討ちとして、メダルの状態で眠り続けた。そのため、世界の管理者からは認識されることはなかった。ところが、別のコアメダルが流れてきた影響で復活。財団Ｘがコアメダルを狙い出したのは彼らのせいである。

・ＩＧ（ｉｍｉｔａｔｉｏｎ　ｇｒｅｅｄ）

コアメダル１枚とセルメダルで誕生したグリードもどき。誰かの特定の欲望で生まれたというよりも完全な自分を求めて他のコアメダルを狙う。

クワガタＩＧ……クワガタのコアメダルで誕生。他のコアメダル（特に緑の）を求めて英司を狙った。モデルは『剣』よりギラファアンデットのカラーで、武器を持ったクワガタヤミー。

ライオンＩＧ……ライオンのコアで形成。ライオディアスが使用可能。モデルは『電王』のレオソルジャー。

設定集？（後書き）

とりあえず現時点での設定集。タジャドル等も能力設定は終わっているので知りたい人がいれば活動報告にでも載せようと思います。

ＩＧは他のライダーの怪人をモデルとしています。一応調べていますが、コンドル、ゾウ、シャチ、ウナギがモデルの怪人を教えていただければ幸いです。ちなみにクジャクは赤い銃撃手、サイは紅き救世主と戦ったのが予定です。

完成と暗躍とチーム結成（前書き）

Ｃｏｕｎｔ　ｔｈｅ　ｍｅｄａｌｓ
オーズが使えるメダルは……

タカ
クワガタ
カマキリ
バッタ
ライオン
トラ
チーター
ゴリラ

完成と暗躍とチーム結成

「それじゃ、治療も終わりだ。よかったな、３人共、大した怪我もなくてな」

場所は保健室。先程の戦いでダメージを負った一夏達のために来ていたんだ。伊達さんが言うには３人共、大したことはないみたいでシップを貼るとか、その程度で済むみたいだった。

「別に助けてくれなくてよかったのに」

「あのまま続けていれば勝っていましたわ」

「いや、強がりはやめようよ。２人とも、俺達が着いた頃にはＩＳ、解除されてたしね」

「「う」」

言葉を詰まらせるセシリア、鈴。完璧に図星だったね……

「お前らなあ……。はぁ、でもまあ、怪我が大したことはなくて安心したぜ。ま、俺も人のこと言えないか……」

同じく、シップや絆創膏だらけの一夏が諌めるけど、２人はまだ強がりを言っていた。

「好きな人にかっこ悪いところを見られたから、恥ずかしいんだよ」

「わあああああ！」」

「ん？」

シャルルの一言に取り乱すセシリアと鈴。頭に「？」を浮かべる一夏。これじゃあ誰かの一夏への想いは成就しないんだろうなあ。一夏は「シャルルのやつ何言ったんだ？」って顔してるし。

「はい、ウーロン茶に紅茶。とりあえず落ちついてね。一夏もウーロン茶でいいでしょ？」

「ん、おう。サンキュ」

「ふ、ふんっ！」

「不本意ですがいただきましょう！」

鈴とセシリアは受け取った飲み物を一気に飲もうとするけど、そうすると「「ゲホッ、ゲホッ」」……むせるよ……って、遅かったみたい。

「そう言えば火野、更識が探していたぞ」

「簪が……？」

「おう、何でもＩＳが大体はできたらしくてな」

簪のＩＳって、バースがモデルだよね。この前できるかどうかって言ってたのにもうできたの？　そうだったら凄いや。

ドドドドドドド……！

「な、何だ？　何の音だ？」

廊下から聞こえる地鳴りにも聞こえる音。どんどんそれが近づいてくるのを感じた俺と一夏は顔を見合わせた。嫌な予感しかしないんだけどね……

ドカーンッ！　そんな激しい音をたてて、保健室のドアが吹き飛ぶ。そのドアが宙を舞う光景に目を奪われそうになったけど、そのドアがあったとこにはもっと恐ろしい光景があったんだ。どこを見ても、手、手、手。とホラー系の映画にも使えそうな光景が繰り広げられていたんだ。

「織斑君」

「デュノア君」

「火野君」

冷静に考えればわかることだったけど、なだれこんできたのは沢山の女子。状況を飲み込めていない俺達に女子達は1枚のプリントを突きつけてきた。

「なになに『今月開催される模擬トーナメントは、より実践的なものとするために、2人組みで行うこととする。ペアができなかったら――――――』」

「ああ、そこまでいいからっ、とにかく！」

「私と組んで織斑君！」

「一緒に組んで、デュノア君」

「私と参加しよ、火野君」

「伊達さん、結婚してください」

あれ、何か1つ違うの混ざってなかった？　伊達さんも「嬢ちゃんがもう少し年が上だったら考えたけどな」って、何普通に答えてるんですかっ？

「え、えっと……（ど、どうしよう、英治、一夏？）」

（落ちついて、とりあえずシャルルは俺達のどっちかが組むことにしないといけないね。一夏、どうする？）

（ジャンケンか？）

（いや、俺はアテがあるから、一夏が組んでいいよ）

この間1秒。とりあえずさっさと手を打たないとってことで、行動を開始する。

「悪いな、俺。シャルルと組むことになってるし……」

「ゴメンね、皆。俺も約束した相手がいるから」

しーん、そう一気に場の空気が静まる。悔しそうに去っていく女子を目に、俺達はふう、と息をつくのだった。

「ちょ、ちょっと。あたしと組みなさいよ！　幼馴染でしょうが！」

「いえ、ここはクラスメイトとしてわたくしと……」

「2人とも、悪いな。後で何でも言うこと聞いてやるからここは諦めてくれ」

一夏がそう言った途端、2人の目がキュピーンって光ったけど、気のせいだよね。

「ま、まあ、そういうことなら仕方ないですわね」

「わ、わかったわ。その代わり後で覚悟しときなさいよ」

ねえ、一夏、ひょっとしなくても自爆したんじゃ……？

「ねえ、英治。僕は一夏と組むことになったけど大丈夫なの？」

「ああ、気にしないで。俺にはアテがいるからね。それに下手に一夏を残すと厄介なことになりそうだったからね」

「アハハ、ありがとね。気を使ってくれて」

「じゃあ俺は組んでくれそうな人の所に行ってくるから」

「うん、頑張ってね」

そう言って保健室を後にする。さてと、簪はどこにいるのかな？

◆◆◆

「くっ、火野英治……」

英治が簪を探し始めた頃、ラウラは1人、屋上に佇んでいた。思い浮かぶのは、自分の強さを間違ってると言い、自分を追い詰めた男。そのせいか、彼女は今、一夏は眼中になく、どうやって英治を叩き潰すか、が頭の中を占領していた。

「お前、オーズを叩き潰したいんだってなァ」

「何者だ!?」

急に後ろから聞こえた声に慌ててラウラは振り向く。そこにいたのは、見たこともない男だった。現役の軍人である自分に悟られず、背後を取ったことに警戒するが、男はそんなことを気にしないように続けた。

「だから、オーズ、いや火野英治を潰したいんだろォ?」

「ッ!」

火野英治、まさしく自分が倒そうとしていた相手の名前を出されてラウラは目の前の男がますます謎に思えてきたのだった。

「その目、いい目じゃねェか。お前の欲望、開放しちまいなァ」

男、ワースはラウラにセルメダルを入れて去っていった。ラウラは自分身に一瞬違和感を感じ、見渡したが、男は既に消えていたのだった。

「せいぜい楽しませてくれよォ、オーズよォ」

ワースはラウラの中にいるヤミーの存在に期待しながら歩きだした。オーズが自分の相手にふさわしいかどうかを確かめるために。

（しかしよォ、ギルの野郎が言ってたが、この世界には俺のと、ギルのしかコアメダルは存在してねェはずなんだが……まァ、考えても変わんねェか）

オーズが持ってるコアメダルの存在に疑問を持ちつつも、ワースの姿は闇に紛れたのであった。

◆◆◆

「簪、いる？」

「……うん、ここに……」

簪を探しに整備室に来てみると案の定いた。最後の点検でもあるのかな？

「早速だけど、俺を探していた用事って？」

「……これが、できたってことと、……模擬戦の相手になって」

模擬戦の相手、か。可動実験は大事だからね。俺はすぐにＯＫして、アリーナに向かうことになった。

「ねぇ、模擬戦やるのはいいんだけどさ、１つお願いがあるんだけど？」

「……な、何……？」

「今度のトーナメント、俺と組んでくれないかな？」

「……え！？」

急に驚いた顔の簪。俺、何かマズイことでも言ったのかな？

「べ、別にいいけど……私で、いいの……？」

「よくなかったら頼まないよ。それとも、簪は俺とじゃ嫌だった？」

ふるふると首を振る簪。どうやらいいみたいだな。

「それじゃあ、よろしくね。それとさ、簪はもう少し自身持った方がいいよ」

「……私は、あの人には適わないから……」

あの人？　誰のことだろ？　でも、その誰かと比べて、自分が劣っているからそう思うんだよね。

「あの人が誰だかわからないけどそんな卑屈にならなくてもいいと思うよ。簪には簪にしかないいいところがあるんだから」

「……私のいいところ？」

「うん。例えばそのＩＳ。自分で作れることは凄いと思うよ」

「でも……あの人は、できる……」

げ、その人、そんなに凄いの……？

「で、でもさ、俺にはＩＳは作れないよ。ＩＳが作れたからすごいってなら、俺なんか……」

「で、でもあの人は他にも何でもできるから……」

こういうやり取りは数回続いた。俺が簪の凄いところを言っても、「……あの人もできる」の一点張り。段々と自分でもヤケクソになっていくのがわかるほどの繰り返しだった。

「あぁあああああ、もう。簪には簪にしかできないことがあるし、その人にも苦手があるんだって。完璧な人がいたらそっちの方が怖いよ！　人って字は支え合ってできているものだしね」

「……編み物……」

編み物？　あおれが一体どうかしたのかな？

「その人の、苦手なこと……。あ、ありがとう…なんか、すっきり

した……」

俺の必死の説得が通じたのか、簪はさっきよりいい表情をしていた。シャルルといい、どうして俺の周りには卑屈な女子が多いのかな？

「じゃあ、今度のトーナメント、よろしくね」

「う、うん。……よろしく、お願いします……」

こうして正式にペア結成と言ったところで、アリーナに着いた。さてと、模擬戦、始めますか。あ、よく考えれば織斑先生から私闘禁止ってなってたんだった……でも、模擬戦だから、大丈夫だよな。

◆◆◆

『タカ！　トラ！　バッタ！　タ・ト・バ　タトバ　タ・ト・バ！！』

模擬戦の開始前。簪を待ちながら周りを見回した俺は一人の女子と目があった。その人は俺と目が合うなり、ウィンクをして、扇子を広げた。だが、気になったのは、その人は簪と、目、髪の色が同じってこと。制服のリボンから見ると上級生だから姉ってことだよね。

「……待った……？」

「いや、別に。それよりあそこにいるのって簪のお姉さん？」

俺が指す方向を、見て表情を暗くする簪。お姉さんと何かあったのか？

「……う、うん。でも、今は…あんまり、仲良く、ない」

「……そうなのか」

何とかしてあげたいとは思うけど、これは簪の問題だからむやみに首を突っ込むべきではなかった俺はそれだけを言う。さてと、始めようか。

「……展開」

簪がそう言うと、あっという間にＩＳが展開される。黒とシルバーの装甲。肩や肘、膝とかにあるガチャポンのカプセルみたいなパーツ。そして背中に展開される翼。デザイン、シルエットが他のＩＳより人型に近いそれはまさに、仮面ライダーバースをそのままＩＳ化したものだった。

「じゃあ、始めようか」

コクリと頷く簪を見て、距離を取る。

少しの静寂の後、どちらともなく、動き出した。

「当たって……！」

バースバスター似の銃を呼び出し、こっちに向かって撃ってくる。

2発、3発と銃弾は俺に向かって飛んでくる。それを横に、あるいは上にとよけ続ける。セルメダルを消費しない分、あっちの方が燃費（？）がいいんだろうなぁ。そう思いつつもオーズカリバーで斬撃を飛ばしながら反撃する。簪はそれを楽々とかわすと同時に、再度、こっちを狙ってくる。

「くっ、のわっ、おおっと！」

どう考えてもこの状況が続けば、こちらが不利なのは変わらないであろう。それ程射程の差、弾数の差は大きいんだ。シールドエネルギーを消費して斬撃を飛ばすこっちと弾数式の銃の向こう。このまま遠距離戦が続けば絶対こっちが負ける。せめてウナギか、クジャクがあれば……

「……隙有り」

「しまった！」

考えてるうちに動きが悪くなった所をつかれて何発かくらう。ラッキーなことに大ダメージにはなってないけど。とりあえずコレに賭けてみますか。

『タカ！　ゴリラ！　バッタ！』

メダルチェンジと同時に腕を突き出す。そうすると、腕甲だろうか、その辺りのパーツが飛んでいく。まぁ、要するにロケットパンチだな。

「ロケットパンチだ…？」

これもかわす簪だけど、何か今、期待に満ちた顔をしていたような。でも、これで隙は作れたはず。

『クワガタ！　カマキリ！　チーター！』

「セイヤッ！」

「え……？」

一気に近づいてカマキリソードを振るう。突然の加速、それも瞬時加速並みの加速をたやすくやったことに驚いたのか声をあげる簪を何回か攻撃するのだが……

ギュィィンッ！

回転する何かに止められて、火花が散る。簪の右腕に装備されたドリルアーム。それに俺の攻撃は受け止められていたんだ。

「うわっ……！」

ドリルとソード、そのままつばぜり合いになるかと思ったが、そうはいかなくて、ドリルの回転による振動で思うように力が入らなくて弾かれる腕。がら空きになった胴にはドリルの一撃が。

「のわぁあああああああ」

ドシーン、そういう音と一緒に地面に叩きつけられる俺。シールドエネルギーは結構減ったけど、まだ戦えるな。でも、どうやって攻めようか。やっぱり大技で、かな？

「……クレーンアーム」

「え？」

クレーンアームの展開により、さっきまで右腕にあったドリルはクレーンの先端になる……つまり、ドリルの射程が伸びること……アレ、かなり不利？

そう思った瞬間に、飛んでくるドリル。ギリギリでかわせたけど……危なかったぁ。

『タカ！　トラ！　バッタ！　タ・ト・バ　タトバ　タ・ト・バ！！』

イチかバチかの逆転のためにタトバコンボに戻り、オーズカリバーを取り出す。シールドエネルギーの消費は大きいから斬撃は飛ばさない。でも、これならダメージは期待できるはず。

『スキャニングチャージ！！』

「ッ！？」

その音で何かするってわかったのか、簪はこっちに向かって加速してくる。ドリルやクレーンも展開しないで突撃してくることに疑問は感じたけど、背に腹は変えれないから、こっちも加速して簪に突っ込んでいく。いくよ、簪！

ガキンッ！

その音と共に着地する両者。着地によって舞い上がる砂煙。場を支配する静寂の中、健在だったのは簪の方だった。こっちの一撃は

当たっていた。それでも俺が負けたのは、簪の翼はカッターウィングってことを忘れていたからだった。

「英司、大丈夫……？」

「ん、大丈夫だよ。ハハ、それにしてもあっさりと負けちゃったな」

「そ、そんなことないよ……英司も、強かったし……」

その後も談笑は続いた。そういえば、そう思って簪のお姉さんがいた方を見るとそこは誰もいなかった。もう帰ったのかな、妹に一言くらいかけていけばいいかもしれないのに……

トーナメントまでもう少し。特訓あるのみ、かな。

完成と暗躍とチーム結成（後書き）

遂に（？）登場、簪のＩＳ。でも、名前未定（笑）。いや、本気で。何かいいアイディアがあったら教えてくれれば嬉しいです。ちなみに自分が間がれたのは『打鉄・誕』とかでしっくりこなくて…ｏｒｚ

とりあえず今回の原作（？）ブレイクは
一夏にもシャルルの秘密をばらした。
セシリア、鈴、簪、トーナメント出場可能。
ラウラがヤミーの親に
の３本です。次回もまた見てくださいね。ジャンケン、ポン……ってサ○エさんじゃねえし！

それでは気を取り直して、感想、意見等お待ちしております。

ラッキースケベと眠れない夜とトーナメント開始（前書き）

Ｃｏｕｎｔ　ｔｈｅ　ｍｅｄａｌｓ
オーズが使えるメダルは……

タカ
クワガタ
カマキリ
バッタ
ライオン
トラ
チーター
ゴリラ

「ふぅ、疲れた〜」

「お疲れ、英治」

部屋に戻って来た俺を笑顔で迎えるシャルル。身長差も加わり、多少上目遣い気味になるそれは破壊力抜群で……、同室が女の子なんだなって強く認識させられてしまうのだった。

「ねぇ、英治。遅くなっちゃたけど……あの時は助けてくれてありがとう」

あの時？　って、ああ。ペアのことか。

「いや、気にしなくていいよ。事情を知ってるのは俺と一夏だけだから。それに友達だからね。助けるのには理由は必要ないよ」

「アハハ、友達か……」

何故か微妙そうな顔のシャルル。何でだろ？　そう思ったけど、そんなに気にすることじゃないかな、と俺は思ったのだった。

「でもさ、友達だから。そうじゃなくてもきっと英治は誰にだって手を伸ばすと思うよ。それは、きっと英治が優しいからだよ」

「そうなのかな？」

「そうだよ。だからね、英治、色々とありがとうね」

そう言われて俺は何か、照れくさかった。でも、誰かからこう感謝されるのは嫌いじゃなかった。

（嫌いじゃないわ！　嫌いじゃないわ！）

あれ、今オーズと知らない黄色い怪人が思い浮かんだけど、気のせいだよね。

「ところでさ、シャルル。俺と一夏の前だったら男口調にしなくてもいいんじゃないかな。どこかで本当の自分でいられるのは大事だと思うしね」

「う、うん。僕も直した方がいいかなとは思ったんだけどね、徹底的に仕草とか口調とか覚えさせられたからすぐには直らないかも。で、でも……これじゃ女の子っぽくないのかな？」

「い、いや。そんなことはないと思うよ。シャルルは可愛いと思うし」

「か、可愛い……？　ぼ、僕が？　ほ、本当に？　ウソついてない？」

身を乗り出しながら聞いてくるシャルルに驚いたけど、ホントのことだったからすぐに頷いた。俺の反応を見ると、「そうかぁ、僕可愛いのかぁ、えへへ」と繰り返してたのは怖かったけど……

「ま、まぁ、そろそろ着替えないかな？　どっちもいつまでも制服のままってわけにはいかないでしょ？　じゃあ俺は外にいるから着

替え終わったら言ってね」

そう言って部屋から出ようとしたら「待って！」と服の裾を掴まれた。え、何？

「い、いいよ。そんなの。英治に悪いし。そ、それに……ほら！男同士なのに部屋の外に出てたら変だって思われちゃうよ」

そう言われればそうだな。だからって男と女の子が同じ場所で着替えるのは……？

「ぼ、僕は気にしないから。ね、英治も普段通りでいいよ」

何でか一生懸命になるシャルル。そう言うシャルルの気持ちを無駄にしないために断ることはできなかった。

「じゃ、じゃあ、俺も着替えることにするよ」

「うん、そうして」

にこっと笑うシャルル。その頬は少し赤い気がしたけど、着替えるんだったらさっさと着替えてしまおう。そう思ったからあんまり気にしないこととした。

じー。

上着を脱いだとき、なぜか後ろから感じる視線。誰がっていうのは考えるまでもないけど……。

「ねぇ、シャルル？」

「ふぇ！？　な、何かな？」

動揺した声をあげるシャルル。その反応にはこっちもびっくりでどう声をかけたらいいのかわからなかった。

「と、とりあえずこっち見てないかな？」

「え、え、え、え、そそそ、そんなことないよ」

「そ、そう？」

とっても挙動不審なシャルル。まぁ、本人が違うって言うんだからこれ以上、聞くのもよくないよな。そう思って着替えようとする。

じー。

それでも、感じる視線。え～と、シャルルさん。どうしたのでしょうか？

「えっと、覗きはよくないよ」

「にゃ！？　ぼ、僕はそんなこと……きゃん！」

再び動揺したシャルル。そんな彼女の方から、どたっ、そういう音と悲鳴が聞こえた。

「ちょ、大丈夫？　……あ」

「いたた、足がひっかかちゃった……え？」

不意に振り向くとシャルルと目があう。ということは、彼女の状態も見えてしまうわけで……。俺の視界に写ったのは脱ぎかけのズボンに足をひっかけて転んだシャルル。とうことは、その…下着が見えてしまったわけで……

「ご、ゴメン！」

瞬時に後ろを向く。色はピンクで……って、違う違う。落ち着け、落ち着け。

「……見たよね、英治？」

「ごめんなさい」

慌てようが、落ち着こうが、俺には謝るしかなかった。

「ちゃ、ちゃんと言ってくれれば僕は、その……」

「ん？　何か言った？」

「い、いや、何でもないよ。何でもないから！」

「あ、うん。わかったから、落ちついて」

「あ、う……／／／」

シャルルは顔を赤くして黙り込んだ。えっと、これって俺が悪いの？

◆◆◆

その夜。英治が眠りに着いた後もシャルルは起きていた。いや、眠れなかった。その表現の方が正しいのかもしれない。さっきのハプニングを思い出しては顔を赤くして、悶える。それの繰り返しだった。そういえば。シャルルはふと思った。自分の下着を見たとき、英治はどう思ったのか、と。自分は男としてＩＳ学園に来るために、仕草や言葉遣いを教え込まれた。そして先日までは男として接してきた。英治は可愛いと言ってくれたが、それでも不安なことはあった。自分を異性として意識しているのかどうか。そして今日、自分の下着を見られた。それで意識してくれれば……

「な、何考えてんだろうね、僕は……」

その呟きに答えるものは誰もいない。少しの静寂の後、頭が冷えたシャルルは眠ろうと目蓋を閉じる。想い浮かぶのは英治の顔。

（ああ、もうっ、でも／／／）

すぐさま顔を赤くする。英治を異性として意識したあの日。母がいなくなってから、シャルル自身と向き合ってくれた少年。半分ヤケだった自分にやりたいことを考えさせてくれた。

気が付けばシャルルは自分の布団を出て、英治の寝顔を覗いていた。心地よさそうな顔の英治。彼はどんな夢を見ているのだろう？

そんな英治を優しい表情で見つめていたシャルルは、静かに彼の額にキスをしたのだった。

「おやすみ、英治」

彼女の眠れない夜は続く。

◆◆◆

6月の最後の週。この日から学年別トーナメントは始まる。IS学園にはそのトーナメントを見るための来賓が来るため、1回戦がもうじき始まるというのに忙しかった。

「で、調子はどう、一夏？」

「おう、バッチリだ」

男子があてがわれた更衣室。そこにいるのは俺と一夏、シャルル。それから俺のペアの簪だった。着替えも終わったし、作戦会議的な名目で彼女もここにいた。最初は簪はその内気の性格のためか、一夏とあまり話さなかったが、一夏の性格のおかげか、彼女も人並みには一夏と話すようになっていたんだ。

「しかし、すごいな、こりゃ……」

モニターから見えるアリーナの観客席。そこには政府のお偉いさん、技術者等々すごい顔ぶれが集っていた。

「3年にはスカウト、2年には1年間の成果の確認にそれぞれ人が来ているからね。1年には関係はないみたいだけど、上位に入ればチェックが入るかもね」

「……それだけじゃない……多分、織斑君と、英治にも視察が来てる……」

「ふーん、ご苦労なことだ」

シャルルと簪の説明にも興味がなさそうな一夏。どうやら一夏が気になるのは……

「一夏はボーデヴィッヒさんとの戦いだけが気になってるからね」

「まあ、な」

やっぱりね。最初の出会いからして良くなかったし、この前の敗北。男としては同じ相手に2回も負けたくないからね。その勝負的な問題では俺もボーデヴィッヒさんの標的らしいけど。

「一夏、あんまり感情的にならないでね。彼女、ＩＳの操縦技術ではこの学年1番だと思うから」

シャルルの言うことには俺も思うところはある。この前の戦いは彼女のＩＳとラトラーターが相性がよかったからで、操縦技術では足元にも及んでないはず。

「そろそろ対戦表が決まるはずだよね」

シャルルは呟く。今回のトーナメントは2人ペアで行う、今まで

のとは違う形式。だからかな、対戦表を作るためのシステムが上手く作動できなかったみたいで、今朝から手作りのくじでトーナメント表が作られていたんだ。

数分後、発表されるトーナメント表。それには驚きの組み合わせがついていた。

Aブロック1回戦…火野英治　更識簪ＶＳセシリア・オルコット
鳳鈴音
同じく2回戦…織斑一夏　シャルル・デュノアＶＳラウラ・ボーデヴィッヒ　篠ノ之箒

◆◆◆

「……」

「……」

ラウラと箒がいる更衣室の一角は沈黙に包まれていた。周囲の興味がなく、特定の誰かと組む気がなかったラウラと特定の誰かを誘えず終いの箒。ペアが見つからず抽選で組まされたのは彼女達だけだった。　望んで組んだわけでもないし、性格的な問題からか、彼女達は全くそりがあわなかった。連携のれの字もないくらいに。

（初戦が一夏、これに勝っても次は火野達かセシリア達のどちらか、か。だが私は負けるわけにはいかないのだ！）

そんな具合に気合を入れる筈とは反対にラウラはその口を釣り上げた。まずは自分の敬愛する教官に泥を塗った一夏を倒せて、次に自分に屈辱を与えた英治を倒せる。彼女にとっては都合のいい組み合わせだった。ラウラの2人を倒すという想いは狂気に変わり、彼女の中にあった。それが火種になることは誰も知らない。

ラッキースケベと眠れない夜とトーナメント開始（後書き）

やっとで次回からトーナメントに入ります。我ながら展開が遅いと思っていましたので、次の巻からは適度なペースでやりたいな、と。

それでは意見、感想等お待ちしております。

撃ち合いとドつきあいとトーナメント開始（前書き）

Ｃｏｕｎｔ　ｔｈｅ　ｍｅｄａｌｓ
オーズが使えるメダルは……

タカ
クワガタ
カマキリ
バッタ
ライオン
トラ
チーター
ゴリラ

撃ち合いとドつきあいとトーナメント開始

「さてと、お手柔らかにね、セシリア、鈴」

「勝負というからには全力でいきますわ」

「そうよ。あんたらに勝ってあたしと組まなかった一夏にお仕置きするんだから！」

「…話に入れない……」

アリーナに浮かぶ４機のＩＳ。トーナメント１回戦である俺、簪ペア対セシリア、鈴のペア。この２人は自分に一夏が自分と組まなかったことにご立腹で、その怒りの矛先が俺にもむいているような……

「そ、それにわたくしは優勝しなきゃいけないんですの！」

「セシリア！　あんたも、例の件を……！」

それに一夏の件もあってか、やる気はＭＡＸだろうな……。それでも、俺は簡単に負ける気はしないけどね。こっちだって練習してきたんだから。

『それでは、両チーム規定の位置へ』

試合開始を促すアナウンス。それに従って、セシリア達と距離を取る。

『5、4、3、2、1』

「簪、援護お願い！」

「……任せて」

試合開始とともに俺は加速する。接近戦向けの俺と、射撃武器がある簪。どっちが前衛をやるか、なんて簡単な話だった。というか、俺が後衛に向かないだけなんだけどね……

「来なさい、英治！」

激突するオーズカリバーと双天牙月。やはり相手の前衛は鈴であり、つばぜり合いとなる。金属音が鳴り響く中、俺は押されていた。パワー型の甲龍相手ではタトバコンボではパワーに向かないからだろう。

「くっ！」

思った通りに弾かれたのは俺だった。パワーにはパワーを。

『タカ！　ゴリラ　バッタ！』

「メダルを変えたって！」

鈴がそう叫ぶなり、吹き飛ばされる俺。殴り飛ばされたような衝撃の中、俺は弾道、銃口の見えない衝撃砲への対応方法を考えていた。

◆◆◆

「さあ、おゆきなさい！」

「当たらなかったら、どうってこと、ない」

一方の簪は、後衛同士、セシリアとの打ち合いになっていた。セシリアの操作するビットを縦横無尽に飛びながらかわす簪。ビットの隙を狙って本体を狙うが、その行動を読まれていたのか簡単によけられる。

「……こうも、連続だと……」

ビームの雨の中、簪は呟いた。簪が苦戦しているのは、セシリアの成長が原因だった。俺や一夏と戦った時の欠点、ビットの操作中、本体は何もできない、を少しずつ克服していたからだ。一度に５つのレーザー。俺だったら、手も足も出ないかもしれない。

「こうなったら……」

何かを思いついた簪は地面に向かう。空中では３６０度警戒しなければいけないが、地面にいれば１８０度の警戒で済む。それに、簪には他にも手があった。目には目を。誘導兵器には誘導兵器を。

「……ＣＬＡＷｓ、起動」

瞬間、翼等の装備が外れ、１つの形を作っていく。完成したそれはサソリのような外見。ＣＬＡＷｓ・サソリ。ＣＬＡＷｓとは、バースの装備「Ｃａｎｎｏｎ，Ｌｅｇ，Ａｒｍ，Ｗｉｎｇ，Ｓｙｓｔｅｍ」の略称で、ブレストキャノン、キャタピラレッグ、ドリルアーム、クレーンアーム、ショベルアーム、カッターウィングが含まれている。その各装備が合体したものがＣＬＡＷｓ・サソリ。本来のバースではセルメダルを多量に消費するから、多様はできないんだけど、ＩＳで再現されたそれにはデメリットが少ない。強いて上げるのなら、翼もパーツの１部となっているため、飛行速度が落ちることであるくらい、かな。ちなみに動かし方はセシリアのビットと同じように操作するか、あらかじめ組まれたプログラムに従うかの２つ。

「な、なんですの、それは！？」

簪が展開したＣＬＡＷｓ・サソリに目を丸くするセシリア。いや、セシリアでなくても初見の者ならそれに驚くと思うよ。

「……お願い」

簪の指示でセシリアに向かっていくＣＬＡＷｓ。さすがに飛行能力はないのか、右腕をワイヤーで飛ばす。

「そんなもの、あたりませんわっ！」

横に逃げるセシリア。けど、ＣＬＡＷｓもその方向に回転することで、追撃する。今度は上によける。そこに飛んでくるのは、左腕。２本の腕の攻撃をかわしながら、セシリアは距離を取った。相手の攻撃はワイヤー。その長さがどの程度のものかは知らないけど、距離を取れば届かないと思ったんだろう。

「この距離なら……ッ！」

ＣＬＡＷｓの射程外に来れたセシリアめがけて飛んでくる弾丸。セシリアがその方を向くと、銃を構えた簪がいたのだった。

「ビットは、壊した。後は、貴方だけ……」

やられた。セシリアが思ったのはそうだった。ＣＬＡＷｓによって自分に隙ができた。簪はそのタイミングを見逃さず、着々と１つ、２つとビットを落としていった。

「くっ、まだわたくしは負けてないですわ！」

セシリアもレーザーライフルを構える。お互いの銃口が狙いをつける。

◆◆◆

ドガァァンッ！

壁に叩きつけられる音が響く。衝撃砲の直撃をまた受けた俺だけど、ただでは転ぶ気はしなかった俺は腕甲がないゴリラアームを見た。俺がぶつかった場所とは逆方向、そっちにも土煙は上がっていた。

「やってくれたわね……」

鈴もすぐさま浮上して、こっちに向き直す。カウンターとばかりに放ったバゴーンプレッシャーは彼女に直撃して、ダメージを負わせるのに成功したのだった。でも、シールドエネルギーの残量はこっちが負けている。

簪の方は順調にセシリアを追い詰めていた。とりあえず、女の子に活躍を取られるのは格好悪いかなぁ、そう思った俺は気合を入れ直した。さあて、どうやって攻める？　衝撃砲の回避は鈴の視線から予測するしかないとして、どうやって有効打を与えるか……、最初の切り結びでパワーではこっちの分が悪いことはわかってる。なら、スピードしかないよな。

『クワガタ！　カマキリ！　チーター！』

「ッ！」

鈴が反応するが、襲い。両腕の刃でダメージを与える。厄介な衝撃砲への対抗策としてはいちかばちかだけど、インファイトっていう手段もあるんだ。

「ちょこまかと！　あたりなさい！」

ガキィン！

連結した双天牙月を交差した両腕で止める。力押しされているけど、こういう時のためのクワガタだから！

「しびれるけど、ゴメン！」

「へ？　きゃぁあああああああ」

怪しい煙をあげ、バランスを崩す甲龍。絶対防御が発動したのか、鈴のシールドエネルギーはかなり減っていた。ここしかチャンスはないよね。

『スキャニングチャージ！！』

加速しながら、電撃を纏ったすれ違いざまに両刃で切り裂く。鈴のシールドエネルギーはゼロになっていた。鈴に勝てたことにより、俺は着実にレベルアップしているのを実感していた。

◆◆◆

激しい銃撃戦の中、簪とセシリア、両者のシールドエネルギーは減っていた。簪はＣＬＡＷｓを解除して、カッターウィングを展開していた。空中での銃撃戦。弾丸、レーザー、ミサイルが入り乱れる戦い。

「……そこ！」

「きゃぁ！　まだまだですわ！」

「！！」

ブルー・ティアーズから放たれたミサイル。執念から撃たれたそ

れを簪はかわしきることはできなくて、煙があがる。

「やりましたの……？」

ライフルを構えたままセシリアは呟く。そして、気づく。煙の中、立っている影に。だが、簪のＩＳは試合開始当初と様子が大きく違っていた。両腕、胸部、足。それぞれに装備があった。バース・デイ。ＣＬＡＷｓフル装備のそれは、簪が好きなアニメの表現で言えば、フルアーマーかな？

「これが、とっておき……」

クレーンアームの先端に接続されたドリルアームを飛ばして攻撃する。対応が遅れたセシリアはその攻撃にあたり、ワイヤーに巻き付かれる。

「くっ、やってしまいましたわ……」

後悔をするセシリア。それとは反対に簪はセシリアをロックしたまま、ブレストキャノンのチャージを始める。

「ブレストキャノン、シュート」

セシリアが光の波に飲まれると共に試合終了のブザーが鳴る。俺は簪のとこに行く。

「おつかれ、簪」

「……うん」

自分のＩＳで勝ったことが嬉しかった簪は嬉しそうに頷く。次は一夏の試合だな。

◆◆◆

「お疲れ、英治、簪」

「ああ、ありがと」

ピットに戻ってくると、一夏とシャルルがいて、スポーツドリンクをくれた。早速一口っと。

「一夏、調子はどう？」

「ああ、バッチリだぜ。ラウラの方が実力は上かもしれないけど、やれるだけのことはやってくるさ」

「いや、そこは絶対勝つ、とか言おうよ」

「僕もそう思うよ」

「……同感」

３人に言われて、頭をかく一夏。すぐさま、「わかったよ」と言う。

「絶対、勝ってくるぜ！」

「……今更、言っても……」

「うんうん」

「アハハハ、じゃあ英治、行ってくるよ」

「ああ、頑張って」

◆◆◆

「ふん、逃げずに来たとはな。まぁ、いい。貴様はここで……」

「やれるのならやってみろよ。この前とは違うからな」

試合開始前から繰り広げられる舌戦。この決着がつかないまま、試合開始のカウントダウンが始まる。

「「叩きのめす！」」

ブザーと一緒に2人の言葉は重なった。

「おおおっ！」

瞬時加速をしながら雄叫びをあげる一夏。でも、それと一緒に嫌な予感が俺にはしたんだ……

撃ち合いとドつきあいとトーナメント開始（後書き）

やっとで始まったトーナメント。この調子で行けば夏休み、その後はいつになるのか（汗）　これじゃ夏休みの風都編が……ゲフンゲフン、今のはなかったことに。

今回の執筆にあたって、亜種コンボの必殺技を確認（ｗｉｋｉで）したところ、こんな感じに……

頭…属性強化（水、光等）または視力等の強化。ただしサイは不明
腕…武器の強化。クジャクはギガスキャン。
脚…バッタはジャンプ。チーターは加速。タコは脚の固定。後は？

という具合になりました。劇中ではタカキリバ、ラキリバ、タカキリーター、タカジャバ、シャゴリタしか使ってないので、推測多いですけどね。

チームワークとラウラの欲望とその代償（前書き）

予約投降する日にちを間違えて１０／９にしていました。すみません。以後気を付けます。

Ｃｏｕｎｔ　ｔｈｅ　ｍｅｄａｌｓ
オーズが使えるメダルは……

タカ
クワガタ
カマキリ
バッタ
ライオン
トラ
チーター
ゴリラ

チームワークとラウラの欲望とその代償

「おおおっ！」

「ふん……」

試合開始と共に瞬時加速する一夏。ボーデヴィッヒさんは動揺もなく右腕を突き出す。トーナメントの何日か前、ボーデヴィッヒさんの慣性停止能力『ＡＩＣ』に対抗するための策が一夏にあることを話したのを思い出す。ＡＩＣもエネルギー波なら零落百夜で切り避けることを。

「くっ……！」

だが、対策があるからってどうにかなるわけじゃなく、ＡＩＣに止められる一夏。一夏がＡＩＣに対抗できるのはエネルギー波が雪片弐型に当たったときだけ。おまけに一夏の動きは読まれやすいらしい。

「開幕直後の先制攻撃か。わかりやすいな」

「……そりゃどうも。以心伝心で何よりだ」

「ならば私がどうするかわかるだろう」

ボーデヴィッヒさんはレールガンの照準を一夏にあわせる。だが、一夏には焦りの表情はなかった。だって……

「させないよ」

ボーデヴィッヒさんの後ろからシャルルはアサルトカノン≪ガルム≫の引き金を引く。一夏のＡＩＣを解除して間合いを取るボーデヴィッヒさん。

「逃がさないよ」

ボーデヴィッヒさんと向き合ったシャルルは瞬時にアサルトライフルを展開する。戦場のリアルタイムに合わせた武器を瞬時に展開できるシャルルの特技、『高速切替（ラピッド・スイッチ）』は遺感なく発揮されていた。

「私を忘れてもらっては困る」

シャルルの追撃を阻むように立ちふさがる篠ノ之さん。専用機持ちではない彼女は打鉄を纏っていた。打鉄は防御に優れている。それの照明のように盾で銃弾を弾きながら剣を振るう。

「それじゃ、俺も忘れないようにしないとな！」

今度は一夏が割り込み、篠ノ之さんと切り結ぶ。何回か剣がぶつかっていくけど、その度に篠ノ之さんは後ろに押されていく。白式と打鉄の性能差が大きくでた瞬間だった。

「くっ、この！」

自分が不利なのに焦ったのか大振りになる篠ノ之さん。もちろんこのチャンスを見逃すはずはなく……

「シャルル！」

「うん！」

雪片で攻撃を受け止めた一夏が叫ぶ。それに呼応するようにシャルルはアサルトライフルを構えたまま篠ノ之さんの背後にまわる。

「はっ……！」

顔を青ざめるけど、もう遅い。シャルルは引き金を引こうとしていたから。

「！？」

突然、宙を舞う篠ノ之さん。どう見ても不可思議な軌道で篠ノ之さんはアリーナの端へ飛んでったけど、大丈夫なのか？

「邪魔だ」

篠ノ之さんを投げた張本人、ボーデヴィッヒさんは呟く。彼女のワイヤーブレードが篠ノ之さんを放り投げたのみたい。

「なっ、何をする！」

投げ飛ばされた篠ノ之さんは抗議をするけど、聞く耳を持たれず。ボーデヴィッヒさんは一夏をプラズマ手刀で追い詰めていく。その正確無比な攻撃に一夏は攻撃を凌ぐだけで精一杯って感じだった。

シャルルはすかさず一夏の援護にまわろうとするけど、ワイヤーブレードに行く手を阻まれて、それの回避ばっかりになっていた。

だけど、何回かその応酬が繰り返されると、シャルルは急に向きを変える。その視線の先にいるのは、篠ノ之さん。どうやら、一夏

がボーデヴィッヒさんの足止めをしている間にシャルルが篠ノ之さんを撃墜する。そうすれば安心して2対1でボーデヴィッヒさんと戦える。

「一夏が相手じゃなくてゴメンね」

「なっ……！？　バカにするなっ！」

激昂した篠ノ之さんの一撃を右手に展開した近接ブレード≪ブレッド・スライサー≫で受け止めたまま、左手のアサルトライフルの照準をあわせる。

「くっ……」

ロクな回避行動を取ることもできなくて、篠ノ之さんのシールドエネルギーは減っていく。

「先に片方を潰す戦法か。いい戦法だな、だが無意味だ」

追い詰められている篠ノ之さんに興味を示さずに、一夏への攻撃を続けていく。自分の武器がブレードだけ、離されたら一気に決められることがわかっているから、一夏は必死で食らいついていた。

「うぉおおお！」

自分に気合を入れて、高速近接戦闘を続けていく一夏。お互いの武器が交差する金属音が一定のリズムでフィールドに響いていく。

「……そろそろ終わらせるか」

その言葉と共に一夏の動きは止まる。一夏は動こうと足掻くが、体は少しも動かすことはできない。一夏はマズイなって顔だけど、アリーナ全体を見ることができる俺は戦いはまだまだ続くことがわかっていた。

ドンッ！

「がっ……！」

響きわたる銃声。ボーデヴィッヒさんがダメージを受けると同時に一夏は動けるようになる。そして一顆の隣に降り立つ影。

「お待たせ、一夏！」

「サンキュ、助かったよ」

篠ノ之さんを下したシャルルが合流してから、一夏の反撃は始まる。一夏の突撃をサポートするシャルル。ワイヤーブレードを撃ち落とすなどで、道を作っていく。

「一夏！」

「おう！」

加速する一夏。零落百夜が当たるとヤバいことはわかっているボーデヴィッヒさんは右手を突き出し、ＡＩＣを発動する。度重なる零落百夜の使用、試合初期のダメージと重なって白式のシールドエネルギーは残り少ない。後１発くらえば、撃墜だろう。それを理解しているボーデヴィッヒさんは口元に冷笑を浮かべる。

「これで終わりだ」

「ははっ、大事なことを忘れているぜ。これは2人組なんだぜ」

「なっ！」

「これでっ！」

シャルルは右腕のシールドをボーデヴィッヒさんに押し当てる。シャルルのＩＳが何なのか、それに気づいたボーデヴィッヒさんは焦りの表情を見せる。瞬間、縦の装甲がはじけ飛び、リボルバーと杭がついた装備が現れる。ノットパニッｓｓ……『盾殺し≪シールド・ピアース≫』。受業で習った第2世代最大の攻撃力を誇る武器。

ズガンッ！　ズガンッ！　ズガンッ！

「がっ……ぐっ……」

盾殺しの連射にシールドエネルギーがごっそり減っていく。誰が見ても、シャルル達の勝利だった。でも、何だろ、この近づいてくる嫌な予感は……

◆◆◆

（私はここで負けるのか……？　織斑一夏、そして火野英治を倒すこともなく？）

自分の敬愛する教官に泥を塗ったアイツを。教官―織斑千冬は最初に自分を認めてくれた存在だった。そしてそんな存在だから、憧れ、近づく、いや、彼女になりたいと願う。一度、千冬に強さの理由を聞いてみた。同じことをすれば彼女に近づけると思って。だが、千冬の特別は弟だった。弟―織斑一夏だけが千冬に特別な表情をさせる。それが許せなくて完膚なきまでに叩き潰すことを決めた。それなのに、火野英治に負けた。自分の強さを見せれば自分の敬愛した教官が帰ってくると思ったから。

（お前、力が欲しいンだよなァ。だったら望め。そうすりゃ手に入るぜェ）

頭に響く声。力が欲しいラウラは迷うまでもなく、力を望む。それが、人に許されることのない力とは思わずに。

◆◆◆

「あぁあああああああああ！」

突然、身が叫んばかりに叫びだすボーデヴィッヒさん。その体からは、銀色のメダルが流れ出す。

「織斑先生！　アリーナの遮断シールドの解除を！　早く！」

『わかった、後で説明してもらうぞ』

すぐさま、アリーナに降りる。どうしてこの世界にヤミーが!?

「英治、アレは一体なんなんだよ？　ラウラから突然メダルが……」

「一夏は下がっていて、ここからは俺のやることだから」

ヤミーの足元に倒れるボーデヴィッヒさんを見つめる。彼女は自分の過ちに気づいたのだろうか、その体は震えていた。次にヤミーに目をやる。ワニのようなヤミー。ワニが5体のグリードのどれにも該当しないことに疑問を感じたけど、今はそれどころじゃないから!

「どこに行っても、人の欲望は消えないし、利用するやつはいるのか。変身!!」

『タカ!　トラ!　バッタ!　タ・ト・バ　タトバ　タ・ト・バ!!』

トラクローで切りかかる。が、しかし、ワニヤミーには大したダメージは与えられないみたいで、相手が軽くよろめいただけだった。何てパワーだ、こいつは……

「織斑一夏を……火野英治を……倒すっ!!」

ワニヤミーは叫ぶ。俺と一夏を倒すって。つまりボーデヴィッヒさんの欲望はそうだったってこと。俺が狙われるのはラトラーターでボーデヴィッヒさんに勝ったからだろう。一夏が狙われるのは…事情はわからないけど、ボーデヴィッヒさんが因縁みたいなことを言っていた。それで、一夏を消そうと……

そんなことはさせない！　そう思って格闘、つまりパンチやキックの応酬で立ち向かうけど、相手には大したダメージを与えれてる気がしない……。元々ワニって動物はイメージに似合わず、足が速いし、そのアゴの噛み付きはあがいても逃げることはできない。その能力はヤミーになっても充分に発揮されるから、かなりの強敵だ。おまけにアリーナはシェルターこそかかっているが、コイツが暴れると他の皆が危ない。アリーナの外に行けばコイツに対抗できる手段があるのに。

「はぁ！」

右ストレートを打ち込む。だが、その拳は簡単に止められて首を絞め上げられる。

「あ、ぐっ……！」

片手で持ち上げられる。地面に足がつかず、首も絞められていて力が入らない。おまけに右腕は掴まれている。どうする？

「英治！！」

刹那、シャルルがヤミーの背中にアサルトライフルを撃ち込んだ。やはりダメージは与えれていないけど、今のショックで首絞めから脱出はできた……

「英治、大丈夫？」

「ああ、ありがとう、シャルル。助かったよ」

ヤミーと距離を取ったところで近くに来るシャルル。このアリー

ナにいるのは、俺、シャルル、一夏、ボーデヴィッヒさん、篠ノ之さんだけど、シャルル以外の3人は試合でＩＳのシールドエネルギーは尽きている。早く退避してもらわないと。

「一夏！　篠ノ之さんとボーデヴィッヒさんを連れてアリーナから出て！　シャルルはその援護を！」

「……ああ、わかった。箒、ラウラ、行くぞ」

自分が何もできないことに悔しそうな一夏。でも、自分ができることはそれくらいだと分かっているからこそ、すぐに行動にする。シャルルに目をやる。シャルルは頷いて、一夏達の近くに行く。これで、安心してコイツと戦えるな。ガタキリバで一気に行くか？それともラトラーターで？　考えながらも格闘戦を続ける。拳やクローがぶつかり合い、火花が散り、倒れ、転がる体。とりあえず一夏達が早く避難してくれれば……

「キシャアアアアア！！」

そんなときだった、一夏達の方に空から飛来してくる何かが来たのは。

赤く、肩に扇の様に広がる翼。鳥のような顔。飛来したのはクジャクのＩＧ。ソイツが来た場所は運悪く、一夏達が出ようとした出口の前だった。

無言で手を突き出すクジャクＩＧ。その手から放たれてのは火炎弾。生身の人間が当たったら冗談じゃないことになる威力のはず。

「皆、危ない！」

それにいち早く対応したシャルルはラファールの盾を構え、一夏達の前に立つ。だが、ジリジリとシャルルが駆るラファールは後退していく。

「うわぁあああああ」

火炎弾は防げはしたもののシャルルまでがＩＳを解除されてしまう。……このままじゃマズイ。焦る俺の心情は関係なし、クジャクＩＧは一夏達に近づき、その爪を降り下ろそうとする。

「させてたまるかぁーーーー！！」

『タカ！　トラ！　チーター！』

タカトラーターとなって、一夏達とＩＧの間に入る。そして、すぐさま降りおろされ爪。

「がっ……」

切り裂かれた俺は、転がり、そして倒れる。メダルは飛ばされてなくて、変身は解かれてないけど、この体力じゃコンボはできなさそうだな。

「ぐぅ……ハァ……ハァ……まだだ」

誰の目から見てもボロボロ。一夏は「俺達に構わず逃げろ！」って叫んでる。結構キツいなぁ……。目がくらんできた。それでも、俺は立ち上がる。後悔だけはしたくない。手が届くなら伸ばす。届かなかったら誰かの手を掴んで、届く距離を伸ばす。そんな譲れないもの、守りたいものがあるから、まだ立てるんだ。

フラッ。立ち上がるけど、よろめく。でも、構えを取る。来るなら、来い。俺はそう簡単には負けないから。

2体の怪人は駆け出して来る。そんな時だった。空に道ができていたのは……。そして響くのはバイクのエンジン音。

「伊達明、参上！」

現れたのはタコカンの道を使い、ライドベンダーで現れた、伊達さん、いや、バースだった。

チームワークとラウラの欲望とその代償（後書き）

次回、皆大好きあのマシンが登場！

ところで、本小説で出したオリジナルの爬虫類グリード、ワース。彼のコアメダル、コブラ、カメ、ワニについてですが、そのメダルは他のタカやバッタと亜種形態になっていいでしょうか？　オーズ本編ではそんな描写は無かったですし、一般には爬虫類メダルは亜種ができないって見解が大多数です。もしかしたら、自分が気づいてないだけで、公式でできないって断言してるかもしれません。そういうわけで、爬虫類メダルはブラカワニ専用か、亜種可能にしていいか、意見を貰えると嬉しいです。他にも感想等お待ちしております。それでは、また次回。

乱戦と逆転と超マシン（前書き）

Ｃｏｕｎｔ　ｔｈｅ　ｍｅｄａｌｓ
オーズが使えるメダルは……

タカ
クワガタ
カマキリ
バッタ
ライオン
トラ
チーター
ゴリラ

乱戦と逆転と超マシン

「火野、大丈夫か？」

ヤミーとＩＧをライドベンダーで弾き飛ばして、俺の方に来る伊達さん。これで２対２、頭数は同じだけど、俺は結構辛いなぁ。でも、やるしかないでしょ。

「こっちの鳥が噂のグリードもどきか？」

その問いに頷く。

「だったらえぐり取った方がいいよな。ヤミーの方はよろしく！」

『ドリルアーム』

そう言って伊達さんはクジャクの方に突っ込んでいく。じゃあ俺はヤミーの方を。とりあえずバランスから考えてタカトラーターからタトバに戻っておく。

「ハッ！　セイヤッ！」

メダジャリバーで攻撃をしかける。斬るたびにセルメダルが散らばってく。この調子なら、いける。

『スキャニングチャージ！！』

「ぐっ……はぁあああああ、セイヤーーーー！」

よろめいたけど、バッタレッグに力をこめて、飛び上がる。そして両足を突き出しながら3つの光の輪をくぐっていく。これで決める。そう思って繰り出したタトバキック。でも……その一撃は相手に受け止められていた。

「うわぁあああああああ」

ジャイアントスイングをされて、壁に叩きつけられる。多分、タトバキックが当たらなかったのは、俺が跳ぶタイミングとか力を入れるタイミングをミスったからだ。これじゃ、他のスキャニングチャージも上手く当てれるか微妙だな……何か、いい方法は……？

そう考えていた俺の目に写ったのはライドベンダー。あれなら、俺の負担にならないいい方法が……

。だったら有言実行。

『ライオン！　トラ！　チーター！　ラッタラッタラトラーター！！』

ワニヤミーが近づく前にライドベンダーの元に行く。手間だけど、ライドベンダーを自販機に戻してとあるカンドロイドを取り出す。そしてライドベンダーはもっかいバイクにする。その後、カンドロイドをライドベンダーに入れると、そのカンドロイドは大きくなり、前輪となる。

「ＧＡＡＡＡＡＡＡＡＡ！」

途端に猛獣のような雄叫びをあげるライドベンダー、いや、トライドベンダー。ラトラーターにしか制御できなくて、なおかつ、そのコンボの負担をなくすマシン。

さあて、反撃開始だ。

◆◆◆

「オラァ！」

一方のバースは、ドリルアームで戦いを繰り広げていた。ドリルで突くだけでなく、振り回す等の荒々しい戦い方となっていた。バースの猛攻により、ＩＧからはセルメダルが飛び散っていく。

「あれ、中々落とさねえな」

コアメダルを落とさないＩＧにそんなことを言いながらもバースは攻撃の手を緩めない。というか、緩めたらいけない。相手はクジャクであり、飛べるはず。バースにもカッターウィングがあるが、伊達はマニュアルを読んでいないので、その制御方法を理解していないのだ……

「キシャア！」

クジャクＩＧはそのことに気づいたのか、突然飛び上がる。

「げ。お前、飛ぶなんてずるいだろ。後藤ちゃんならウイングの使い方ちゃんとわかってるんだろうな」

そんなことを考えてはいるが、伊達は今後もマニュアルを読むこ

とはないだろう。医者としてそれはどうなのだろうか……？

「だったらコレだな」

『クレーンアーム』

クレーンアームから放たれてワイヤーがクジャクＩＧの足に絡みつく。

「おりゃああ！！」

バースはそれを力一杯振り下ろす。鈍い音をたてながら地面に激突するＩＧ。だが、また飛ばれたら厄介だと、バースは追撃を開始する。

『ショベルアーム』

左腕に装備されたそれで伊達は殴りかかる。バーズ最大の出力を持つショベルアームで殴られたＩＧは大量のセルメダルをばらまきながら、後ろに吹っ飛ぶ。

「さ～て、コイツで決めるか」

セルメダルが多量に入ったセルバレットポッドをバースバスターのフラッシャーノズルに取り付ける。

『セルバースト』

「おりゃあああああ！」

放たれた光弾はクジャクＩＧによける隙も与えなかった。光の奔流に飲まれたＩＧは断末魔をあげて、爆散する。バースは敵を倒したのを確認してクレーンアームを展開。そこら中に散らばるセルメダルを回収し、クジャクのコアメダルは手に取る。

「火野の方はっと、大丈夫だな」

視線の先にはヤミーが猛獣に振り回されている光景だった。

◆◆◆

トライドベンダーは走るのではなく、駆けるように進んでいく。メダル型の光弾を撃ちながら、ヤミーに飛びかかる。俺の攻撃は大して効かなかったヤミーもトライドベンダーの突撃には吹き飛ばされる。

「火野英治……倒す。力を…強さを…あの人のように……」

執念のようなものでワニヤミーは立ち上がる。でも、その姿は見ていて苦しかった。俺のせいで生まれたとも言えるヤミー。だからこそ、俺がそれを間違っているって伝えるために倒さなきゃいけないんだ。

トライドベンダーによって大きなダメージを負ったにも関わらず、ヤミーはこっちに近づいてくる。

「本当の強さは、誰かを倒して証明するものでもないし、強い人の

真似でもないはずなんだ。大切なのは、自分でどうありたいのか、どうしたいのか。その想いを貫き通すことなんだ！」

叫んだ後、メダジャリバーにセルメダルを入れて、加速したトライドベンダーの上に立つ。

『トリプルスキャニングチャージ！！』

「ガァアアアア！！」

「はぁあああああ、セイヤーーーー！！」

すれ違いざまにぶつかるヤミーの爪とメダジャリバー。だが、その拮抗は一瞬だけで、爪は砕け、メダジャリバーはヤミーを切り裂く。

「力を…力をおおおおおお」

ヤミーの叫びはただ純粋な願いであり、その断末魔は虚しく響いた。

「ふぅ、何とか、倒せたな……」

「あァ。お前は俺が戦うに値する存在だってことはわかったぜェ」

「！？」

後ろから聞こえた声に振り向いた瞬間、激しい痛みが体に走る。変身が解除され、地に倒れる。視界に写ったのは見たこともないグリードだった。

「俺の名はワースだァ。今のは挨拶代わりだァ。これは貰っていくぜェ」

ワースと名乗ったグリードの手にはライオンとチーターのコアだった。

「だったら、こっちも挨拶させてもらうぜ」

ワースの後ろから聞こえる何かが回転する音。そして飛び散るメダル。声の主、バースはドリルアームをワースに突き立てていた。

「ぐっ、俺のコアが……まァ、いい。またな、オーズ」

そう吐き捨ててワースは去っていった。今の状態じゃ勝てる気がしなかったから帰ってくれただけよかったのか……？

「火野、立てるか？」

「はい……な、何とか……」

そう言って来た伊達さんに渡されたのはクジャクのコアと見たこともないメダル。カメだな、これは。ということはあのグリードは爬虫類ってことなのか？

「英治、大丈夫？」

「そうだ。お前大丈夫なのかよ？」

「うん。大……丈……」

駆け寄ってくる一夏達に大丈夫、そう言おうとしたけど、俺の意識は途切れたのだった。

「おい、火野！？」

「英治、しっかりして！」

「英治、おい、英治！」

◆◆◆

火野英治。アイツと比べたら私は……弱いだろうな。ラウラは保健室のベッドの上で考えていた。自分が求めていたものが彼女はわからなくなっていたのだった。

「大丈夫か？」

「……教官」

そんな彼女の元にやってきたのは彼女が敬愛する織斑千冬だった。

「ここでは、織斑先生と呼べ、そう言ってるだろう」

「……私が、望んだからこんなことになったのですね。あのグリードというやつに利用されて……私が、望んだから」

あなたになることを。口には出していなかったが、千冬はラウラが言いたいことがわかっていた。

「ラウラ・ボーデヴィッヒ！」

「は、はい！」

急に自分の名前を呼ばれ、驚きの声をあげる。

「お前は誰だ？」

私は…誰なんだ……？　何が言えるのか、彼女にはわからなくて、沈黙が続いた。

「誰でもないのなら、ちょうどいい。お前はこれからラウラ・ボーデヴィッヒになるがいい。何、時間は山のようにあるぞ。なにせ３年間はこの学園に在籍しなければいけないからな。その後も、まあ死ぬまで時間はある。たっぷり悩めよ、小娘」

「あ……」

口を開けたままポカンと固まるラウラ。彼女は千冬に励まされるなど、予想外のことだったからだ。

「ああ、それからお前は私にはなれないぞ。アイツの姉も、コイツの教師も疲れるからな」

退室しようとした千冬は付け足すように言った。コイツ、隣のベッドで眠る英治を指しながらのことだった。

「ふっ、ははは」

憑き物が落ちたように笑う。ラウラ。自分で考えて行動する。ラウラ・ボーデヴィッヒはこれから始まるのだ。まずは英治が目を覚ますのを待つ。彼と話してみたいことがあったからだ。

◆◆◆

「ん、ここは……」

「気づいたようだな。火野英治」

「ボーデヴィッヒさん……？」

目を覚ましたらそこにいたのは予想外の人物だった。

「まずは、お前に謝る。私があんなことを望んだからお前は命の危険にあった。私のせいだ。すまなかった」

「自分が悪いって分かったのなら、俺には言うことはないさ」

そう言ったら予想外だ、そう言わんばかりの顔をされた。

「それで、火野英治。１つ聞いてもいいか？」

聞きたいこと？　何だろ？

「お前は何かを貫き通す想いが強さだと言った。私にもやりたいことは見つかるのだろうか？」

聞きたいことは、そんなことなのか。

「見つかるさ。今すぐ、とは限らないけどね。まだまだ人生は長いからさ、ゆっくりと探していけばいいよ。それに俺がいる。困ったらいつだって手を貸すからさ」

「……そうか。なら、見つけてみせるさ。私自身も、やりたいことも」

そう言って立ち上がるボーデヴィッヒさん。そのまま彼女は保健室から出ていこうとする。

「ああ、お前のおかげで何かに気づけた。礼を言う、英治」

「うん、どういたしまして、ラウラ」

乱戦と逆転と超マシン（後書き）

やっとでトーナメントが終了。長かった……
アンケートで参戦が決まった龍騎とカブトの出番が遠すぎて泣きそう。

話は変わりますが、この3連休で特撮のＤＶＤを結構借りました。
「レッツゴー仮面ライダー」や「ウルトラマンゼロ」だったりと。
後、よう○べで「リュウケンドー」の序盤を見直したり。↑何やってんだ大学生!?　教訓は夜中に特撮の映画を見るとテンション上がって寝付けなくなることでした。

それでは、要望、感想等お待ちしております。

大浴場とキスとマウストゥマウス（前書き）

Ｃｏｕｎｔ　ｔｈｅ　ｍｅｄａｌｓ
オーズが使えるメダルは……

タカ
クジャク
クワガタ
カマキリ
バッタ
トラ
カメ

大浴場とキスとマウストゥマウス

「うわぁあああん」

「チャンスが……」

トーナメントが中止になった、そういう連絡があってから学園中が暗い雰囲気になっていた。今、シャルル、一夏と学食にいるんだけどここもそんな雰囲気だった。ところで、チャンス？　何かあったんだっけ？　アレ、何か忘れているような……

「……」

学食中を見回すと呆然と立ち尽くす篠ノ之さんがいた。ん、篠ノ之さん？　あ、優勝した人が一夏と付き合えるってやつかな。すっかり忘れてた。

「英治、ちょっと行ってくる」

「ん、ああ」

篠ノ之さんのとこに行く一夏。

「なあ、箒。この前の約束のことだけど……」

ピクッ

あ、反応した。

「付き合ってもいいぞ」

「……！　ほ、本当か！？」

「ああ。幼馴染の頼みだもんな、いくらだって付き合うさ」

「そ、そうか」

ん、何か会話が成り立っていないような気がする……

「買い物くらい」

「……」

再び固まる篠ノ之さん。あの、表情怖いんだけど。

「お～い、箒。どうした？」

「……」

「だから、箒、どうしたんだよ？」

篠ノ之さんから黒いオーラが出てるのは気のせいだよね。気のせいって言ってくれよ、誰か。シャルルに目をやるけど、黙ったまま首を横に振られた。

「そんなことだろうと思ったわ！！」

どげしっ！　そんな鈍い音をたてながら一夏の体は宙に浮く。思

いっきり蹴られたのだ、一夏は。

「僕、一夏ってわざとやってるんじゃないかなって思うんだけど」

「うん、まあ、そうかもね」

苦笑いしながら答える。まあ、本人は唐変木だからね……

「な、何の話してるんだよ……くっそー、箒のやつ、思いっきり蹴りやがって。俺は約束を守ったはずなんだけどな……」

「「……」」

絶句する俺達。正直言ってなんて言ったらいいのかわからなかったから。

「あ、織斑君達、3人ともここにいましたか。さっきはお疲れ様でした」

「山田先生こそ。ずっと手記で疲れませんでしたか？」

「いえいえ、私は昔からああいった地味な作業が得意なんです。心配には及びませんよ。なにせ先生ですから」

えへん、と胸を張る山田先生。もちろん揺れる。何がって言わないけど、男の子だからか、俺と一夏の視線はそこに行ってしまう。

「2人のスケベ」

「ちょっとちょっと、誤解だよ、シャルル」

「そうだ、それは誤解だ！」

機嫌が悪そうにぼそっと呟くシャルル。とりあえず誤解を解かなきゃ、って、目で追ってたのは事実だから……。いやいや、そうじゃなくて……

「？　どうかしたのですか？」

「いやいや、何でもないです。それで先生、何か用事があったんじゃないんですか？」

「そうですか。それより朗報です！」

「「朗報？」」

朗報って何かあったっけ？　俺達が頭に「？」を浮かべてるのも気にしないで、山田先生は話を続ける。

「なんとですね！　今日から男子の大浴場使用が解禁です！」

へえ、大浴場が使えるようになったのか。そうか、そうか、それはよかったのか……な。シャルルと目が合って絶句する。どうしよ？　そんな俺達のことを気にせず、一夏のテンションは上がっていく。

「ありがとうございます、山田先生！」

山田先生の手をガシッと握る一夏。その一夏のテンションに山田先生はついていけないっていうより、顔を赤くしているような……

「先生と生徒ですし……でも、織斑先生が義姉なのは魅力的ですけど……」

そんな呟きが聞こえたのは気のせいってことにしておこう。うん、それがいいはず。

結局、山田先生は大浴場で待ってるから着替えとか持って来て。そう言って去っていた。

「さ、行こうぜ。英治、シャルル……あ」

やっとで大事なことを思い出す一夏。こういうのってどうすればいいんだろ？

◆◆◆

「あ、来ましたね、一番風呂ですよ。それじゃあどうぞ」

「ごゆっくり～」と言ってドアを閉める先生。結局、何も案が思い浮かばなくて3人で来てしまった。

「「「……」」」

沈黙。それが何分か続いた後、一夏が口を開いた。

「シャルルは疲れてるだろ？　俺と英治はここにいるから風呂入って来いよ。俺達は時間潰したら部屋に戻るからさ」

「え？　２人はどうするの？」

「俺は部屋のシャワーで我慢するさ。男女が一緒に風呂に入るわけにもいかないからさ」

「俺もシャワーでいいよ。それに旅をしていたからさ、大抵はシャワーで済ませていたよ」

一夏も俺と同じく、こういう時は男子が譲る、そういう考えになってシャルルに風呂を勧める。せっかく使えるようにしてくれた山田先生には悪いけどね。

「い、いいよ。それに僕、あんまりお風呂って好きじゃないんだよね。だからさ、２人が入ってきなよ。一夏はお風呂好きなんでしょ？」

「好きだ！」

急に叫ぶ一夏にびっくりする。一夏の風呂に対する想いはわかったからさ、落ち着きなよ。

結局、シャルルに押し切られる形で一夏は大浴場に入っていったのだった。

「英治はいいの？」

「ん、まあね。女の子を置いて入るのも気が引けるし、そこまで風呂には執着してないからね」

「そ、そうなんだ……（女の子扱いしてくれてるんだ……エヘヘ）」

結局、雑談をして時間を潰してから部屋に戻ることに。山田先生には一夏が長風呂だって説明して。

◆◆◆

で、どうしてこんなことになったんだ。シャワーを浴びて布団に入る。ここまではいいんだ。ただ、背中に柔らかくて暖かい感触が……

「って、シャシャシャシャルル、ななな何してるんでございますでしょうか？」

落ち着け、自分にそう言い聞かせるけど、無意味。心臓の鼓動が大きくなっているのがよくわかる。

「その……大事な話があるんだ。英治に聞いて欲しい……」

「わ、わかった」

大事な話、そう言われて気持ちを切り替える。

「その……僕ね、英治が言ってくれたようにここにいようと思う。僕はやりたいことを見つけられてないし、それに……」

「それに？」

「……」

少しの沈黙。次のシャルルの言葉を待っているうちに、シャルルは俺を後ろから抱きしめた。感じられるシャルルの鼓動。その鼓動は緊張なのか、早い気がした。

「英治がここにいても大丈夫。僕に手を伸ばしてくれる。だから、ここにいれる、いや、いたいんだ」

「……そうか」

シャルルが自分でやりたいことを決める手助けになったのなら、それは嬉しかった。俺の伸ばした手が誰かを助けられたのなら……

「それだけじゃないよ。もう1つ、やりたいことはあるんだ」

「？」

「ふふっ、まあ、英治はそんなに気にしなくていいよ。……いや、でも、気にしてくれた方がいいのかな……？」

首をかしげると、シャルルは軽く笑った。その後はよく聞こえなかったけど。

「それとね、英治。お願いがあるんだ」

「お願い？」

「うん、シャルロット。それが僕の本当の、お母さんがつけてくれ

た名前。これからは2人きりのときだけでもいいから、その名前で呼んでくれる？」

「うん、わかったよ、シャルロット」

「うん」

嬉しそうに返事をするシャルロット。自分の大事な人につけてもらった名前だからかな。

「ところで、シャルロット。いつまでこの体勢なのかな？　このままだと、ちょっと……」

今の体勢、というか状況は夜、暗い部屋、同じベッドで密着。

「あ、ああっ、うんっ！　そ、そうだねっ！」

言われて今の状況を冷静に考えたのか、いそいそとベッドから出ていくシャルル。その声は恥ずかしそうだった。

「ね、ねぇ、英治。最後にいい？」

「ん？」

チュッ

その瞬間、ほっぺに優しい感触がした。何が起きたのかを把握するまで、時間はかかった。

「シャ、シャルロット？」

「お、おやすみ、英治！」

「ああ、うん、おやすみ」

その夜は色々と考えてしまい、中々眠れなかった。後で聞いた話だけど、シャルロットも眠れなかったみたい。

◆◆◆

同時刻。ラウラはＩＳのプライベート・チャンネルを開いていた。相手はドイツのＩＳ配備特殊部隊『シュヴァルツェア・ハーゼ』。通称『黒ウサギ隊』。

『受諾。クラリッサ・ハルフォーフ大尉です』

「ら、ラウラ・ボーデヴィッヒ少佐だ」

突然の自分の隊長からの通信に疑問を感じながら応えるクラリッサ。ラウラは自分の部下とは仲良くなかったため、通信が来たことは本当に謎だった。

『ラウラ・ボーデヴィッヒ隊長。どうかなさったのですか？』

「ああ、クラリッサ。お前に頼みたいことがあるのだが……」

『なんでしょうか？』

「その……言いにくいことだが、私には頼れる人がお前達しか思いつかなくてな……」

急に声が小さくなるラウラ。一体この人は何が言いたいんだろう？　クラリッサはそんなことを思いながら聞いていた。仲良くない人でも軍では上司の命令は絶対だから。

だが、その思いは大きく裏切られることとなった。

「す、好きな人ができたんだが、どうすればいい……？」

『は！？』

想定していた問題の斜め上を行く答え。それにクラリッサは固まった。今、自分の隊長はなんて言った？　好きな人ができた、だと。

『隊長、それは織斑教官ではなくて？』

「ああ、教官は憧れだが、それとは違うんだ。その、アイツは……／／／」

恥ずかしくなったのか、声が小さくなるラウラ。その光景を想像してクラリッサは鼻血がでそうな衝撃を受けた。元々ラウラの容姿はかわいいに分類されるタイプである。ただ、性格や眼帯がそれを打ち消しているのであって。クラリッサが想像したのは、小動物をイメージさせる雰囲気で、頬を赤くしてモジモジしているラウラ。

そんなのを想像した途端、冷水とまで呼ばれたラウラのイメージはどっかに消えてしまった。そして、クラリッサは思う。どうしてこんな可愛い生き物ともっと仲良くしておかなかったのだろうか、

と。

『お任せ下さい、隊長。このクラリッサ、伊達や酔狂で日本の少女漫画を愛読しているのではありません。必ず隊長のお役にたってみせます』

「おお」

期待に満ちた声をあげるラウラ。そんなラウラにクラリッサは自分の持てる知識を教えていく。

英治達とは違うが、こっちも眠れない夜だった。

◆◆◆

翌日。シャルロットの姿は朝のＨＲには無かった。朝食を取った後、シャルロットが「先に行ってて」って言ったから教室に来たんだけど、山田先生が来たときにまで、彼女は姿を見せなかったのだった。

「み、みなさん。おはようございます」

なんだか疲れた様子の山田先生。何かあったのかな？

「今日は、ですね。皆さんに転校生を紹介します。転校生といいますか、すでに紹介は済んでいるっていうか、はぁ……」

歯切れの悪い言い方の山田先生。本当に何があったんですか！？
そんな山田先生とは逆に転校生って言葉に反応するクラスメイト。

「では、入って、来てください」

「失礼します」

その声を聞いた途端、クラス中が固まった。教室に入ってきたのはスカート、つまり女子用の制服を着たシャルロットだったから。

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしくお願いします」

ペコリと礼をするシャルロット。山田先生は「部屋割りが……」とかブツブツ言い始め、クラス中は「デュノア君って女子だったの！？」とか、「昨日、男子が大浴場使ったよね」。そういう話となった。あれ、嫌な予感が……

バシーンッ！

ドアが壊れそうな勢いで開かれた。そこにいたのは甲龍を纏った鈴。彼女は方で息をしていた。

「一夏っ！　死ねっ！！！」

ここで話は変わっちゃうけど、座席の説明をしよう。俺と一夏は現在隣同士だよ。そんな時に衝撃砲を撃ったら……って、ちょっとちょっと、落ち着いて、鈴！　そんな中、放たれた衝撃砲。
あ、これ死んだな。そう思って目を閉じた。想い浮かぶのは今までの人生。

だが、いつまでたっても、衝撃は来なかった。おそるおそる目を開けると、そこにはシュヴァルツェア・レーゲンを展開したラウラがいた。

「助かったよ、ラウラ」

そう言った途端、胸ぐらを掴まれてラウラに引き寄せられた。

「ラ、ラウ……むぐっ！？」

重なる俺とラウラの唇。え？　どういうこと？

「お、お前は嫁にする！　決定事項だ！　異論は認めん！」

そんなことを言ってるが、俺の耳には届かなかった。え～と、何がどうなってるの、本当に？

「初めてだったのに……」

轟音や爆音響きわたる教室で、俺はただ1人固まっていた。

大浴場とキスとマウストゥマウス（後書き）

ＭＯＶＩＥ大戦に影響されて……

「花火大会？」

「うん。その街のタワーで写真を取るとイイことがあるんだって」

夏休み、とある街に遊びに行く英治達。だが、そこは……

「もっと、僕を楽しませてよ」

『ＵＬＴＩＭＡＴＥ』

「あれは、ドーパント？」

現れたのは１０体の怪人。そいつらは最強とも呼べる力を持っていた

「うわぁあああああああ」

「英治ーーーーー！！」

倒れるオーズ

「「さぁ、お前の罪を数えろ！！」」

だが、現れたのは……

「後悔だけはしない。俺はそう決めたんだ。だから、戦うよ」

「いくぜ、相棒」

「ああ」

「「「変身！！」」」

立ち上がるのは2人の仮面ライダー。この戦いはどうなるのか……

仮面ライダー×仮面ライダーＮＯＶＥＬ大戦エクストリーム

その内やるかも……？

予告？

「ここが、新たな世界か」

突如現れた謎の男。記憶のない彼は……

「やつは破壊者だ。絶対に倒さなければいけない」

「貴方は一体？」

英治の前には預言者を名乗る男も

「こいつはなんだ？　ヤミーでもグリードでもないらしいな」

「変身！」

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ　……』

「ちょっとくすぐったいぞ」

「え！？」

仮面ライダー×仮面ライダーＮＯＶＥＬ大戦ＤＥＳＴＯＲＯＹ

コレ、本当にやるの？

ごめんなさい、調子乗りました。

それでは、意見、要望、感想等お待ちしております。

妄想と追跡とバースバスター（前書き）

Ｃｏｕｎｔ　ｔｈｅ　ｍｅｄａｌｓ
オーズが使えるメダルは……

タカ
クジャク
クワガタ
カマキリ
バッタ
トラ
ゴリラ
カメ

「ゴメンね、手伝ってもらっちゃって」

「気にしないで。困ったときはお互い様だしね」

放課後の廊下、夕日が差し込む中を英治とシャルロットは歩いていた。2人の手には、大量のプリントがあった。学校行事である臨海学校について書かれたプリントが。

「でも、よかったの？　英治、臨海学校の買い物に行くんじゃなかったの？」

「別にいいよ・大体、シャルロットがいないんじゃ行ってもしょうがないしね」

「えっ？」

シャルロットはその声に驚きをあげた。英治の顔はわずかに赤く染まっている。

「ま、まぁ、プリントの手伝いでも好きな娘を一緒の方がいいってことだよ」

「英治、それって……」

「うん、シャルロット……」

「英治……」

見つめ合う2人。徐々にその影は重なっていき……

「――あれ？」

そこでシャルロットは目を覚ました。ベッドから起き上がり辺りを見回すけど、そこは寮の自室で、朝。先程の光景とはかなり違うものであった。

「夢か……」

ハァ～と深いため息を吐く。どうせ夢ならもっと……

「……」

さっきの続きをイメージする。重なるのは2人の唇。そして……

「な、何を考えてんだろうね。僕は……」

赤くなった顔を横に振り、冷静さを取り戻そうとするけど、さっきの夢が頭から離れなかった。

「はぁ、アレ？」

ふと、隣のベッドを見ると、そこは黒いオーラが溢れていた。ラウラ・ボーデヴィッヒ。それがシャルロットの同居人だ。先日のトーナメントでは敵対していたのだが、シャルロットの人当たりがいいおかげか、すぐに仲良くなれたのだ。

「えっと、ラウラ、どうしたの？」

「ああ、嫁のとこに行ったのだが、いなかったのだ。全く夫を放って勝手にどこかにいくとは……」

「アハハハ……英治はラウラの嫁じゃないと思うけど……」

苦笑いしながら「ラウラの」を強調して訂正するシャルロット。しかし、訂正するところが微妙に違うのは気のせいだろうか。先程の夢のせいで、シャルロットは頭が回らなかったのかもしれない。

ラウラのせいで目は完全に覚めてしまったため、２度寝をするわけにもいかなくて、シャルロットはとりあえず頭を冷やそうとシャワーを浴びることにするのだった。

一方、ラウラの嫁と称される英治は……

◆◆◆

「くっ、待てーーー！！」

ライドベンダーを走らせていた。目の前には鳥のＩＧ。つまりコンドルのＩＧであった。飛んで逃げるＩＧを英治は朝っぱらから追い掛け回していたのだった。

なぜこうなってるのかというと、話は結構前まで遡る。

◆◆◆

prrrrrr

「はい、火野です」

「お、火野か。朝早くに悪いな」

朝早くに伊達さんからの電話。どうしたんだろ？

「え～と、何かあったんですか？」

話を聞くと、伊達さんのゴリラカンがヤミーかＩＧの出現を捉えたみたい。それでどうするかの話になって、俺が倒すことになった。コアメダルが関係するＩＧだった場合、オーズの方がいいからね。そういうわけで、織斑先生に連絡を入れてから出発。タカカンの誘導について行ったんだ。

「この辺りか……」

タカカンに連れられて来た場所は周囲には何もない、広い一本道だった。敵はどこだ、と周りを見回したけど、怪しい影は見つからなかった。

ビュンッ！

「ッ！　おおっと！」

頭の上から聞こえてくる何かが近づいてくる音。反射的にその場から転がる。片腕を切ったみたいで、血が流れるけど、気にしない。まずは相手を確認する。

赤い翼に、両腕の爪。外見から見ると、鳥の怪人。つまり、コンドルのＩＧだろう。とりあえず、ここで倒さなきゃ。

「変身！」

『タカ！　トラ！　バッタ！　タ・ト・バ　タトバ　タ・ト・バ！！』

「ハッ！」

構えるとともに、トラクローを展開。駆け出してコンドルＩＧに切り掛かる。

先制を上手くとれたのか、火花とセルメダルをまき散らしながら、ＩＧは転がる。倒れたＩＧに追撃にと、トラクローを振りかざすが、その前に胸を蹴られてよろめいてしまう。

「ガァアアア！」

ＩＧは赤い翼を開き、飛び立つ。そのまま、一閃、二閃とすれ違いざまにこっちを切る。

「うわぁあああああ」

こっちが転がると同時に、また上昇するＩＧ。結構痛い。アイツは……飛んでばっかりで厄介だな。ここは……。

相手がもう一度、こっちに突撃をしてくるのを見て、カウンターを狙うために足に力をこめる。

「セイヤーーーー！」

バッタレッグから繰り出す飛び蹴りと、向こうの爪がぶつかる。

俺のキックは相手の腕を弾き、胴体に当たる。

ふぅ。着地と同時に相手を見るとよろめきながらも、飛び立とうとしていた……って、ちょっと！

逃げ出すＩＧの背中を見ながら、ライドベンダーにまたがる。

これが上の話に繋がるんだ。

この後もしばらく追跡は続いたんだけど、トンネルとか、森とかを通られて、結局見失っちゃった。これ以上はどうしようもないから学園に戻るかな。

◆◆◆

バンッ、バンッ！

早朝のアリーナに響く銃声。そこにいたのは男と少年の２人。少年は手にした銃―バースバスターを構え、次々とターゲットを狙っていく。だが、その結果が芳しいものではなく、何とかあたっているって感じだった。

「あ～、一夏ちゃん。もちっと腰を低くしねえと。さっきから反動

に負けちまってるぞ」

男―伊達明は少年―織斑一夏に指導する。２人がやってるのは見ての通り特訓である。一夏の皆を守りたい願い。それと、一夏自身が狙われてることを考えると、彼は強くなる必要があった。それにこの世界では必ずしもＩＳが最強ではないのだ。ガイアメモリを使い変化する異形のドーパント。欲望によって生まれるヤミー。それを作り出すグリード。本来は生まれるはずのないＩＧ。それらに立ち向かえる力も彼は手にしなければいけないのだ。

そんなこんなで始まったこの特訓も今日で何回目だろうか、そう思えるほどに続いていたのだ。

「そう言われても……コレ、結構反動が大きいですよ」

「ああ。ま、そんくらいなきゃヤミーとかは倒せないからな。それに始めたばっかのころよりは十分よくなったじゃねぇか」

最初の頃は一発撃つたびに、一夏は派手に後ろに吹っ飛んでいたのだ。そこから自分の力量を分からせ、体を鍛えさせた。反動には簡単に負けないようになったが、今度は的に当たらない。まぁ、ＩＳの方である程度はわかってたようなので、簡単なレクチャーで数発は当てれるようになった。

（あの頃の後藤ちゃんと比べると、熱意は変わらないが、腕がな。まぁ、ライドベンダー隊の隊長と比べるのはアレか……）

伊達が考えている間も一夏は引き金を引き続ける。的のど真ん中ってわけではないし、全弾当たってもいないが、確実に一夏は腕を上げていった。

「よし、一夏ちゃん。今日はここまでだ。学生の本分は勉強だからな」

「え、はい。もうこんな時間ですか。伊達さん、今日もありがとうございました」

「おう、頑張れよ」

自室に戻る一夏を見て、伊達はセルメダルの補充を考えていた。一定の期間で紅渡は送ってくれるけど、この消費じゃ待ってられない、と。

「ま、ヤミーもいるみたいだから、何とかなるか。さ～て、俺もお仕事をしないとなっと」

伊達はセルメダルの入ったミルク缶を背負い、保健室に向かった。

◆◆◆

「なぁ、シャルロット。英治はどうしたんだ?」

「わからないよ。朝、ラウラもいないって言ってたけど、どこにいったんだろ?」

1限が終わった休み時間。一夏は英治がいないのをずっと気にしていたが、千冬は特に何も言わなかったので、わからなかったのだ。

シャルロットにも聞いてみたところ、彼女もわからないって言う。首をかしげながら一夏は自分の席に戻ろうとする。

「一夏、火野だったらでは怪人退治に行ったのではないか？」

「あぁ、そっちか」

箒に言われて合点がついたように手を叩く一夏。英治の行方がわかったのはいいのだが、この教室に男子１人ってのはいつまでたっても慣れないんだな。そう思いながら、一夏は英治に早く帰って来て欲しいと思っていた。

一方の英治は……

「ところで、ココどこ？」

ＩＧを追うことに夢中になってしまい、道がわからなくなっていた。彼は無事ＩＳ学園に帰れるのだろうか？

妄想と追跡とバースバスター（後書き）

進展のない話。かなりｇｄｇｄだと我ながら思った。だが私は謝らない（キリッ

ちなみに爬虫類メダルの亜種問題については進展無し。ただ説得力のある意見がありましたので、反対意見がこれ以上出ないようでしたら本小説では亜種可能の方向で行きたいと思います。まぁ、さっさとブラカワニになれれば悩むこともなかったんですが……

それでは、意見、要望、感想等お待ちしております。

買い物と水着と終わる追跡戦（前書き）

Ｃｏｕｎｔ　ｔｈｅ　ｍｅｄａｌｓ
オーズが使えるメダルは……

タカ
クジャク
クワガタ
カマキリ
バッタ
トラ
ゴリラ
カメ

買い物と水着と終わる追跡戦

とある日曜日。シャルロットとラウラは臨海学校に向けた買い物に来ていた。本当は英治と来たかったのだが、彼は先日からずっとＩＧの捜索に力を入れていて、それどころではなかったのだった。２人とも、英治がオーズとしての戦いがあることを理解していたため、ここは素直に諦めることにしたのだ。

「ねぇ、ラウラ。アレって……？」

「ん、一夏とセシリアと鈴か。何してるのだ？」

駅前のショッピングモールに着いた２人はよく見知った顔を見つけた。いつもならあのメンツの中に箒もいるのだろうが、なぜあの３人だけなのだろか？　シャルロット達はそれを疑問に思いながらも、自分達には関係ないか、と自分達の買い物に専念することにした。

ちなみに、一夏が鈴、セシリアと来ている理由は、学年別トーナメントまで遡る。シャルロットと組むことになった一夏は、鈴達の誘いを断るときに後で何でも言うことを聞く。そう言ってしまったのだ。勿論、セシリアと鈴はコレを使ってデートをしようとしたのだ。そこで、臨海学校の買い物という名目で一夏を誘った。ここまではいい。だが、誘った日時は２人とも同じ。女心、つまり２人きりがいいってことがわかれば、どちらかの誘いをずらす、または断ることができたのだろうが、さすが我らの唐変木。一夏は２人の誘いをただの買い物だと思っていて、鈴ともセシリアとも来ることにしたのだ。

ラウラ達からはよく見えなかったのだが、セシリア、鈴はとても

不機嫌そうな顔をしていたそうだ。

「それじゃ、まずは水着を買いに行こうか」

「む、買わないといけないのか？　学校指定ので十分なのだが……」

「ダ～メ。せっかくなんだから可愛いのにしなきゃ。ほら、いくよ」

抵抗虚しく、ラウラはシャルロットに引きずられる形で水着売り場へ。ラウラは興味なさそうだったが……

「う～ん、こっちがいいかな。あ、でもこっちも……」

「シャルロット。いつまで私の水着を選ぶのだ？　私はいいって言ってるだろう」

かれこれ数十分。シャルロットは自分の水着よりも、ラウラのものばかり選んでいた。水着はいらないと一点張りでも「ダ～メ」や「それは拒否されました」と返され、相手にされない。ラウラにとっては学校指定の水着、つまりスク水は機能性に優れているため、それで十分だと思っているし、たかが泳ぐための服にこだわる理由はわからなかった。

「シャルロットも自分のを選んだらどうだ？」

「え～だってラウラほっとくと水着選ばなそうだから……」

この後、何とかシャルロットを説き伏せ、１人になれたラウラは

周囲を見回した。そこでとある会話が彼女の耳に入ってきた。

「ねぇ、水着どれにする？」

「う～ん。選ぶのって大変よね。料理とかがＯＫでも水着が駄目だと嫌われちゃうもんね」

「なっ……！？」

その瞬間、ラウラに電流が走った。水着が駄目だと男に嫌われる。その瞬間、彼女の脳内にはある光景が浮かび上がった。水着の選択を誤ったために英治に嫌われる光景が。

『ラウラ、ゴメンね。俺、水着のセンスがない娘とは付き合えないんだ』

『あの時、僕のアドバイスに従わなかったからだよ。じゃあ英治は僕がもらうから』

『……残念ね。貴方は、英治と付き合えない……』

『待つのだ！　嫁よ待ってくれぇー！』

英治にフラれ、シャルロットには見下され、名前の知らない眼鏡をかけた、水色の髪の娘からは冷ややかな視線を送られる。そして３人は立ち去っていく。

その光景がよほど堪えたのだろうか、ラウラは力を失ったように膝をつく。

だが、彼女はここで諦めるわけにはいかなかった。震える指でＩＳのプライベートチャンネルを開いた。通信先は自身の部下、つま

り黒ウサギ隊のとこである。

『受諾。こちら、クラリッサ・ハルフォーフ大尉です』

「わ、私だ……」

何かに怯えるように震えた声のラウラ。本来、軍の通信は名前、階級を言わなければいけないのだが、震えるラウラを想像したクラリッサは鼻血を吹き出しそうな衝撃を受けたのだった。

『ど、どうかしたのですか、ラウラ・ボーデヴィッヒ隊長？』

落ち着いた声で話そうとするクラリッサ。隊長に萌えていましたなど、死んでも言えないからだろう。

「あ、ああ。とても重大な問題が発生している……」

ラウラのその様子から判断したクラリッサはハンドサインで部下達を集める。どんな事態にでも対応できるようにするためだ。

『部隊を派遣しますか？』

「い、いや、その必要はない。ただ……」

『ただ？』

「その……水着についてだが……」

水着？　クラリッサの頭上には大量の「？」が浮かぶ。一体水着がなんだというのだろうか？

詳しく話を聞くとこうだ。元々学校指定のスク水で臨海学校に臨もうとしたラウラ。だが、周囲に声に耳を傾ければそれではマズイ。自分の想いは報われることがなくなるかもしれない、と。

『隊長、その英治って方の性癖は存じ上げませんが、スク水って選択は危険です。一部の者には受けがいいのですが、そうとは限りません。彼がその一部ではなかった場合は……』

「そ、そうなのか……」

『加えて、申しにくいのですが、隊長の体型は男性を悩殺できるものではありません。下手な選択はできません』

「なら、一体どうすればいいのだ？」

不安気に応えるラウラ。クラリッサはそんな隊長が可愛いと思い、全力でその恋を応援することを決めた。

『隊長、ご安心を。我ら黒ウサギ隊は隊長と共にあります。必ずや隊長の力になってみせます』

「おお。頼むぞ」

「えっと、コレって話かけていいのかな……？」

ラウラが話し込んでる間に自分の水着を買い終えたシャルロットは悩んでいたのだった。

◆◆◆

「……アレは、織斑君？　でも、アレは……？」

アニ○イトに向かう簪は女子２人に引きずられている一夏見て戸惑う。そして、あんまり関わりたくないと決めて、スルーすることにした。それに簪と一夏は仲がいいわけもなかった。元々、彼女の本来のＩＳとなるはずだった『打鉄弐式』は一夏の白式の制作の犠牲となり、後回しにされた。それで、彼女は一夏を恨んでいた。だが、今は彼女のＩＳ『ＢＩＲＴＨ』があるからその確執もなくなっていた。でも、簪から見た一夏はあくまで『英治の友達』であって、自分の友達かって聞かれたら首を縦に振るかは微妙である。

結局、簪は一夏達のことを気にも留めず、自分の目的を果たそうと足を進めるのであった。

◆◆◆

「さてと、買い物も終わったから帰ろうか？」

「そうだな」

臨海学校のための買い物を終えたシャルロット達は学園に戻ろう

としていた。だが、向こうが騒がしいことに気づいたのだった。
その騒がしさが歓声ならば、大して気に留めなかっただろうが、それとは違い、聞こえてきたのは悲鳴だった。

2人は無言で頷き合い、現場に向かう。自分達に何かできることがあるかもしれないから。
そんな彼女達がたどり着いたときに見た光景は、暴れ回る怪人でもなく、たくさんの怪我人がうめく光景でもなく、怪人がバイクにはねとばされる光景だった。

「「英治！」」

「あれ。ラウラにシャルロット？　どうしてここに？」

バイクに乗ってた人物、英治の元に駆け寄る2人。そんな2人とは違い、英治はこの場に2人がいたことに驚き、目を丸くしていた。

「うん。ちょっと、買い物にね……って、英治、アッチはいいの？」

「おっと、そうだったな。さあて、もう逃がさないぞ」

慣れた手つきでオーズドライバーを装着し3枚のコアメダルを入れる。オースキャナーでメダルを読み取り、一言。

「変身！！」

『タカ！　トラ！　バッタ！　タ・ト・バ　タトバ　タ・ト・バ！！』

「はぁあああああああ」

メダジャリバーを構え、駆け出す。英治は何度もあと少しってところでコンドルＩＧに逃げられているため、いい加減に決着をつけたかったのだ。そのため、メダジャリバーで容赦なく切りつけていた。

切られる度に苦痛の声を上げ、セルメダルを落とすＩＧ。反撃とばかりに突き出した爪も、メダジャリバーに止められ、トラクローでの手痛い反撃を食らう。ＩＧは転がり、力なく倒れ込む。

「こっちに変えてみるか」

『タカ！　クジャク！　バッタ！』

トラコアを先日入手したクジャクコアに変える。左腕に攻防どちらにも使えるタジャスピナーが装備された亜種形態、タジャバとなったのだ。

「悪いけど、これで決めるから」

ドライバーに入っていた3枚のコアメダルを取り出し、タジャスピナーに入れる。そして、オースキャナーで読み取る。

『タカ！　クジャク！　バッタ！　ギン！　ギン！　ギン！　ギガスキャン！！』

「はぁあああああああ、セイヤーーーーー！！」

軽く引いた左腕を突き出す。刹那、赤2つ、緑1つ、銀3つのメダル型の光が円を描きながら進んでいく。何とか立ち上がったＩＧにはかわす余裕などあるはずもなく、光の輪に当たった瞬間、その

体は爆炎に飲まれた。

「よっと」

降ってくるコンドルコアをキャッチした英治は変身を解く。これで天空を舞う不死鳥の如きコンボが使えるようになった。ワースといったグリードが現れた以上、対抗するためにはコンボの力が必要なのだ。

◆◆◆

「ふぅ。疲れた……」

「お疲れ様、英治」

シャルロットが渡してくれたスポーツドリンクを飲みながら一息つく。そういえばシャルロットには聞きたいことがあったんだよな。

「今更だけどさ、どうしてシャルロットは自分が女子だったって皆にばらしたの？」

「そ、それは……なんというか、英治にちゃんと女の子って見て欲しかったからっていうか……」

「前にも言ったけどさ、シャルロットは可愛い女の子だって。そこは気にしなくていいよ」

「……そういう意味じゃないのに」

なぜか不満そうなシャルロット。何か俺、マズイことでも言った？

「まぁ、せっかく教えてくれた名前も皆が呼ぶことになっちゃったから、何か新しい呼び名でも考えようか？」

「え、ホント！」

そう言うと、目を輝かせるシャルロット。う～ん、何がいいのかな？

「じゃあさ、シャルロットから“シャル”ってどう？」

「シャル。うん！　いいよ！　すごくいいよ！」

嬉しそうに微笑むシャルロット。そんな彼女とは逆の方向からは黒いオーラが流れてきた。

「嫁よ。私というものがありながら他の女とイチャつくとはな……」

いやいや、ラウラの嫁じゃないから。普通は女の子がお嫁さんだから。

そんなこんなでラウラをなだめることに成功して、せっかくだから少し遊んで帰ることになった。もうすぐ臨海学校か～。あれ、何か忘れているような……？　まぁ、いいか。

買い物と水着と終わる追跡戦（後書き）

次回から臨海学校に。もうすぐ作者のやりたかったことの１つができるぜ。まぁ、それが何かは最近の展開から予測はつくと思いますけどね。もうすぐ、奇跡の力が降ｒ（ｒｙ

ちなみに作者、最近入手できたファイズとカイザのフィギュアーツの影響で「５５５」にはまっています。１話から見直したいんだけど、時間が……

それでは、意見、要望、感想等お待ちしております。

海とポロリとタコの足（前書き）

Ｃｏｕｎｔ　ｔｈｅ　ｍｅｄａｌｓ
オーズが使えるメダルは……

タカ
クジャク
コンドル
クワガタ
カマキリ
バッタ
トラ
ゴリラ
カメ

海とポロリとタコの足

「海っ！　見えたぁっ！」

トンネルを抜けた先の光景を見て、１人の女子が声を上げる。

臨海学校初日。俺達は目的地までバスで移動していた。澄んだ青空。静かに揺れる草木からのんびりと過ごすにはよさそうな天気だと思った。

初日である今日は１日中自由時間で、皆好きなように遊ぶみたい。でも、俺は……

「英治、今日は思いっきり遊ぼうぜ」

「あ、うん……そうだね」

海が見えて一夏だけでなくクラス中の皆はテンションが上がっている。こんな状況じゃ、とても言う気になれないよ。水着買うの忘れてた……って。だってさ、ＩＧの追跡で買いに行く時間がなかったんだ。

「そろそろ目的地に着く。全員ちゃんと席に座れ」

数分後、織斑先生が言うと、皆サッと席に着いた。相変わらず凄い統率力だなぁ。

言葉通りにバスはすぐに旅館に着いた。綺麗な場所だな。

「ここが３日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

「「「「よろしくおねがいしまーす」」」」

「はい、こちらこそ。今年の1年生も元気があってよろしいですね」

丁寧にお辞儀する女将さん。今年もってことは毎年ここで実習をやってるってことだよね。

「あら、こちらが噂の……？」

女将さんの視線は俺と一夏の方に向く。まぁ、それはそうか。毎年ＩＳ学園が利用してても、男子がＩＳ学園生徒として来るのは初めてだからね。

「ええ、まあ。今年は男子がいるせいで浴場分けが難しくなって申し訳ありません」

「いえいえ、そんな。それにいい男の子達ですよ。しっかりしてそうな感じがしますよ」

「それは片方だけですよ。お前達も挨拶しろ」

「あ、はい。火野英治です。お世話になります」

「お、織斑一夏です。よろしくお願いします」

一夏は織斑先生に頭を押されていた。そんな光景にも軽く微笑み、女将さんは気品のあるお辞儀をする。

その後、女将さんから施設の案内があって、解散。ここから今日は食事以外は全部自由時間だ。

「ね、ね、ね、おりむー、ひのひの。部屋どこ～？　遊びに行くから教えて～？」

この声はのほほんさんか。そういや俺と一夏の部屋ってどこだ？　一覧にも書いてなかったし……

「いや、俺も知らない。廊下にでも寝るんじゃねぇか？」

いや、廊下はさすがにないと思うよ……

「わー、それはいいね。私もそうしようかなー。あー、床冷たーいって～」

「いやいや、それはよくないでしょ？　俺達の部屋ってどこなんだろうな？」

女子と同じ部屋にするわけにもいかないから、俺達には部屋が用意されているって山田先生は言ってたけど、どこかは言ってなかったしな。

「織斑、火野。お前達の部屋はこっちだ。ついてこい」

織斑先生に呼ばれて、ついていくと、そこは……

「「教員用？」」

教員用って書かれた紙が貼ってある部屋だった。ちなみに隣は織斑先生の部屋。何でも女子が夜に遊びに来るのを防ぐため、だそうで。まぁ、織斑先生の部屋が隣で騒げる勇気のある人はいないだろうしね。安全かな……？

そんなこんなで部屋の豪華さに驚きつつも、先生からの指示を聞き、自由時間となったのだった。

「英治、さっそく海に行こうぜ」

「いきなりだね。いいけど、俺、水着買ってないんだ。だから泳げないけどね」

男だけならともかく、女の子の前でパンツ一枚ってわけにはいかないからね。

◆◆◆

更衣室に向かった一夏と別れた俺は、少し時間を潰してからビーチに行くことにした。旅館の周りを歩いてみたんだけど、謎のにんじんがあったのは何でだ？　飾り物？　だったらにんじんである必要はないしな。

思ったよりも散策に時間をかけちゃったみたいで、海に着くと、一夏の上に鈴が乗っかっているのが見えた。

「お、英治。思ったよりも遅かったな」

「あはは、まぁね。ここら辺ぐるってしてきたからね」

「ねぇ、何で英治は水着じゃないのよ？」

鈴の問いに水着を買いに行くの忘れていたって言うと、笑われた。仕方ないでしょ、どっちにしろ時間もなかったしね。

「あ、織斑君の上に鳳さんが！」

「あ～、いいなぁ」

「きっと早いもの勝ちよ」

男子2人、しかも片方肩車してるってなると、目立つのは当然なわけで、次々と女子が集まってくる。一夏は誤解が広まるって言って、鈴に降りるように言っていた。それを聞いた鈴は仕方なさそうに飛び降りる。ひらり、と手をついて一回転して立ち上がる。何ていうか、猫っぽっかったな。

「い、一夏さん。約束通りサンオイルを……」

「ん、ああ。わかった」

一体どういう経緯でそんな約束をしたのかは知らないけど、一夏はセシリアが立てたビーチパラソルの方に向かった。さてと、俺はどうするかな。

「あ、英治。ここにいたんだ」

「ん？　あ、シャル。どうし……た……の？」

後ろからの声に振り向くと、シャルと……バスタオルをぐるぐるに巻いた謎の物体がいた。え～と、ミイラか何かかな？

「ほら、大丈夫だから出てきなよ」

「だ、大丈夫かどうかは私が決める……」

「その声、ひょっとしてラウラ？」

俺の声に頷くシャル。一体何があったんだろ？

「ほーら、せっかくだから英治に見てもらわないと」

「ま、待て。わ、私にも心の準備ってものがあってな……」

説得するのだが、ラウラが首を縦に振る気配はなくて、ため息を吐くシャル。

「だったら、僕と英治で遊びに行こ。ラウラは出てこないみたいだしね」

そう言って俺の手を引くシャル。一瞬、黒い笑みだったのは気のせいだよね……？

「ま、待て！　ぬ、脱げばいいんだろ！　脱げば！」

バッとバスタオルを振り払うラウラ。現れたのはレースをふんだんに使った大人っぽい水着。

「わ、笑いたければ笑うがいい……」

そう言うラウラはモジモジしていて、そういう仕草と相まってかスゴイ可愛かった。

「いや、そんなことないって。可愛いよ」

「なっ……！　社交辞令などいらん……」

「そんなことないって。似合ってると思うよ」

そう言うと顔を赤くして黙り込むラウラ。煙が出ているのは気のせいだよね……

「そうだよね。僕も可愛いって言ったんだけどね信じてくれないんだよ」

「へぇ、そうなんだ。遅くなっちゃったけど、シャルも似合ってるよ」

「え、そ、そう……ありがと」

褒められたからか、シャルは照れくさそうに髪をいじった。その後もおしゃべりをしていたとき、事件は起こった。

「キャアーーーーーー！！」

「み、水着がぁ！！」

そんな悲鳴が聞こえてきたと思ったら、何故かたくさんの水着が宙を舞っていた。

「え～と、これどういう状況？」

「え、英治。見ちゃダメだからね」

釘を刺すように言うシャル。男子としては目で追ってしまう光景が繰り広げられているから……

「い、一夏さん！」

「一夏ぁーーー！」

「え、2人とも、落ち着け。これは事故だって」

「「問答無用（ですわ）！」

「グハァッ！」

そんな声が聞こえてくるけど、あんまり気にしないようにしよう。一体何が起こってるんだ？

「キャ、英治！」

「シャル！　大丈夫？」

急に叫びをあげたシャルの方を向くと、彼女に巻き付くものがあった。見た感じタコの足だけど……。って、タコ！？　もしかして思って見た方向にはタコの怪人が……

変身しようと思ってオーズドライバーを出した俺のところに舞い降りてくるものがあった。それはオレンジの水着。コレって、まさか……？

「え、えいじぃ……」

声の方を向くと、胸を腕で隠した涙目のシャルがいた。睨んでいるんだけど、涙目のせいであんまり迫力はない。

「ご、ゴメン」

いつまでも水着を手に持ってるわけにはいかないから、シャルに返して気を取り直す。今度こそ。

「変身！」

『タカ！　トラ！　バッタ！　タ・ト・バ　タトバ　タ・ト・バ！！』

変身した俺をいきなり触手が襲いかかってくる。捕まるわけにはいかないから、1本、2本とメダジャリバーで切り裂いていく。

「3……4……」

後ろ、右、上、と触手を切り落とす。タコの足は8本だから、もう少しだな。

「これで、最後っ！」

剣を振り下ろし、最後の1本を切り落とす。これで、足は全部切ったから後は本体を。

「うわぁ！」

そう思ってタコＩＧに向かって走り出したら、何かに殴り飛ばさ

れた。

「イタタタ。今度は何だ？」

見ると、触手は再生していて、次々と攻撃を仕掛けてくる。こっちもメダジャリバーで反撃するけど、さっきまでと再生スピードが段違いのため、切っても切ってもキリがない。

シュル、パシッ

「しまった！」

今の衝撃でメダジャリバーを落としてしまう。そこで立ち止まってしまったのが悪かったみたいで、すぐにグルグル巻きにされてしまう。足は動かせるけど、バッタレッグじゃ切ることはできないし、腕が動かせないから、トラクロー、カマキリソードもダメかもな。だったら……

そう思って取り出したのは苦労の末手に入れた赤いコアメダル。これなら。

『タカ！　トラ！　コンドル！』

「はぁあああ！」

コンドルレッグのラプタードエッジから繰り出す真空波で絡みつく触手を切り払う。今度はトラクローも展開して、両腕、両足の爪で触手を切り裂きながらＩＧに近づく。巻きついてきたのは、自由なとこで切り裂き、すぐに脱出する。そのまま走ると、目の前にはＩＧ本体が。

「セイヤッ！」

すかさず叩き込んだのは回し蹴り。ラプタードエッジの斬撃も加わり、相手は大きくよろめく。

「ハッ、セイッ」

そのまま連撃を繰り出す。赤と黄色の旋風を纏いながら繰り出す攻撃は大ダメージを与えるには十分で、相手はすぐにダウンした。そろそろ決めるよ。

『スキャニングチャージ！！』

「はぁあああああああああ」

トラクローでＸ字に相手を切り裂き、その勢いを殺さないで、相手を踏み台にして、飛び上がる。

「セイヤーーーー！！」

そのままかかと落としの要領でラプタードエッジを突き立てる。

「ガァアアアアア」

火花とセルメダルをまき散らしながらＩＧは爆発する。煙が晴れた先には青いコアメダルが落ちていた。

「やったぁ」

「火野君、お疲れ～」

次々と声がかけられる。変身を解いてそっちの方を向く。

「あ」

「「「「「え？」」」」」

少しの硬直。考えてみて。水着が取られている状態ではしゃぐとどうなるのか。

「「「「「キャアーーーーーー」」」」」

「ごめんなさ～～～～い」

こうして日中の自由時間は過ぎていったのだった。

海とポロリとタコの足（後書き）

自分でも何がしたかったのかよくわからなかった今回の話。まぁ、ガタキリバからシャウタまでのメダルを集めないと今後の展開に繋げれなかったから、無理矢理出したって感じですね←オイ

それでは、意見、要望、感想等お待ちしております。

夕食と聞き耳と恋バナ（前書き）

前話と前々話のサブタイがかぶってたので修正しました。

Ｃｏｕｎｔ　ｔｈｅ　ｍｅｄａｌｓ
オーズが使えるメダルは……

タカ
クジャク
コンドル
クワガタ
カマキリ
バッタ
トラ
ゴリラ
カメ

夕食と聞き耳と恋バナ

日が沈み、時刻は既に午後7時半。かなり広い部屋で夕食を取っていた。それにしても昼も夜も刺身が出るなんてスゴイ豪華だなぁ。

「あー、うまい。しかもこのわさび本わさじゃないか。すげえな、おい。高校生の飯じゃねえぞ」

一夏、そんなことよくわかるね。もしかして本わさを結構な頻度で食べてるのかな？

「ねえ、英治。本わさって？」

隣に座るシャルが聞く。簡単に本物のわさびだって説明すると、シャルはわさびの山を箸にとって……え？

「っ～～～～～～」

「だ、大丈夫？」

涙目で鼻を押さえてるシャル。彼女は「らいじょうぶ」とか「風味があって、おいしいね」って言うけど、無理しなくていいから。

「水でも飲んで落ち着いて」

「う、うん／／／」

近くにあったコップの水を渡す。もう誰が誰のかわからなかったからね。シャルの顔が赤い気がするのは、わさびのせいかな？

「なっ！　シャルロット。それは嫁のコップだぞ」

「え、そうだったの？　ゴメン、シャル」

「え、べ、別に気にしなくていいよ。その……間接キスだし……」

後半は何を言ってたのか聞こえなかったけど、気にしなくていいって言ってるからあんまり気にしない方がいいかな。

「むぅ。英治、水だ、飲め」

口を尖らせたラウラは俺にコップを渡してくる。コップをテーブルに置いて、箸を持つと、ラウラはまた不機嫌そうな顔になった。俺、何かした？

「あ～！　織斑君が！」

「セシリアに」

「あ～んしてる！」

女子達が騒ぐ方向を見てみると、そのまんまな光景だった。周りからずるいとか、羨ましいって言われてるし……

「お前達は静かに食事を取ることができんのか」

その騒ぎに我慢の限界だった織斑先生が割って入る。女子達はしぶしぶといった感じで自分の席に戻り、あ～んしてもらうことが終わってしまったセシリアは残念そうな顔をする。その後も一夏の周

りはにぎやかって言うか、うるさい感じだったけど、俺はあんまり気にしないで箸を進めていた。あ、これ、美味しい。

◆◆◆

いきなりだけど、臨海学校や修学旅行の夜って何をする？　旅していたから俺はまともに中学校行ってないんだよね……。まぁ、ある程度の学力はつけてもらってたんだけどね。

話を戻そう。枕投げ、恋バナ、怪談。人それぞれやることは違うんだろうな。でも、ここＩＳ学園は女子がほとんど。大抵は恋バナに収束するみたい。

何でわかるかって？　それは温泉に行く、もしくは部屋に戻るとき、女子の部屋の近くを通るから。それで話している内容から、そうわかったんだ。

まぁ、何でこんな話をしているかって言うと、目の前の光景が光景だからから、かな。女子３人が織斑先生の部屋に聞き耳を立てている状況のせいだな。

「で、篠ノ之さんにセシリアに鈴は何をしてるの？」

「「「しっ！　静かに」」」

息の合った行動に驚いたけど、ドアの向こうから聞こえた声にもっと驚くことが……

『千冬姉、久しぶりだからちょっと緊張してる？』

『そんなわけあるか、馬鹿者。……んっ！　す、少しは加減しろ……』

『はいはい。じゃあ、ここは……と』

『くあっ！　そ、そこは……やめっ……つぅ！！』

そんな声が聞こえてきたのだった。まさか、２人は禁断の関係だったのか……

そんなことを考えながら篠ノ之さん達の方を向くと、目が死んでいた。詳しく言うと、目から光がなくなって、口元は吊り上がっている。

「あはは、馬に蹴られたくはないから、部屋に戻るよ。そ、それじゃあ、ごゆっくり」

こう言って部屋に戻る。べ、別に３人が怖かったわけじゃないからね。

「「「へぶっ！」」」、そんな女子が言わないような声をバックに俺は自室に戻った。そう言えば、ここ明かりがあるわけじゃないから、星がよく見えるんだよな。そう思った俺は夜風に当たりに行くことにしたのだった。

◆◆◆

「「「「「……」」」」」

ここは千冬の部屋。この部屋にいるのは6人もなのだが、その空気はお通夜のように暗く、重くなっていたのだった。ちなみにメンバーは千冬、箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラ。一夏はというと、千冬、セシリアに連続でマッサージをしたため、汗をかき、再度温泉に。

「おいおい。ここは葬式か通夜か？　いつもの馬鹿騒ぎはどうした？」

「い、いえ……」

「お、織斑先生とこうして話すのは、ええと……」

「は、はじめてですし……」

「まったく、しょうがないな。私が飲み物を奢ってやろう。篠ノ之、何がいい？」

いきなり呼ばれたことに驚き、声が出ない箒。箒だけに言えたことではないのだが、千冬は一夏が好きな娘にとっては越えなければいけない最大の壁なのだ。

「全く。ほれ、好きなのを取れ」

千冬が冷蔵庫から出したのはラムネ、オレンジジュース、スポーツドリンク、コーヒー、紅茶。箒、シャルロット、鈴、ラウラ、セシリアの順で受け取って、ぎこちないが、蓋を開け、口をつける。

「飲んだな？」

「は、はい」

「そ、そりゃ、飲みましたけど……」

「一体、何か入っていましたの！？」

その問いに不審な顔をしながらも、各々頷く。あまりにもぎこちない５人を鼻で笑いながら、千冬はとある缶を出す。

「あ」

誰が声をあげたのだろうか。千冬が取り出したのは缶ビール。本来ならば教師がこのタイミングで飲むべきものではないのだが……全員が声を失う中、千冬はゴクゴクと喉を鳴らしながらビールを口にする。

「どうした？　私だって人間さ。ビールぐらいは飲むぞ。それとも私が作業オイルを飲む人間に見えるのか？」

「い、いえ。そんなわけでは……」

「ないですけど……」

「でもその、今は……」

「仕事中なんじゃ……？」

「……ポカーン……」

放心状態であるラウラ以外は千冬がビールを飲むことに突っ込んだ。と言っても、勝てるはずもなくて……

「硬いことを言うな。それに口止め料はもう払ったぞ」

そう言ってそれぞれに渡した飲み物に目をやる。5人はそれに気がついて「あっ」とだけ、言う。完全にやられたのだった。

「さて、前座はこのくらいでいいか。そろそろ本題の話をするか」

「本題？」、そんなことを思う5人娘をよそに千冬は早くも2本目のビールを開ける。ビールを開けた景気のいい音だけがこの場に響く。

「お前ら、あいつのどこがいいんだ？」

まずは箒、セシリア、鈴を見て言う。この3人に共通するあいつって言ったら1人、つまり織斑一夏しか存在しなかった。

「わ、私はあいつが以前より弱くなってるのが腹立たしいだけで……」

「あたしは、腐れ縁なだけだし……」

「わ、わたくしはクラス代表としてしっかりしてほしいだけです」

「ふむ、ではそう伝えておこう」

「「「言わなくていいです！！」」」

しれっと言う千冬。もごもごだったり、きっぱりといった違いはあるが、素直になれなかった3人は千冬に詰め寄った。こんなことを言われてはただでさえ鈍感な一夏が自分の思いに気づくことは未来永劫になくなるから。

「で、お前達はどうなんだ？」

次はシャルロット、ラウラに目を向ける。彼女達の意中の彼は一夏ではないからだ。

「えっと、僕。いや、私は優しいところっていうか、何ていうか……」

自分でも上手く表現できないのだが、真摯な態度のシャルロットを箒達3人は羨ましそうに見ていた。

「ボーデヴィッヒ、お前はどうだ？」

「わ、私は自分の意思を貫ける強いところでしょうか」

「ふむ。確かに火野は心が強いな。まぁ、ＩＳの方はまだまだ、だが」

英治との関わりは数ヶ月といった所だが、その人となりは千冬にもよくわかった。一言で言うと、いい奴である。だが、ただいい奴でないこともわかっていた。

「ま、火野はともかく、あいつと付き合える奴は得だぞ。家事、料理、マッサージとか上手いからな。どうだ、欲しいか？」

「「「く、くれるんですか？」」」

期待の眼差しを向ける3人。

「やるか、バカ」

すぐにがっくりとなる3人。そんな光景をシャルロットは苦笑いしていた。そして、英治にも、こんな立場の人がいるのかな、そう思い始めていた。

「女なら奪うくらいの気持ちで行かなくてどうする。自分を磨けよ、ガキども」

愉快そうに言う千冬の声はガックリとうなだれている3人には届かなかったのだった。

夕食と聞き耳と恋バナ（後書き）

次回から3巻の本番（？）に入って行きたいと思います。頭数が2つ、原作より多いので敵の性能を上げようかな。そう思っても、今度はあっちが予定より強くなってしまうジレンマ。まあ、こんなことを今考えてる時点でストックがヤバいんですけどね。現実が忙しくなりだして……

それでは、意見、要望、感想等お待ちしております。

天才とウサ耳と舞い降りる紅（前書き）

予約の設定だけして、投降を押してなかった……ｏｒｚ
申し訳ありませんでした。

Ｃｏｕｎｔ　ｔｈｅ　ｍｅｄａｌｓ
オーズが使えるメダルは……

タカ
クジャク
コンドル
クワガタ
カマキリ
バッタ
トラ
ゴリラ
タコ
カメ

天才とウサ耳と舞い降りる紅

臨海学校2日目。この日は丸1日、データ取りや、武器の試験運用等で忙しい日となっている。特に、専用機持ちは国や企業から送られてきたもので大忙しってところかな。でも、そういうのに属していない俺、自力で組み上げたため試験するものが少ない簪はある程度の余裕はあるみたいだった。

ラウラが遅刻するというハプニングはあったけど、コア・ネットワークを説明するということで見逃してもらっていた。

「さて、それでは各班ごとに振り分けられたISの装備試験を行うように。専用機持ちは専用パーツのテストだ。各自、迅速に行え」

織斑先生の号令で各々行動を開始する。ここには1年生が皆いたから、スゴイ人数が一度に動き出す。専用機持ちは織斑先生の元に向かう指示だったので、この場に残ることに。

「ああ、篠ノ之。お前はちょっとこっちに来い」

「はい」

「お前には今日から……」

ん？　何で篠ノ之さんが呼ばれているんだ？

そんな俺の疑問は突然聞こえてきた声にかき消されたのだった。

「ちーちゃ～～～～～～～～～ん！！」

ドタドタと砂煙を上げながらこっちに走ってくる影が1つ。人間離れしたスピードで突っ込んで来るのにもびっくりだけど、何より驚くのはその人の格好だった。不思議の国のアリスみたいな格好に、ウサ耳。一体どういうセンスの持ち主なんだろう？

「……束」

ため息をつくように呟く織斑先生。そういや、束ってどっかで聞いたことのある名前の気がするなぁ。どこで聞いたんだっけ？

「やあやあ！　会いたかったよ、ちーちゃん！　さあ、ハグハグしよう！　愛を確かめｙ……ぶへっ」

人間離れしたスピードで織斑先生に抱きかかろうとした束って呼ばれた女の人を片手で掴み、投げる。

え、何でそのスピードに反応できたんですか？　しかも、その腕力。織斑先生、貴方本当に人間ですか？　紫のグリードの生まれ変わりとかじゃないですよね……？

「ぐぬぬぬ。相変わらず容赦がないねっ」

何事もなかったように起き上がる束さん。投げられた時結構鈍い音がしたんだけど……

「やあ！」

「どうも」

今度は篠ノ之さんと向き合う。篠ノ之さんの淡白な反応からすると、そこまで親しくないのかな。

「えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなぁ。大きくなったね、箒ちゃん。特におっぱいが」

がんっ！

本日2回目の鈍い音。えっと、何でソレ持ってんの？

「殴りますよ」

「な、殴ってから言ったぁ……。し、しかも日本刀の鞘で叩いたぁ。痛いよ箒ちゃん」

束さんが言ったように篠ノ之さんの手には日本刀が。まぁ、ＩＳ学園は各国の法律の影響されないみたいだけど、銃刀法違反くらいは適用してください。まぁ、メダジャリバーがある俺も俺だけどね……

「え、えっと、この合宿には関係者以外立ち入り禁止なんですけど……」

「んん？　珍妙奇天烈なことを言うね。ＩＳの関係者というのなら、1番はこの私をおいて他にいないよ」

「えっ、あっ、はい、そうですね……」

説得にかかった山田先生もあっけなく論破されて黙り込む。それよりも、この人は自分が1番のＩＳの関係者って言ったよね。束…ＩＳ…あ、ＩＳの開発者、篠ノ之束か。……って、えぇぇぇぇえええええ！！　何でそんな人がここにいるの!?

「おい束。自己紹介くらいしろ。ウチの生徒が困っている」

そうは言ってもこの場にいるのは専用機持ち軍団だけ。まぁ、皆戸惑っているけど。そういう俺もだし。

「えー、めんどくさいなぁ。私が天才の束さんだよ、はろー。終わり」

その言葉を聞いて唖然とする人や騒がしくなる人。皆違う反応をするんだけど、束さんは全く興味がなさそうだった。

「それで、頼んでいたものはどうした？」

そんな中、篠ノ之さんも周りの反応を気にしないで束さんに話しかける。どうして姉妹なのに他人行儀なんだ？

「うっふっふっふ。それはすでに準備済みだよ。さあ、大空をご覧あれ！」

束さんが、ビシッって指した方向には何にも見えなかった。一体何だ？

ひゅーん、ズドンッ！！

「うわっ！」

激しい衝撃と共に何かが落下してきた。その場には銀色の金属の塊が。

「これは一体？」

警戒する俺の前で、それは開いた。そこにあったのは真紅。その表現が相応しいＩＳだった。

「じゃじゃーん！　これぞ箒ちゃん専用機こと『紅椿』！　全スペックが現行ＩＳを上回る束さんお手製のＩＳだよ！」

とんでもないことをサラリと言った束さんは篠ノ之さんのフィッティングとパーソナライズを開始する。何枚もの画面を見ながら、宙に浮かぶキーボードを叩いていく。あんなこと、絶対できないだろうなぁ。

俺がそんなことを考えてる間に作業は終わっていた。早すぎでしょ。篠ノ之さんの方はあらかた終わったのか、今度は一夏の白式に興味を示す。俺にはもうわからなくなったので、近くにいた簪に話しかけることに。

「簪はさ、あのＩＳどう思う？」

「え、わ、私はただスゴイと思った……」

複雑そうな顔の簪。彼女も姉との仲があんまりいいわけじゃなかったんだったよな。悪いこと言っちゃったな……

「そうか。ところでさ、簪は今日はどのくらいやることあるの？」

「……うん、ＣＬＡＷｓのチェックと、フル装備の試運転……」

簪はやることがあるのか。ラウラやシャルロットも自分の国から送られてきた装備があるみたいだし、俺はどうしよ。結構メダルも

増えたし、使いやすい組み合わせでも探しているか？　それにこのオレンジのコアメダルの能力も知りたいし。

「ねえねえ、君がメダルの仮面ライダーなんでしょ？　束さんはそれにも興味があるのだ。変身して見せてよ」

「え、いや、そんな人に見せていいもんじゃないんですけど……」

「え～、ひどいよ。いいでしょ、いいでしょ。コレあげるからさ」

そう言って束さんは俺に何かを手渡してくる。コ、コレは……

「おい、束。あんまり人に迷惑を……」

「いや、いいですよ、織斑先生。それにコレ、貰っちゃいましたし」

そう言って織斑先生に見せたのは青いシャチが描かれたコアメダル。

「じゃあ、いきますよ。変身！」

『タカ！　トラ！　バッタ！　タ・ト・バ　タトバ　タ・ト・バ！！』

「おお～。仮面ライダーを生で見れて束さんは感激なのだ～。さっきのメダルも使ってみせてよ」

言われるままにメダルを変えることに。本当はあんまり気は乗らないんだけど、コアメダルをくれたしな。

『シャチ！　トラ！　バッタ！』

「あれ？　今度は歌はしないんだ。ねえねえ、他の歌は？」

「え、歌はコンボじゃないと」

今度はコンボについてじっくり聞かれて実演させられそうになったけど、何とか説得してこの場は引いてもらうことができた。ある程度のことを見れたから満足したのか、篠ノ之さんの方に戻っていく束さん。紅椿の試運転をしてるみたい。そっちも気になったんだけど、せっかく変身してるし、コレも試してみるか。

『シャチ！　カメ！　バッタ！』

オレンジの腕に取り付けられた盾。どうやら、防御型のメダルだな。どうやら、一番堅いみたい。コレを使ったコンボってどんなのだろ？　やっぱり防御型。

「たっ、た、大変です！　お、おお、織斑先生っ！」

変身を解くと、慌てた山田先生が走って来た。山田先生はいつも慌ててるけど、今回はいつもの非じゃなかった。嫌な予感しかしないな……

「どうした？」

「こ、これをっ！」

山田先生から渡された書類を見て表情が曇る織斑先生。そのまま山田先生と小声で話し始める。何か大事なことなんだな。

「全員、注目！」

山田先生が走り去った後、織斑先生が手を叩き、声をかける。

「現時刻よりＩＳ学園教員は特殊任務行動へと移る。今日の稼働テストは中止。専用機持ちは集合しろ。織斑、火野、オルコット、デュノア、ボーデヴィッヒ、鳳、更識。！　……それに篠ノ之も来い」

「はい！」

気合の入った返事の篠ノ之さん。そんな篠ノ之さんを見て不安そうな顔の一夏。何が何なのかよくわからないけど、嵐が来る。それだけははっきり言えるんだ。

天才とウサ耳と舞い降りる紅（後書き）

度重なるこちらの不手際、申し訳ありませんでした。

いきなりですが、爬虫類メダルは他のコアメダルと亜種可能な方向で進めて行くことにしました。そうしないと爬虫類メダルの出番がしばらくないし、活躍の機会もなさそうだったので。

それでは、意見、要望、感想等お待ちしております。

展開装甲と第４世代と作戦開始（前書き）

Ｃｏｕｎｔ　ｔｈｅ　ｍｅｄａｌｓ
オーズが使えるメダルは……

タカ
クジャク
コンドル
クワガタ
カマキリ
バッタ
トラ
ゴリラ
シャチ
タコ
カメ

展開装甲と第４世代と作戦開始

「では、現状を説明する」

旅館の奥の部屋に設けられた臨時の作戦室。ここには、専用機持ちと教師陣が集まっていた。薄暗い部屋に浮かび上がるディスプレイには情報が記されている。

「２時間前、ハワイ沖で試験稼働であった、アメリカ・イスラエル共同開発の第３世代型の軍用ＩＳ『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』が制御下から離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡があった』

スポーツのためのＩＳではなく、戦争のためのＩＳ（兵器）。それが暴走するとどうなるのかは嫌でも想像はできたんだ。悲しみしかないってことが。

「その後、衛星による追跡の結果、福音はここから2キロ先の地点を通過することがわかった。時間にして５０分後。学園上層部の通達により、我々がこの事態に対処することになった」

淡々と告げる織斑先生。こういう事態は力がある者が対処するべき、ＩＳに対抗できるのはＩＳだけ。だからＩＳが多くあるココに頼んだ、いや、命令したんだろうな。

「教員は学園の訓練機を使用して空域及び海域の封鎖を行う。よって、本作戦の要は専用機持ちに担当してもらう」

軍用のＩＳを俺達で止めろってわけか。代表候補生とかそういう

肩書きを持っていたとしても普通は学生にやらせるべきことではないんだろうけど、俺達がやらなくちゃ、被害がでるかもしれない。それが1番、俺は嫌だから。そう思って自分の拳に視線を落とす。作戦会議は始まっている。

「目標ＩＳの詳細なスペックデータを要求します」

「わかった。ただし、これらは二ヶ国の最重要軍事機密だ。けして口外するな。情報が漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁判と最低でも2年間の監視がつけられる」

「了解しました」

セシリアの質問によって、モニターに目標のスペックが映し出される。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型。……わたくしのＩＳと同じく、オールレンジ攻撃を行えるようですわね」

「攻撃と機動、両方に特化した機体ね。厄介だわ。しかも、スペックはあたしの甲龍を上回るから、向こうの方が有利……」

「この特殊武装が曲者って感じはするね。ちょうど本国からリヴァイヴ用の防御パッケージが届いているけど、連続しての防御は難しい気がするよ」

「しかも、向こうの格闘戦のデータが未知数だ。持っているスキルもわからん。偵察は行えないのですか？」

「……多分、無理、時間がない……。一撃必殺じゃないと、厳しい

……」

上から、セシリア、鈴、シャル、ラウラ、箒。代表候補生である彼女達は真剣に話し合っている。それ相応の訓練を受けていないから戸惑う一夏。戦いの経験はあっても、こういう軍事的な作戦会議なんかしたことがない俺は戸惑っていた。一夏と俺とは違い、篠ノ之さんはただ黙っているみたいだった。

「更識の言うとおりだ。この機体は今も音速飛行を続けている。アプローチは1回が限界だろう」

「やっぱり、一撃必殺……？」

簪がそう呟くと、全員が一夏の方を向く。勿論、俺も。一夏の白式の零落百夜。ＩＳのシールドバリア無効のそれがこのメンバーの中でＩＳに有効だから。

「え……？」

「だから、あんたの零落百夜で落とすしかないのよ」

疑問の声をあげる一夏に、鈴が告げた。他のメンバーも口々に一夏が適任である、だが、問題点もあるって。問題点は移動手段、どうやって相手についていくか、だった。

「ちょっと待てよ！　お、俺が行くのか？」

「「「「「当然」」」」」

５人の代表候補生の声が重なる。ホント、こういう時は連携はい

いもんな。

「織斑、これは訓練でない。実戦だ。もし覚悟が無いなら、無理強いはしない」

「……」

わずかの沈黙。頭を切り替えるために目を閉じる一夏。その目が開いたとき、その目はさっきまでの戸惑いの色はなくなっていた。

「やります。俺がやってみせます」

力強い声で一夏は言ったのだった。

「よし。それでは作戦の具体的な内容に入る。現在、この専用機持ちの中で最高のスピードが出せるのは誰だの機体だ？」

その問いにいち早く答えたのは、セシリアだった。チーターコアがあったら、俺もスピードは出せるんだけど、生憎、それは俺の手元には無いから。

「それなら、わたくしのブルー・ティアーズが。ちょうどイギリスから強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』が届いていますわ」

「オルコット、超音速下での戦闘訓練時間は？」

「２０時間です」

「ふむ、それなら適任……」

その声を遮るように、明るい声が響いた。

「待った待ーった。その作戦はちょっと待ったなんだよ～！」

声の方を見ると、束さんが天井から顔を出していた。

「……山田先生、室外への強制退去を」

「えっ！？　あ、はいっ。あの、篠ノ之博士、とりあえず降りてきてください……」

「とうっ★」

くるりんっ。空中で一回転して着地。どうしてそんな格好でそんな動きが出来るんだろ？

「ちーちゃん、ちーちゃん。もっといい作戦が私の頭の中にナウ・プリンティング」

「……出て行け」

頭を押さえる織斑先生。束さんを連れ出そうと山田先生は頑張るんだけど、その腕は宙を切るだけだった。

「聞いて聞いて！　ここは断・然！　紅椿の出番なんだよっ！」

「何！」

「紅椿のデータを見てみて。ほら、パッケージなんかなくても超高

速戦闘ができるんだよ！」

束さんが言うなり、織斑先生の周囲にモニターが浮かぶ。俺の場所からじゃその画面は見えないけど、織斑先生の表情から、そのスペックはとんでもないものなんじゃないのか、そう思い始めたんだ。

「紅椿の展開装甲を調整して、ほいほいほいっと。ホラ！　これでスピードバッチリ！」

展開装甲……？　そんなの聞いたことないなぁ。そう思って周りを見回したけど、誰一人、展開装甲って言葉は知らないみたいだった。

展開装甲、紅椿の全身、白式の雪片弐型に搭載されていて、状況に応じた切り替えが可能って言う、万能型。ちにみに、第４世代型ＩＳの装備。現在、世界中が力を入れて開発してるのは第３世代型。第４世代はパッケージの換装を必要としないで、どこでも、どんな状況でも戦える万能型を目指したもの。勿論、第３世代型とはスペックの差は大きい。

そんなものを個人が作った、そう聞けばスゴイことだと思う。でも、シャル達代表候補生の顔は暗い。それもそのはず。世界中の技術者達は第３世代を作るのに必死になっている。だけど、たった１人がいともたやすくその上を行くものを作った。それは、世界の努力を無駄って言ってるようだった。

「束、言ったはずだぞ。やりすぎるな、と」

「そうだっけ？　えへへ、ついつい熱中しちゃったんだよ～」

織斑先生に言われて、束さんは皆が黙り込んでる理由がわかった

みたい。その空気に何を思ったのか知らないけど、束さんは言った。
「紅椿は完全じゃないよ。だけど、スペックを引き出せばこの事件の解決なんで夕飯前だよ」って。

「……束、紅椿の調整にはどのくらいかかる？」

「お、織斑先生！？」

声を荒らげたのはセシリアだった。高速戦闘用パッケージを持っていたのは自分だけだったから、作戦に参加できると思ってたみたい。

でも、セシリアの意見は高速戦闘用パッケージをまだインストールしてないこと、それと紅椿の調整が7分で終わることから却下されたのだった。

「よし。では、本作戦では織斑、篠ノ之の両名による目標の追跡及び撃墜を目標とする。作戦開始は３０分後。各員、ただちに準備にかかれ」

パン、と手を叩いて織斑先生は言う。それを合図に教員達は自分の作業に取りかかるのだった。セシリア達も手伝いに回ったのを見て、俺も自分にできることをやることにした。唯一の男だから機材を運ぶとかそういう仕事があるだろうし。

◆◆◆

３０分後。砂浜に並び立つのは紅と白。自身のＩＳを展開した一夏と篠ノ之さんは作戦開始の合図を待っていた。俺達残った専用機持ち組は織斑先生と一緒に作戦室で待機していた。

「一夏さん……」

「大丈夫よ、きっと……」

不安そうに呟くセシリアと鈴。その理由は相手が軍用のＩＳであること。そして、一夏と篠ノ之さんは実戦の訓練を受けていないからだ。代表候補生であるセシリア、鈴、シャル、ラウラ、簪は代表候補生として訓練を受けていたし、俺もオーズとして戦ってきた経験はある。でも、普通の学生だった２人はそのためのものは何もないはず。そんな２人が軍用、つまり戦争のための兵器と戦えるのかは、すごく不安だ。チーターレッグが使えれば……、今、必要な力がないことに後悔して、拳を強く握る。後悔したくないから俺は強くなろうと決めたはずなのに。

「英治、大丈夫？」

俺の顔を覗いた、シャルが話しかけてくる。何でもない、そう言いたかったけど、気が付けば俺の口は動いていたんだ。

「大丈夫じゃない、っていうより、悔しいかな。高速戦闘についていく手段はあっても使うことはできない。しかも使えない理由が俺のせいだから、ね」

自嘲気味にこぼした俺は本当に何もできなかったのか考えた。いや、わかっていたんだ。チーターがない以上、作戦に必要なスピードは出せないってこと。無理矢理着いて行っても足手纏いにしかな

らないってことも。

「……英治。大丈夫だよ。一夏達を信じよ」

「……ああ、うん」

すっかり忘れていたよ、信じることも大事だって。自分で言っといて忘れてたなんて、かっこ悪いなぁ。

「よし、作戦開始だ」

織斑先生が告げると、モニターは、白式が紅椿の上に乗って飛び立つ光景を映し出していた。白式のエネルギーの節約のため、足の速い紅椿が白式を輸送するっていう作戦なんだ。後は篠ノ之さんのサポートの元、一夏が零落百夜で銀の福音を堕とす。

一夏達との通信が終わってもパッとしない表情の織斑先生。何かあったのか？

「織斑先生、何かあったんですか？」

「ああ、篠ノ之のやつ、浮かれている」

その状態では、何かをし損じる。そう織斑先生は続ける。一夏も警告はしたらしいんだけど、篠ノ之さんは聞き耳持たずってとこだったらしい。手にした力に溺れる、か。何のための力かちゃんと考えるのかが大事だよな。それに、言い換えればどんな力も自分の強さにできるってこと。そのことを俺は自分の身をもってわかったから。

しばらくして緊迫した作戦室に入ってきた情報は、作戦失敗。そして一夏が重症を負ったってことだった。

展開装甲と第４世代と作戦開始（後書き）

やっとで始まった3巻の山場。果たして紅椿の、白式の活躍はあるのか？
このままだとそう思う展開でした。別の紅が活躍する予定になってしまうので。

そしてチーターが奪われたのはこのためだけだったっていう。ライオンは完璧な巻き添え。まぁ、早いうちに取り返せればいいなぁって思ってるけど……

そう言えばＭＯＶＩＥ大戦ＭＥＧＡＭＡＸって翔太郎にフィリップ。おまけに財団Ｘも出るんですよね。見に行かないと。Ｗにオーズにフォーゼの構図か……。フォーゼ以外はこの小説には出ますからね。代わりにディケイドでも突っ込むか。あ、そうするとＩＳ要素が……この際、「欲望の王と世界の破壊者」もしくは「欲望の王と疾風の切り札」でも作ってそっちでバカスカやるか？

それでは、意見、要望、感想等お待ちしております。

傷跡と激昂と反撃（前書き）

Ｃｏｕｎｔ　ｔｈｅ　ｍｅｄａｌｓ
オーズが使えるメダルは……

タカ
クジャク
コンドル
クワガタ
カマキリ
バッタ
トラ
ゴリラ
シャチ
タコ
カメ

傷跡と激昂と反撃

「……」

旅館の1室。壁の時計が示す時刻は作戦失敗となってから数時間も経過している。

一夏は何時間も目覚めないままだった。あちこちに巻かれた包帯がその結果の無残さを表している。

箒はずっと一夏の側にいて、彼が目覚めるのを待っていた。ただ、このまま目覚めないのではないのか、と不安に押しつぶされそうになる。

（わ、私のせいで……）

作戦開始後、2人は無事予定通りに福音と接触。そのまま戦闘が始まった。福音の高機動、連射可能でなおかつ1発1発の威力が高い砲。そして翼に取り付けられた多くの銃。それらに苦戦しながらも確実に福音を追い詰めていった。そして生まれたチャンス。そこで零落百夜を決めれれば作戦成功だった。だが、一夏の目に映ったのは密猟戦。ＩＳ学園教員が海域を封鎖したはずなのに、それは一夏達が戦う場の近くに来てしまったのだ。

そして、福音の砲口はその船に向けられる。一夏はそれに気づき、残ったエネルギーでそれを相殺する。命を守った。だが、そのことでチャンスを逃してしまった一夏を箒は何故犯罪者を庇ったのだ、と罵倒する。普段の彼女なら言わない言葉を。それを納得できる一夏ではなく、彼女を説得しようとしたとき、悲劇は起きた。福音は足を止めた箒を狙う。一夏はそれに気づき、反応のできなかった箒を庇うが、途中でエネルギー切れ。激しい痛みに身を焼かれ、一夏

は意識を離した。

それを思い出す度に箒の胸は絞め上げられる。一夏がこうなったのは自分のせいなのだから。

一夏がこうなったにもかかわらず、誰も箒を責めないことが更に辛かった。

何のための剣道だったのだろうか？　何のために自分を鍛えてきたのか？　何のために自分の紅椿（ちから）を願ったのだろうか？

（私は、もう……ＩＳには……）

箒が決心をしようとしたとき、ドアが勢いよく開けられた。

バンッ！　その音に驚くが、入ってきた者の顔を見る気にはならなかった。

「あー、あー。わかりやすいわねぇ」

遠慮なく入ってくるのは鈴。彼女はこの部屋だけでなく、箒の心にも遠慮なく入ってきたのだ。

「……」

「あのさあ」

鈴に対して無言を貫く箒。答えないのではない、答えられないのだ。

「一夏がこうなってるのって、あんたのせいなんでしょ？」

ＩＳの絶対防御。それが操縦者を守るために強制的に昏睡状態にさせるのだが、一夏の現状を見ると、目を覚ますのかどうかさえ、怪しかった。

「……」

「で、何？　落ち込んでますってポーズ？　っざけんじゃないわよ！！」

胸ぐらを掴まれ、無理矢理立たされる箒。抵抗する気はなく、ただなされるがままだった。

「やるべきことがあるでしょうが！　今、やらなくてどうすんのよ！」

「わ、私は……もう、ＩＳには乗らない……」

バシンッ！！

頬をぶたれ、箒は力なく倒れる。だが、鈴の気持ちはそれで晴れるわけではなく、もう一度胸ぐらを掴む。鈴が怒ってるのは一夏がやられた原因である箒ではない。一夏がやられたにも関わらず、こんなメソメソした態度の箒にだ。同じ一夏が好きな者なのに、一夏がやられたのに、こんな風にいられるのが気に食わなかったから。

「甘ったれてんじゃないわよ……専用機持ちってのは、そんなワガママが許されるような立場じゃないのよ。それとも、アンタは……」

怒りの色で滲ませた瞳はまっすぐ箒を見ていた。

「戦うべき時に戦えない、臆病者か」

「……ど……」

漏れた言葉はか弱かったが、急に火がついたのか、その勢いは大きくなっていく。

「どうしろと言うんだ！　もう敵の居所もわからない！　戦えるのなら、私だって戦う！」

その言葉と共に、鈴の腕を払い、箒は自信の力で、意思で立ち上がった。その目は先程とは違い闘志が宿っていた。

◆◆◆

「ふぅ、何とかなったみたいだね」

一夏の様子を身に来たつもりだったんだけど、聞こえてきたのは鈴の叫び。女の子の会話を盗み聞きする趣味があるわけじゃないけど、聞こえてきた内容には興味があった。それに、鈴の様子、いつまでもうなだれたままの篠ノ之さんから、自分が割って入ることも考えたんだけど、その必要は無かったみたいだし。

篠ノ之さんの闘志に火は点いた。ラウラからの情報で福音の居場所もわかってる。シャル達も準備済み。反撃の準備はできた。

これからやることは命令違反の上、ＩＳの無断使用。罰は重いだろうけど、俺は後悔しない生き方を選ぶ。だから……

「行こうか、反撃に」

「……ああ、私もやられっぱなしは消に合わんからな」

「ふーん、やっとらしくなったじゃない」

「僕達も準備ＯＫだよ」

「いつでもいけますわ」

「目標はここから３０キロ先の沖合にいる。衛星で確認した」

「私も、いける……」

その後、７機のＩＳが飛び立ったのを見て、１人の先生がため息をついたのだった。だが、その顔はため息に反して困ったような顔をしていなかった。どちらかと言えば、やっとか、そういう感じだった。

◆◆◆

「見えたぞ。まずは私が先制をしかける。それからは作戦通りに」

膝を抱え込むように佇む福音。それをギリギリの範囲で捉えたラウラは、両肩のレールガンで狙いをつける。

ドンッ。放たれた砲弾は福音に当たって、煙を上げる。

「初弾命中。続けて砲撃を行う」

ラウラは砲撃を続けるが、福音はそれをかわしながら、驚く程のスピードでラウラとの距離を縮めていく。さっきまでは4キロあったのも、すぐに3、2キロとその距離は縮まっていく。

シュヴァルツェア・レーゲンが装備している砲戦パッケージ『パンツァー・カノーニア』は火力や反動を抑えるための機能とかで、機動性は低い。つまり高速で近づいてくる福音の攻撃をかわすことはできないのだ。

だけど、ラウラにとってはそれも想定内の出来事で、彼女は口元を歪めた。

「セシリア！！」

高速戦闘パッケージ、『ストライクガンナー』を装備したブルー・ティアーズは福音に牽制の射撃をして、ラウラから遠ざける。

ストライクガンナーはブルー・ティアーズの特徴であったビットをブースターにすることによって爆発的な加速を得るもの。スピードを緩めることもなく、セシリアは射撃を続けていく。

だが、福音もやすやすと当たることはなく、銃撃をかわしていく。そんな福音に後ろから迫る影があった。

「遅いよ」

シャルはショットガン2丁による射撃を福音に浴びせていく。福音は体勢を崩すも、すぐに立て直して、≪銀の鐘≫と呼ばれる翼に組み込まれた大量の砲口から光の雨を放つ。

「おっと。悪いけど、この『ガーデン・カーテン』はそのくらいじゃ落ちないよ」

シャルが装備した防御型パッケージ、ガーデン・カーテンは実体とエネルギーの2重のシールドで敵の攻撃を防ぐってものだ。

攻撃が止むとシャルはアサルトカノンを展開。セシリア、ラウラと一緒に攻撃を続ける。

「チャージは、６０％……。持ちこたえて……」

戦闘が繰り広げられている遥か上空。そこで俺と簪は待機していた。現状で一番有効なのは簪のブレストキャノンのフルチャージだった。それを当てるためにシャル達で時間を稼ぎ、隙を作る。この中で次に防御力を持っていたのは俺だったから、俺が簪の防衛をすることになったんだ。ちなみにガタカメドルという組み合わせだ。これなら射程もそれなりにあるし、防御、近接とできるからね。

一方、シャル達3人に追い詰められて、逃げることを選んだ福音。だけど、その方向には……

「させるかぁ！！」

海面を突き抜けて現れたのは、鈴と箒。加速のために、甲龍が紅椿の上に乗っているんだ。

「離脱する前にたたき落とす！」

紅椿が福音にぶつかると同時に、甲龍が飛び立つ。甲龍の攻撃型パッケージ『崩山』を機動させ、攻撃をしかける。崩山によって増え、４つとなった衝撃砲が火を吹いた。ゼロ距離で放たれたそれは

福音にかわすこともさせず、その体を弾き飛ばした。

『!?』

「チャンスは今だ!」

バランスを崩した福音が体勢を立て直そうとしたときに俺がコンドルレッグで蹴りかかる。その一撃は大したダメージにはなってないようだけど、俺の目的は簪が照準をあわせる時間を作ることだから。

「簪!」

「うん、ブレストキャノン、シュート!」

俺が福音から離れた瞬間、大きな光が福音を飲み込んだ。

「やりましたの!?」

攻撃を受け落下していく福音を見て、セシリアが呟いた。相手が海に落ちたのが確認できたから、俺達は警戒を解き、顔を見合わせた。これで終わった。そう思った瞬間のことだった。海が青白く輝いたのは。

「これは……!?　一体、何が起きているんだ…?」

「!?　まずい、これは『第2形態移行(セカンド・シフト)』だ!」

皆がISからの警告に反応した瞬間はもう遅かった。

「何っ！？」

消えたと思ったら、一番遠くにいたはずのラウラを掴む福音。その速さに皆が目を疑う。

「ラウラを離せぇ！」

シャルはショットガンを展開して、福音の背後を取る。けれど、福音の全身から現れたエネルギー翼はそのまま全方位に対する光弾の雨になった。掴まれているラウラはともかく、ガーデン・カーテンで守りきることは叶わずシャルも吹き飛ばされて、海に落ちていった。

「シャル！　ラウラ！　くっ！」

両腕のシールドで直撃をもらうのだけは何とかかわしている状態なんだけど、このままじゃこっちが負けるのは目に見えていた。俺の後ろに行った簪を除いた面々も直撃はしていないけど、じわじわとダメージを与えられていたんだ。

「くっ！　不覚ですわ……」

次にやられたのはセシリア。彼女の銃は巨大であるために接近戦には向かない。だから猛スピードで近づいてきた福音から逃れることはできなくて海に落ちていった。

「セシリアまで……。何とかする方法は……」

そう考えても、防戦一方の今を打開する方法は思いつかなかった。ライドオーズのラトラーターなら福音以上のスピードなんだけど、

今は使えない。だったらガタキリバで？　それも全方位のビームに撃ち落とされて終わりだ。

「私の仲間をよくも！」

俺が考えてる内に箒が接近戦をしかける。紅と銀、２つの閃光がぶつかりあう。斬撃を、スラスターを。局所局所を加速させながら戦う。展開装甲を持つ紅椿でこそ、できる接近戦なんだ。でも、それがいつまでも続けれるわけじゃなかったんだ。

「な、エネルギーが……」

トドメの一撃を入れようとしたときのエネルギー切れ。福音がその隙を見逃すわけもなくて、篠ノ之さんは首を掴まれる。そのまま福音の砲口は光り出した。

（すまない、一夏……）

今の紅椿のエネルギー残量ならその攻撃を耐え切れはしないかもしれない。輝きを増す翼に、篠ノ之さんは祈るように目を閉じる。

だけど、いつまでもたっても光は放たれることはなくて、逆に福音は篠ノ之さんから遠ざかったのだった。

「あ……」

篠ノ之さんの声が漏れる。その声は喜びの色だった。彼女と福音の間に降り立った白い騎士。

「一夏……なのだな……」

「俺の仲間は、誰1人やらせねぇ！」

姿を変えた白式を纏い、一夏はこの戦いに舞い降りてきた。

「一夏っ、体は、傷は！」

「おう、待たせたな」

一夏の側による篠ノ之さんに笑って応える一夏。こんな状況で話し込むのはアレだけど、今くらいはいいかな。

「はっ、セイヤッ！」

シャル達を簪と鈴に頼み、俺は福音に接近戦を仕掛ける。せめてあの2人が話終えるまで、時間を取らなくちゃな。

放たれる光弾を両腕の盾で防ぎ、コンドルの爪で蹴る。だが、福音はそれを後ろに下がることでかわして、光弾の雨を放ってくる。

「ぐっ……」

さすがに両腕のシールドだけではそれを防ぎきることはできなくて、シールドエネルギーはどんどん減っていく。

「英治、大丈夫か？」

篠ノ之さんとの話を終えた一夏が福音に切りかかる。福音は俺達と離れるようにして、それをかわす。

「うん、なんとかね。エネルギーから考えると俺と一夏だけだよ。アイツと戦えそうなの」

「ああ、俺は再戦といくか」

「じゃあ、俺はこっちに」

『タカ！　トラ！　バッタ！　タ・ト・バ　タトバ　タ・ト・バ！！』

ライドオーズ、白式、福音。３機のＩＳは高速で交わり合う。爪が、剣が、光弾が入り乱れる。

「はっ！」

トラクローを突き立てるが、上に飛んでかわされる。でも……

「一夏！」

「おう！」

一夏は右手だけで持った雪片弐型を振り下ろす。その一撃もよけられる。以前までの白式だったら剣を返さないと、次の手は打てない。でも、第２形態移行をした白式の左腕は新たな武器がある。≪雪羅≫、場合により変化されることのできるソレの指先から出たエネルギー状のクローで斬る。

福音は白式を危険な存在と認識して、距離を取り、翼の砲門を一斉に開く。俺と一夏は放たれた光弾の中をくぐり抜けながら近づいていく。でも、光弾の数は増えていく一方で、よけ続けるのも難しくなってきた。このまま時間が経てば。こっちのシールドエネルギ

ーがゼロになってどうしようもなくなる……。だったら。

「英治、何をするんだよ！」

白式の盾になる。俺の思う通りだったら、白式は燃費が悪いままのはず。いくら零落百夜で相殺できるからってそれを何回もやらせるわけにはいかないからね……

「くっ、今は福音を……」

エネルギーが尽きる。ここまでかな……

「英治……！」

水飛沫を上げて海に落ちる。後は一夏がなんとかしてくれるかな？　……でも、このままっていうのも悔しいかな……。うん、そうだよな。まだ手はあるんだし。

その瞬間だった、福音が進化したとき青白く輝いた海が、真紅に輝いたのは。

傷跡と激昂と反撃（後書き）

やっとでここまで来た……。次回は皆大好きあのコンボが。

ＭＯＶＩＥ大戦ＭＥＧＡＭＡＸに新しいオーズのコンボが出るらしいことと、オーズの最終回付近のディレクターズカット版が出るのを聞いてテンション上がり中。

それでは、意見、要望、感想等お待ちしております。

Time judged all（前書き）

Count the medals
オーズが使えるメダルは……

タカ
クジャク
コンドル
クワガタ
カマキリ
バッタ
トラ
ゴリラ
シャチ
タコ
カメ

Time judged all

「くっ、コイツ強い。それにこっちのエネルギーもマズイ……」

何度も切り結び、一夏は呟いた。手応えはある。雪羅が追加されたことにより、射撃や防御も可能になり、戦術の幅は広がったのは確かだ。それでも、第2形態移行前新の問題だった燃費の悪さは解決していないのだ。

「やばっ！」

福音が放った光弾をギリギリで回避する。エネルギーも減っているが、慣れない超高速戦闘のせいで、一夏の精神力も相当疲れているのだ。

◆◆◆

（一夏が来てくれた……）

箒はそのことに嬉しくなり、心が熱くなる。そして、戦う一夏の背中を見て強く願う。共に戦いたい、と。

それだけが頭の中を駆け、純粋で強い願いとなる。紅椿はその願いに応えるかのように展開装甲から黄金の粒子を放出させる。

「これは……！？」

『絢爛舞踏―発動』

その単一使用能力が発動したとき、紅椿のエネルギーは回復した。

「これなら、いける！」

そう感じた箒は一夏の元へその翼を広げる。白式のシールドエネルギーは残り２０％を切っていたのだ。

「一夏、受け取れ！」

「箒？　ああ！」

一夏は伸ばされた箒の手を掴む。刹那、白式のエネルギーが回復する。

「エネルギーが回復してる？　これなら！」

一夏は意識を右腕に集中させて、雪片を振るう。渾身の一撃、そうとばかりに放たれたそれは福音を切り裂き、大ダメージを与える。だが、福音はまだ落ちない。

「こちらにも、いるぞ！」

箒は手にした刀で斬撃を放つ。だが、福音は翼の中にうずくまり、ダメージを最低限に抑える。

「箒、マズイ！」

福音は回転しながら翼を開く。それと同時に全方位に嵐のごとく放たれるエネルギー弾。

「ぐぁあああああ」

「一夏！　くっ……」

ビームの嵐からは逃げ切ることはできず、2人はダメージを負う。すぐさま絢爛舞踏で回復を。そう思った2人の距離は遠かった。そして2人の間に入り込む福音。そのまま翼を一夏の砲口に向け、光を放とうとする。

「ちくしょう……」

そう呟いた一夏の下は紅く輝いていた。

「何だ、この歌は？　はっ、まさか……」

そして、聞こえてくる歌に箒は1つだけ心当りがあった。奇跡の力がここに降臨する。

◆◆◆

沈みながらも、ここで負けたくない、そう思った俺が出したのは2枚のコアメダル。それをトラ、バッ

タと入れ替え、スキャンする。

『タカ！　クジャク！　コンドル！　タ～ジャ～ドル～！！』

クジャクアーム、コンドルレッグが装着され、タカヘッドの部分はヘッドギアだけでなく、真紅のバイザーが展開される。

「はぁ！」

翼を広げ、浮上する。目の前に映った光景は一夏が打たれそうな瞬間。加速したまま俺は一夏の前に行ってタジャスピナーを構える。光弾はそれに弾かれて、消える。

「一夏、大丈夫かい？」

「え、英治、お前、大丈夫なのか……？」

「ああ。コイツならいける。一夏は下がってて。そのエネルギーじゃキツイでしょ？」

「……悪い」

一夏が篠ノ之さんと合流したのを見て、再び福音と向き合う。。

「さてと、反撃といかせてもらうよ」

福音が翼の砲門を開くと同時に、クジャクのようなエネルギー状の翼を開く。その翼は羽のような光弾であり、福音が光を放つと同時にそれを撃ち出す。

その瞬間、あちこちで両者の攻撃がぶつかり合い、爆発を起こす。

煙で姿を見失いそうになるけど、タカなら問題ない。タジャスピナーで火炎を放ちながら福音に近づく。

『！？』

突然現れた俺に福音は混乱するも、すれ違いざまにコンドルレッグで切り裂く。

「セイヤァ！」

旋回して、再びコンドルレッグで蹴る。今度はかかと落としのように上からだ。

福音はよろめきながらも、距離を取る。大技を出してくるつもりなんだ。でもね、周りはちゃんと見た方がいいよ。

「「コレは、お返しだぁ！」」

一夏と篠ノ之さんが加速しながら、福音の両翼を切り落とす。

「英治！」

「ああ、任せて」

『スキャニングチャージ！！』

福音はエネルギーの翼を生やそうとするけど、もう遅い。福音に向かって、加速。半回転して両足を突き出すと、つま先から膝にかけて、巨大な光の爪が現れる。

「はぁぁあああああ、セイヤーーーー！！」

プロミネンスドロップ。その一撃が決まった瞬間、福音は解除され、操縦者が落ちる。うん、落ちる、って、えぇぇぇえええええ。マズイ！

「ったく、ツメが甘いのよ、ツメが……」

「……油断大敵……だよ」

そう思ったのも束の間、操縦者は鈴がちゃんと抱えていた。残りの皆も無傷とはいかなくても、大丈夫みたいで、それを確認すると、一息ついた。

「これで、終わったな」

こうして俺達は旅館に戻ることに。でも、この時は勝利の余韻で忘れていたんだ。俺達は無断で出撃してきたってことを。

◆◆◆◆

「作戦完了、そう言いたいところだが、お前達は独自行動により重大な違反を犯した。帰ったらすぐ反省文の提出と懲罰用の特別トレーニングを用意してやるから、そのつもりでいろ」

「「「「「「「「「「……はい」」」」」」」」」」

帰ってきて、第一声がそれだった。かれこれ説教は続いていて、もう３０分くらいになるんじゃないかな。セシリアは慣れない正座のためか、顔を青くしていた。

「お、織斑先生。そろそろその辺で……。け、怪我人もいますし、ね？」

「ふん」

山田先生の発言を受けて、説教は終わったみたい。ありがとうございます、山田先生。

「あ、あの、それじゃ、皆さん、診断しましょうか。ちゃんと服を脱いで見せてくださいね。も、もちろん、男女別々ですからね」

一緒だったら困るんですけど……

「わかりました。じゃ、一夏、行こうか」

「ん、ああ。あ、口の中切れてる……」

立ち上がる俺達はそのままこの部屋から出ようとする。

「……しかしまぁ。よくやった。全員、よく無事に帰ってきたな」

織斑先生のその声はしっかりと皆の耳に届いていた。

◆◆◆

「なぁ、俺、皆を守れたんだよな？」

女子が診断している間、一夏が不意に問いかけてきた。皆を守れたかって、聞く必要もないと思うけどなぁ。

「そうでしょ。逆に一夏は守れなかったって思ってる？」

「いや。でも、俺さ、今まで守られてきてばっかりだったからさ、実感が沸かなかったんだ」

「一夏はさ、皆を守れたよ。実感があってもなくてもこれが事実だと思うよ」

「……そうか。サンキューな」

一夏はスッキリした顔で笑う。その後、自分達の診断が始まるまでただ雑談をしていた。さてと、疲れたから早く終わらないかなぁ。

◆◆◆

「今日も月は綺麗だな」

１人、砂浜で俺は波の音を聞きながらただずんでいた。本当は旅館から抜け出すのはいけないことなんだけど、考えたいことがあったからね。それに、一夏も海に行ったみたいだしね。

思い出すのは今日の戦い。ライドオーズのコンボの１つであるタジャドルを使って勝てた相手。今までのことを振り返って見る。突如現れた無人機、力に溺れた軍人、そして今回のＩＳの暴走。今まで、ライドオーズのコンボを使って切り抜けてきた戦いなんだ。なんか、行事がある度に何か起こってるような気が……

いやいや、今考えるのはソレじゃなくて。多分、これからも何か事件は起きる、そんな気がするんだ。オーズの力もあるけど、最悪、ＩＳを破壊して操縦者を殺しかねない気がするんだ。そうなると、ＩＳの事件のときはＩＳで対処するのが一番いいんだ。だったら俺はもっとライドオーズを使いこなせなくちゃいけない、いや、使いこなせるようになりたいんだ。義務とかじゃなくて、俺がやりたいことだからね。

まぁ、何が言いたかったのかって言うと、ライドオーズのコンボをもっと積極的に使った方がいいんじゃないんだろうかってこと。ライドオーズはコンボも亜種形態も使いこなせて、その性能を発揮できるはずだから。いざって時に愛機を使いこなせなかったからってのは、絶対嫌だしね。

考え事はこれくらいにして、少し風に当たったら部屋に戻ろうと思ったら、足音が聞こえてきた。

「む、英治。こんなところにいたのか。いいのか、教官に怒られるぞ」

「ははは、そんなことを言うラウラも同じだって」

そんなことを言うと、「む……」って黙られてしまった。

「英治は一体何してたのだ？」

「んー、ちょっと考え事かな」

「考え事か。私に相談するといい。嫁の問題は私の問題でもあるからな」

いや、嫁じゃないって。

「まぁ、その考え事ももう大丈夫だけどね」

「む……そうなのか」

大丈夫って言ったら少し残念そうな顔をされた。

「今度困ったことがあったらラウラを頼るよ」

「うむ。そうするといい」

満足そうに頷くラウラ。突っ込みたいところはいっぱいあるけど、今はいっか。

「あ、英治にラウラもここにいたんだ。探したよ」

「シャルロットか。今は嫁との時間なんだ。いくらお前でも……」

「いや、英治はラウラの嫁じゃないから……ってそうじゃなくて！英治はまだ誰のでもないから！」

「む、まだなのか？　だったら今から私のに……」

「しなくていいよ！」

いきなり始まる2人の口論。完全に俺、蚊帳の外なんだけど……

ドガァァンッ！

「ん、一体何なんだ！？」

突然爆発音が聞こえてきた。爆音がどんどん近づいてくる。

「え、英治、アレ！」

シャルが指差す方向には篠ノ之さんを抱える一夏を鬼のような形相で追うセシリアと鈴（ＩＳ展開済み）。

「一夏って段々こっちに近づいてきてるよね。このままじゃ僕達危ないじゃないかな……？」

「「うん」」

俺達3人は横に跳ぶ。瞬間、砂煙を上がるほどの勢いで走る一夏とすれ違う。

「英治、助けてくれぇ！」

「無理言わないで！」

「一夏、止まりなさい！」

「そうですわ！　それに篠ノ之さん、羨まし……ではなくて、ずるいですわよ！」

「……／／／」

一夏達が通り過ぎ去ったのを見送った後、部屋に戻ることにした。多分、いや、絶対織斑先生は今の騒動に気づいているはずだし。叩かれるのは嫌だからね。

「じゃあ2人とも、おやすみ」

「うん、おやすみなさい」

「うむ」

◆◆◆

翌日。旅館を出発したバスは休憩として、サービスエリアに止まっていた。ここで昼食にするらしい。

「一夏、大丈夫？」

隣に座るのは、ボロボロの一夏。結局、昨日あの後1時間くらい逃げ回って、織斑先生に見つかったそうだ。疲れた体に長い説教の

せいで、睡眠不足らしい。疲れも取れてないみたいだし。

「……これが大丈夫に見えるのか……？」

「……ゴメンなさい」

「ねぇ、織斑一夏君に火野英治君っているかしら？」

「「ん？」」

声の先にはカジュアルスースの金髪美人がいた。彼女は俺達と目が合うなり、手招きをしてきた。

「何だろう？　一夏、行こう」

「……ああ」

「君達がそうなんだ。へぇ」

「あの、貴方は？　それに俺達に何か？」

「ええ。私はナターシャ・ファイルス。銀の福音の操縦者よ」

「「え……」」

ちゅ。

混乱している俺達の頬に柔らかい何かが触れる。混乱してる俺達をよそにウィンクしたナターシャさんは告げる。

「これは私からのお礼よ。白いナイトさんに、赤いフェニックスさ

ん」

そのまま手をひらひらと振りながら去っていくナターシャさん。

一夏は手を振って、俺は頬に軽く触れながら見送った。2人とも混乱していたってことは同じだけど。

「「英治～」」

うぇ？

振り返ると黒いオーラと笑みを浮かべたシャルとラウラが……あはは。もう笑うしかなかった。隣の一夏も同じ状況みたいだったな。

Ｔｉｍｅ　ｊｕｄｇｅｄ　ａｌｌ（後書き）

今回で3巻終了。ここで書きたかったのはタジャドルは勿論、英治の決意でした。これからはライドオーズのコンボの出番が増えるかも……。まぁ、亜種中心で進むと思いますが。

次回からは現実とは真逆（？）の夏編に。夏編は予告していた通り風都編もあります。すぐにではないですけど。え、ＩＳ要素ないだろって？　そ、そこは、ねぇ。

それでは、意見、要望、感想等お待ちしております。

設定集？（前書き）

これ見る前に37部を見ることをオススメします。

設定集？

・ライドオーズ『タジャドル』

タジャドルコンボがＩＳ化。攻防両方に使えるタジャスピナー搭載。タジャスピナーからは火炎弾を放て、展開した光の翼からは羽型の光弾を放てる。遠近両方で活躍できるコンボ。元々英治はタジャドルを飛ぶイメージとしていたため、それも相まってか、タトバを除くコンボの中では一番使える可能性が。

必殺技はスキャニングチャージのプロミネンスドロップか、ギガスキャン。タカ、クジャク、コンドル、ギン×３のギガスキャンをマグナブレイズと呼ぶ。

・メダル設定

クジャク……タジャスピナー装備。ギガスキャン使用可能に。

コンドル……ラプタードエッジによる近接戦。わかりやすく言うと、ものを斬れるキックが放てる。わ　かる人はインフィニティジャスティスガンダムのグリフォンビームブレイド（脚のやつ）を想像してもらえば。

シャチ……未使用だが、もう載せます。待機中の水分を凝縮。それを打ち出す。要するに強力な水鉄
砲。

タコ……壁に張り付く、何かに張り付くことによってバランスを取るといったことが可能だが、飛行が　基本のＩＳバトルでは活躍の機会が……

カメ……完全防御型のアーム。両腕のシールドでの防御はシールドエネルギーの消費もなく、どんな攻撃も防げるっていう代物。零落百夜もこのシールドなら防げる程。問題点は攻撃力は皆無ってこと。

・ＩＳ『ＢＩＲＴＨ』

簪が伊達のバースを参考に組み上げたＩＳ。武装はバースのＣＬＡＷｓと同じだが、カッターウィングを標準装備している。また、セルメダルの消費なしでなおかつイメージすれば武装が展開なので、本家よりも便利な点もある。

またＣＬＡＷｓサソリもできる。この場合はカッターウィングは外れる。制御は自分で動きをイメージするか、あらかじめ組んでおいたプログラムに沿った動きをするかのどちらか。武装、デザインは本家と全く同じ。

・ＩＧ

クジャクＩＧ……クジャクコアで形成。モデルは『剣』のピーコックアンデット。武器はないが、羽を飛ばすことができる。

コンドルＩＧ……コンドルコアで形成。爪で攻撃をする。モデルは『クウガ』のラ・ドルド・グ。

タコＩＧ……タココアで形成。脚こと触手で攻撃する。モデルは『アギト』のオクトパスロード。

・ヤミー

ワニヤミー……ラウラの英治を倒したいという欲望から生まれたヤミー。ワニの持つパワーにより、オーズを苦戦させた。モデルは『ディケイド』より、アリゲーターイマジン。

設定集？（後書き）

現在の設定はこんな感じです。何か質問等あったら、感想でもメッセージでも何でもどうぞ。

暑さとうな重と白対紅（前書き）

Ｃｏｕｎｔ　ｔｈｅ　ｍｅｄａｌｓ
オーズが使えるメダルは……

タカ
クジャク
コンドル
クワガタ
カマキリ
バッタ
トラ
ゴリラ
シャチ
タコ
カメ

暑さとうな重と白対紅

もうすぐ夏休みっていう1日。さんさんと降り注ぐ日光に、じめじめとした暑さ。やる気がなくなりそうな天候だった。

こんな日もＩＳ学園は授業がある。でも、クーラーがあるから、気になることはあんまりなかったけどね。ちなみに今のが今日の最後の授業。あ～、今日はウナギでも食べたいなぁ……

そんなことを考えながら、授業を受ける。ＩＳ学園の食堂は何でもあるし、ウナギの蒲焼くらいあるよな。

「火野、暑いのはわかるが、授業中だ。集中しろ」

バシンッ！

痛っ！　頭を抑えながらすみませんと返す。織斑先生ってやっぱり読心術使えるよね？

◆◆◆

放課後、暑いって思うんだけど、今日も一夏のＩＳの特訓はある。一夏も頑張るよな～、そう思っててもその場所に足を進めている俺がいる。やっぱり強くなりたいからね。

「お、英治も来たのか」

「ん、まあね」

集まったのは1組の専用機持ち軍団＋鈴。今日はどんな特訓をしようかな。ひたすら模擬戦かな？　射撃の特訓が必要な訳じゃないし……

「なぁ、英治。頼みがあるんだけど……」

一夏が尋ねる。その目は真剣なものだったから、俺は続きを黙って促した。

「コンボで戦ってくれないか？　白式も第2形態移行したし、俺がどのくらい強くなったか知りたいしな」

「わかった。と言っても、できるコンボはタジャドルかガタキリバだけど」

「う。ガタキリバってあの人型ビットのやつだよな？　それは勘弁だ」

「わかったよ、じゃあタジャドルだね」

『タカ！　クジャク！　コンドル！　タ～ジャ～ドル～！！』

俺が飛び立つと同時に、一夏も白式の展開を終えていた。

「じゃあ、誰か審判よろしく」

「わかった。僕がやるよ。それじゃあ、始め！」

「行くぜ、英治！」

ガキィィン！

先手必勝ってばかりに振りかざしてきた雪片を左腕のタジャスピナーで受け止める。

「うぉおおおおお」

雪片に力がこめられるのがわかる。雄叫びとともに俺は少しづつ押されていく。このままだったら俺、不利だな……でも。

「甘いよ！」

一夏にキックをして、その反動を利用して宙返り。距離を取ると同時にタジャスピナーを突き出す。

「っ！　やばっ！」

右に、左に飛びながら放たれる火炎弾をかわす一夏。時には雪片で弾き、雪羅のシールドモードで防御しながら。じゃあこっちはかわせるかな？

光の羽を広げ、そこから光弾を放つ。最初はかわせていたんだけど、福音の光弾の雨に匹敵する数のそれに一夏も防戦一方となり、雪羅で防御するしかなかった。

そう言えば一夏が言ってたな。白式は第2形態移行になったら武装は増えたけど、燃費はさらに悪くなったって。

「はぁぁあああああああ！」

雪片と雪羅のクローモードの変則的な二刀流の一夏。瞬時加速をしているため、俺は反射的にそれを受け止めるしかなかった。とっさに水平に構えたオーズカリバー。ギリギリと押されてすぐに体勢を崩しそうだったけど、少しでも隙があればいいんだ。

「この距離ならバリアにも大ダメージだよな」

一夏に軽く左腕を当てる。そのまま、ダンッ、ダンッと火炎弾を2発、3発と打ち込んでいく。

「しまっ……ぐっ」

白式のシールドエネルギーが大きく減ったのを見て再び距離を取る。どうやら一夏のシールドエネルギーは残り少ないみたい。

（マズイな……もう雪羅は使わない方がいいな。零落百夜もできて1回か。本当にコイツは燃費が悪いよな）

再び加速してくる一夏と切り結ぶ。これで決められないってわかると一夏はすぐに離れていく。多分、タジャドルは武装が多いからだね。一夏が白式1本なのに対して俺はオーズカリバー、両足のクローにタジャスピナー。これで接近戦をすれば圧倒的に俺が有利かな。でも、一夏の白式は一撃でそれをひっくり返すこともできるのも事実だ。だから俺は油断したらいけないし、するつもりもない。

「さてと、そろそろ決めるよ、一夏！」

「おう、来い！」

雪片を構える一夏。カウンター狙いだろう。俺は1夏と距離を取

ってタジャスピナーを開き、セットしてる赤のコアメダルを3枚。
セルメダルを残った場所にはめて、スキャンする。

『タカ！　クジャク！　コンドル！　ギン！　ギン！　ギン！　ギガスキャン！！』

「はぁぁあああああ」

スキャンが終わると、赤い炎に包まれる。そのままタジャスピナーを突き出し、一夏に突撃する。

「セイヤーーーー！」

「おぉおおおおお！」

マグナブレイズと降りおろされた雪片。それがぶつかったとき、辺りは爆発に包まれた。それと同時になるブザー。

『勝者、火野英治』

ふぅ、何とか勝ったな。ふと一夏に目をやると、篠ノ之さん、セシリア、鈴に囲まれて何か言われてた。一夏の理不尽だって言いたげなことからどんなことを言われてるのかは想像がつくなぁ。

「お疲れ、英治」

「よくやったぞ。さすがは私のｙ「「だから嫁じゃないって」」…
…むう。何が不満なのだ？」

このやり取り何回目だろう？　いつまでたってもラウラは俺のこ

とを嫁って言うのだった。いつになったら止めてくれるのかなぁ。

◆◆◆

「はぁ、暑いからウナギが食いてぇと思った矢先にコイツかよ」

英治達が模擬戦してる頃、伊達はＩＧを相対していた。相手は推測できるようにウナギのＩＧ。英治と同じくウナギの蒲焼が食べたいって思ってた伊達にはどうリアクションを取るべきか迷う相手だった。

「ま、いっか。それじゃお仕事といきますか」

慣れた手つきでバースドライバーを腰に巻き、セルメダルを弾く。

「変身！」

キャッチしたセルメダルをドライバーに入れ、ハンドルを回す。

カポーンって音が鳴った直後、伊達の体はバースを纏う。

「おりゃあ！」

ヌルン

「くらえ！」

ヌルン

パンチ、キックと打撃をするバースだが、相手はウナギである。その体には粘膜があり、そのせいで拳も脚もすべり、満足な攻撃をできずにいた。そして攻撃に失敗して体勢を崩してる所を蹴り飛ばされる。

「いって～な。だったらコイツだ」

立ち上がりセルメダルを取り出す。格闘が効かなくても武器なら大丈夫だろうと言う、大雑把な考えから来たものだった。

『ドリルアーム』

ドリルアームを展開してＩＧに殴りかかるバース。ここで考えてみてほしい。ドリルとは先端を当てることから始める。相手がヌルヌルしていると……

「あ！　コイツもダメなのかよ。クレーンもショベルもダメだろうなぁ。仕方ないか、コイツは使い慣れていないんだけどな」

嫌そうな声で伊達はセルメダルを入れる。バースが持ってる唯一の斬ることができる武器を展開する。

『カッターウィング』

「おおっと」

飛び立つとき、バランスを崩しながらもバースは上昇する。ＩＧからある程度の距離を取ったところで静止。ここからどうするのか

を考え出した。そうは言っても、加速したままカッターウィングで攻撃する以外ないだろうが。

「さあて、こっからドンドン攻めるぜ」

急降下。すれ違いざまにカッターウィングをぶつけて、再上昇。そこから旋回、そしてもう一度切りかかる。

2度の攻撃を受けたウナギIGはセルメダルをばらまきながら転がる。体を構成するセルメダルが減ったため、IGの動きは鈍くなっていく。

「そろそろいいな。んじゃあ、とっておきのでいくぜ」

『ブレストキャノン』

ブレストキャノンを展開。IGがよろめいているうちにと、セルメダルを2枚、3枚と続けて入れていく。

『セルバースト』

1枚入れるごとにブレストキャノンの砲口は強く光っていく。エネルギーの充填が終わると、目標に照準をあわせて、引き金を引く。

「ブレストキャノン、シュート!!」

赤い光の流れに飲まれたIGは爆散する。

煙が晴れると、そこには大量のセルメダルと青のコアメダルが落ちていた。

『クレーンアーム』

「よっと」

クレーンアームを振り回して、セルメダルを回収する。一緒に回収したコアメダル、ウナギコアだけを手に取り、セルメダルは一気にミルク缶の方に投げる。大半のセルメダルは缶に入るのだが、缶に入らなくてそこら辺に落ちるものがでてくる。そのセルメダルはミルク缶の周辺に待機していたゴリラカンが投げ入れていく。

せっせと働くゴリラカンをよそに、伊達は背伸びをしていたのだった。

「ふぅ、お仕事完了ってな。今日も大量大量。これで一夏ちゃんの特訓もしばらくは心配ないだろうな」

ミルク缶を背負ってライドベンダーにまたがる。伊達はＩＳ学園に向かってアクセルを回すのだった。

◆◆◆

現在、夜の7時。晩ご飯だ、と俺は食堂に来ていた。今日はうな重にしよっと。

「お、火野、見つけたぜ」

「あ、伊達さん」

ほらよ、と手渡されたのはウナギのコアメダル。え、いつの間に？

「今日の昼過ぎってとこだな。いっつも火野ばっかりが戦ってるからな。たまには少し休め」

「はい、ありがとうございます」

ペコリとお礼を言う。これで青のコンボも可能か。後は白のコンボだけだな。残ったコアメダルは2枚。それとワースに取られたのが2枚。後4枚で俺が回収しなくちゃいけないコアメダルは集まるのか。

「せっかくだから、俺もここで飯にするかな。火野、お前何食うんだ？」

「俺は今日うな重にしようかなって思ってますけど」

「俺も日中もそう思ってたんだがよ、ウナギの怪人相手にしたら何ていうかよ」

苦笑いしながら伊達さんそう言った。まぁ、俺もタコＩＧと戦ったときはタコは当分、食べなくていいやって思ったしなぁ。

結局伊達さんは焼き魚定食を注文していた。伊達さんがここにいるのが、珍しいからか、食べてるとき、すっごく視線が集中していたよ……

暑さとうな重と白対紅（後書き）

徒然なるままに書いたこの話。作者のウナギ食べたいなぁって思いも混ざっていますが。大学生には手が出せない代物さ。それに今時期じゃないですしね。

今回でシャウタが可能になりましたけど、サゴーゾとブラカワニをどのタイミングで出せばいいのか悩み中。下手するとプトティラ以降になってしまいそうですから……

それでは、意見、要望、感想等お待ちしております。

内気な少女とストーカーと眠れない夜（前書き）

Ｃｏｕｎｔ　ｔｈｅ　ｍｅｄａｌｓ
オーズが使えるメダルは……

タカ
クジャク
コンドル
クワガタ
カマキリ
バッタ
トラ
ゴリラ
シャチ
ウナギ
タコ
カメ

内気な少女とストーカーと眠れない夜

「はぁ、今日も駄目だったな……」

寮の自室で1年1組所属の白藤泉はそんなことを呟いていた。泉は気になる人がいた。その名も我らが一級フラグ建築士こと織斑一夏であった。

彼女がそんな想いを抱いたのはひと月くらい前の話。ベタな展開であったが、廊下でぶつかってしまったことだった。元々、泉の不注意でぶつかったのだが、一夏は「大丈夫か？」と聞いて、手を差し出した。今まで女子校育ちであった泉にとって家族以外の異性に優しくされたのは初めてのことだった。

それ以来、泉は気が付けば一夏を目で追っているのであった。いわゆる一目惚れである。

泉の性格は内向的であるため、いきなり告白する勇気などなかった。だからまずは少しずつ仲良くなることから始めようと思っているのだが、結局声をかけることはできない。明日こそは、それを何回繰り返してきたのだろうか？

おまけに一夏の周りには箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラといった専用機持ちの奇麗所が集まってくる。全員が一夏に想いを寄せているわけではないことは分かっているのだが、どうしても彼女達と自分を比べてしまい、自身を無くすのだった。

◆◆◆

「はぁ、織斑君……」

とある日の放課後、泉はアリーナに向かう一夏一行を教室の廊下から見ていた。結局今日も挨拶すらできなくて過ぎていった。

「私のバカ。今日こそは今日こそはって言ってるのに～」

頭を抱えて落ち込む泉。今日は部活も休みだから寮にさっさと戻ることにした。

「おい、ちょっといいかァ」

不意に声をかけられた。泉の視線の先には蛇柄のジャッケットを着た目付きの悪い男がいた。

「は、はい。え、えっと何かご用でしょうか？」

「独占欲か。面白いじゃねェか。その欲望、開放しちまいなァ」

「へ？　キャ！」

いきなり男が銀色のメダルを指で遊びながら近づいてくるのにびっくりして目を閉じる。だが、いつまで経っても男に触られてはいないし、音もしない。不思議に思った泉が目を開けるとそこには誰もいなかった。

「あ、あれ？　さっきまで男の人、いたよね……？　あれ、私疲れてるのかな？」

今日は早く寝ようと決めた泉だった。

◆◆◆

「はぁ……はぁ。今日も疲れたぜ……」

息も絶え絶え、白式を展開したままアリーナに倒れ込む一夏。今日はシャル、鈴、篠ノ之さんの順番での3連戦だったからね。

増えた武装の扱い、より酷くなった燃費とかの問題に苦しむ一夏。第2形態移行ってプラスのイメージしかなかったけど、必ずしもいいものってわけじゃないんのか？　それとも白式が特別なだけ？

「なさけないぞ、一夏。その程度でへこたれるなど。それでも男か！」

「ちょ、箒、無理言うなよ」

「一夏さん、白式のエネルギーの分配の調整が必要ですわね。よろしければ今度、2人きりで……」

「セシリア、アンタ何言ってんのよ！　あたしが教えるわよ。なんて言ったって幼馴染だからね」

「待て、幼馴染だと言うなら私もだぞ」

平常運行の一夏達を見て苦笑する。ホントに相変わらずだよなぁ。

「アハハ、一夏、大変そうだね……」

苦笑いのシャルに、無言だけどジト目のラウラ。俺も苦笑いでその光景を見ていた。まあ、あの光景が一夏らしいんだけどね……

「英治、もうこんな時間だし、ご飯にしよ？」

「ん、そうだな。じゃあ、着替え終わったら入口に集合ってことで」

「じゃあ、後でな」

一夏一行がいつまで経っても終わる気がしなかったから、先に食堂に行くことにした俺達3人。とりあえず一夏達に先行ってるって言ったんだけど、聞こえていないだろうな……

「お、おい！　英治、シャル、ラウラ。助けてくれ～！」

ピットに戻ってる途中、こんな声が聞こえてきたのは気のせいかな？

◆◆◆

「はぁ～、サッパリした～」

時間はかなり飛んで、晩ご飯後。今日は男子が大浴場が使える日だったので、俺達はそこに行ってきた。一夏程風呂が好きなわけではないけど、やっぱり風呂っていいものだね。疲れがとれるからね。

「……？」

急に立ち止まり周りを見回す一夏。どうしたんだ？

「いや、何かさ、誰かに見られてる気がして……」

そう言われて俺も周りを見回すけど、何も見えないな……。一夏の気のせいなのかな？

「う～ん、そうは言っても誰もいないみたいだけど……」

一夏は腑に落ちないような顔だけど、「まぁ、そうかもしんねぇな」と言って気にするのは一応、やめたみたい。

「じゃあ、一夏、おやすみ」

「……ああ、おやすみ」

一夏と別れる。男子の部屋は1人部屋のままで、俺も一夏も一人部屋のままだった。う～ん、正直言っちゃどっちでもいいんだけどね。

◆◆◆

現在、夜の0時。勉強が本分である学生の俺は宿題をやっていた。
そんな中、誰かがノックしてきたんだ。誰だ、こんな時間に？

コンコン

「は～い」

ガチャ
ドアを開けると、そこには……

「あれ、一夏。どうかしたの？」

何だか少しやつれた顔の一夏がいた。

「……ああ、英治、悪いけどこの部屋に泊めてくれないか？」

一顆は部屋に戻ってからもずっと視線を感じていたみたい。どうにか気にしないで眠ろうとしたんだけど、我慢の限界になったそうだ。それで俺の部屋に避難してきたってわけだ。
困ってる一夏を放っておけなかったから、部屋に入れる。

「まぁ、自由にしていていいよ。俺は宿題しなきゃいけないし……」

「ん、そうか。手伝おうか？」

「いや、大丈夫だよ。もうすぐ終わるし」

そんなこんなで宿題を終わらせて寝ることに。それで横になった

のはいいんだけど……

「……ねえ、一夏？」

「……何だ？」

「……何かいるよね、コレ」

「……ああ」

謎の視線を感じる。でも何も見えないっていう気味の悪い状況だった。それで思うように眠れない夜を過ごすのだった。

◆◆◆

「結局、眠れなかったな……」

「ああ、具合悪い……」

寝不足の俺達。気が付けば謎の視線は消えていてその安堵感で眠りそうになったけど、授業があるから眠るわけにはいかなくて、頑張るしかなかったのだった。体力的よりも精神的に疲れたんだよ。これぱかりはどうしようもなくて……ああ、辛い。

「と、とりあえず授業の準備しなきゃ……」

「お、おう。じゃあ俺は部屋に戻るぜ……」

フラフラ、ヨロヨロと動き始める俺達。今日は色々と無理っぽいな……

「朝ごはん食べなきゃ……」

食堂に向かう俺。でもその足はおぼつかなくて、気が抜ければ、バタンと倒れる気がした。

「やあやあ、ひのひの。おはよ～なのだ～」

「ん、のほほんさんか……おはよう……」

「だ、だいじょうぶ？　ひのひの、目のくますごいよ～」

「……正直、大丈夫じゃない……」

気力だけで食堂に向かう。すれ違う皆から心配されたんだ。皆の優しさがよくわかるよ……

「え、英治。だ、大丈夫！？」

「英治か。……って、どうしたんだ！？」

「ハハハ、ちょっとね」

フラッ、バタンッ！

「「英治！！」」

食堂に着いた途端、意識が……もう駄目、おやすみなさい…ｚｚｚ

「火野、いるかぁー？　って、おい！　大丈夫か！？」

「だ、伊達さん。え、英治が！」

「よ、嫁は大丈夫なのか？」

「ああ、コイツは寝てるだけだから大丈夫だ」

◆◆◆

「……ん、ここは？　知らない天井か……？」

医薬品のにおいがする空間。部屋の色は一言で言うなら、白。そんな部屋って言ったら保健室しかないよな。

隣のベッドを見ると、一夏も寝ていた。一夏も限界だったのか？

「お、気がついたか」

「ん、伊達さん。俺、どのくらい寝てたんですか？」

「午前一杯だな。もう午後の授業は始まっちまってるぞ」

「え、そうですか？　じゃあ、急いで行かないと」

起き上がろうとする俺をなだめながら伊達さんは話があるって言った。

「話って何ですか？」

「おう、今朝の話なんだがよ。ＩＳ学園にヤミーがいたみたいなんだ。でもすぐに反応を失っちまってな」

カンドロイドを使って探し回ってるみたいなんだけど、未だ見つかってないようだ。

「そういうわけだから、お前はヤミーを探すぞ」

「わかりました」

「一夏ちゃんも寝てるだけだから、このままでも大丈夫だ。そういうわけで、俺達は行くぞ」

というわけで、俺は学園の南側、伊達さんは北側を探すことに。見つかるといいんだけど。

◆◆◆

一夏が眠る保健室。扉が開き、何者かが入ってくる足音はする。

だが、その姿は見えない。

「……」

謎の影は一夏を見つめて、そのままどこかへ消えていく。

◆◆◆

「織斑君、どうしたんだろ？　それに火野君も……」

泉は授業を受けながら、そんなことを呟いていたのだった。

そして今日見た夢のことを思い出した。ただベッドで横になってる一夏を見つめていただけだったものだけど。それでも一夏の側にずっといれた気がして、満足だったが。

「……？」

一瞬、とある光景が見えた。一夏が保健室で眠っている光景だった。彼の姿を見ると、もっと側にいたい。彼が自分だけのものだったらなぁ、そう思い始めたのだった。

内気な少女とストーカーと眠れない夜（後書き）

最近、戦闘描写がスランプです。何かいつも同じような表現になりますしね。語彙力か表現力が足りないんだろうなぁ……

とりあえず久々の出番のワース。そういや行ってませんでしたが、ワースもギルも初登場時に持ってたメダルはそれぞれが2枚ずつの6枚です。

つまり、現在は……

ワース……コブラ×2　カメ　ワニ×2

ギル……プテラ×2　トリケラ×2　ティラノ×2

こういう感じですね。最初から全部持ってたらオーズが勝てませんからね（笑）

それでは意見、要望、感想等お待ちしております。

見えない敵と灼熱コンボと少女の決意（前書き）

Ｃｏｕｎｔ　ｔｈｅ　ｍｅｄａｌｓ
オーズが使えるメダルは……

タカ
クジャク
コンドル
クワガタ
カマキリ
バッタ
トラ
ゴリラ
シャチ
ウナギ
タコ
カメ

見えない敵と灼熱コンボと少女の決意

「ヤミーはここにはいないみたいだな。次行こ。……ん？」

俺の頭の上をくるくると円を描くように回る影があったので上を見ると、バッタカンを抱えたタカカンがいた。落ちてくるバッタカン。それをキャッチすると、通信がつながった。

『火野！　保健室の方にヤミーの反応があった。急ぐぞ』

「な……！」

急がなきゃ。保健室に向かって走り出す。

「はぁ…はぁ…一夏、大丈夫！？」

「ん、どうしたんだ、英治？　というか、どうして俺はここで寝てたんだ？」

「そんなことより、一夏、ここにヤミーがいたはずなんだけど……」

「え！！　嘘だろ……？　全然気付かなかったぞ。それに何ともないしなぁ」

「は！？」

何ともないってどういうことだ？

『火野、まだその近くにヤミーはいるみたいだ』

「え、でも何もいませんよ」

『いや、反応はあるんだけどよ……』

この近くにヤミーはいる。でも、姿は見えない。ん、待てよ。もし昨日から一夏を見ていた謎の視線がそのヤミーだとしたら。そのヤミーが元々見えないヤミーだったのなら……

やってみる価値はあるな。

「変身！」

『タカ！　トラ！　バッタ！　タ・ト・バ　タトバ　タ・ト・バ！！』

タトバコンボになった俺はタカヘッドに力を集中させる。そして浮かび上がる影が1つ。その姿はカメレオンのようだった。カメレオンだったのなら、相手が見えなかったのも納得かな。周囲の色にあわせていたんだから。

「でも、こいつ。誰の、何の欲望から生まれたんだ？」

一夏の近くにいたってことは一夏に関係したことのはずだよな。ま、今はそれよりもヤミーを倒さなきゃな、って！

「のわぁあ！」

構えを取った俺をよそにカメレオンヤミーはその長い舌で一夏を捉え、逃げ出した。

「あ、待て！」

幸いなことにカメレオンヤミーは足が速いってわけじゃないから追いつくのは楽だった。

「おりゃぁあ！」

ヤミーに飛びかかる。足を掴むことができて、ヤミーは転ぶ。今の衝撃で一夏に巻き付いてた舌はほどかれる。よし、後は倒すだけだ。

「うおっ！　イタタタ。助けるんだったらもっと丁寧にやってくれよ」

「あ、ゴメン。とりあえず下がってて」

そのやり取りの間にヤミーは姿を消す。でも、タカヘッドなら大丈夫だから。

「そこ！」

右後ろにバッタレッグで跳躍。展開したトラクローを振るう。途端、ヤミーの姿は現れて、セルメダルは飛び散らしながら後ろに吹っ飛ぶ。

そのまま追撃をする。クローで何回か切った後、蹴り飛ばす。ヤミーは反撃しようと拳を振りかざすけど、それを左腕で受け止める。

「セイヤッ！」

そのまま右ストレート。俺が有利なのは一目瞭然なんだけど、何か嫌な予感がするんだ。

ヤミーは舌の伸ばして攻撃してくるけど、それを切り落として、距離を縮めてく。もう少しで勝てる、そう思って意識をヤミーだけに集中させていたからか、何かが降り立った音には気付かなかったんだ。

「俺も混ぜてくれよォ」

背後からの声に振り向くと、そこにいたのはこの前のグリード。

「……ワース」

「さァ、始めようじゃないかァ」

「くっ……」

いきなり殴りかかってくる拳を受け止めたけど、予想以上の重さに体勢を崩しそうになる。

「まだまだァ」

「くっ、がっ……」

ワースの猛攻に防御しきれなくて、直撃をもらう。鳩尾に当たった拳は俺を大きく吹っ飛ばした。コイツ、やっぱり強い……

でも、負けるわけにはいかないからね。トラクローで反撃を始めるけど、ワースの腕の腕甲に止められる。コイツ、やっぱり堅いな……

「はぁ！」

ワースを蹴った反動で距離を取る。そしてワースと向き合う。

「英治、後ろだ！」

「え？　うわぁああ」

一夏の声に気を取られて後ろを向くと、すぐそこにカメレオンヤミーが。火花を上げて転がる俺。コンボを使うか？　ワースの防御を何とかできそうなコンボはガタキリバか？　いや、待てよ。もしかしたら……。そう思ってタカヘッドの能力を使う。視界に写すのはワース。狙いの物は……よし、大丈夫だ。

「うぉおおおおお」

雄叫びを上げながらワースに大振りで殴りかかる。だけど、その拳はやすやすと掴まれて、もう片方の腕で首を掴まれる。

「思ったより楽しめなかったなァ。がっかりだ……」

「くっ、あぁ……」

「英治！」

首を掴まれたまま持ち上げられる。俺の体が地面から離れてくごとに呼吸が苦しくなる。一夏が声をあげるけど、大丈夫だから……

「終わりだァ、オーズ……ガハッ」

うめき声と同時にワースの腕から力が抜ける。突き付けた左腕は目的を果たせたみたいだ。左手に掴んである2枚の黄色のコアメダルを見て、そう思った。

「ふう、……防御されるなら反応できないスピードでってね」

呼吸を整えてベルトに敵から奪った、いや、返してもらったメダルを入れる。

『ライオン！　トラ！　チーター！　ラッタラッタラトラーター！！』

「はぁぁあああああああああ、はっ！！」

ラトラーターになると同時にライオディアスを使う。メズールのようにコアメダルを奪うことはできなかったけど、隙を作るのには充分だ。

チーターの速さでワースの後ろに回り込んで、一閃。次にヤミーに攻撃。

「くっ。そうこなくちゃなァ、オーズ！」

ダメージを食らいながらも狂気の笑みを浮かべるワース。アイツにとっては戦いこそが求めるものなんだろう。それこそ戦いが生きる証って程に。だから、俺はコイツには絶対負けられないんだ。手を休めないでワースに攻撃を続けていく。戦いなんていいものじゃないんだから。

「セイヤッ！」

体勢を崩したところに体重を乗せた一撃を放つ。ワースはそれに反応しきれなくて、火花を上げながら、後ろに2、3歩とよろめく。

「ちっ……コイツは分が悪いな…中々楽しめたぜ、オーズ」

セルメダルを落としながらワースは去っていった。一難が去ったことに安堵しながらも、気を引き締めてヤミーを向き合う。だけど、そのヤミーはもうボロボロでもう少しで倒せそうなところだった。自分の味方が逃げたことを見ると、逃げようとするヤミー。でも、逃がさない！

『スキャニングチャージ！！』

「はぁぁあああああ」

両腕で円を描くような構えを取ると、黄色い光の輪が現れる。

「セイヤーーーー！」

輪を1枚くぐるごとに俺は速くなっていく。ヤミーは走り出すけど、もう遅い。最後の輪をくぐり抜けると同時に両腕を振り下ろす。X字の傷を背中に刻み、ヤミーは断末魔を上げる。

「ふぅ、疲れたぁ……」

ヤミーの爆発を背に、俺は変身を解いた。一夏も怪我はなくて、こっちに笑顔を向けてくる。

「おい、火野、一夏ちゃん、大丈夫か？」

「伊達さん、襲いですよ」
「おう、ワリイワリイ」
伊達さんは誤魔化すように笑う。まぁ、何とか撃退できたからいいんだけど……
結局、誰がヤミーの親だったんだ？

◆◆◆

「それにしてもすっかり今日1日やすんじまったな」
「まぁ、そうだね。でも、仕方ないよ。ヤミーにはそう簡単に対応できるわけじゃないから」

今回の顛末を織斑先生に報告した後、俺達は雑談をしながら廊下を歩いていた。時刻はもう放課後。教室や廊下にいる人もまばらになって、それぞれが部活なり、アリーナなり自分の活動場所に移動していた。一夏の特訓も今日はお休みで、俺達はこの後、どうするかを考えていた。

「あ、俺教室にちょっと用事があるんだった。じゃ、俺はこっちに行くぜ」
「うん。俺は伊達さんのとこに行くかな。今回のことで話したいことがあるしね」

一夏と別れて、保健室に向かう。多分、これからワースは活動を盛んにしてくるはず。だから俺達も対策をしておかなきゃな。

「伊達さん、います？」

「おう、火野か。いいとこに来たな」

伊達さんも俺に聞きたいことがあったみたい。何だろうと思って伊達さんを見ると、その手には2本目のバースドライバーがあった。

「それってプロトタイプの方ですか？」

伊達さんは頷いて、続ける。一夏自信が襲われるのがこんなに早くだと思わなかったこと。一夏本人にベルトを託していいのかどうか、と。

「火野、お前、一夏ちゃんについてどう思う？」

「どうって言われても……一言で言うならまっすぐなやつですね」

誰かを守りたい。一夏はそう思って無茶はするけど、力の使い方を間違えるようなやつじゃないのは確かだから。多分、力の重さもわかってるはず。

「なるほどな。ま、もう少し考えてみるさ」

この話は終わりで、この後これからのヤミー、ＩＧ対策をどうするのかを話しあったんだけど、カンドロイドの偵察くらいしか発見手段は思いつかなかったのだった。グリードそのものを発見する方

法があればいいんだけどな。

◆◆◆

英治達が話してる頃、一夏は教室に着いていた。さっさと用事を済ませて帰ろう。一夏はそう思っていたのだった。

「あ、あれ、織斑君、どうかしたの？」

「ん、ああ。ちょっと忘れ物しちまってな」

一夏に話しかけてきたのは泉だった。彼女はちょっと緊張気味なのだが、一夏は気づかない。そのまま自分の席に行って、忘れ物を手に取る。

「えっと、今日倒れたみたいだけど、大丈夫なの……？」

「大丈夫だぜ。寝てたら楽になったしな。じゃあ、俺は行くよ。じゃあな、白藤さん」

「……う、うん！　また明日！」

歩きだした一夏の背中を見送りながら泉は心の中でガッツポーズをするのだった。一夏と少し仲良くなれた気がしたからだ。

「この調子でもっと仲良くなれたらな……」

夕暮れの中、彼女は呟いた。彼女がその願望を叶えるのかどうかは、彼女次第だろう。

見えない敵と灼熱コンボと少女の決意（後書き）

とりあえずラトラーター奪還完了の巻。
せっかくだからヤミーも出そう↓じゃあ、どんな欲望？↓一夏が好き。でも面と向かえないような子のか、一夏ハーレムに嫉妬のどっちかだな↓書きやすさから現在に至るのだった。

ちなみにほぼ即興で生み出したキャラ、白藤泉についてですが。今後の登場は未定です。とりあえず一夏に純粋に優しい内気なキャラがＩＳヒロインとかぶらないので……
名前の由来はオーズのキャラから。“白”石千代子。後“藤”慎太郎。“泉”比奈から取りました。

次回からは風都編。キャラだけじゃなく、ＩＳ戦闘もちゃんとありますよ。プロットが出来てても文を纏めるのに苦戦中。
ＩＳ４巻の話はほぼ飛ばす形になります。そこらへんの詳しい設定は次回の後書きもしくは前書きで。

それでは感想等お待ちしております。

Fを見に行こう／動き出す者達（前書き）

Ｃｏｕｎｔ　ｔｈｅ　ｍｅｄａｌｓ
オーズが使えるメダルは……

タカ
クジャク
コンドル
クワガタ
カマキリ
バッタ
ライオン
トラ
チーター
ゴリラ
シャチ
ウナギ
タコ
カメ

Fを見に行こう／動き出す者達

「ん～。何かないのかな？」

夏休みに入ったある日。シャルは雑誌に目を通していた。流行りをチェックする。女子としては大事なことなのだ。話題の品やスポット。そういうものを女子は気にするものである。同室のラウラはそういうのに疎いのだが……

「ん？　これは……！」

ページをめくるシャルの手が止まる。そこには大きく、「あなたの恋が叶う」と書かれていた。

「何々。風都タワーの展望室でふうと君と写真を撮ったカップルは結ばれるだって……」

―少女妄想中―

『英治、花火綺麗だね』

『うん、そうだね。でも、シャル、君の方がもっと綺麗だよ』

『え、英治ぃ……／／／』

見つめあう2人。そして花火を背に、2人の唇は重なる。

「……な、何をまた考えてたんだろうね、僕は……」

そんなことを言っても、まんざらでもない顔のシャルだった。

「あ、でも展望室はチケットがなきゃ入れないのか……アレ？」

そういえば、そう思ってお財布を取り出したシャル。この前ちょっとしたアルバイトをしたときに貰ったチケットがあることを思い出したのだ。

チケットをよく見ると『風都タワー展望室入場券』と書かれていて、日にちも花火大会の日だった。アルバイト先の人に感謝して、その日の予定を考えるシャルだった。

ちなみにそのアルバイトとはメイド（&執事）喫茶でのことだったのだが、その話は別の機会にしよう。

予定を立てたシャルは英治を誘うことに。自分の敵であるラウラ、簪とは差をつけなければいけないからだ。そして、英治を徹底的に振り向かせなければいけない。英治は鈍感っていうよりもヘタレ、そう表すのが適切だろうとシャルは思っている。英治は「もしかして俺に好意を寄せてるんじゃ」とは思うが、自信がないためか、それをすぐに否定する。それとどこか自分から恋愛から遠ざかろうとしているような気もしたのだ。

「とにかく頑張らなくちゃね」

自分を奮い立たせるシャル。ラウラ、簪は共にこういうのに興味はないだろうとシャルは判断していたのだった。そのままデートのプランを考える。デートの光景を想像して頬を緩ませたりしていたか、彼女は気付かなかったのだ。自分の背後にいた銀髪の少女に。

「それはそうと、風都ってどんな所何だろう？」

気になったシャルはページをめくる。偶然にもその雑誌では風都特集なるものをやってたのだった。

「どれどれ……え、これは……」

シャルが見つけたものは風都の都市伝説だった。ただの都市伝説なら気にはしなかっただろう。でも、そこに書かれていたものに気になるものがあった。『仮面ライダー』という言葉が。

「シャルロットめ。嫁を勝手に連れてくつもりだな。だが……」

気配を消したまま部屋を出たラウラはＩＳのプライベート・チャンネルを開く。相手は自分のライバルでもある水色の髪をした少女。だが、今の状況で一番協力しやすい人物だった。

◆◆◆

「ふっふーん」

上機嫌で寮の廊下を歩く鈴。彼女の向かう先は一夏の部屋。

（これさえあれば……一夏と……）

とある雑誌で読んだ恋が叶うおまじない。それを実践するためには一夏とある場所に行かなければいけない。そういう訳で一夏を誘うために鈴は足を進めてく。

（それにしても暑いわね……クーラーくらいつけなさいよ）

エアコンがかからない廊下にイライラしながら歩いていたが、段々とそのイライラは別の方向に向き始めたのだ。

何で遊びに行くときは自分から誘わないといけないのか。たまには一夏から誘え、と。

「あれ、鈴、何してんだ？」

「い、い、一夏!？　ア、アンタこそ何してんのよ!？」

「いや、山田先生に呼ばれて出さなきゃいけないものがあったからな」

「ふ～ん」

周りには自分達以外誰もいない。今がチャンスと思い、鈴は一夏に話しかけようとする。

「い、一夏。あのさ……」

「ん？　それにしても暑いな～今日。ここじゃなんだし俺の部屋に行こうぜ。すぐだしな」

「い、いいわよ。暑いんだから何か冷たいの出しなさいよ」

頷いて一夏歩きだした一夏に着いていく。心の中で鈴はこれってチャンスなんじゃ、と思っていた。でも一夏の部屋で2人きりになることを急に意識し始めてしまったのだ。ただ遊びに行くのを誘う

だけなんだからと自分を落ち着かせようと鈴は首を振る。

「鈴、どうかしたのか？」

「何でもない！　何でもないから！」

「……そうか？」

自爆しそうな鈴であったが、相手が一夏だったからかこれ以上気にされることはなかった。

（全く。まあいいわ。アンタとここで写真を取れば……）

そう思う鈴の手に握られていたのは2枚の『風都タワー展望室入場券』と書かれたチケットだった。

◆◆◆

「う～ん、夏休み、何するかな……？」

俺、火野英治は自室で夏休みの予定を考えていた。残ったＩＧは後2体。それとグリード。いや、それだけじゃない。前に俺達を襲ってきたやつがいる。確か、財団って言ってたよな。これからどうやって戦っていくか……？　グリードは欲望がある限りヤミーを作り続けるし、財団の方は名前からして人数は多そうだ。対してこっちは俺と伊達さんだけ。苦戦は必至だろうな。

ん、待てよ。そういえば『風都』って街に仮面ライダーがいるんだったよな。その人にも協力してもらえないかな。

「よし、時間もあるんだから風都にでも行ってみるかな」

そうと決まればいつがいいかな。せっかく行くんだから観光もしたいしな。え～と、何か情報誌は……ないや。

コンコン

「英治、いる？」

「ん、いるけど。入ってきていいよ」

お邪魔します、と言いながら入ってきたのはシャルだった。何だろ？

「あ、あのさ、英治。そのよかったら僕と旅行に行かない？」

旅行？　どこにだろ？

「風都ってとこなんだけど、今度花火大会があるんだよ。それに展望室のチケットも貰ったから、どうかなって思って」

「え、風都？　偶然だね。俺もそこに行きたいって思ってたんだよ」

「それってこの記事のこと？」

そう言ってシャルが見せてくれたのはある雑誌の１ページ。そこには風都の都市伝説として仮面ライダーがいるというものだった。

確か、仮面ライダーWだったよな。
この後は2つ返事で風都に行くことが決まった。今週の日曜日だな。今日が火曜だから5日後か。楽しみだな、花火大会。

◆◆◆

『前も言ったはずです。我々財団Xはガイアメモリから手を引いた、と』

「ああ、それは何回も聞いたさ。だが、俺達の新型メモリを見れば考えが変わるだろ」

どこかの研究所。通信器を持った男が別の誰かと通信をしていた。

『確かに貴方達の新型メモリのカタログスペックは高いでしょう。でも、実績もないものを我々はそう簡単に採用する気はありません』

無機質な声で淡々と答える相手に男は面白くなさそうな顔をする。

「だったら成果を見せればいいんだろ。じゃあ、こうしよう。俺達は風都の仮面ライダーを倒す。アイツらは財団にとって邪魔な存在だろ？　ソイツらを消せば俺達の力は証明できるし、財団にとって邪魔な存在も消える。両者にとってお得だろ？」

『……』

しばしの沈黙。考えが纏まったのか、通信先からの声がする。

『わかりました。では、ご自由にどうぞ。ああ、それとついでに財団が開発した新型のＩＳのテストもしてもらえませんか？　その条件を飲んでいただければ最低限の支援はしますが、いかがです？』

「ふん、いいだろう。テストと言ったな。何をすればいいんだ？」

『いえ、ただＩＳを起動させてもらえば結構です。無人機ですからね』

男の肯定の返事を受けた後、通信は切れる。

「おい、お前ら。始めるぞ、新しい世界を」

男の呼び掛けで集まる９人。『ＮＥＷ　ＷＯＲＬＤ』を名乗る組織も風都を目指すことになったのだ。

◆◆◆

「しかし、よろしかったのですか？　あの者達を風都に行かせて？」

「構わないですよ。仮面ライダーを倒してくれると言うのなら。それにＩＳの実験もしたかったのは本当ですしね」

「はぁ……」

財団の本部。そこで上司と部下の2人が話していた。

「新型って言うと、ＩＳコアではないコアを使った無人機ですよね」

部下が指した方には1機のＩＳがいた。禍々しいデザインのそれは今には何かを破壊しそうな気がして、見るものに畏怖の念を与える。そのカラーリングでもある紫色がその禍々しさを強調してるのだろう。

Fを見に行こう／動き出す者達（後書き）

今回から始まりました風都編。そうは言っても風都に着いてすらいませんが……

時系列としてはＩＳ４巻のシャルとラウラの買い物回以降。ただし鈴とセシリアのプールの件はなし。代わりに鈴は展望室のチケット入手、そんなもんですね。
Ｗ側は本編（ＡｔｏＺ込）→照井と亜樹子の結婚式→アクセル、エターナルです。

今回の設定はこんなもん。後は進むたびに載せていきたいと思います。

それでは感想等お待ちしております。

2組のS／忍びよる魔の手（前書き）

Ｃｏｕｎｔ　ｔｈｅ　ｍｅｄａｌｓ
オーズが使えるメダルは……

タカ
クジャク
コンドル
クワガタ
カマキリ
バッタ
ライオン
トラ
チーター
ゴリラ
シャチ
ウナギ
タコ
カメ

「ここが風都か……」

電車に揺られ、たどり着いたのは風都。あちこちに風車があって、いかにも風の街って感じだな。

「綺麗な街だね。花火大会までは時間があるし、どうしようか？」

隣のシャルが尋ねる。やっぱり観光だよな、せっかく来たんだし。あ、でもどこに行けばいいのかな？

「う～ん。美味しい和菓子屋があるんだから、そこに行ってみたいかな」

「和菓子屋ね。それってどこにあるかわかる？」

「……アハハ……」

「まぁ、気にしないで。多分、地図があるはずだからそれ見てから行こうか？」

早速地図を探すために辺りをキョロキョロと見回す。地図は……あそこだね。ん、あれは……？

「え、英治……」

「う、うん。わかってる。とりあえず見なかったことにしよっか」

コクリと頷くシャル。俺達の視線の先に見えたのは黒いオーラを放つポニテと金髪だった。どう見ても俺達が知ってる人なんだけど……

そのストーカー2人は柱や自動販売機の影に隠れながらコソコソと進んでいく。周りの人はその怪しい行動を黒いオーラに引いて、一定の距離を取ろうとしていた。

「あの2人には悪いんだけど、知り合いだって思われたくないよね……」

2人、篠ノ之さんとセシリアから目を逸らすシャル。俺も今の2人とは関わりたくないって想いが強くて、黙って頷き2人から距離を取る。

「あの2人がいるってことは、もしかして……」

「うん。箒とセシリアが向かってる方向には白式と甲龍の反応があるよ」

「やっぱり……」

俺ができるのは、一夏が後ろから刺されないように願うことくらいだよな……

「とりあえずセシリア達も行ったみたいだから、俺達も動こうか？いつまでもここにいるわけにはいかないしね」

「う、うん。そうだね」

気を取り直して地図の所に向かう俺達。でも、俺達はセシリア達に夢中で、気付かなかったんだ。後ろから俺達を付けてきている人達がいるってことに。

◆◆◆

「目標は行動を開始した。追跡を続行する」

「……周りの視線が、痛い……」

英治とシャルが歩きだした後、物陰からひょこって顔を出したのはラウラと簪。この2人が組んで行動してるのは、数日前に遡る。

シャルロットが英治と風都にデートに行こうとしているのを妄想中の本人から知ったラウラはすぐさま、簪に連絡をした。

『……何、ラウラ？』

『大問題が生じている。お前の手を借りたい』

『何の話……？』

ラウラの通信に興味なさそうに応える簪。だが、彼女の態度はすぐに変わった。

『シャルロットが、英治とデートしようとしている』

『……詳しく聞かせて』

こうして簪の部屋に集まった2人。ここでラウラが詳しい説明をする。シャルロットは英治を誘って風都に行くつもりだ。その風都には恋が叶うおまじないがある。シャルはそれを実行しようとしている、と。

そこからの行動は早かった。花火大会の日程の確認。ここから風都への交通手段等をあらゆる手を尽くして調べあげた。

難関である展望室に入ることは、ラウラがチケットを入手していたため、クリア。後は当日のシャルロットの行動を監視すればいいという結論に至った。

デートの妨害をどうすればいいのか、は2人が持てる知識や人脈を使用し、作戦を練ることに。だが、頭脳となったのは、黒ウサギ隊副隊長のクラリッサのため、どこか不安が残るのだが……

閑話休題。

我がもの顔でストーキングをするラウラと周りの視線を気にして、恥ずかしそうな簪のペアは英治達の後を着いていく。本人達に気づかれないようにと、服装も目立たないようなもので、本人がわからないようにとサングラスをかけていた。最初、ラウラは黒いスーツにサングラスがストーキングの正装だと主張していたのだった……。簪の必死の抵抗により、黒いスーツは外されたのだが、ラウラが譲らなかったため、サングラスの着用は義務をなってしまったのだった。

ちなみにいくら目立たないような服装を心掛けても、サングラス

に、髪の色、そして行動のせいで目立ってしまっているのは変わらないのであった。

◆◆◆

「へぇ、今夜はここの上に行くのか。すごく高いな」

「ふふん、あたしのおかげで入れるのよ。感謝しなさいよ」

風都タワーを見上げる一夏。風都タワーといえば、3年前の夏に壊れた事件があったな。彼はそんなことを思っていた。仮面ライダーがこの事件を解決してってことも忘れてはいない。

「そういや、3年前に仮面ライダーがここで戦ったのよね。英治の知り合いかしら?」

「違うんじゃないか? アイツ、ついこの前に『風都の仮面ライダーってどんな人だろ?』って言ってたし……」

一夏の反応にふーんとあいづちを打つ鈴。彼女も日本にいたとき、この街に仮面ライダーがいるって噂は聞いていた。ただ、自分が関わりを持つとは一切思わなかったが。

「ま、いいわ。それよりまだまだ花火大会まで時間があるじゃない。これからどうする?」

「う〜ん、そうだな……って、アレ、ラウラと簪じゃないか？」

「は、何言ってんのよ？　って、本当じゃない！？　何やってるのよ！？」

何かから隠れるように動くラウラ達に軽く引く鈴。知り合いが何やってんのよ、と心の中でため息をつきながら2人に話しかけようとする一夏を止める。一夏なら人数は多いほうが楽しいだろって言って彼女達を誘いかねない。そんなことしたらせっかくの2人きりが……

「いいから、行くわよ！」

有無を言わさず一夏の手を引いて歩き出す。最初はこの場から離れるのが目的だったのだが、次第に距離を取って落ち着くと一夏と手をつないでることに意識しだす。

（こ、これって周りから見たら恋人に見えるのかな……）

照れながら歩く鈴。そんな彼女は後ろからの黒いオーラに気づくことはなかった。

◆◆◆

「鈴め、一夏と手をつないでいて……」

「羨ましい。いえ、妬ましいですわ……」

ブツブツと瘴気を発する箒、セシリア組。道行く人は彼女達を見て、「ひっ」と悲鳴をあげ、逃げていく。

なぜ彼女が鈴が一夏を連れてデートに行くのかを知れたのかというと、同じクラスの布仏本音。通称のほほんさんのおかげである。のほほんさんは、一夏を誘うことに成功した鈴がブツブツと「一夏とデート」と繰り返してるのを聞いたからである。よく耳を傾けると「風都」だの「花火大会」とか聞こえてきたのだった。これは鈴自身の自爆でもあるが……

これは面白い話になると、箒とセシリアが予想通りに食いついてきたのだった。ただ、その勢いには引いたが……

「一夏め。楽しそうに笑いおって……」

「一夏さん、いつまでも鈴さんの手を離さないで……」

「「そんなにまな板がいいのか!?」」

本人が聞いたら間違いなくブチ切れるであろうセリフ。ちなみに箒＞セシリア＞＞＞＞超えられない壁＞＞＞＞＞鈴である。何がとは明言しないが。

とにかく彼女達の目的はただ1つ。花火大会の時刻に展望室に一夏達を入れないことだった。それがチケットの入手ができなかった乙女達に残された手段だった。

ドガァァンッ!!

「な、いきなり何ですの？」

突然響きわたる爆音。聞こえてきたのは向こうの広場。セシリアは妬む乙女からイギリスの代表候補生に頭を切り替える。

「箒さん」

頷く箒。箒は代表候補生ではないが、専用機持ちである。勝手な行動をされるよりだったら自分と行動してもらった方が確実だろうという判断の元、２人は現場に向かうのだった。

向かったのはセシリア達だけではなかった。何の偶然か、風都タワー近くにはいわゆる専用機持ち軍団がいたのだった。それぞれが異変に気づき、走り出した。

◆◆◆

「ここから爆発音がしたんだ」

全力で走って来てたどり着いた俺は周りを見回す。あちこちには突然のパニックで慌てる人々。一体何があったんだって言うんだ？

「英治、先に行かないでよ」

「ごめん。でも、何か嫌な予感がしたからさ」

後から来たシャルに謝りながらも目を動かす。そして見つけた。パニックの中、興味なさそうに佇む人を。

「あ～、思ったよりも反応が面白くないな～。やっぱ誰かに当てればよかったかな～」

そんなことを言う人の口調は軽いものだったけど、目は冷たかった。

「これは君がやったの？」

「そうだけど。何か文句あるの？」

「文句ってレベルじゃないよ。とにかくこんなことはするな」

「うっざ～。何正義の味方ぶってんの？　アンタウザイよ。さっさと消えてくれない？」

男は懐からメモリを取り出し、起動させる。

『ＴＩＭＥ』

腕にあるコネクターにそれを差し込んだ途端、男の人の体は異形のものに変わっていく。

「……シャル」

「うん。怪我しないでよ」

俺の考えがわかったのか、シャルは周りの人の避難を開始した。

代表候補生ならそういう訓練も受けてるみたいだからね。

「お前みたいなやつを見逃すわけにはいかないんだ」

俺がドライバーをつけて瞬間に相手の雰囲気が変わる。俺の認識を変えたんだろう。

「変身！」

『タカ！　トラ！　バッタ！　タ・ト・バ　タトバ　タ・ト・バ！』

「へえ、アンタ仮面ライダーだったんだ。いいよ、かかって来なよ」

それを皮切りに走りだした。降りおろされたメダジャリバーを、相手は時計の針のような長い剣と短い剣を交差させて受け止める。

ガキンッ！　ガキンッ！

火花が散り、金属がぶつかる音が何回も響く。手数のせいで俺は段々と押され始めていた。

「しまっ……くっ……」

ちょっとした隙をつかれて、一撃を食らう。ダメージは少ないけど、このままだったら圧倒的に不利だな。だったら……

『タカ！　カマキリ！　バッタ！』

2刀流には2刀流。両腕に展開したカマキリソードを構える。

「姿が変わっても無駄無駄」

そう言って切りかかってくる相手。だけど手数はさっきと違って同じだから全ての攻撃を凌げていた、いや、こっちが有利になっていた。

相手の攻撃を弾き、生まれた隙に蹴り込む。くの字になって相手は吹っ飛び、壁に激突する。

「イッタイんですけど。もういいや。お前倒すけどいいよな」

「来い……な!?」

構えを取った瞬間に突き刺さる痛み。ドーパントの拳が俺の鳩尾に当たっていた。

「ほら、まだまだ休んじゃ駄目っすよ」

相手がそう言った刹那、俺は背中から蹴り飛ばされた。何が起こってるんだ？　それを考える間もなく、俺は次の攻撃を食らう。

『タカ！　カメ！　チーター！』

相手の能力を知るために防御型のタカカメーターになる。タカの超視力と超聴力。カメの防御力。チーターの速さなら対応できるかもしれないから。

相手が高速移動してると思っての対策だった。だけど……

「無駄って言ってるじゃないっすか」

「がっ……ぐっ…」

何1つとして反応できなかった。タカヘッドに力をこめて相手を感知しようとしても、相手に気づくのは相手が攻撃した瞬間だけ。反撃をしようとチーターで走っても、既に相手は俺の後ろに。

「ほらほら。根性見せなって」

「うわぁあああああ」

降りおろされた剣によって変身解除に追い込まれる。弾き飛ばされたメダルは相手の手に。

「ふーん。これが財団の探してるメダルねぇ～。お前を殺せばもっと出てくるんだろ?」

ゆっくりとこっちに歩いてくる怪人。立とうにも力が入らないや……結構、いやかなりのピンチだな。

「じゃ、終わり、と。ん?」

その瞬間、ドーパントは何かにはねとばされた。

「大丈夫か?」

バイクから降りてきた人はちょっとキザっぽく手を伸ばしてきた。それを掴んで立ち上がる。

「ありがとうございます」

「いや、礼はいいぜ。それよりもアイツだな。行くぜ相棒」

バイクの人は赤いメモリをはめる所が2つあるベルトを装着する。

『ＪＯＫＥＲ』

鳴り響くガイアウィスパー。男の人がその黒いメモリを入れる前に、ドライバーの右側に緑のメモリが現れる。黒いメモリを入れ、ドライバーをＷの字のように開く。

「変身！」

『ＣＹＣＬＯＮＥ　ＪＯＫＥＲ』

男の人を風が包み、その姿を変える。

体の半分で違う色。赤い複眼。たなびくマフラー。そこにいたのは……

「来たか、仮面ライダーＷ」

「……仮面ライダー、Ｗ」

「『さぁ、お前の罪を数えろ！』」

2組のS／忍びよる魔の手（後書き）

遂に登場、W。個人的にはサイクロンジョーカーかファングジョーカーが好き。

この風都編のノリは劇場版Wを目指してるんだけど、中々思うように文がまとまらない。プロットから細かい設定まではまとまっているんですけどね（汗）

そして作者。何を血迷ったのか、クライマックスヒーローズフォーゼを予約してきました。明日発売のフィギュアーツのナイトといい、最近は出費が多くなるな……

それでは感想等お待ちしております。

Tよ止まれ／Wとオーズ（前書き）

前回と比べると短いです、はい。

Ｃｏｕｎｔ　ｔｈｅ　ｍｅｄａｌｓ
オーズが使えるメダルは……

クジャク
コンドル
クワガタ
カマキリ
バッタ
ライオン
トラ
ゴリラ
シャチ
ウナギ
タコ

Tよ止まれ／Wとオーズ

「行くぜ」

鮮やかな回し蹴り、風を纏う拳でタイムドーパントに次々とダメージを与えていくW。ドーパントも手にした剣で反撃に出るが、それを蹴り飛ばされる。

「ちぃ！」

すかさず叩き込まれるボディーブロー。うめき声をあげてドーパントは膝をつく。

「アンタを倒すのが、俺達の目的なんだ。さっさとやられてくれない？」

「そいつはお断りだ」

「……残念。じゃ」

刹那、殴り飛ばされるW。まるで相手が突然そこに現れたかのようだった。アイツ、どんな力を持ってるんだ？

俺もいつまでも休んでる場合じゃないよな。不利になってるWを見て、自分を奮い立たせる。

「変身！」

『ライオン！　ウナギ！　バッタ！』

「セイヤッ！」

ウナギウィップを相手にぶつける。さすがに突然の攻撃は反応できなかったのか、攻撃は当たる。

「助かったぜ。お前、もう大丈夫なのか？」

『メダルで変身とは興味深い。後で調べさせてもらうよ』

「……お手柔らかにお願いします」

背中合わせで立つ2人。それでも、敵の力には対抗できなくて、ダメージを食らっていく。

「やろぉ」

Wの拳は空を切るだけ。一瞬で背後に回り、拳を降りおろそうとするドーパント。だけど、その攻撃は右手によって受け止められた。

『君の能力は検索済みさ。タイムとは中々の能力だね。時間を止めることができる。ただし、時間を止めているものには干渉できない。生憎Wは僕と翔太郎の2人なんだ。翔太郎が反応できなくても、僕が反応すればいいのさ』

Wの右目が点滅する。2人の意識があるWだからこそ取れる戦法なのだろう。

「くっ、でもさぁ、それで防げるつまりなの？」

「うわぁあ！」

「のわっ！」

ドーパントが嘲笑うかのように言った後、俺とWは吹き飛ばされた。ドーパントの攻撃になすすべもなくて、次々と重い一撃を叩き込まれる。そのダメージに意識をもってかれそうになるけど、それを何とかして耐える。

反撃にと、ウナギウィップを振り回すけど、その攻撃が当たるはずもなく、気が付けば相手は目の前にいる。攻撃をどうやって当てればいいんだ？

「おい、大丈夫か？」

「くっ、大丈夫です。それよりアイツの能力を何とかしないと」

指し伸ばされたWの手を掴んで立ち上がる。そのまま背中合わせになる。少しでも死角を減らそうと考えてのことだった。けれど、時間停止の前には大した意味もなく、殴り、切られ、蹴り飛ばされる。

「……フィリップ」

『……全く、君はいつも無茶ばかりだ』

フィリップと呼ばれた人は呆れながらも、その無茶を止めることはしなかった。きっと、自分の相棒を信じてるからだろう。

何か策があるのか、Wはドライバーのメモリを抜いて、金と青のメモリと入れ替える。

『ＬＵＮＡ　ＴＲＩＧＧＥＲ』

右半身は金色に、左側は青くなってその手には銃が握られる。

「はっ！」

「そんなの時間を止めるまでもないよ……なっ」

放たれた弾丸は不規則な軌道を描きながらも、ドーパントを追尾する。余裕をこいていたドーパントも回避しきることはできなくて、次々と被弾する。

「まだまだ行くぜ」

Wは引き金を引き続ける。弾丸はドーパントを捉えて、その体から火花を散らせていく。

「これで決まりだ」

『ＴＲＩＧＧＥＲ　ＭＡＸＩＭＡＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

「『トリガーフルバースト』」

両腕で構えた銃からは大量の光弾が放たれる。その1発1発がさっきまでのと威力が桁違いで、当たれば相手はただじゃすまないはず。

「残念でした～」

小馬鹿にした声が聞こえたと思った瞬間にはドーパントはWに剣を降りおろしていた。火花を上げ、転がるW。そんなWを見て、ド

ーパントは余裕だと言っている。

『残念なのは、君の方だ』

「は？　何言ってんの？　状況わかってるの？」

倒れてるWに近づくドーパント。その手には剣が握られていて、トドメを刺すつもりなんだろう。でも……

「状況が分かってねえのはお前の方だ」

さっき放たれた光弾はまだ消えていなくて、その弾道を切り替える。

「うわぁあああああああ」

背後か弾丸が来てるとは全く思っていなくて、全弾に当たってしまう。煙を上げながらのたうち回るドーパント。

今がチャンスってことだな。Wから目配せでそう確信した俺はメダジャリバーにセルメダルを入れる。

『トリプルスキャニングチャージ！！』

「はぁぁあああああ、セイヤーーーー！」

まっすぐ降りおろされた一撃はドーパントを次元ごと切り裂く。

「おいおい、マジかよ……」

『次元を切るとは興味深い』

Wが感嘆の声をあげてる間に次元は元に戻る。ドーパントは膝から倒れ込み、爆発する。メモリが排出されて、人の姿に戻る。メモリからは煙が上がり、今にも砕けそうだった。

「くそっ、まだだ、まだなんだよ」

砕けそうなメモリを掴もうと必死で手を伸ばす男。だが、男とメモリの間に割り込む影が1つ。スマートなボディの赤いドーパント。ソイツはタイムメモリを拾い、力をこめる。

「おい、やめろ、やめてくれ、やめろぉぉおおおお」

パキン

「ちくしょう。俺は、俺は、俺はぁあああああああ」

メモリが砕けると同時に断末魔を上げて、その男は消滅する。アイツ、メモリが壊されることに必死だったな。……そんなにあんな力が必要だったのか？

「……仮面ライダーW。また会おう。それとコイツは貰っておく」

赤いドーパントが見せたのはさっき取られたタカ、カメ、チーターのコアメダル。

「あ、待て！」

そう言って手を伸ばすんだけど、相手は一瞬で消えていた。ただ赤い閃光みたいなのがぼんやりと見えたから、さっきのとは違って

時間を止めているわけではなさそうだった。

「お前、ちょっといいか？」

「あ、はい」

さっきまでWだった黒いソフト帽をかぶった人が話しかけてくる。俺も変身を解いてそれに応える。

「さっきはありがとうございました。助かりました」

「気にすんな。それよりもお前には聞きたいことがいくつかあってな。え～と」

「あ、俺は火野英治です」

「左翔太郎、探偵だ」

気障っぽく名乗る翔太郎さん。探偵か～。ドラマの中でしか見たことなかったから本当にいるとは思わなかったなぁ。

「それでだ、火野。あそこのやつらは知り合いか？」

「へ？　あそこの……？」

翔太郎さんが指した方を見ると、シャルだけでなく、簪、ラウラ、一夏、篠ノ之さん、セシリア、鈴といった専用機持ち組が勢ぞろいしていたのだ。

「そうですけど……」

簪とラウラがいることにびっくりしながらも頷く。何でいるんだ？

この後、翔太郎さんの事務所で話をすることになったんだけど、何故か全員着いてくることになったんだ……

◆◆◆

「そうか、アイツがやられたか」

「そうだな。これからどうする？」

風都のどこかにある廃墟。そこには８人の男が集まっていた。

「彼のメモリは強力ですけど、彼本人の実力はこの中では一番低いですからね」

「お前は、いつも辛辣だな」

「別に悪いことではないでしょう。それに私は事実を言ってるだけですよ」

「チッ、好きにしろ」

「あぎゃぎゃぎゃ。負け犬のことはどうでもいいんだよ。それよりも早く俺に戦わせろよ」

突然、男達が好き勝手話してる所の扉が開く。扉の向こうからは赤いドーパントが歩いてくる。

「ご苦労だったな」

「ああ。コアメダルも入手してきた……」

赤いドーパントは人の姿に戻るなり、３枚のコアメダルをリーダー格の男に渡す。そして、腕を組んだまま壁によりかかる。

「ソニックも戻ってきたことだ。これからの作戦を言う」

「ふむ、やっとか」

「何をするつもりだ？」

「これからＷの所に言って宣戦布告をしてくる。それだけだ」

「ねぇ、Ｄ２。それは面白いの？」

「ああ。とびっきりのゲームだ。アル、お前も楽しめる程のだ。それに仮面ライダーは逃げることができない。絶対参加者になるぞ」

Ｄ２と呼ばれた男の口元が怪しく釣りあがる。Ｄ２は懐から１つのガイアメモリを取り出し、起動させる。これがゲーム開始までのカウントダウンとばかりに。

Tよ止まれ／Wとオーズ（後書き）

時を止める相手との戦い。イメージはハイパーカブトＶＳカッシスワームのハイパーシューティングでした。それをルナトリガーで再現してみたつもりが、文才がなくて……

勘のいい人なら敵が使うメモリがどんな感じになってるのか、わかってるかもしれません。敵の設定は追追本編で語られる予定ですので、お待ちください。

それでは、感想等お待ちしております。

始まるW／それぞれの戦場へ（前書き）

Ｃｏｕｎｔ　ｔｈｅ　ｍｅｄａｌｓ
オーズが使えるメダルは……

クジャク
コンドル
クワガタ
カマキリ
バッタ
ライオン
トラ
ゴリラ
シャチ
ウナギ
タコ

「着いたぜ」

翔太郎さんの案内によって俺達は鳴海探偵事務所に来ていた。どうやら聞きたいことがあるみたいで、警察の人も来るみたい。

「……鳴海探偵事務所？　どっかで聞いた気がするんだよな……？」

「それって何かの雑誌とかで読んだからじゃないの？　結構有名みたいだしね」

看板を見てから、何かがつっかかっている一夏。そういえば前に織斑先生が風都に仮面ライダーがいるって教えてくれたときに懐かしそうな顔をしていたけど、それが関係してるのか？

「英治、何をボーッとしている。早く行くぞ」

そんなことを考えてるうちに皆は事務所の中に入っていった。あれ、声かけるんだったらもっと早くかけて欲しかったんだけど……

「す、すごーい！　本物よ。本物の織斑一夏よ！　それにこんなに可愛い娘達までいっぱいいて」

「おい、亜樹子！　落ち着け。コイツらが引いてるだろうが」

今の何？　気になって中に入ってみるとテンションの高い女子中学生がいた。有名人にあったからテンションが高いんだろうなぁ。

「アキちゃん、どうしたんだい？　急に大声を出して？」

今度はどこから入って来たのか、クリップで髪を留めた男の人が出てきた。本当にどこから出てきたんだ？　さっきまでいなかったよな。

「ああ、紹介してなかったな。コイツが相棒のフィリップ。それでこっちは……」

「所長の照井亜樹子でーす。皆よろしくね」

そんなこんなで自己紹介も程々に、もうすぐ来る刑事さんを待つことに。

◆◆◆

「すまない、遅くなった」

待つこと数分。探偵事務所の扉を開けて入ってきたのは赤いジャケットを来た人だった。

「風都署の照井竜だ」

刑事手帳を見せながら名乗る照井さん……ん、アレ？　照井って……

「もしかして照井さんって亜樹子さんの……？」

「私達夫婦よ。ね、竜君」

そう言って照井さんの腕に抱きつく亜樹子さん。そしてまんざらでもなさそうな照井さん。その光景を見て、羨ましいって何人かが言ってたのは気のせいじゃないはず。

「じゃあ、照井も来たことだ、話を始めるぞ」

翔太郎さんに言われてこの場の空気は真面目なものになる。俺達は説明する。どんな時にドーパントに遭遇して、戦うことになったのか、を。

「なるほど。そういうことだったのか。でも、一つ疑問が。どうしてあのドーパントになった男はメモリを壊された瞬間に消滅したんだい？」

「確かにな。ＮＥＶＥＲだったらマキシマムに相当する威力をくらった瞬間に消えるからな」

ＮＥＶＥＲとかわからない言葉が出てきてよくわからないんだけど、あの人は自分のメモリが壊されるのをかなり恐れていた。

「……ふむ。検索するにもキーワードが足りないな……。ところで火野英治。君が変身していたのは何だい？　メモリではなくてメダルで変身していたけど」

「ああ、あれはオーズです」

「「オーズ？」」

照井夫婦がはもる。翔太郎さんとフィリップさんとは違って2人は俺が変身するのは知らないからなぁ。

結局オーズのことも説明する。コアメダルのこと。グリード、ヤミーのこと等々。

「なるほどな。こんなもんにもガイアメモリみてぇにヤバい力が入ってるのか」

「コアメダルにセルメダルか、実に興味深い。この件が片付いたら検索しよう」

反応は人それぞれ。フィリップさんが言う検索って何だ？　インターネット？

「ま、今回の事件は解決ってことだな。お前らはもう帰っていいぜ。悪いな、時間取らせちまって」

「いえ、気にしないでください。それにライダーは助け合いですし」

「……確かにな」

フッ、と気障に笑う翔太郎さん。この探偵事務所の面々に挨拶して帰ろうとする。そういえば結局皆いるんだよな。これからどうするんだろ？

「残念だが、事件は終わっちゃいない」

「「「「!?」」」」

突然響く謎の声。身構えるけど、声の主はどこにも見当たらない。

「おい、何者だ!」

「ああ、ここだ」

何事もなかったかのように男はソファに腰掛けていた。

「い、いつの間に……」

そう言った簪だけじゃない。ここにいる全員が男が音もなくこの場に現れていたことに驚いていた。

「貴様、何者だ?」

「場合によってはタダじゃすまさないぞ」

「おお、怖い怖い」

照井さん、ラウラが男に脅しをかけるように睨みつける。だけど、男はそんなのを全く気にとめることはなかった。

「ま、いいか。さっさと要件だけ言うぞ」

男は黙って翔太郎さん、フィリップさん、照井さん、そして俺を指す。

「お前達仮面ライダーにゲームの誘いをしにきた」

「あいにく、お断りだぜ」

「ああ。貴様、本当にふざけているのか」

「これを見てもそう言えるのか？」

そう言って男は指をならす。その瞬間、蒼い騎士のような風貌のドーパントと返り血を浴びたような姿の禍々しいドーパントが現れる。

騎士の方は剣先を照井さんに、もう一体は爪を翔太郎さんに向ける。つまり、動けば命がないと警告してるのだ。

「ちっ」

「本題に入るぞ」

苦虫を潰したような顔の翔太郎さんを気にすることもなく、男は話を続けようとする。

翔太郎さんもこの状態じゃ抵抗ができないからか、黙って男に視線をやる。

「仮面ライダーに俺達ＮＥＷ　ＷＯＲＬＤは宣戦布告をしにきた。ルールは簡単だ。この風都に俺を含めた９人がいる。そいつらを時間内に倒せたら俺達の勝ち。できなかったら風都はどうなるかわかってるよな」

「てめぇ！！」

男に翔太郎さんは今にも殴りかかりにいきそうだったけど、ドー

パントに抑えられてるからできなかった。

「タイムリミットとは何だい？」

フィリップさんが問いかける。その問いに男は口を釣り上げながら、指を鳴らす。

「こ、これは……」

「ＩＳですの……？」

どこかの空間が映し出せれ、見えたのはただずむＩＳの姿。でも、それは……

「どうして、これがあるんだ……」

「え、英治……？」

「どうしたんだ……」

「一体、何……？」

そのＩＳは紫色だった。そして俺がよく知る姿にそっくりだった。今にも暴走し、全てを破壊しそうな太古の竜の姿に。

「ああ。そのＩＳは財団の試作機でな。ＩＳコアでないコアを使ってるんだ。ちょうどこういうのをな」

「ッ！」

男が見せたのはさっき取られたコアメダル。この瞬間、俺の中で何かが止まった気がした。

「つまり、紫のコアメダルがコアってことか」

「御名当だ。お前らが俺達全員を倒せなかったらコイツが暴走する。その恐ろしさはソイツが知ってるからな」

行くぞ、と言いドーパントを連れて帰ろうとする男。最後に何かを付け足すように振り向いてきた。

「俺達はＮＥＶＥＲなんかじゃない。戦うために生み出された存在だというのは同じだがな」

時空を開き、男達は去っていった。残された俺達。だけど、沈黙も束の間。さっさと対策を練らなくちゃいけない。

「俺達でやるしかありませんね」

俺が言うと、翔太郎さん、照井さんは頷く。やつらは俺達を名指しで来た。それに俺達が動かなかったらこの街がどうなるかわからない。いや、わかってるんだ。最悪なことになるって。

「ねぇ、英治。あの紫のＩＳってそんなにヤバいの？」

シャルの問いに黙って頷く。

「一体、どれほどのものなのだ？」

「アレは、オーズのコンボの中で一番強いんだ」

その一言に一夏達は絶句する。オーズのコンボの強さを知ってるから、どれほどの相手かわかったんだろうな。
でも、すぐに一夏の目の色は驚愕のものではなく、何かを決意したものになる。

「だったら、尚更何とかしなくちゃな」

「どういうこと？」

一夏が考えてることはわかる。だからこそ、彼の決意を知る必要があった。

「決まってるだろ。アレを見っけて壊すんだ」

その言葉にシャル達も頷く。

「ねぇ、皆。それがどんなに危険なことかわかってるの？」

亜樹子さんが説得するみたいだけど、皆は聞く気はないようだ。

「翔太郎君も止めてよ！　竜君も！」

「フィリップ。一夏達にあのＩＳの有りかを教えてやってくれ」

「わかったよ、翔太郎」

そう言ってフィリップさんは隠し扉に入っていく。

「一夏達は止めてもいくんだよね」

「ああ、ＩＳはお守りじゃないしな。なんとかできるかもしれない力があるのに、やらなかったら後悔するだけだからな」

それ、俺のセリフなんだけど……

「英治、さっさと終わらせて花火を見に行こ？」

「抜け駆け、駄目……」

「私と行くぞ。お前は私の嫁だからな」

「さあて、さっさと潰してくるわよ。あたしだって花火大会楽しみにしてたのよ」

「鈴さん、あなたも……」

「私達のなら大丈夫だ。もう力の使い方を間違える気はないしな」

皆……

「わかったよ。だけど、皆無事に帰ってきてよ」

「その言葉、お前にもそのまま返すよ」

一夏の言葉に皆、ウンウンと頷く。危険なの俺も変わらないしな。

でも、負ける気はしないから。

「あのＩＳの居場所はここだ」

フィリップさんが一夏達に説明を始める。俺達も準備をしないとな。

「火野、頼りにさせてもらうぜ。ライダーは助け合いだしな」

「よろしく頼む」

拳をぶつけ合い気合を入れる。あんな奴らの好きにさせてたまるかよ。

「じゃあ、行くぜ」

「「はい／ああ」」

「皆ぁー、無事に帰ってきてね！」

亜樹子さんに見送られ、俺達は戦いのために出発する。

「あぎゃぎゃ。待ってたぜ、さぁ、戦いを始めようじゃないか」

出発しようとして、早々さっきの血のドーパントがいた。どうやら俺達を待っていたみたいだな。誰が行く？　ここで全員の時間を取られるわけにはいかなさそうだから。

「翔太郎、ここは僕に任せてくれないか。君はこれからドーパントを探し回らなくちゃいけない。だったら体力を温存しなければいけない」

そう言ったフィリップさんの手には白い恐竜みたいな機械が。

「頼むぜ、フィリップ。ここは俺達が何とかする。お前らはさっさと行け」

『ＦＡＮＧ』

『ＪＯＫＥＲ』

「「変身」」

『ＦＡＮＧ　ＪＯＫＥＲ』

翔太郎さんの意識がフィリップさんに移され、意識が無くなった体は倒れる。一方のフィリップさんの体は白と黒のＷへと変化する。

「ガァァアアア！」

獣のような雄叫びを上げるＷを見て、俺は走り出した。こんなことならライドベンダーでくればよかったな。

照井さんは俺と逆方向に行き、一夏達は飛び立った。

タイムリミットがいつまでかわからないけど、絶対好きにはさせない。

始まるW／それぞれの戦場へ（後書き）

ここから戦いの連続で長くなりそう、いや、長いです。

まぁ、敵のＩＳに関しては夏の映画的なノリで最強フォームの先行登場って感じです。サゴーゾ、シャウタ出してませんし。

というか、ＩＳ×オーズのネタの発想がＩＳ“コア”と“コア”メダルから来たなんですっごく安直すぎるよ、俺。

それでは感想等お待ちしております。

Fの咆哮／空を駆けろ（前書き）

Ｃｏｕｎｔ　ｔｈｅ　ｍｅｄａｌｓ
オーズが使えるメダルは……

クジャク
コンドル
クワガタ
カマキリ
バッタ
ライオン
トラ
ゴリラ
シャチ
ウナギ
タコ

Fの咆哮／空を駆けろ

「ガァアア！」

「ぎゃは」

Wファングジョーカーと赤いドーパント・ブラッドドーパントの拳がぶつかる。野獣の咆哮と狂気の笑みがその場に響き、鈍い音とともに両者は吹き飛ぶ。

『ＡＲＭ　ＦＡＮＧ』

タクティカルホーンを1回弾き、右腕に刃を発生させる。そのままWは駆け出し、右腕の刃を振るう。アームファングが振るわれる度に、ブラッドドーパントからは、血飛沫が上がる。

「はぁ！」

ファングジョーカーの猛攻に怯んだ相手を蹴り飛ばす。相手はそれを防御しようともしないで、その一撃を受け、後ろに飛ぶ。

『よし、さっさと決めるぜ』

「待つんだ、翔太郎。このままあっさりとやられているのはおかしい。ヤツは何かをしようとしているはずだ」

トドメを刺すように促す翔太郎をなだめるフィリップ。彼の何かが告げていた。相手は何かを企んでいる。どこかで何かを仕掛けてくる、と。

（相手の名はブラッド。つまり『血』。血で何かする能力のはずだ）

いつもは検索することによって相手の能力をすぐさまに突き止めるフィリップなのだが、戦闘中であるため、そんな時間はない。

（待てよ、血だと？）

そう考えるフィリップの目に映るのは、ブラッドドーパントから飛び散った血。それに気がついたときには、もう遅かった。

「遅えんだよ！」

刹那、辺りにまき散らされた血はそれぞれが小さな針のようなものになり、Wを襲う。

「あぁあああああ」

気づいたときにはもうかわすことはできなくて、Wは全弾にあたってしまう。体から煙をあげ、膝をつくW。

「ヤツの能力は血の制御。最初はわざと攻撃を食らって血をまき散らし、それで攻撃するつもりだったんだ」

『血の制御か……厄介な能力じゃねぇか』

Wが対策を練っているときも、ドーパントは歩いてくる。先程針として飛ばした血を今度は刀の形にしながら。

「ハッ！」

降りおろされた刀を両腕をクロスして受け止めるW。ギリギリという音とともに、Wは少しずつ後退していく。

「がぁあああああああ」

咆哮とともに少しずつ体勢を戻していく。そしてWとドーパントは拮抗状態になる。

「がぁ！」

両腕をはらい、相手の刀を弾き飛ばす。その瞬間に生まれた隙を逃さず、腹に蹴り込む。今のは当たりどころがわるかったのか、ドーパントは立とうともがくが、中々体に力が入らない。

『フィリップ』

「……ああ」

タクティカルホーンを3回弾く。

『ＦＡＮＧ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

その音声とともに、Wの右足に刃が飛び出る。

「『ファングストライザー』」

跳び上がり、右足を突き出すとWは空中で回転を始める。その回転は勢いを増し、青い旋風となる。

「ちっ、ここまでか……」

そう呟いた後、ドーパントは恐竜を模したような一撃に飲まれ、その姿を消す。

「……翔太郎、後は頼んだよ」

「ああ、任せな」

変身を解いた翔太郎はすぐさま、愛機のハードボイルダーにまたがる。相棒が自分の体力を温存するために変身した。だったら自分はこの事件をさっさと解決することが相棒の、いや、相棒だけじゃない。この街のためになるとわかっているからだ。

◆◆◆

「ここにもいないか……」

Wがブラッドドーパントを倒した同時刻。照井は風都のはずれを訪れていた。出発が遅れるであろう翔太郎、足がない英治に代わって、自分が遠くを探す必要があったからだ。

ザッ、ザッ

不意に足音が聞こえてくる。反射的に振り向いた照井の視線の先にはめんどくさそうな男が。

「ったく。ここにくる奴がいるのかよ……まぁ、いいぜ」

男は銀と赤のメモリを取り出す。

『ＰＨＯＴＯＮ』

起動させたメモリを右腕に挿すと、男はフォトンドーパントとなる。

「ＮＥＷ　ＷＯＲＬＤのメンバーか……」

照井はすぐさま距離を取り、自身のメモリを取り出す。

『ＡＣＣＥＬ』

「変……身！」

エンジン音が響き、照井の体は仮面ライダーアクセルへとなる。

「さあ、振り切るぜ」

エンジンブレードを構え、走り出す。一方のフォトンドーパントは手から光弾を放ち、それを迎え撃とうとする。

「はぁぁあああああ」

周囲の爆発にひるむことなく走り続けるアクセル。敵との距離がゼロになった瞬間、その剣を振り下ろす。

「ぐっ、やらせるかよ」

フォトンドーパントも負けじと、痛みに耐えながらもゼロ距離で光弾を放つ。痛み分けとなりながらも、２人は再度ぶつかり合う。

アクセルがホイールのように回転し、剣を振るえば、ドーパントは光を集め、盾とする。

逆にドーパントが光弾を連続で放てば、アクセルはバイクモードとなり、弾幕の間を走り抜ける。

一進一退の攻防を繰り広げる２人。一撃一撃の重さはアクセルに分があるが、リーチは圧倒的に相手が上だった。アクセルにもエンジンブレードを使用した遠距離攻撃はあるが、相手のように何発も撃てるわけではない。射撃戦は確実に不利なため、アクセルはどうにかして接近戦に持ち込もうとする。

「逃がさんッ！」

『ＥＬＥＣＴＲＩＣ』

擬似メモリであるエンジンメモリをエンジンブレードに入れ、刃に電撃を纏わせる。その強力な一撃は命中すれば、大ダメージなのだが、相手に逆手に取られてしまった。

「距離を取らせてもらうぜ」

エンジンブレードの衝撃を利用して後ろへ跳ぶフォトンドーパント。アクセルとの距離はかなり開いていた。

「じゃあ、本気でいくぜ！」

そう宣言するなりさっきまでとは量、密度が圧倒的に違う弾幕を放ってくる。アクセルは何発かはエンジンブレードで弾き落とすが、徐々に被弾していく。

「ぐわぁあああああああ」

爆発に飲まれるアクセル。結構ボロボロだが、エンジンブレードを杖がわりにして何とか立っていた。

「ああ、もう、わかったからさっさと終わらせるぞ」

まだ立ち上がるアクセルに呆れるような声を上げ、フォトンドーパントは大量の光弾を生成する。地上にいてはかわしきることは不可能なほどに。

「終わるのは貴様の方だ」

その光弾にアクセルはひるむことなく、１つのツールを取り出し、アクセルメモリに取り付ける。

『ＡＣＣＥＬ　ＵＰＧＲＡＤＥ　ＢＯＯＳＴＥＲ』

真っ赤な体は金色へ。背中や肩の重そうな装甲は取り払われ、体のあちこちにはブースターが装着される。ガイアメモリ強化アダプターを装着し変身した、アクセルブースターとなる。

「はぁ！」

弾幕を上昇してかわす。新たに放たれる弾幕を右、左等にブースターの噴出方向を変え、回避していく。初めてアクセルブースター

となったときは慣れない能力と足の怪我によって制御に苦戦したが、今は違う。密かに続けた特訓の成果によって、照井はアクセルブースターを完全に制御できるようになっていた。

弾幕の隙間を飛びながら、エンジンメモリを再度装填する。

『ＥＮＧＩＮＥ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

加速しながら、黄色く輝く刃で一閃。

「絶望がお前のゴールだ」

爆発を背にアクセルはそう呟いたのだった。

◆◆◆

「アイツらはここにはいないのかな……？」

照井さんと別れた後、俺は風都の街中を走り回っていた。敵の顔はわからない、この土地のことがあんまりわからない。そんな状態でも、俺は探すことをやめる気はなかった。

「……はぁ。このまま走り続けて、いざってときに体力なくなったらアウトだな……」

息を整えるために立ち止まる。深く深呼吸して走り出そうをした途端、目の前の景色が変わった。

「ここは……？」

どこかの廃墟だろうか。寂れた空間だった。壁はボロボロ。天井にもヒビが入って空が見えるところがある。

「予定変更だ。ゲームの相手はWとアクセルだけになった。何でも上はお前の持ってるメダルが欲しいらしくてな」

目の前にいたのは俺達に宣戦布告に来た男だった。コイツは空間を越える能力があるみたいだったな。それで俺を呼び寄せたってわけか。

「悪いけど、このメダルを渡すわけにはいかないんだ」

「そうだろうな。だったら実力で奪わせてもらう」

ドライバーにコアメダルを入れる俺と同時に、男はガイアメモリを起動させる。

「変身！」

『ライオン！　トラ！　バッタ！』

『ＤＥＳＴＲＯＹ』

対峙するオーズとデストロイドーパント。構えを一瞬取った後、両者は駆け出した。

Fの咆哮／空を駆けろ（後書き）

本日、クライマックスヒーローズフォーゼ発売。予約したのはいいんだけど、今日は深夜までバイトがあって取りにいけないｏｒｚ

それにＰＳ３のガンダムＥＸＶＳも一緒に予約してるから、どっちから手をつけるべきかも悩み中。ただクラヒフォーゼのＮＥＷ電王はすっごく気になってるんですけどね。

それでは感想等お待ちしております。

敗北のO／狂気の紫（前書き）

Ｃｏｕｎｔ　ｔｈｅ　ｍｅｄａｌｓ
オーズが使えるメダルは……

クジャク
コンドル
クワガタ
カマキリ
バッタ
ライオン
トラ
ゴリラ
シャチ
ウナギ
タコ

敗北のO／狂気の紫

「ぐぁあああああああ」

火花を上げながら、転がる。『破壊』の名を持つデストロイドーパント。その力は名前にふさわしいものだった。その一撃はサゴーゾ並みの重さを持っていて、殴られる度に意識を奪われそうになる。それに戦いもカウンターメインであり、こちらの攻撃を受け流して確実に攻撃を食らわせてくる。おまけにタイムリミットがあるせいか、自分でも焦ってるのがよくわかる。そのせいもあり、中々ダメージを与えられないでいた。

「中々しぶといな。だが……」

デストロイドーパントは銃を取り出し、こちらに構える。瞬時にメダジャリバーで弾丸を切り払い、煙があがる。その煙で相手が見えなくなる。多分、相手も同じ条件のはずだから攻めるのは今しかない。

『ライオン！　カマキリ！　バッタ！』

『スキャニングチャージ！！』

バッタレッグで跳び上がり、カマキリソードをクロスさせる。

「なっ！　いない……」

「どこ見てるんだ？」

「ッ！」

声の方を向いた瞬間、鋭い飛び蹴りを食らう。その一撃にラキリバのメダルは弾き飛ばされ、敵の手に。一体、何があったんだ？

「何があったんだ？　そんな顔をしてるな。まぁ、せっかくだ。教えてやるよ。コイツだ」

『ＤＩＭＥＮＳＩＯＮ』

そのメモリを起動させると、俺の背後に現れた。ディメンジョン―次元、か。

「このメモリで俺のもお前の位置も変えたってわけだ」

自分を俺の射線から動かして、かつ蹴り込むのにいい場所にワープしたってことか。時間といい、高速移動するやつといい、何でこうも戦いにくい相手ばっかりなんだ……

「デストロイとディメンジョン。２本のメモリを使うからか、俺はＤ２と呼ばれていた」

呼ばれていた？　含みのある言い方に疑問を浮かべるけど、そんな場合じゃないな。

『シャチ！　クジャク！　コンドル！』

シャジャドルになる。ここは唯一のコンボであるシャウタになるべきなんだろうけど、この後も戦いがあるんだとしたらコンボをそ

う簡単に使うわけにはいかないな。

「姿を変えても無駄だ」

そう言うとディメンジョンドーパントは俺の死角から攻撃しようとしてくる。でも……

ガキンッ！

「残念だけど、お前の仲間でそういうのは経験済みだから……ね！」

タジャスピナーで攻撃を受け止め、それで強く押す。

「だったらこういうのはどうだ？」

ドーパントは俺から距離を取って、直径1メートルくらいの破壊弾を何個も作り上げる。そしてそれを転送しながら放ってくる。右から来たと思ったら違う弾丸が別の方向から来たり、弾道が変わる。それに一発一発が大きいため、かわすのも難しくなっていき、肩、足、胸と次々と命中していく。

「ぐぁ！」

火花があがり、意識が飛びそうになり、体に激痛が走る。さっきからのダメージも相まって俺の動きも遅くなってく。

そして、ついに背中に一発直撃。よろめいた瞬間を相手が見逃してくれるはずもなく、残弾を全て当てられる。

「うわぁあああああああああ」

煙をあげながら、膝から倒れる。諦めちゃ……駄目だ。震える腕で立ち上がろうとするけど、背中を踏みつけられて地面に倒れる。

「この程度か……」

剣を取り出し、突き立てる。相手は興味を失ったように呟き、ためらいもなく、剣先に力をこめる。

「あぁあああああああああああああああ」

ズブリ。そんな生々しい音とともに腹の辺りに走る強烈な痛み。再度、変身を解除され、シャチ、クジャク、コンドルのコアメダルも奪われる。

「こんなものか。後は任せた」

デストロイドーパントが指を鳴らすと現れたのは4体のドーパント。

大地をイメージさせる屈強な体を持つドーパント。
龍人の姿のドーパント。
紫紺の鎧を纏い、剣を構えるドーパント。
所々に楽器のような装飾が見えるドーパント。

「がっ……変身……」

『クワガタ！　トラ！　タコ！』

口から血を吐き、腹から血を流しながらも変身する。頭から電流を放ちながら剣を構えたドーパントにメダジャリバーで切りかかる。電撃は切り払われ、つばぜり合いになる。ギギギ、金属音がなりな

がら両者は拮抗する。だけれども、それは数秒のことでフラフラの俺はすぐに押し負ける。

「私達もいるってことをお忘れなく」

大地のドーパントは正拳突きをしてくる。

「うわぁぁあああ」

廃墟の壁を突き抜けて、外に吹っ飛ばされる。

「悪く思うなよ。これも俺達が生きていくために必要なことだからな」

「悪い。でも……」

残った2人が格闘戦を仕掛けてくる。楽器のドーパントは棒を振り下ろしてくる。それをトラクローで受け止めようとするが、棒が振動しているためにすぐに弾かれる。

「おりゃあ！」

がら空きになった胴に重い棒の一撃が。それもさっき刺されたところのため、痛みは余計に大きい。

「はぁ！」

さらに追撃で龍のドーパントはその爪で俺の体を切り裂く。そして炎を至近距離で放ってくる。

「……」

悲鳴を上げる気力すらなく、力無く倒れるだけだった。ここまでなのか……？

◆◆◆

「次のお相手は……」

D2はオーズにダメージを与えて後、財団のIS、『ヴァイオレット・バイオレンス（狂気の紫）』の元に来ていた。彼が見ているレーダーに映るのは近づいてくるISが7機あるということ。

ISの評価はISを相手にさせるのが、一番。そう思いヴァイオレット・バイオレンスを起動させる。Wとアクセルにはとっておきを向かわせた。だったら自分はここでオーズと専用機持ちの戦いを見させてもらおう、そう思ってその戦いの光景を映す。

元々、NEW WORLDのメンバーは財団によって作られた人間であった。ガイアメモリには適正がある。同じメモリでも性能を引き出せるのは人それぞれである。多くのメモリからその人間にあったメモリを探すよりは、メモリにあった人間を作った方が手っ取り早い。そんな計画からNEW WORLDは生み出された。メモリを解析し、メモリの性能を100%引き出せる人間を繋げる。つまり、自身のガイアメモリがもう1つの心臓とも言えるのだった。そのため、メモリブレイクされればソイツは消える。

ドーパントとしては十二分な力を発揮できるのだったが、とある件で財団はメモリから撤退することになった。そのため、ＮＥＷＷＯＲＬＤは存在価値を無くした。

だからこそ、財団にとって厄介な仮面ライダーを倒すことで自分達の有用さを証明しようとしたのだった。

「全てを破壊する、か……。それも悪くないかもしれないな」

Ｄ２はヴァイオレット・バイオレンスが飛び立つのを見送って呟くだけだった。

◆◆◆

「ラウラ、敵までどんくらいなんだ？」

「ああ。目標まで後……っ！」

「何か、来る……」

ヴァイオレット・バイオレンスの元へ向かう一夏達。目標位置まで後少しってとこで警告音がなり、紫色の何かが近くを横切っていった。

「まさか、もう起動していたとはな……」

「コイツ、かなりヤバいわよ。さっさと決めた方がよさそうね」

ヴァイオレット・バイオレンスが反転し、一夏達を向き合うと同時に禍々しい翼を広げて、高速で動き出す。それに対応するように白式、紅椿が飛び立つ。高速戦闘用に限らず、誰1人ちしてパッケージは装備していなかった。

白、紅、紫。その3色がぶつかり合う。ヴァイオレット・バイオレンスは特殊な装備はなく、武装もバズーカ、と斧だけと少ないが、その出力、スピードは福音をも越えるものだった。

隙を見て、セシリア、シャルロットは援護射撃をするが、当たらない。ラウラのＡＩＣも相手を思うように捕捉できず、鈴は双天牙月、簪はドリルアームを装備し、射撃組の3人の防衛に専念していた。

「一夏！」

「わかってる！」

箒の2刀を斧で受け止めたときに、一夏は雪片を振りかざす。当たれば大ダメージだっただろうが、その攻撃は斧を持っていない左腕に掴まれる。

『……』

雪片ごと一夏を投げ飛ばし、スラスターを全開して箒を押し飛ばす。体勢を崩した紅椿に斧で切りかかすが、それは銃弾に阻まれる。

「させませんわ」

セシリアはスターライトＭｋ－？で狙い撃っていくが、簡単にかわされる。

「まだまだ」

アサルトライフルを２丁構えたシャルロットが追撃をしかける。
それをものともせず、シャルロットに切りかかろうとした瞬間、ヴァイオレット・バイオレンスの動きが止まる。

「今だ、やれ！」

ドンッ！　ドンッ！

あちこちから次々と弾丸が叩き込まれていき、狂気の紫は煙につつまれる。

「やったの？」

「いえ、まだですわ！」

煙が晴れてそこにいたのはほぼ無傷の狂気の紫。この時、誰もが思った。コレを落とすには零落百夜しかない、と。

「コレは俺がやるしかないよな」

自身に気合を入れて、雪片を構える一夏。それを確実に当てるためにどうやって攻めていくか考えるみ皆の元に聞こえてくる声があった。

「ぐわぁあああああああああ」

抵抗もできず、なすがままにされるオーズガタトラタだった。彼らの前で痛めつけられていくオーズ。英治の悲痛な叫びがこだましていく。

敗北のO／狂気の紫（後書き）

英治フルボッコ回。Wとオーズを見比べて思ったことなんですけど、オーズって苦戦するシーンがWと比べるとスゴイ多いですよね。Wはナスカやタブーと序盤から優勢に戦うシーンがあるんですけど、オーズは9割グリードにボコられますよね……

それでは感想等お待ちしております。

Fを信じろ／その一撃のために（前書き）

Ｃｏｕｎｔ　ｔｈｅ　ｍｅｄａｌｓ
オーズが使えるメダルは……

クワガタ
トラ
ゴリラ
ウナギ
タコ

Fを信じろ／その一撃のために

「英治ィィイイイイイイ！」

一夏の目の前で繰り広げられる光景はオーズが４体のドーパントにやられているものだった。大地や岩石を操り、重い一撃を放つグランドドーパント。龍の名に相応しい攻撃力を持つドラグーンドーパント。青い剣士の姿をし、鋭い一撃を放つスラッシュドーパント。楽器のような姿だが、振動を操ることにより、距離があっても確実にダメージを与えてくるウェイブドーパント。

連続しての戦いのせいで、疲労がたまり、デストロイドーパントにやられて傷のせいで、目に見えて動きが悪くなっていく。さらに多くのコアメダルを奪われたせいでコンボも使えずに反撃の機会を得られずにいたのだった。

何度も倒れては立ち上がり、また倒れる。一夏はそんな英治を今すぐにでも助けに行きたかった。力は託されている。ああいう怪人と戦える力を。

だけど、今に相手はそんなことを許してくれるような相手ではなかった。一夏達が相手にしているＩＳ、ヴァイオレット・バイオレンスは専用機７体を相手にしても大したダメージを受けないでいた。しかも、全員のシールドエネルギーは半分を切っていた。７人揃ってやっとで互角であろうこの状況。１人抜ければどうなるのかは、簡単にわかった。

「一夏っ！」

箒の声がした。考えていたせいか、目の前には狂気の紫が。

「しまった！　ぐぅ……」

とっさに振りおろされた斧を剣で防ぐ。だが、つばぜり合いにならずに一夏は簡単に弾き飛ばされる。

体勢を立て直したときには、狂気の紫の追撃が。

「やばっ……！」

雪羅をシールドモードにして攻撃を防ぐ。何とか直撃は免れたのだが、シールドエネルギーはごっそりともっていかれた。

「もう、見てらんないわねぇ！」

「一夏、今のうちに距離を取るのだ！」

双天牙月を連結せずに構える鈴と、雨月、空裂の両刀を手にする箒が突撃する。狂気の紫は手にした斧と、格闘で応戦する。４本の剣で少しずつだが、ダメージを与えることができていく。

ガシッ

狂気の紫は２人を掴む。箒達は自分を掴む腕を離そうと攻撃をするが、こめられた力が緩む気配は一切なかった。圧倒的な力で掴まれた紅椿を甲龍の腕からはギギギと音が鳴り、火花が出ている。このままだと最悪の場合、２人の腕ごと砕かれるであろう。そんなことをわかっているのだが、鈴達の焦りは少ない。なぜなら……

「これ以上、やらせないよ！」

盾殺しを装備し、加速するシャルロットがいたからだ。盾殺しは危険と認識して、狂気の紫は距離を取ろうと加速する。だが、動くことはできなかった。

「やらせんぞっ！」

右手を向けて自分にＡＩＣをつかってくるラウラによって狂気の紫は動けなかった。その後、狂気の紫を囲む青い雫のようなもの。

「いきなさい、ブルー・ティアーズ！」

４方向から放たれた光は狂気の紫の頭部に直撃する。煙の中から出てきた狂気の紫は頭部にヒビが入っていたが、壊れるには至らず、しかも未だに箒と鈴を離さずにいた。だが、シャルロットは確実にその距離を縮めていた。

「これで！」

『ＧＡＡＡＡＡＡＡＡＡ』

「なっ！？」

咆哮を上げると、無理矢理ＡＩＣを振り切って狂気の紫は動き出す。掴んでいた箒と鈴をシャルロットめがけ投げつける。加速中であったシャルロットは方向を急に変えることもできなくて、２人にぶつかる。そのまま３人は地面に落ちる。

「鈴さん、篠ノ之さん。大丈夫でして？」

「シャルロット、無事か？」

セシリアとラウラの通信に答えようとする3人。だが、3人の目の前にゆっくりと狂気の紫は降り立ってきた。さっきまでと違い、その手にはバズーカを持って。

「くっ……ここまでか」

「諦めんじゃないわよ！」

悔しそうに唇を構える箒を叱咤する鈴。シャルロットはシールドを展開して襲い来る攻撃に備えようとするが、頭ではあんな攻撃をこのシールドでは防げない、そうわかっていたのだった。

バズーカの砲口には光が集まっていく。もう駄目か、そう思ってたとき、上空から光が降り注いだ。

「……間にあった……」

光を放った張本人である、簪は上空で呟いた。相手は撃墜には至らないものの、大ダメージを与えていることに安堵し、次の攻め手を考える。皆のエネルギー残量を考えると、ブレストキャノンを再度充填するまでの時間を稼ぐのは難しいだろう。かと言ってこのままじゃパワーもスピードも狂気の紫には勝てない。それに英治があんな状況である以上、早くこっちを何とかして助けにいきたい。だからといって焦っては勝てないこともわかっていた。

（だったら、アレ、やるしかない……）

そう思った簪は皆への回線を開く。

「お願い、隙を作って……これなら、何とかできる……」

その通信を聞いた全員はボロボロながらも頷いた。

「アタシに任せなさい！」

「鈴さん、援護しますわ」

真っ先行動したのは鈴だった。ブルー・ティアーズのビット、ライフルによる援護を受けながら、その距離を縮めていく。

「さっきまでのお返しよ！」

双天牙月を振り下ろす。だが、それは簡単に腕で止められる。そしてがら空きの鈴の体に斧を叩きつけようとする。

「まだまだぁ！」

斧の一撃をくらう瞬間、鈴は衝撃砲を放った。一矢報いると同時に甲龍は解除される。

「後は、頼んだわよ……」

道を塞ぐビットを壊していく狂気の紫を睨みながら、鈴は言った。

「箒、次は俺達が……」

「ああ、わかっている。遅れるなよ」

後のメンバーを信じ、一夏と箒はＩＳを最大速度で加速させる。
こんなスピードで飛び続けるとすぐにエネルギー切れを起こすのだが、今はこの一瞬をどうにかすればいいだけだった。策がある、そう言った簪を信じているからだ。
切りかかっては弾き飛ばされを繰り返しながらも時間を稼いでいく一夏と箒。

「はぁぁあああああ！」

一瞬でいい、そう願い２刀を振り下ろす箒。

「一夏っ！」

「ああ」

その呼びかけに応え、一夏は零落百夜を発動させる。残りのエネルギー全てを。

「これでも、くらえ！」

左手を切り落とし、白式はエネルギーが尽きる。ＩＳが解除され、落下していく一夏を回収する箒。悔しいことだが、彼女の紅椿のエネルギーはほぼゼロである。今向かっても足で纏いになるだけだろう。

「後は頼んだぞ……」

「なぁ、箒」

突然、一夏が話しかけてくる。その目はいつも以上に真剣だった。

「悪いんだけどさ、後頼めるか。俺、アッチに行ってくるよ」

指差す方向では爆発が起こる。あの方向では英治が戦っている、こっちよりも危険な場所であることはわかっていた。箒からしてみれば一夏にそんなところには行って欲しくなかった。でも、一夏の目を見たとき、そんな考えはなくなった。

「……一夏、無事に戻ってこい」

「ああ。絶対に戻ってくるぜ」

そう返し、一夏は駆け出した。見上げる空では４人が狂気の紫と戦っていた。

◆◆◆

「……お前がアクセルか……」

「貴様、あの赤いドーパントだな」

照井はソニックを呼ばれた男と向き合っていた。場所は風都の外れで、照井にとっては因縁の相手を振り切った場所だった。

「ああ。俺はお前と戦いたかった。どっちが速いのか知りたかったからな……」

『ＳＯＮＩＣ』

「来い。変……身！」

『ＡＣＣＥＬ』

「さぁ、振り切るぜ」

ソニックドーパントの持つダガーナイフとエンジンブレードが交差した。火花が飛ぶと同時に距離を取る。

「違う、その姿じゃない」

そう言ってソニックドーパントは赤い閃光となってアクセルを襲う。高速で切りつけられ、転がるアクセル。

「くっ……ならば……望み通りにしてやる」

『ＴＲＩＡＬ』

そのメモリをドライバーに入れた途端、アクセルは黄色くなり、青くなる。青くなると同時にその姿は身軽なものとなる。アクセルトライアル。挑戦の記憶を持つものは自身の最速に挑戦していくのだった。

「ふっ」

「はぁ！」

ぶつかるのは赤い閃光と青い閃光。ここに最速を極める戦いが始まったのだ。

Fを信じろ／その一撃のために（後書き）

とりあえず大体の敵ドーパントの名前が出たので、モデルを発表したいと思います。わかってる人は多いでしょうけど。

タイムドーパント↓仮面ライダー電王（時間だから）
ブラッドドーパント↓仮面ライダーキバ（ヴァンパイアより。キバの訳ファングだとかぶるし）
フォトンドーパント↓仮面ライダーファイズ（フォトンブラッドより）
デストロイドーパント↓仮面ライダーディケイド（破壊者より）
グランドドーパント↓仮面ライダーアギト（グランドフォーム）
ドラグーンドーパント↓仮面ライダー龍騎（竜だから）
スラッシュドーパント↓仮面ライダーブレイド（剣と言ったら斬るだから）
ウェイブドーパント↓仮面ライダー響鬼（音は波だから）
ソニックドーパント↓仮面ライダーカブト（高速移動できるから）

残った1人は何がモデルかもうわかりましたよね。イメージはそのラスボスに近いですけど。

それでは感想等お待ちしております。

Iの変身／ハイスピードバトル（前書き）

Ｃｏｕｎｔ　ｔｈｅ　ｍｅｄａｌｓ
オーズが使えるメダルは……

クワガタ
トラ
ゴリラ
ウナギ
タコ

Iの変身／ハイスピードバトル

高速でぶつかりあうアクセルトライアルとソニックドーパント。青と赤の閃光の対決は激しさを増していた。

Sドーパントのダガーナイフを振り払いながらローキックを放つ。だが、それを蹴りで返され両者は距離を取る。

「ふふふ、ふふふふふ」

「貴様、何がおかしい……？」

急に笑い出すSドーパント。彼の組織、ＮＥＷ　ＷＯＲＬＤの目的はさっさと仮面ライダーを倒してその力を証明することだった。だが、ソニックドーパント個人としては自分と同じ速さを持つアクセルと戦うことでその心は踊っていた。この戦いは俺にとって大事なものとなる、と。

「……こんなに心躍る戦いは初めてでな……」

「悪いが、貴様の趣味につきあってる暇はない！」

そう言って両者は再びぶつかり合う。何かが通り去った後はあるし、音も聞こえる。だが、肝心の姿は見えない。高速の世界での戦いは戦っている彼らにしか到達できないものだからだ。

「はぁ！」

「はっ！」

何度目の激突だろうか。拳をダガーナイフがぶつかりあった後の刹那の静止。

「くっ……」

膝をついたのはアクセルだった。

無手とダガーナイフ。それだけでリーチの差はできる。それに戦うのは高速の世界。ちょっとの油断が命取りとなる場所だ。いくらダガーナイフと言えど、その威力は冗談では済まされないものとなるのだ。

だが、リーチだけならエンジンブレードがあれば、つばぜり合いも含めてアクセルが有利になるはずだった。けれど一瞬の隙が命取りの高速戦闘では、それの扱いによっては一気に不利になる恐れがあった。

加えてソニックドーパントの戦いはカウンター主体であった。一撃一撃の威力は低くても何度も叩き込まれれば、そのダメージは大きなものとなるのだ。

「……これで終わりだ」

ダガーをアクセルの首に当てる。そのまま力を入れれば自分の勝ちだ。そう言い聞かせ力を込めた瞬間、その腕は掴まれる。

「まだだ、まだ終わらん！」

強い力でソニックドーパントの腕を掴む。Sドーパントは抜け出そうともがくが、アクセルが手を放す気配は無かった。

「これで終わりだ！」

ドライバーからトライアルメモリを抜き、作動させる。

『ＴＲＩＡＬ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

トライアルメモリがカウントを開始すると同時にそれを宙に投げ、回し蹴り、裏拳を次々と叩き込んでいく。

攻撃の波にさらされ身動きの取れないＳドーパントを襲う技の応酬。次第にそれはマシンガンのような蹴りへと変わっていく。

「はぁあああああああ」

青いＴ字型の光がＳドーパントの体に浮かび上がる。そのまま何十発ものキックを叩き込む。

「はぁ！」

最後の一撃である回し蹴りを叩き込む。後ろを向き、落ちてくるトライアルメモリを掴む。

「９．８秒。それがお前の絶望までのタイムだ」

爆発を背にアクセルはそう言い放った。ソニックドーパントだった男はメモリブレイクとともに消滅した。その最後には自分の宿敵であった男を思い出させた。

ガイアメモリとは悪魔のものだ。そんなものをこの街からなくす。そう決意を新たにし、照井は次の場所に向こうとした。だが……

フラッ……

よろめいた。さっきの戦いのダメージが大きかったのか、照井はその場に膝を着いた。今のままで次の相手を発見しても足で纏いになるだろう。そう判断した照井は空を見上げ、呟いた。

「左、フィリップ。それに火野、後は頼んだ」

◆◆◆

「セイヤッ」

ボロボロのまま振り下ろしたトラクローは簡単によけられ、反撃の拳をくらう。コンボという切り札ができない以上、この状況を打開するのは難しい。でも、俺は諦めるわけにはいかないんだ……

「いい加減、しつこいですね」

グランドドーパントのかかと落としを受け止める。しつこいって言うけど、負けられないんだ。だから、当然だよ。

グランドドーパントの足を振り払って、トラクローで切り裂く。よろめいた後、追撃をしようとするけど、今度はウェイブドーパントの棒に阻まれる。

「おりゃあ！」

そしてドラグーンドーパントの爪が突き立てられ、また地面に倒れる。立とうともがいたところを腹でけられる。

「そろそろ、楽にしてやるか……」

そう言うのはスラッシュドーパント。仰向けで倒れる俺の左胸めがけてその剣を突き立てる。

このままじゃ……

そう俺が覚悟を決めた瞬間、銃声が鳴り響いた。

「む、一体誰だ……？」

「邪魔者が来ましたか……」

一同の視線の先にいたのはバースバスターを構える一夏だった。

「これ以上、仲間はやらせねえ！　変身！」

バースドライバーを巻き、セルメダルを入れる。カポーンって音がすると、一夏の姿は変わる。

伊達さんが変身するバースと違ってUフラッシャーは緑に光り、ところどころには赤いラインが。バースの試作品であるプロトバース。一夏に託された力だった。

「うぉおおおおおおお」

プロトバースは駆け出して、近場にいたスラッシュドーパントに殴りかかる。戦いに慣れていないからか、その一撃には怯む気配すら相手は見せないけど、そんなことは気にしないって感じに一夏はこぶしを連続で叩き込んでいく。

「邪魔だ」

一閃。その一撃で一夏は俺の近くまで転がってくる。

「一夏、どうしてここに？」

「白式のエネルギーも切れちまったしな、それに友達を放って置けるわけないだろ」

「……助かったよ。ありがとう」

「気にすんなよ。それより……」

一夏の言いたいことに黙って頷く。視線の先にはゆっくりと歩いてくる４人のドーパントが。

さぁ、反撃開始だ！

◆◆◆

「装備、フル展開……Ｂｉｒｔｈ・Ｄａｙ始動……」

一方の狂気の紫と向かい合う専用機持ちチーム。既に鈴と箒は戦闘不能となっていて、残るのはボロボロのセシリア、シャルロット、ラウラであった。簪の頼みによって時間稼ぎをする３人は、武装の大半を消費し、シールドエネルギーも３分の１を切っていた。

それでも狂気の紫は止まることを知らずに、暴れようとする。狙いをつけたのはＡＩＣの連発で集中力が切れかけのラウラ。本来ならこの位使った程度ではこんなことにならないのだが、相手が悪すぎた。ＡＩＣで何とか捉えられても少しでも気を抜けばすぐに逃げられる。

「……しまった！」

「やらせませんわ！」

回避行動が遅れるラウラの前にはセシリアが。インターセプターを構えた彼女は何とかしてそれで対抗しようとしたが、あえなく落とされる。

「セシリア、礼を言うぞ」

「でしたら、勝ってください」

そう言ってセシリアは落下した。ＩＳの絶対防御によって彼女は無傷だった。

「ラウラ、これからどうする？」

「とにかくやるしかないな。私達のエネルギーで戦うのは心もとないが……」

シャルロットとラウラ。彼女達の前には加速してくる狂気の紫が。だが、狂気の紫は２人にたどり着く前に何かにはねとばされた。

「…お待たせ……」

攻撃をしかけたのは簪だった。だが、その右腕にはクレーンアームとドリルアーム。左腕にはショベルアーム。足にはキャタピラレッグ。そして胸部にはブレストキャノン。背中の標準装備でありカッターウィングと合わさってその姿は正にバース・デイだった。

「大丈夫、後は、任せて……」

簪を最大の障害と認識した狂気の紫の斧が降り下ろされる。だけど、簪は慌てることもなく、ショベルアームでそれを防ぐ。

だが、防ぐだけなのにその光景は箒達を驚かせたのだった。

「す、すごい。何よ、アレとパワーは互角っての？」

「私の紅椿でも押されたものを……」

地上で感嘆の声を上げる箒と鈴。その2人の元に近づいてくるセシリアの表情もまた驚きのものだった。

「えい！」

拮抗状態のままブレストキャノンを放つ。相手を引き離せればいい程度に考えていたため、その威力は低かったが、簪の思い通りになった。衝撃で後ろに飛ぶ狂気の紫めがけて今度はクレーンアームにつけられたドリルアームを放つ。ドリルはまっすぐに狂気の紫の胸部にあたり、ヒビを入れる。

接近戦では分が悪いと感じたのか、放たれるバズーカを旋回してかわしながら簪はブレストキャノンで反撃する。

「これでも……！」

狂気の紫が動きを止めた一瞬の隙を逃さず、ショベルアームを叩き込む。その攻撃は狂気の紫の右腕を砕き、相手の攻撃を封じることとなった。

『……』

ついには逃げ出そうとする狂気の紫。でも、ここで相手を逃がすわけもなく、簪はブレストキャノンのチャージを始める。

（５０％、これで十分……）

「ブレストキャノン、シュート！！」

放たれた光はまっすぐ狂気の紫を貫く。飛び散る残骸の中から紫色のコアメダルを見つけ、回収しようとする。

「あ……」

１枚は掴めたが残り2枚には届きそうもなかった。それでも簪は手を伸ばそうとした。

（お願い、届いて……）

こんなところでコアメダルを落とせば見つけるのは難しいだろう。きっとこのメダルが英治の助けになるはず。だからこそこのメダルを簪は確実に掴みたかった。

でも、そんな簪の焦りはすぐに終わった。なぜなら……

「ふぅ、何とか間に合ったね」

「これで英治が逆転することができるのだな」

シャルロットとラウラがそれぞれ1枚ずつ掴んでいたからだ。

「た、助かった、ありがとう……」

「それより……」

「ああ。さっさと行くぞ」

彼女達3人は目をあわせるなり、頷いた。このメダルを届けるために。

Iの変身／ハイスピードバトル（後書き）

次回はあのコンボが登場。それとWの出番がちゃんとありますよ。

それでは感想等お待ちしております。

究極のB／無限のデータベース（前書き）

Ｃｏｕｎｔ　ｔｈｅ　ｍｅｄａｌｓ
オーズが使えるメダルは……

クワガタ
トラ
ゴリラ
ウナギ
タコ

「うぉおおおお」

拳を振るうプロトバース。グランドドーパントにあたるが、相手はびくともしなかった。

「その程度ですか……？　はっ！」

逆に殴り飛ばされて一夏は俺の方に飛ばされる。その俺も残った3体のドーパントの攻撃を凌ぎきれず、ダメージをさらに負っていくだけだった。

「一夏、大丈夫？」

「ああ、なんとかな。やっぱり慣れねぇな。コレ。剣でもあればちょっとはマシになるかもしれないけど」

立ち上がってぼやく一夏。彼のＩＳでの戦闘スタイルは刀メインだからね。第2形態移行してその他の武器が増えたくらいだし、それに伊達さんとの特訓をしたからって銃の使いがバッチリってわけじゃないからなぁ。ん、待てよ……

「一夏！」

ふと思いついた俺はソレを一夏に渡す。それを受け取った一夏はびっくりしたように何度もこっちを見てくる。

「英治、お前、いいのか……？」

渡されたもの、メダジャリバーを見て一夏は聞いてくる。俺が丸腰になるのが気になるんだろうな。オーズは各アームにそれぞれ武器として使えるものがあるから心配は杞憂だけど。

「一夏、それであの青いドーパントの相手を頼むよ。俺は何とか残った3人を抑えとくから」

「ああ、わかった。無理すんじゃないぞ」

「そっちこそ」

そのやり取りの後、プロトバースはメダジャリバーを構えて、スラッシュドーパントに切りかかる。Sドーパントはそれを剣で受け止め、つばぜり合いとなる。すぐさま離れ、もう一度切りかかる。

剣と剣がぶつかり合う音を聞きながら俺は残りの3体と向かい合う。

「じゃ、俺も何とかしないとな……」

『クワガタ！　ウナギ！　タコ！』

ガタウタとなった俺は頭からの電撃、ウナギウィップを振り回すことで距離を持ちながら戦い始めた。近づいてくるグランドドーパントを右手のウナギウィップではらい、左手でウェイブドーパントに巻き付く。そしてそこにクワガタの電流を流し込む。クワガタとウナギ。それぞれの電撃が組み合わさり、ウェイブドーパントを襲う。さすがにコレはきいたのか、煙をあげながら膝をついたのだっ

た。

「おりゃあ！」

「がっ……」

後ろからの衝撃によろめきそうになるのをタコレッグで踏ん張る。仕掛けてきたのは拳に炎を纏わせるドラグーンドーパント。炎を使う相手にはシャチはあればよかったんだけど、ないものねだりをしてもしょうがない。今の手持ちのメダルで何とかしなきゃな。でも、何がいいんだ……？

◆◆◆

「相棒が言うには、ココにいるみてぇだな……」

廃工場の中を歩くのは翔太郎。フィリップの検索によってこの場所をつきとめて、やってきたのだ。どんなヤツが相手でもこの街を泣かせるヤツは許せねぇ。だから絶対に止めてやる。そう心に誓う翔太郎は廃工場の奥へと足を進めるのだった。

「ん？」

そうしてやってきたのは一番奥の部屋。そこにいたのは白い服を来てつまらなさそうにあくびをする少年だった。

「やっと見つけたぜ。テメェがＮＥＷ　ＷＯＲＬＤのメンバーだな？」

「うん。君達との戦いを楽しみにしていたんだ。その力で僕を楽しませてよ」

向かい合うのはアルと呼ばれた少年。少年はあどけない笑みを浮かべているが、その中には狂気が隠されていた。

「子供はさっさとガイアメモリを渡して帰んな。それはお遊びに使うもんじゃない」

「そんなことはわかってるよ。いいから始めようよ」

『ＵＬＴＩＭＥＴ』

ガイアウィスパーが鳴り響く。少年が首にあるコネクタに自身のメモリ―アルティメットメモリを挿し込むと少年の体は黒い闇に包まれ、その姿を変える。

真っ黒で禍々しく、刺々しい体。その瞳も闇に捕らわれたかのように濁っていた。

「変身しなよ」

そんな見た目とは裏腹にその声はまだあどけなさが残っていた。純粋であるがゆえに迷うことなく破壊をすることができるのだろう。

「ちぃ。しゃあねぇな。いくぜ、相棒」

『ああ』

ダブルドライバーを装着することによって2人の感覚は共有される。フィリップもアルの中にかつての自分よりをも越える恐ろしさを感じていた。

『ＣＹＣＬＯＮＥ』

『ＪＯＫＥＲ』

場所は違えど、同じタイミングで響くガイアウィスパー。翔太郎は右手、フィリップは左手でガイアメモリを持ち、2人並んだときにWの字になるように腕を動かす。

「『変身』」

まずはフィリップがサイクロンメモリをダブルドライバーの右側に挿し込む。瞬間、鳴海探偵事務所の地下ガレージでフィリップは意識を失う。

サイクロンメモリが転送されてきたと同時にジョーカーメモリを入れ、ダブルドライバーを開く。

『ＣＹＣＬＯＮＥ　ＪＯＫＥＲ』

翔太郎は風に包まれ、仮面ライダーWに変身する。

「『さあ、お前の罪を数えろ』」

お決まりのセリフを言うとともにWは駆け出す。

「はぁ！」

風を纏いながらの飛び蹴り。アルティメットドーパントは少し後ずさるだけで大したダメージは受けていないようだ。

「どんどんいくぜ」

疾風の名のごとく、攻撃をするW。だが、それらは簡単に受け止められる。

「ふ～ん。今度はこっちからいくよ」

アルティメットドーパントのパンチ1発でWは大きく吹っ飛ぶ。

「くっ、なんてパワーだぜ」

『翔太郎。ここはパワーにはパワーだ』

「わかった」

『ＨＥＡＴ　ＭＥＴＡＬ』

右半身は赤く、左半身は銀色になり、背中には専用の武器、メタルシャフトが装備される。

メタルシャフトに炎を纏わせ、振り下ろしたり、突いたりするがアルティメットドーパントはびくともしない。

「だったらコイツはどうだ」

『ＨＥＡＴ　ＴＲＩＧＧＥＲ』

ゼロ距離で炎の弾丸を放つ。ハーフチェンジの中での最大の攻撃力を持つ形態なだけあってアルティメットドーパントは大きく吹き飛ぶ。

「やったか……？」

『いや、まだだ』

「その程度なの？」

何事もなかったかのように立ち上がるアルティメットドーパント。こんなに強い相手は以前現れたコイツと同じ究極の名を持つもの以来だな。そんなことを思いながらWは次の手を考える。

『成程。アルティメットメモリとはその名の通り究極。何か秀でた特殊な力を持っているわけではなく、その身自体が最強。そういうことみたいだね』

「だったらこっちも究極だ。いくぜ、相棒」

『ああ。翔太郎。だがしかし、エクストリームは正確には究極の意味ではない』

「だぁああ。そんなことは後でいいだろ」

サイクロンジョーカーに戻ったWの元に飛来するエクストリームメモリ。体の中央にはクリスタルサーバーが出現し、そのマスクも形を変える。

Wサイクロンジョーカーエクストリーム。地球という無限のデータベースと繋がった姿である。この姿で多くの強敵に打ち勝ってき

たのだ。

「いいよ。それだよ。僕が求めていたものはっ！」

さっきまでとはうって変わってアグレッシブに攻撃を仕掛けてくるアルティメットドーパント。Wは動じることもなくその拳を受け止める。

「あぁぁぁあああああああ」

空いてる拳も突き立てようとする。この距離ならWも反応できないだろうと、考えてのことだった。

「『プリズムビッカー』」

だがその攻撃もＣＪＸの専用武器プリズムビッカーに阻まれる。

「ちぃ！」

後ろに跳んで距離を取るUドーパント。あのままの状態で戦っていれば自身が負ける気がしたからだ。そうは思っても自分にそう感じさせるWの存在に興奮していたが。

『翔太郎。敵の身体能力はエクストリームより上だ』

「つまり殴り合いとかはすんなよってことだろ」

フィリップの肯定を聞き、Wはプリズムメモリを取り出す。

『ＰＲＩＳＭ』

プリズムメモリを入れることにより、プリズムビッカーはプリズムソードとビッカーシールドの2つになる。光の矛と盾を構え、Wは相手の出方を伺うのだった。

◆◆◆

『クワガタ！　ゴリラ！　タコ！』

『スキャニングチャージ！！』

「はぁぁあああああ、セイヤーーーー！！」

電撃を纏ったバゴーンプレッシャーを放つけど、ドラグーンドーパントの火球によって威力は抑えられ、グランドドーパントが作り出す土の壁によって防がれる。

「悪いな。隙だらけだぞ」

「しまった……」

体が震え、バランス感覚がおかしくなりそうになる。タコレッグじゃなかったら絶対立ってられなかったな。攻撃の主、ウェイブドーパントは「お、耐えたか」と飄々とした態度でいた。

「うわぁぁあああああああ」

「え？」

声をあげて飛んできたのはプロトバース。突然のことに反応できなくて俺はぶつかって吹っ飛ぶ。元々のダメージがたまっていたのか2人共変身が解除される。

一夏が戦っていたスラッシュドーパントの方を見ると手負いのようで、後1歩ってとこで負けたんだろうってことが考えられた。

「くっそ、後1歩だったのに……」

一夏はもう一度変身しようとするが、バースドライバーは遠かった。いや、バースドライバーだけじゃなかった。さっきまで使ってたコアメダルもバースドライバーの近く、つまり俺から遠くにあった。この距離じゃ取りに行ってる間にドーパントにやられて終わりだ。幸いにもオーズドライバーは手元にあるけど、ヘッドのコアもレッグのコアももうない。どうする？

俺が考えてる間もドーパント軍団は近付いてくる。このままじゃ……

ドガァァンッ！

その時、ドーパント達の足元が爆発する。そこからさらに爆発。

「これで手持ちの武器はもうないよ」

「私もだ。英治、無事か？」

「コレ、使って……」

やってきたのは簪、シャル、ラウラの3人。皆の手には紫のコアメダルが1つずつ。あんまりこのコンボは使いたくないけど、何もできなくて後悔する方がずっと嫌だ。だから、やるよ。

「ありがとう、3人とも。これで俺はまだ戦える」

オーズドライバーに紫のメダルを入れていく。オースキャナーにそれを読み取らせていく。キン、キン、キンと聞きなれた音が響く中、いつものように叫ぶ。

「変身！」

『プテラ！　トリケラ！　ティラノ！　プットティラノザウル～ス！！！』

全身が紫色に輝き、冷気が覆う。見る人によっては神々しい印象のタジャドルコンボとは違い、悪魔のような姿。何もかも破壊できる力を持ってるけど、俺はこの力を守るために使う。

オーズプトティラコンボの降臨の前に4体のドーパントは固まるだけだった。彼らの本能が告げていた。コイツは相手にしてはいけない、と。

究極のB／無限のデータベース（後書き）

プトティラとエクストリーム登場。これで勝てる。
ただ自分の中ではアルティメットドーパント＞＞エターナルなので、少々Uドーパントが強くない印象が……

次回はプトティラ無双。多分風都編は後5話以内に終わるはずです。
さらにその後……
IS学園やライドオーズの出番をお待ちの方はしばらくお待ちください。

それでは感想等お待ちしております。

PS
MOVIE大戦MEGAMAXで故郷のB級グルメの名前が出たときはびっくりしました。

無敵のP／太古の力（前書き）

Ｃｏｕｎｔ　ｔｈｅ　ｍｅｄａｌｓ
オーズが使えるメダルは……

クワガタ
トラ
ゴリラ
ウナギ
タコ
プテラ
トリケラ
ティラノ

無敵のP／太古の力

「うぉおおおおおおおおお」

咆哮を上げ、ゆっくりと歩き出す。相手のドーパント達はプトティラの威圧に押されたのか、反応が遅れていた。

「くそっ、こんなの俺が……！」

ドラグーンドーパントが前に出て火炎を放つ。その火炎に負けじとこちらも冷気を放つ。ぶつかりあう炎を冷気。お互いがお互いを打ち消し合い、蒸気がその場を覆う。

「がぁあ！」

「ぐわぁあああああ」

蒸気の発生とともに駆け出し、ドラグーンドーパントに拳を振るう。プトティラのパワー、そして相手が反応できなかったこともあわさって相手はかなり吹っ飛んでいった。

次に残った3体と向き合う。ドラグーンドーパントはまだメモリを壊してはいないけど、今の手応えじゃそう簡単には復帰してこないだろうな。今の間に数を減らしておかなくちゃな。

「おいおい、マズイんじゃないのか、コイツは？」

「ああ。俺もそう思う。だが、こんなところで止まってるわけにはいかないからな」

棒と剣、それぞれの得物を携えてウェイブドーパント、スラッシュドーパントは近付いてくる。

「がぁ！」

だけど、それを展開した尻尾―テイルディバイダーで弾き飛ばす。そのまま転がってよろめく2体に追撃をしかけるためにエクスターナルフィンを開き、飛翔する。

「やらせませんよ！」

途中、グランドドーパントが岩の壁を作り、妨害するけど、このコンボにはそのくらいどうってことない。

簡単その壁をぶち抜けてスラッシュ、ウェイブの2体に拳を振るい、蹴りを放つ。

今度はうめき声をあげて倒れる2人の助けに入るため、グランドドーパントが格闘戦を挑んでくる。

「はっ！」

グランドドーパントの正拳を受けるけど、びくともしないで歩き続ける。今度はキックを放ってくるけど、それを受け止めて相手を投げ飛ばす。

「くっ……はぁ、はぁ」

フラフラと立ち上がり、構えを取るグランドドーパント。どうしても相手は引いてくれる気はないみたい。それが相手のやりたいことなんだろう。だったら、俺は……

『スキャニングチャージ！！』

全力で相手を倒す。そう思い、オースキャナーを動かす。

肩から伸びるワインドスティンガーがグランドドーパントを貫く。エクスターナルフィンが開かれ、ワインドスティンガーに沿って相手に冷気を送り込み、凍らせる。そして凍った相手をテイルディバイダーで砕く。

凍った体が砕けると同時にグランドメモリも消滅して、使用者はいなくなる。自分のエゴでその人のこれからを奪ったことを悔しく思うけど、今は戦いなんだ。そっちに集中しなきゃ。そうしなくちゃ本当に守りたいものすら守れないから。

「す、すげえな」

「う、うん。何て言うか……」

「……あ、圧倒的……」

「ああ。あれが英治が恐れた力なのか。だが、アイツはその力をどう使うべきなのか分かっているから強いんだろうな」

少し離れた場所から俺の戦いを見てるのは一夏に紫のメダルを持ってきてくれた3人。一夏は今がチャンスだと思い、もう一度プロトバースになって戦おうと思った。でも、自分の実力や今の戦況を考えると今行っても足で纏いにしかならないこともわかっていたんだろう。握った拳は小さく震え、唇を悔しそうに噛み締めていたから。

「畜生！　よくもグランドを！」

何とか復活したドラグーンドーパントは拳に炎を纏わせながら走り寄ってくる。

「うぉおおおおおお」

いきなりのことに反応が遅れてその拳にあたって後ろによろめく。

「おりゃあっ！」

「ふっ！」

後ろからはスラッシュとウェイブの攻撃が。相手は力の差を連携で埋めようとしてくる。現に俺は中々反撃のチャンスを見つけれずにいた。

剣にロッドに火球。格闘だけで戦うのは難しくなってきた、そう感じた俺は大地に拳を突き立て、何かを掴む。取り出したのは恐竜の口のような斧、メダガブリュー。

メダガブリューを叩きつけるようにウェイブドーパントに振り下ろす。

バキンッ！

「なっ……」

ウェイブドーパントの振動す棒をへし折り、メダガブリューの一

撃はウェイブドーパントを襲う。まっすぐに振りおろされた一撃は相手から火花をあげて大地に伏せさせる。

「はぁぁあああああああ」

袈裟懸けに剣を振り下ろす攻撃を腕甲で防ぎ、メダガブリューで横に薙ぐ。スラッシュドーパントは激しい轟音をたて、廃墟の壁に激突する。

「この野郎ぉおおおおおお……うわぁぁあああああ」

ドラグーンドーパントを一閃。苦痛の叫びをあげてよろめくドラグーン。

そんなドラグーンをよそに俺はメダガブリューにセルメダルを入れる。

『ゴックン』

『プットティラノヒッサ～ツ！！』

「がぁあああああああああ」

紫色のエネルギーを纏った一撃はドラグーンドーパントを消し飛ばした。残るのは後2体。

『ゴックン』

またセルメダルを入れる。今度はメダガブリューをアックスモードからバズーカモードにする。

『プットティラノヒッサ～ツ！！』

放たれた紫の光の渦は残った2体を飲み込む。断末魔をあげる暇さえ与えずに爆発が起こる。

辺りの敵は倒した。少し体を休めよう。そう思って変身を解こうとした瞬間にまた景色が変わった。デストロイドーパントが呼んでるんだろうな。今度こそ勝たなくちゃ。

◆◆◆

「あはははははは」

狂った笑いをあげるアルティメットドーパントの一撃をビッカーシールドで受け止め、プリズムソードを振るう。

「ふふふ、あはははははは」

ダメージをくらいながらもその笑いは途切れることなく、拳を振るい続ける。何発もの拳をシールドで受け止めるが、徐々に後退していく。

「くっ、どういう体してんだよ、コイツは」

『言ったろ、翔太郎。ヤツの身体能力はエクストリームをも上回る、と』

「ああ、そうかよ。でもな、俺は負けるわけにはいかねえからな」

『そこは俺達は、だろ』

「……だな。いくぜ、相棒」

「『はぁぁあああああ』」

2人の力をこめたプリズムソードはアルティメットドーパントを大きく吹き飛ばす。

「あはは、このくらい……ッ！」

大したダメージでは無い。そう思ってたアルティメットドーパントの体に違和感が。傷つけられたところをおさえながらWの方を向く。

『いくら究極の体と言っても完璧ではない。メモリがある場所をダイレクトに狙えばダメージにはなろだろ？』

「くそっ……でもまだまだだよ！」

何度も拳を振るうが、よけられ、払われ、盾に止められる。2人分の感覚を持つものと焦りや痛みから動きの精細を欠いたもの。どちらが有利なのかは明白だった。

「うわぁぁあああああああああ」

Wの一撃は正確に弱点を突く。

ピシッ

自分のメモリに亀裂が入ったのがわかる。それでも戦うことを止める気はなかった。アルティメットドーパントにとって戦うことは快楽でもあり存在意義でもあったからだ。

「あぁぁあああああああ」

右足が黒く光る。その一点に残されたエネルギーを集中させる。Wといえどモロにくらえばタダでは済まないだろう。

「……フィリップ」

『ああ』

Wはドライバーのエクストリームメモリを閉じ、もう一度展開する。

『ＥＸＴＲＥＭＥ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

「『はぁぁあああああああ』」

Wの体は竜巻に包まれ、飛び上がる。

「『ダブルエクストリーム！！』」

アルティメットドーパントが突き出した右足とWの両足が激突して激しい爆発を起こす。地面に叩きつけられる両者。

「くふふ、あはははははは」

ボロボロながらも、先に立ち上がったのはアルティメットドーパントだった。だが、その体はあちこちが粒子になろうとしていた。

「はははははは」

指先が、足先が消えていくのに狂ったように笑い続けるアルティメットドーパント。そのまま笑い続け、その身体は消滅した。

パキン、メモリの残骸だけがその場に残る。Wはその光景をただ見つめるだけだった。

『翔太郎、やつらＮＥＷ　ＷＯＲＬＤについてだが……やはり財団Ｘが絡んでいるようだ』

「……そうか」

この街を泣かせる死の商人、財団Ｘ。それを絶対に叩き潰すことをWは誓うのだった。

『翔太郎、アレを見るんだ』

「あ」

目の前には空間の歪みが自分達を招くように広がっていた。理屈よりも先に翔太郎は感じていた。これはＮＥＷ　ＷＯＲＬＤの最後の１人からの挑戦状だと。

「いくぜ、相棒」

『ああ、いこう』

迷うことなくWはその歪みに向かって歩きだした。

無敵のP／太古の力（後書き）

次回、この章の最終決戦。
どういう展開が熱くなるのか、考えていたら気がついた。タカもトラもバッタも一枚ずつしかないから全コンボ集合はできない、と。

最初の方を改訂してそれぞれの１０枚目だけ存在しているようにするか、それとも諦めるか……
まあ、この章では全コンボ集合とかはやりませんけどね。

ふと思いついた小ネタ（スーパータトバ用）
仮面ライダーアクアことミハル↓三春↓織斑三春って名前の一夏もしくは千冬の子孫。名前を変換してみたら思いついた。

それでは感想等お待ちしております。

Cに平和を／決着がつくとき（前書き）

Ｃｏｕｎｔ　ｔｈｅ　ｍｅｄａｌｓ
オーズが使えるメダルは……

クワガタ
トラ
ゴリラ
ウナギ
タコ
プテラ
トリケラ
ティラノ

「待っていたぜ」

男、D2は荒野に立ち尽くしていた。今度は負けない。メダガブリューを構え、相手を見据える。

『DESTROY』

「うぉおおおおおおおお」

「はぁあああああああああ」

D2がドーパントになった瞬間、俺と相手は駆け出した。お互いの拳が突き刺さり、両者を飛ばす。

俺は地面に倒れる前に翼を広げ、飛び立つ。そして相手との距離がゼロになったとき、メダガブリューを振り下ろす。

「ガァ！」

「くっ……」

デストロイドーパントは何とか剣でそれを受け止めるが、すぐに弾き飛ばされる。

「だったらコレだ！」

不規則な軌道で、でも確実に俺を狙ってくる破壊弾がいくつも飛んでくる。よけるのは無理だったから、それをテイルディバイダー

やメダガブリューで撃ち落とす。

「チッ……」

相手は苦虫を噛み潰したような声をあげるけど、攻撃の手を緩めようとはしなかった。

次第に多くなっていく光弾を撃ち落とすのが間に合わなくなって、次々と攻撃があたっていく。俺は両腕をクロスさせて少しでもダメージを減らそうとするけど、攻撃の手は止まない。

「これで終わりだ！」

刹那、何十発もの光弾は襲いかかってきて、爆発をあげる。

「これで……」

「うぉおおおおおおおおおおおお」

「なっ……」

だけど、プトティラとなった俺はそんなダメージを気にすることもなく、走り、メダガブリューで一閃。

「はぁ！」

よろめいたところに拳を叩き込んで、テイルディバイダーを叩きつける。

轟音をあげて、大地に倒れるデストロイドーパント。ボロボロながらもとある機械を取り出す。

『ＤＥＳＴＲＯＹ　ＵＰＧＲＡＤＥ』

ガイアメモリ強化アダプタを相手が使うと、その姿は鋭角的になり、禍々しさが増す。感じ取られる威圧は物凄いもので、プトティラでさえ、怯むほどだった。

『ＤＩＭＥＮＳＩＯＮ』

ディメンジョンメモリを起動し、デストロイドーパントは消える。多分、狙ってくるのは俺の死角。そう思って後ろを見るけど、誰もいない。どこだ？　そう思って上を見回すけど、見つからなかった。

「どこを見ている？」

「ッ！」

デストロイドーパントが現れたのは俺の目の前。突然のこと過ぎて反応できなかったから、重い一撃をくらう。プトティラでさえ激しく吹き飛ばされるほどの力。一瞬でも隙を見せたら終わりだ。そう自分に言い聞かせて立ち上がる。

ダッ、ダッ……

両者無言で走り出す。拳を叩き込み、得物を振るう。何もない場所にはただただ鈍い音だけが響いていく。

「はぁあああ」

雄叫びをあげながら振りおろされた剣が俺を捉える。強烈な痛みに膝をつく。すぐに立ち上がろうとするけど、周りには何発もの光弾が。

倒れるの覚悟で突っ込むしかないのか？　そう思っていたとき、響く音が。

『ＣＹＣＬＯＮＥ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

『ＨＥＡＴ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

『ＬＵＮＡ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

『ＭＥＴＡＬ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

突然現れた光の壁に光弾は阻まれ、爆発する。立ち込める煙の中、浮かび上がる一つの影。

『何とか間に合ったようだね、翔太郎』

「ああ。それに、早くコイツを倒さねぇとな」

煙が晴れ、その姿が見える。右が緑、真ん中はクリスタル、そして左側は黒。剣と盾を構えたＷサイクロンジョーカーエクストリームがそこにはいた。

「フッ、やっと来たか。お前達２人を同時に倒さないと、俺達の存在価値は証明できないみたいだからな」

剣の柄をなぞり、デストロイドーパントは言う。その声には２対１でも勝てるという自信の色があった。

「言ってな。とにかく、この、街を泣かす奴は許さねぇ。止めてやるよ、俺が、いや……」

「『俺／僕達が！』」

「そうですよね。俺も手伝いますよ。ライダーは助け合いですから」

「違いねぇ。頼りにさせてもらうぜ」

俺の言ったことに頷く翔太郎さん。頼りにされるんだし、俺ももっと頑張らないと。

『翔太郎、いくよ』

「ああ」

「『さあ、お前の罪を数えろ！』」

「ふっ、そんなもの知るかよ」

自分の罪を気に止めることもなく、剣を構えるデストロイドーパント。ここで言うのも不謹慎だけど、Wみたいな決めゼリフがあるのもいいのかも、そう思ったのはおいておこうか。

「いきますよ、仮面ライダーW」

オーズとW。2人の仮面ライダーが揃ってからは圧倒的だった。俺の隙をWが埋めてくれて、Wの隙を俺がサポートする。

「おりゃぁあ！」

Wの一撃がドーパントの剣を弾き飛ばす。そしてもう一閃。それは防ぎようもなく、ドーパントは火花をあげながら倒れる。

「まだだ……」

相手が光弾を多数放つ。でも、これには対策はあるんだ。エクスターナルフィンを開き、冷気を放つ。冷気に飲まれ、凍りつく光弾。それをテイルディバイダーで砕く。

「おお、ファングジョーカーも驚きなほど武器が隠されてるな」

『あの力、それに恐竜か、興味深い』

「くそっ、ふざけやがって……これで終わらせてやる」

ボロボロのドーパントはいくつもの光弾を1つにする。破壊するための力が一点に集中する。あれをくらったらもう終わりだろう。でも、当たらなければ大丈夫。

『オーズ、あわせられるよね？』

「はい！」

『ＣＹＣＬＯＮＥ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

『ＨＥＡＴ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

『ゴックン』

『ＬＵＮＡ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

『ＪＯＫＥＲ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

俺はメダガブリューにセルメダルを、Ｗはビッカーシールドに４本のガイアメモリを挿していく。

「『ビッカーファイナリュージョン』」

『プットティラノヒッサ～ツ！！』

２つの技が重なって１つになる。それはデストロイドーパントの放った光弾とぶつかる。

拮抗。一瞬でも気を抜けばすぐに相手の攻撃に飲まれるはず。負けられない。そう思いながら引き金を引き続ける。反動で俺はドンドン下がっていく。

「うぉおおおおおおおおおお」

「『はぁあああああああああ』」

気合でどうにか相手の攻撃を相殺する。２人がかりで相殺がやっとってどんな攻撃力なんだよ？

「もらった！」

ディメンジョンメモリの力で武器が奪われる。右手にプリズムソード、左にはメダガブリュー。

斧と剣。変則的な2刀流で襲いかかるドーパント。その激しい連撃は防ぐことすら厳しかった。

「ハッ！」

「うわぁあああああ」

Wが切り飛ばされる。転がるWを見て、次は俺だ、と、切りかかってくる。左腕甲で2刀の攻撃を防ぐけど、すぐもたなくなる。でも、それで充分だから。

『スキャニングチャージ！！』

「この距離なら逃がさないよ」

ワインドスティンガーを突き刺し、エクスターナルフィンで冷気を送る。相手は上手く急所を外せたみたいで、完全に凍っていなかった。無事な腕で銃のトリガーを引く。

「うっ……でも、今です！」

「ああ、サンキュな」

『翔太郎、やつにはこっちが有効だ』

『ＰＲＩＳＭ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

『ＥＸＴＲＥＭＥ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ』

「『ダブルプリズムエクストリーム！！』」

飛び上がったWは連続で何発ものキックをくらわせていく。凍った体は砕け、それ以外の場所は激しい痛みが襲う。

「『はっ！』」

「ふっ、ここまでか……まあ、いい」

最後の一撃を食らわせると、相手は爆発する。ただ相手は何か満足な様子で逝った気がした。最後の声には後悔とかそんなものが感じられなかったから。

「終わったな、火野」

「ああ、僕達だけでは無理だっただろう。礼を言う」

変身を解くと、フィリップさんまで現れる。エクストリームって本当に2人が1人になるんだ。あおれよりも、俺達、勝ったんだよな。

「あはは、だからライダー同士助け合いです、よ……って、アレ」

急に力が抜ける。そういえばお腹、刺されたし、それ以外にもボロボロだったもんな……

そんなことを考えながら俺の意識は途切れたのだった。

Cに平和を／決着がつくとき（後書き）

個人的には少々物足りない決戦編。いい表現が見つかり次第改稿したいです。

W編は後1話で終わりです。やっとで次の段階っていうか、重量系メダルの入手の話にいける。

それでは感想等お待ちしております。

Dのレポート／エピローグ（前書き）

今回は特別な形を取っていて、短い話2つとなっています。
Ｃｏｕｎｔ～はお休みです。

Dのレポート／エピローグ

ＮＥＷ　ＷＯＲＬＤとの戦いから何日か経った。あの戦いの被害は少なく、その後の花火大会は問題なく行われた。そして今も風都は平和だ。依頼が来ないのが玉に瑕だが、それだけ風都が平和だってことで安心しよう。

あの戦いの後の話をしよう。Ｄ２を倒した後、英治は気を失っちまったんだ。体のあちこちには傷があり、腹からはとんでもない量の血が流れていた。あの時は焦ってしまったが、彼のクラスメイト達が応急処置をしてくれたおかげで何とか一命を取り留めた。さすが代表候補生と言ったところだろう。

それにあんなボロボロになってまでも戦おうとする英治の意思。年下だが、俺達が見習うべきところだろう。同じ『仮面ライダー』として。

ＮＥＷ　ＷＯＲＬＤが起こした事件についてだが、わずかなメモリの破片しか残らなかったため、警察はそうそう対応はできないだろう。使用者はメモリブレイクとともに消えちまったからな。

彼らは財団Ｘによって生み出された存在だ。財団はガイアメモリから手を引いたらしいが、それでも安心はできない。英治が持つコアメダルに、ＩＳ。ヤツらが狙うのはまだまだある。相棒が言うには宇宙の力を秘めたツールもヤツらは研究しているらしい。宇宙の力を秘めた物がどんなものかしらないが、近いうちにヤツらと決着をつける必要がありそうだ。その時は仮面ライダーとしてヤツらに勝ってみせるぜ。

戦いの後、俺達はそんなことを考えていたが、時間が経過して花火大会の時間になったんだ。元々、英治達はそれを身に来たんだそうだ。だが、英治は戦いの影響で気を失ったまま。どんよりとした表情で花火を見に行くのが3人。シャルロット・デュノア、ラウラ・ボーデヴィッヒ、それと更識簪だ。彼女達は血走った目で英治の看病をすると言っていたが、嫌な予感がしたから、「静かに寝かせてやるのが一番だ」と言い聞かせ、花火を見に行かせた。物凄く黒いオーラが出ていたのは気のせいだと信じたい。英治のやつ、モテるんだな。俺には出逢いってものがないのか、そう考えるところだった。

英治も英治だが、それよりも一夏の方が酷かった。彼は絵に書いたような鈍感で、彼の発言の一つ一つが彼の取り巻きである3人の少女を苛立たせた。一夏を連れてきたのは鳳鈴音。彼女は、いや、英治の取り巻き3人と、セシリア・オルコット、篠ノ之箒を含めた6人は、風都タワーの恋の伝説に惹かれて来たはずだ。

それなのに一夏は「その恋の伝説に興味があったのか。誰が相手なのか知らないけど、お前らの恋、叶うといいな」。そう言いのけたのだ。この発言にブチ切れた箒、セシリア、鈴はISを展開して一夏に襲いかかろうとしてきた。ここを殺人事件の現場にするわけにはいかないし、弾薬の花火をあげさせるわけにもいかないため、俺は必死で止めようとした。まさか止めるのにジョーカーになるハメになるとは思わなかったが。

翌日、早くも目を覚ました英治達はIS学園に帰ることに。代表候補生や男でISが使える、狙われる理由としては充分だ。いつまでもココにいられるわけではないのだ。

今度来るときはゆっくりと風都を見て回って欲しいものだ。そんときは俺が案内しようと思う。この街のことをよく知って欲しいか

らな。

こうして今回の事件は幕を閉じたわけだが、俺はこれが始まりの気がしてならない。財団との戦いの。実際、英治は財団を名乗る刺客と戦ったことがあるようだった。おまけに財団はＩＳの製作もしているようだ。代表候補生達が戦ったのが財団製のＩＳだ。おまけにコアメダルをコアとしていた。ソレであの強さなのだ。あれが正式に完成した場合、世界はとんでもないことになるだろう。そうなる前に財団をどうにかしないとな。

それと英治の持つコアメダルについてだが。この世界にあるというコアメダルは多く見積もって４０枚。英治が探している１５枚、２体のグリードが持つという１０枚が２組の２０枚。そして存在が未確認だが、かつて存在していたコアメダルの１０枚目が５枚で４０だ。この中の何枚かは財団の手にあると考えていいだろう。

とにかくこの世界に本当の平和が訪れるのはまだまだ先のことになりそうだ。それまで俺は、俺達は戦い続けるぜ、仮面ライダーとして。

カメラと旅人ともしもの世界（前書き）

やっとWが終わった。ＩＳ学園だと思っていた方ごめんなさい。どうしてもやりたいことがあったため、こんな展開になっています。

カメラと旅人ともしもの世界

「ここは何の世界だ……？」

首からトイカメラを提げた青年は呟いた。とりあえず情報を、と駅付近を探索することにしたのだった。少し歩くたびにシャッターを押し、その風景を写真に収めていく。自分がいるべき世界かどうかを知るために。

「やはり、な」

色々と情報を集めてる内に青年は気づく、ここは自分がかつて訪れたことのある世界だと。

青年はただ1人で旅をしていた。失った記憶を見つけるために手にした力で様々な世界を渡っていた。ここでいう世界とはいわゆるパラレルワールドである。もしもの世界。そんな世界をいくつも青年は渡り歩いてきた。ときにはその世界の住人と誤解から拳をぶつけることもあった。それでも青年は旅を続けてきた。そして旅の末に生まれる絆があった。その絆は力をなり、青年の旅の支えになった。だから彼は今も旅を続けられるのである。

話を戻そう。この世界がかつて自分が来たことのある世界だと気づけたのは2つのものがあったからだ。まず1つはこの世界に風都が存在すること。そしてもう1つはＩＳだった。仮面ライダーとＩＳ、混じり合うはずがない2つが存在する世界を青年は1つしか知らなかった。もしも、が存在する以上、ここが以前来たことのある世界だとは断言はできないのだが、それでも青年には分かった、こ

こは自分が来たことのある世界だと。

「となれば、風都に行けばいいんだな……ん？」

まずはこの世界の仲間の元に行こう。そう思ってのことだったが、ポケットに手を入れて気づく。何も描かれていないカードを持っていたことに。

「なんだ、このカード？」

青年は不審そうにそのカードを眺めるが何もわからなかった。「ま、いいや」そう頭を切り替え、目的の人物で出会うことに。

目的の人物と出会ったのはいつだろうか。世界を移動すると時間の流れに疎くなることがある。世界によって時間の流れが違うからだ。とある日に出発した世界を1週間後に来てみれ1ヶ月経っていたってこともありえるのだ。

そんなことを考えた青年はいつ、ということを考えるのを止めて、どういうときに会ったのか思い出すことに。あれは、季節は夏で、風都に凶悪な軍団が現れてときだった。1人の仮面ライダーとそれに従う数体のドーパント。自分が相手したのは黄色いドーパントだった。そのドーパントはなんというか濃いヤツで目蓋を閉じればその声が聞こえてきそうな程だった。

「止めだ止めだ。さっさとアイツらのところに行くぞ」

頭を振り払い、落ち着かせようとする。目的の人物達はどうしてるだろうか、そんなことを考えながら足を進めるのだった。

もう1人の破壊者。彼はその瞳で何を見る。

カメラと旅人ともしもの世界（後書き）

見ればわかると思いますが、いきなりでまた別のライダーとクロスします。間にほのぼのした話を1つ入れようと思いましたが、ネタが無かったのでパスさせて頂きました。

どうぞライダーメインの展開の連続に文句がある方は遠慮なくどうぞ。あ、でもやっぱ怖いから止めて。

とりあえずこの章は3話以内で終わらせる予定なのでお付き合いください。

迷子と鉄球と破壊者（前書き）

Ｃｏｕｎｔ　ｔｈｅ　ｍｅｄａｌｓ
オーズが使えるメダルは……

タカ
クジャク
コンドル
クワガタ
カマキリ
バッタ
ライオン
トラ
チーター
ゴリラ
シャチ
ウナギ
タコ
カメ
プテラ
トリケラ
ティラノ

迷子と鉄球と破壊者

「風都に行くにはどうすればいいんだ……？」

青年一門矢司は知らない街で呟いた。いくら自分がこの世界の風都を知ってるからとはいえ、この世界のことをよく知ってるわけではない。おまけに前回は直接風都に来たのだ。どうやって移動するのかの手段を知ってるはずはない。

「ま、駅でもいけばなんとかなるだろうな」

そんなことを考えて歩き出す。この街の駅はどこにあるのかは知らない。所々で「こっちだな」と根拠もないのに自信満々で歩くのだった。駅と逆方向に……

案の定、目的の場所にたどり着けるわけもなく、公園にただずむだけだった。

「……ったく」

目的地に着かないことに拗ね、カメラで辺りを撮り始める。走り回る子供、ベンチの上で寝っ転がる猫、等々、気ままに撮るのだった。

シャッター音だけがその場に響く。　何で写真を撮ろうとしているのかを彼は知らなかった。正確に言うと覚えていないのだった。記憶喪失だった司。彼が持っていたのはトイカメラと変わったバックルだけだった。ただそのバックルに導かれるように旅をしてきた。そうすれば自分の記憶に関する何かが得られると思ったからだった。

でも、実際は何も思い出すことはなかった。じゃあ何で俺は旅をしているのか？

穏やかな天気とは裏腹に司の心は重く淀んでいた。

「こんなこと考えても何も変わらないか。今まで散々考えてきたが、何も変わらなかったしな」

自らを嘲笑するように呟き、思考を切り替える。この世界で己がすることを探すためだ。

そうして立ち上がろうとした瞬間、大地が揺れた。

「おぅ！　何だ……？」

突然の揺れ、何事だ？　そう思い、自分の周りを見回すが変わった様子もなさそうだ。ただの地震か。そう割り切ろうとした瞬間、聞こえてくる悲鳴。

「きゃ、きゃぁあああああああ」

「ば、化け物ぉおおおおお」

こっちの方向に雪崩込むように走ってくる大量の人々。司はその先に何かがあると確信し、人の流れに逆らって走りだした。危険だ、そう言って自分を止めようとする声も無視して駆け抜ける。

◆◆◆

『タカ！　ゴリラ！　チーター！』

「おぉおおおおおおおお」

目の前にいるゾウのＩＧめがけて思いっきり拳を突き出す。その拳はまっすぐ相手を捉えるんだけど、ダメージを与えるには至らなかった。拳は相手の胸で受け止められていた。

その後もパンチを打ち込むんだけど、相手はビクともしなかった。

「嘘だろ……ゴリラのパンチもあんまり効かないなんて……」

今の相手と正面からぶつかれるのはプトティラかサゴーゾくらいだろう。でも、紫のメダルはあんまり使いたくないし、サゴーゾになるためのメダルの１枚は相手の中に。

「ここはガタキリバでいくしか……うわぁあああ」

隙が生まれた瞬間、相手は鉄球を振り回してきた。とっさのことで反応もできなくて跳ね飛ばされる。その衝撃で緑のコアを落としてしまう。手を伸ばそうとしたけど届かなくて、このままでいるわけにもいかないから急いで次の攻撃に備えて体勢を立て直す。まずはあの鉄球をどうにかしないと……

「来い！」

『タカ！　ゴリラ！　タコ！』

「ウォオオオオオオオオ」

「はぁあああああああ」

雄叫びを上げて振りおろされた鉄球をタカゴリタで掴もうとする。だけど、その勢いを殺しきることはできなくて、後ろに吹っ飛ばされる。やっぱりコイツどんなパワーをしているんだ？　どうやって攻めればいいんだ？

「何でこの世界にオーズまでいるんだ？」

「！？」

オーズ、その単語に反応して振り向くと、そこにはトイカメラを首から下げた男の人が。

「おいおい、よそ見していていいのか？」

「え？　……のわぁあ！」

言われてＩＧの方を見ると、鉄球が飛んできていた。慌てて横に飛ぶことによって何とかかわせたけど。

「言わんこっちゃない……俺がやるから下がってろ」

「え、ちょっ、待ってください！」

自分が戦うと言い出した男の人を止めようとするんだけど、その人は聞く耳を持つ気配すらなかった。

「だから、危ないですよ！　下がっていてください！」

「まあ、見ていろ。とっておきのものを見せてやるから」

男の人はバックルを取り付けて、１枚のカードを取り出す。そのカードにはマゼンタの体に緑の複眼、バーコードみたいな仮面が描けれていた。あ、アレって……？

「変身！」

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ　ＤＥＣＡＤＥ』

いくつものシルエットが重なり、男の人の体に装甲を形成する。そして最後に頭にスリットのように光の板が突き刺さる。

「ま、見ているんだな。俺があいうのとの戦い方を見せてやる」

剣をなぞりながら、男ーディケイドは言った。そして腰にあるカードケースから一枚のカードを取り出した。

「超変身……ってな」

『ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ　ＫＵＵＧＡ　ＴＩＴＡＮ』

カードをバックルに挿入すると同時にディケイドの姿は変わる。頑丈そうな紫色の鎧に、同じく紫色の複眼。そして頭のクワガタムシみたいな金色の角。手にした剣を専用の武器に変えて、ディケイドはゆっくりと歩きだした。叩きつけられる鉄球にびくともしないで、ＩＧとの距離を縮める。

「はぁぁあああ」

その距離がなくなると同時に剣を突き立てる。ＩＧはその強烈な一撃にセルメダルを落としながら転がっていく。

「セルメダルか……ということはコイツはヤミーってことだな」

いや、違います。そう訂正するべきかと思ったけど、今は戦ってる途中だからあんまりグダグダ言うのもどうかと思ったから今はスルーしておく。

ディケイドはというと、今の姿のまま、またＩＧとの距離を縮めようとしていた。さすがにＩＧも相手にパワーでは勝てないと悟ったのか、一定の距離を保とうとしている。

「これじゃあ、いつまでたってもジリ貧だな。他のでもあんまり変わらないだろうしな。だったら内側から破壊するか」

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ　ＦＡＩＺ』

機械的なボディ。黄色い複眼に全身を走る赤いライン。その姿になったディケイドは手をはらい、駆け出す。そして殴りかかるが、大したダメージを与えられなくて、逆にはねとばされていた。

「案の定、殴り合いは無理か。ま、さっきの一撃は大きかったからな、もう決めれるか」

『ＦＡＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　ＦＡ　ＦＡ　ＦＡ　ＦＡＩＺ』

ディケイドの右足のラインが赤く輝く。そのエネルギーが充填さ

れた足を突き出し、相手を赤い円錐状の光で拘束する。相手は動こうと必死でもがくけど、その拘束は外れない。

「やぁぁあああああ」

高く飛び上がり、右足を突き出したディケイドは赤い円錐に吸い込まれ、反対側から光となって現れる。

「ガッ……！」

ＩＧの体には赤いΦの字が浮かび上がり、その体が崩壊し、セルメダルとゾウのコアメダルをバラバラと落としていく。

「あ？　何でコイツがコアメダルを持ってるんだ？　おい、説明してもらうぞ」

「え、はい。別にいいですけど……」

俺も聞きたいことがあったからすぐに首を縦に振る。この前の風都に続いて、この夏休みはすごく激しいものになりそうだな……

「……あ、見つけた……」

後ろから歩いてきたのは簪。今日、俺は彼女と買い物に来ていて、突然現れたＩＧと戦うことになったんだ。

「……こっちの、人は……？」

「門矢司だ」

「あ、俺も名前言ってませんでしたよね。俺、火野英治です」

こうして話を聞くために俺達3人は近くの喫茶店に行くことになったんだ。

迷子と鉄球と破壊者（後書き）

作者の趣味全開で始めたディケイド編。やった理由はただ1つ。クウガとかファイズとかが書きたかったから。まあ、始めからやるってことは決めてました。
それから士でなくオリジナルの司にしたのも、司がこの世界に来たことがあるとか、色々と設定が捏造しやすかったからです。はい、ごめんなさい。

それでは感想等お待ちしております。

あ、後、クリスマス？　いいえ、ただの休日です。

アンケートとお知らせ（前書き）

ご協力お願いします。

アンケートとお知らせ

え～、皆様、『欲望の王と無限の空』を読んでいただきありがとうございます。

今回は皆様に協力してもらいたいことがあってアンケートを取りたいと思います。内容は２つ＋αです。

？スーパータトバを出すかどうか。

？これからの展開で敵にオリジナルのＩＳを出す予定です。そのＩＳはライダーをモチーフにするので、敵としてＩＳ化して出して欲しいライダーを教えれください。こっちのＩＳ化アンケートは票数の多かったライダーを英治達の敵側としてＩＳ化して出します。

？その他要望があったらどうぞ。

軽く今後の展開を説明しますと、ＩＳ編は学園のメンバーでＶＳ亡国企業、ライダー編は英治、伊達さん、一夏のプロトバース（装着者が時々変わる）、最初のアンケート結果のカブト、龍騎、時々Ｗ達ＶＳ財団って感じですね。

それから連絡です。自分の都合により年末年始は休載させて頂きます。２８日に次話を投降した後、１月６日までとさせて頂きます。勝手ながらスミマセン。

ディケイドと暴走と超絶変形（前書き）

Ｃｏｕｎｔ　ｔｈｅ　ｍｅｄａｌｓ
オーズが使えるメダルは……

タカ
クジャク
コンドル
クワガタ
カマキリ
バッタ
ライオン
トラ
チーター
ゴリラ
ゾウ
シャチ
ウナギ
タコ
カメ
プテラ
トリケラ
ティラノ

「そういうことだ。俺は色んな世界を旅してて な、この世界に来たわけだ」

「司さんも、ですか……？」

「『も』、ということは、まさかお前もか？」

「ええ、この世界にコアメダルが流れてきたので、それを回収するために、ですね」

司さんと出会った後、俺達は喫茶店で話をしていた。簪もこの場にいるんだけど、思った通り、話にはついて来れないみたいだった。ゴメン……

「え？　つ、つまり、英治は別の世界から来たってこと……？」

「うん、まあそうなるかな。言ってなかったっけ？」

そう言ったら、簪は首を縦に振った。あれ、言ってないんだっけ？　でも、誰かには言ったよな。誰だっけ？

あ、織斑先生にか。皆には言ってないんだよな。きっとこの戦いが終わったら、俺は元の世界に戻ることになるんだろうな。余計な心配とかさせたくないからね。

「話を戻すぞ。この世界には一度だけ来たことがある。その時が……」

「風都ですよね？」

黙って頷き、１枚のカードを懐から取り出す司さん。

「この通り、な」

そのカードには仮面ライダーＷが描かれていた。

「それでだ、あの怪人は何だ？　見たところただのヤミーじゃないし、グリードでもない。さしずめ、コアメダル付きのヤミーってとこだな」

さっき戦ったゾウＩＧ。その存在は司さんが思ってるようなものだけど、何で生まれたのかはわからない。

「大体わかった。俺は残りのコアメダルを集めればいいんだな。それでだ、英治、お前が持ってないのは後何枚だ？」

「後はサイだけです……」

その答えに、司さんは一気に脱力した。なん……だと、そう言ってるけど、これって俺が悪いわけじゃないよね？

「まあ、いい。それで、そのサイを取り込んでる怪人を倒せばいいんだな？」

「ええ、まあ、はい」

こうして、俺達はサイのＩＧを探し回ることになった。正直、ア

テとか全くないんだけどね。

◆◆◆

「ふん、オーズに知らねェヤツだな。まァ、いいか。ガメルのコアでできた怪人がどんなものか見てみてェし、ちょっと遊んでやるか」

後ろに従えるサイの怪人を見て、グリード―ワースは呟く。ビルの屋上から英治達を見下ろし、ここでコイツを暴れさせたらどのくらい面白そうなことになるのかを期待していた。

「あんまり、気分がいいもんじゃねェんだけど、面白そうだからなァ……グゥ！」

狂った笑いを浮かべながらも、ワースは自身の体からコアメダルを1枚取り出す。

「グリードでさえ、自分のじゃないコアメダルの取り込みは危険なんだ。それをなりそこないにやってみたらどうなるのかなァ」

そして、そのコアメダルを後ろの怪人に投げる。コアメダルは怪人の体内に入り、苦しませ、その体を変貌させる。

「ＧＡＡＡ

天井にめり込む。

「ＧＡＡＡ

「ＧＡＡＡ

「しっかし、相変わらず変な歌だな」

「歌は気にしないでください」

軽口を叩くと同時にそれぞれが構えを取る。アイコンタクトをかわし、俺が怪獣に、ディケイドはワースの方に向かう。

「ＧＡＡＡＡＡ」

振りおろされた足を転がりながらかわす。そして隙ができたと思ったときに、飛び上がり、メダジャリバーを振るおうとする。だけれども相手は瞬時にその角をこっちに向けてきた。

ガキンッ

メダジャリバーは簡単に弾き飛ばされ、俺は後ろに飛ばされる。こんな相手に接近戦は無謀だよな。だったら……

『タカ！　クジャク！　コンドル！　タ～ジャ～ドル～！！』

「ハッ！」

赤い翼を広げて飛び立つ。ある程度の高さに来たら、タジャスピナーから放たれる火炎弾で攻撃を始める。相手の巨体ではそれをかわすことも難しくて、ドンドン当たっていく。火炎弾は全弾命中してのに、手応えは全然無かった。どんだけ堅いんだよ。

◆◆◆

「お前が相手してくれんのかァ」

「ずいぶんとトチ狂った野郎だな」

ワースの攻撃を軽々とよけ、ディケイドはその拳を叩き込んでいく。すでにそれを何回も繰り返しているのだが、ワースには全くダメージはなかった。

「どんだけ硬いんだよ、お前は！」

「わりィなァ。さァ、お前も壊れちまいなァ！」

「あいにくとそれはゴメンだな」

『ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ　ＢＬＡＤＥ』

「がッ……」

突然現れた青い壁にワースは吹き飛ばされる。一方のディケイドはその壁をくぐると同時に姿を変える。紫紺の剣士、ブレイドに。

「そうだ、言っておくが俺は破壊者だ。簡単には壊れないぞ。むしろお前を壊すかもなぁ」

「言ってな。お前も楽しめそうじゃねェか」

並大抵の攻撃はコイツにはきかない。そうわかっていたディケイドは2枚のカードを取り出す。

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　ＭＡＣＨ』

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　ＳＬＡＳＨ』

「ハッ！」

ディケイドは高速で動き出し、強化された斬撃を叩き込んでいく。何度も何度も切られたところからは火花が飛び散り、セルメダルがこぼれ始める。

「や、やろォ……！」

『ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　ＭＥＴＡＬ』

ワースの攻撃はメタルの効果によって防がれる。不審に思ったワースは拳を、蹴りを連続で放つがディケイドにダメージを与えることはできなかった。

「厄介だなァ」

ブレイド自体はそうパワーが強いわけではない。純粋なパワーを選ぶのならクウガのタイタンフォームやキバのドッガフォームを選ぶだろう。だが、ブレイドには加速や硬化、磁力やはたまた時間停止といったそういう補助に向いた力がある。手数の多さや戦略の幅は一番広いだろう。

「さて、次々いくぞ」

「来いよォ！」

Dブレイドとワース、両者は再度激突した。

◆◆◆

「参ったなぁ。どうやってアイツに攻撃すれば……」

クジャクの羽から放たれる羽手裏剣やセルカッターを放ったけど、効きめはほとんどなかった。こうなったらガタキリバで……ッ！

アレは……！？

目に入ったのは倒れたビルのガレキにはさまって動けなくなってる女の人。怪物はその人に気づいていないんみたいだけど、その進行方向は女の人の方だった。このままじゃ……

「あ、危ない！」

気がついたときはすでに動き出していたんだ。ガレキを弾き飛ばして女の人を抱き上げる。そうしたときに、辺りが暗くなる。目の前には怪物の足が。

俺は咄嗟に女の人を投げた。怪我人にやっていいことじゃないんだけど、あのままじゃ命が……

「あぁあああああああああああ」

全体重が乗った足に蹴り飛ばされ、近くの壁に激突、そして変身が解かれる。

「くっ……」

さっきの衝撃で頭を切ったみたいで、血がドバドバと流れている。
それでも、俺は止まる気はないけど……

「英治！」

「よそ見してる暇があんのかァ！」

「がっ……」

不意にくらった一撃が重かったせいで、司さんもこっちに転がってきて変身が解除される。

「だ、大丈夫ですか、司さん」

「馬鹿かお前は、どう見てもお前の方が重症だろ？」

「ははは、そうですよね」

そんな様子の俺達を失望したような目で見てくるワース。

「がっかりだなァ。何であんな女庇った？　オーズの力と比べたらそんな女、ゴミみたいなもんだろ」

「ゴミなんかじゃないさ。誰だって命は1つで1回きりだ。俺はそれを大事にしたいからね。それに後悔もしたくないし」

「はッ、下らねぇ」

「下らなくなんかない」

ワースの言葉を遮るように司さんが言う。

「オーズの力、それにお前達も欲望が元だろ？　その欲望はな、お前がゴミだと言ったヤツらから生まれるものなんだよ！　それをお前自身は否定した。それにな、コイツの言うとおり、命は誰だって1つだ。それも尊くて、な。壊すことしかできないやつが踏みにじっていいもんじゃない！」

「うるせェな。何なんだよ、てめェ？」

「通りすがりの仮面ライダーだ、覚えておけ！」

言いたいことは司さんが全部言ってくれたし、後はコイツを倒すだけだな。

「もう1回、いきますよ、司さん」

「ああ」

「「変身！！」」

もう1度、並ぶディケイドとオーズ。今の俺は自分のダメージも考えてタトバだった。

「ん？」

構えを取る俺とは逆に、司さんは3枚のカードを手にしていた。

「成程な。英治、ちょっとくすぐったいぞ」

『ＦＡＩＮＡＬ　ＦＯＲＭ　ＲＩＤＥ　Ｏ　Ｏ　Ｏ　ＯＯＯ』

「え？　ちょ、ちょっとぉ！！」

背中にディケイドの手が当てられたかと思ったら俺の体は3つにわかれた。って、えぇぇえええええええ！！

俺の体は大きなタカカン、トラカン、バッタカンになる。俺はともかく、その光景にはワースも絶句していた。

「なんだァ、アレ……」

「今がチャンスだな」

『ＦＡＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　ＤＥ　ＤＥ　ＤＥ　ＤＥＣＡＤＥ』

「はっ、てやぁあああああああ」

黄色いカードを突き抜けて放たれたキックはワースを吹き飛ばした。だけど、倒すには至らなくて、ワースはセルメダルを大量に落としながら立ち上がった。

「ここは、引かせてもらうぜェ」

よろよろと立ち去るワース。俺はというと、それぞれが怪物に攻

撃をしかけていた。と言っても体当たりくらいしかできないけど。それでもさっきまでよりダメージを与えれてる気がした。これもディケイドの力なのかな？

「英治、決めるぞ」

『ＦＡＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　Ｏ　Ｏ　Ｏ　ＯＯＯ』

その音声とともに俺の体はまた変形する。タカカンは翼となってディケイドの背中に。トラカンは巨大なクローで腕に。バッタカンは足につく装甲になった。

「はっ！」

飛び上がったディケイドはクローで相手を切り裂き、キックを放つ。その攻撃は桁外れの威力で攻撃が当たる度に怪物はうめき声をあげる。

「トドメだ」

翼に力を集中させ、高く飛び立つ。それと同時にクローは足に取り付けられ、足の装甲もアンカージャッキが展開される。

「やぁあああああああああああ」

隕石みたいな速さで放たれたキックは怪物の角をへし折って眉間に突き刺さる。そしてアンカージャッキが作動してクローを打ち込む。クローが突き刺さった場所から相手はセルメダルを落とし始めて、そのキックは相手を貫いた。

刹那、大きな爆発とともに大量のセルメダルが降ってきた。そしてサイのコアメダルともう1つオレンジのコアメダルが。

「終わったな」

「はい、助かりました」

これでコアメダルは全部集めた。そう一件落着と思ったところでオーロラが俺達を飲み込んだんだ。

ディケイドと暴走と超絶変形（後書き）

とりあえず（？）ディケイド編は今回で終わりです。といっても次回の序盤、ちょっとだけ話が食い込みますけどね。

お知らせした通り、諸事情により、1月6日まで休載です。次回の投降は1月7日です。

それからアンケートにもご協力ください。ほとんど票がなくて困っています。要するに好きなダークライダーは何かって聴いてるようなものなので、お願いします。

それでは感想等お待ちしております。

始まりと新たな決意と来訪者（前書き）

今回の話で1つの区切りが終わりって感じですね。

Ｃｏｕｎｔ　ｔｈｅ　ｍｅｄａｌｓ
オーズが使えるメダルは……

タカ
クジャク
コンドル
クワガタ
カマキリ
バッタ
ライオン
トラ
チーター
サイ
ゴリラ
ゾウ
シャチ
ウナギ
タコ
カメ
ワニ
プテラ
トリケラ
ティラノ

始まりと新たな決意と来訪者

「ここは……」

サイのＩＧを倒した後、俺と司さんはオーロラに飲み込まれて夜の広場に来ていた。この場所には何回か来たことあって、見回すと……

「お疲れ様です、火野英治。それと別のディケイド」

紅さんがいた。

「これで貴方に回収するように頼んだコアメダルは全て集まりました」

手元にある１５枚のコアメダル。それとは別に手に入れた４枚も。

「これで僕達からの頼みは終わりました。貴方はこれから元の世界に戻ることも可能ですが……」

言葉を切って、俺の方を向く紅さん。でも、俺の答えはもう決まってるんだ。

「俺、この世界に残ります。グリードに財団Ｘ。それを放って置いて、自分の世界でノコノコと暮らすのはできないんです」

自分が生まれたわけじゃない世界にこれ以上関わるのはよくないことなのかもしれない。でも、このまま何もしないで帰る方が絶対

後悔する。だから、俺はあの世界で戦うことを選ぶんだ。それが今の俺がやりたいことだから。

「……」

俺がそう言うと、無言になる紅さん。でもその沈黙はすぐに破られた。俺の答えが予想通りのものだったのか、笑みを浮かべる紅さん。

「貴方がその答えをすることある程度予想できてました。管理者としては貴方がこれ以上あの世界に存在するのはよくないことですけども、貴方には礼をしてませんでしたしね。それに僕個人としてもあの世界にはオーズは必要だと思ってます。だから、あの世界をお願いできますか？」

その答えに俺は黙って頷く。よし、俺は俺のできることを頑張っていこう。

「それから、ディケイド、いえ、門矢司。貴方には頼みたいことがあります」

「頼みたいこと、か。話を聞こうじゃないか」

「はい。貴方には行って欲しい世界がいくつかあります。原典でもなく、再構築でもない、別の可能性の世界に」

別の可能性？　その言葉に疑問を感じてる間に司さん達の話は進んでいく。話は読めないことが多いけど、司さんには司さんのやらなくちゃいけないことがあるのが分かる。

「そういう訳だ。英治、ここでお別れだ。じゃあな。お前の力、使わせてもらうぜ」

オーズが描かれたカードを見せる司さん。あの変形はもうやりたくないけど、アレが俺達の力なんだ。そう考えると何だか照れくさい気がした。

「はい、司さんもお元気で。それじゃあ」

「「また、どこかで／またな」」

そう言い、司さんはオーロラをくぐっていった。俺はその背中が見えなくなるまでそれを見ていた。

「それでは、貴方も……」

「はい」

紅さんが呼び出したオーロラをくぐる。ここからは俺が自分で選んだ俺だけの道なんだ。そう言い聞かせて、気合を入れる。さてと、まずはＩＳ学園のテストをどうにかしないとな……

背伸びしながら戻ってきた場所はさっきまで戦っていた場所。え～と、簪は……いた。

「やっとで、見つけた……どこにいたの？」

「ん、ちょっとね。自分の決意を新たにしてきた、ってとこかな」

「？」

全くわからないと、首をかしげる簪。そんな彼女をよそに俺は空を見上げた。どんな世界でも空が青いのは同じだから。

◆◆◆

「蓮、お前は生きろ……」

歩き去る友の背を最後に、青年は意識を失った。

意識不明の恋人を目覚めさせるために戦った者。
頂点を極めるために戦った者。
難病に罹り、永遠の命を手にしようとした者。
運命を変えるために戦いを止めようとした者。
ゲーム感覚で戦いに参加した者。
戦いそのものに悦びを感じた者。
英雄になろうとした者。
幸せを得ようとした者。
超人的な力を得るために戦った者。
ある男への復讐と姉を蘇生させるために戦った者。
そして、完全な自分を得るために戦った者。

自分の欲望のために戦う者が数多の世界で、青年は純粋に人を守りたいという願いで戦いを決意した。だが、他の者の願いや友達の命等に板ばさみになり、悩みながらも青年は自分の願いを見つけた。

「戦いを止めたい」

その願いを叶えるために男は戦い、少女をかばった怪我が原因で力尽きた。

それでも人を守れたからだろうか、安らかな顔で眠る青年を見つめる赤龍の目が鏡の中で光った。まるで戦いはまだ終わっていないと告げるように。

そして、赤い光りに包まれ、男の体は消滅した。その行先は誰も知らない。

◆◆◆

消滅していく自分の体を見ながら、青年は自分の過去を振り返った。隕石により海がなくなり、不治の病にかかった妹。そんな妹を助けるために青年は過去を変えた。だが、過去を変えた場合、青年がいた時間軸はなくなる。それは彼自身の消滅を意味していた。

「フッ、ひよりを頼んだぞ、過去の俺」

過去に飛んだ彼は、自分の力を過去の自分に与えた。そうすれば未来が変わるから。悲しい未来が。

これでいい、そう思い、自身の消滅を穏やかに受け入れていた。

大丈夫だ。俺がそばにいる、俺が。そんな声が耳に届いた気がした。すでに消えつつある自分。過去の自分に全てを託した。その過

去の自分が、今の自分と同じことを言っていたことに自分は自分だと強く感じた。

（いや、もうアイツは過去の俺ではないか。アイツが歩く未来は俺のとは違うからな……ッ！）

突然、消滅していく体に感じられる違和感。青年は何だとばかりに自分の体を見るが、何も変わったところはなかった。だが、それが違和感の正体でもあった。

なぜ、自分は違和感を感じられる？　消滅したはずではなかったのか？

気がつくと、周りの景色も変わっていた。先程までいた廃墟とは違い、今いるのはどこかの公園だろうか。何も無い開けた場所だった。だが驚くのはそれだけではなかった。手持ちにあるのは１本のベルト。ついさっき渡したはずのものなのにどうして自分が持っているのか。

考えた末にここではこれが必要とされているのだろうと判断し、辺りを調べることにした。

「ん？　アレは……」

青年が見つけたのは倒れてる男。放っておくわけにはいかない、か。そう思い男に近づく。

「おい、大丈夫か？　返事をしろ！」

服は血で染まり、ボロボロである。服に染み渡る血の量からだと手遅れかもしれないと考えがよぎったが、心配はいらないようだっ

た。

「ん、アレ、ここは。俺、死んだはずじゃ……？」

男はすぐに意識を取り戻した。不思議なことに男には傷はなかった。青年はそのことに疑問を感じたが、それよりも男の自分が死んだはずという発言の方が不思議だった。

「おい、アンタ誰だよ。それにここはどこだよ？」

「ほう、俺の名を聞くのはいい。だが、普通は自分から名乗るのが礼儀だぞ」

「ああ、悪い。俺、城戸真司」

男の名乗りを聞いた後、青年は天を指すようなしぐさをする。

「俺の名は、天の道を往き総てを司る者、天道総司だ」

城戸は尊大な態度の天道に自分の友より取っ付きにくそうを思い、逆に天道は城戸を自分の友みたいなやつだと感じ取った。どんな印象なのかというと、それは本人達の名誉のため、ここでは伏せることにしよう。決して馬で鹿なわけではないと、信じたい。

始まりと新たな決意と来訪者（後書き）

遅いですが、明けましておめでとうございます。今年も本作をよろしくお願いします。

ＩＧとの戦いも終わり物語は次の段階へ。

ただＩＳの続きが出ないため、今後の展開が練りづらいところが…亡国企業とかそこらへんですね。だからアンケートを取ってメンバーを手に入れようとしているんです。

それとやっとで出せた第１回アンケートのカブトと龍騎。天道は劇場版から、城戸は本編からですね。ちなみに英治との接触はまだ後です。消滅する天道と死にゆく城戸。異世界に参戦させるのに一番辻褄が合わせやすかったからですから。はからずもクールと馬鹿の組み合わせになってしまった２人。この２人って案外相性が良いんじゃ？

それではＩＳ５巻から始まる第２部（？）。お楽しみに。感想等お待ちしております。

あ、それとアンケートは次回投降である１／１０　８：００までにさせて頂きます。早速使いたいのでそのスペックとかも考える時間が欲しいので。

ペアと全校集会と争奪戦（前書き）

Ｃｏｕｎｔ　ｔｈｅ　ｍｅｄａｌｓ
オーズが使えるメダルは……

タカ
クジャク
コンドル
クワガタ
カマキリ
バッタ
ライオン
トラ
チーター
サイ
ゴリラ
ゾウ
シャチ
ウナギ
タコ
カメ
ワニ
プテラ
トリケラ
ティラノ

ペアと全校集会と争奪戦

「いや、一夏は私と組むのがいいのだ。そうすれば燃費の問題も解決だ！」

「何を言ってますの！？　わたくしなら近接型の一夏さんと組むのなら遠距離型としてカバーできますわ！」

「ざーんねん。一夏は私と組むのよ。遠近こなせて燃費のいい甲龍なら白式と相性がいいし、何より幼馴染だから一夏とも相性がいいのよ」

「な！？　幼馴染だったら私の方が先だ。だから私の方がいいに決まってる！」

昼休みの食堂で騒ぐ3人娘。話題に一夏はヒートアップする3人にオロオロするだけ。そんな光景も相まって俺達が座る席は注目の的だった。どこで間違えたんだろう？

思い返してみるかな。まず、今は昼休み。ラウラが食べていたメニュー、シュニッツェル（わかりやすく言うと仔牛のカツレツ）を食べていたことから各国の料理の話をしていた……まあ、お菓子ばっかりだったけど。女の子は甘いものが好きって言うし普通のことなのかな。

それで話題が変わったのは一夏のため息が発端だったな。確か、白式の燃費が……って。

そこで篠ノ之さんが「私と組めば万事解決」って言ったから、誰が一夏のペアに相応しいのかって話になったんだったな。

「んー……でもなぁ、最近ペアでのトーナメントとかあるわけじゃないしなぁ」

「急にあるかもしれないでしょうが」

急にあるかもしれないって……否定しきれないのが怖いなぁ……この前の学年別トーナメント急にタッグマッチに変更されたって噂があるし。

「そのときは……」

『ゴクリ』

つばを飲む音が聞こえてくるほどに周りは静かになっていた。こう言えばそうでもないかもしれないけど、実際は一瞬のことだった。

「シャルロットと組むかなぁ」

「へ!?　ぼ、僕?」

突然のことに驚いて食事の手が止まる。「僕って何かしたんだっけ?」って呟きが聞こえてくるほど彼女はびっくりしていた。よく見るとシャルの額には冷や汗が浮かんでいた。何でだ?　そう思って周りを見ると視線で人が殺せんじゃないのかって感じの人がいたから……3人。

「何故シャルロットなのだ?」

「そうですわ、理由の説明を求めますわ」

「答えによっては、ねえ」

とんでもないオーラを出しながら一夏に迫る3人。俺達だけじゃなくて周りの皆もそのオーラに恐れ、下がり始めていた。

「これが『このプレッシャーは……』なのか……」

いやいや、ラウラ。あの3人は新しいタイプでも、コーディネートされた人でも、革新者でもないと思うけど……

「お、落ち着けって3人とも。シャルロットがいいって思ったのは前に組んだことがあるからだよ。というか何で皆そんな怖いんだよ」

必死で説得するような一夏の発言によって3人のオーラは消えていった。ため息と一緒に。

「あ、あはは、一夏って相変わらずだね」

この固まった空気をどうにかしようとシャルは頑張ろうとしたんだけど、その結果はあんまりいいものじゃなかったんだ……

◆◆◆

「やっぱり無駄に広いもんだよな」

「使う人達が俺達しかいないからね」

使う人が2人しかいないロッカールーム。元々大人数の使用を想定して作られたもののため、余っている空間が余計大きく見えた。

さてと、そろそろ行かないと織斑先生に叩かれるよな。

「一夏、そろそろ行こうか？」

「ん、ああ。悪い、先に行っててくれ。ちょっと白式の調整が……」

「わかった。早めにね。そうしないと織斑先生に……」

「それはわかっているって」

こうして1人先にグラウンドに向かう俺の目に映ったのは見慣れた水色の髪。箒かな？　そう思って声をかけようと思ったときにはその影は消えていた。いつの間に？　ま、いっか。それよりもさっさと授業に向かわなきゃ。

「さすがにやるわね。気配は消したつもりなんだけど……それじゃあもう1人にも会いに行ってみるかしら？」

扇子を広げながら笑うその影に俺は気づくこともなく、歩くのだった。余談だけど一夏はその後授業に遅刻。遅れた理由は知らない女子と話してたから、らしい。勿論出席簿の餌食になるのだった。

……ドンマイ。

◆◆◆

翌日。朝のＨＲと一限目を使って行われる全校集会。当たり前のことなんだけど、周りは女子、女子、女子。モテたいとかそういうことは思うんだけど、この状況は嬉しくない。クラスだって３０人くらいの中にポツンと男子２人。それが今は全校生徒となるから……

「それでは、生徒会長から説明をさせていただきます」

生徒会の人のアナウンスが流れると静かになる全校生徒。そして壇上には生徒会長が……って、アレ？　簪のお姉さんだよね……？

「さてさて、今年は色々と立て込んでいて挨拶がまだだったね。私の名は更識盾無。君達生徒の長よ。以後、よろしく」

性別関係なしに人を魅了するような笑みを浮かべる生徒会長さん。あちこちで熱のこもったため息が漏れたのがわかる。

「では、今月の一大イベントの学園祭だけど、今回に限り特別ルールを導入するわ。その内容というのは……」

そこで切って俺達にウインクしてくる会長さん。嫌な予感しかしないんだけど……

会長さんの合図でディスプレイに投影された文字を見て、血の気が引いた。一夏はというとこっちも引きつった顔で事態を把握しようとしていた。

「え、英治、大丈夫？」

俺の異常に気づいたシャルがのぞき込んでくる。だから俺はディスプレイを指すのだった。

「え、えっと、何アレ？」

「俺が知りたいよ……」

動揺しまくりの俺をよそに、生徒会長は告げるのだった。

「名付けて、『各部対抗織斑一夏、火野英争奪戦』！」

ああ、目眩が……。盛り上がる体育館と反比例するように俺は気を落とすのだった。どうしてこうなった。

「ルールは簡単。文化祭での催し物での投票で1位、2位の部活には織斑一夏、火野英治を入部させましょう」

女の子には似合わない雄叫びが体育館に響く。どこまでの盛り上がりかと言うと、秋季大会をあんなもんって言う人がいるくらい、かな。とりあえず今グリードが来ればとんでもない量のヤミーを作れんじゃないかな。

俺達の意思を無視して欲望渦巻く文化祭は幕を上げるんだろうなぁ。一言言うなら、その欲望、開放しないでください。

◆◆◆

放課後のＨＲ。クラスで文化祭にやることを決めることに。ところで投票が１位なのが部活じゃなくてクラスだったらどうなるんだ？　強制入部とかないのかな？　そうなら自分のクラスのを頑張れば……

「却下」

『えええええええええええー！！』

いけない、いけない。つい自分の考え事に集中してたな。一夏が却下って言ってたけど案は何があるんだ？

・織斑一夏＆火野英治のホストクラブ
・織斑一夏＆火野英治とツイスター
・織斑一夏＆火野英治とポッキーゲーム
・織斑一夏＆火野英治と王様ゲーム

ちょっとちょっと、どうしてこうなってるの？　却下だから却下！

「一体どうなってるんだ？　ほらシャルからも何か……」

「ね、ねえ英治。僕と、その、ポッキーゲームしない？」

モジモジと上目遣いで言うシャルは可愛いと思ったけど、けどさ。それも却下で。

「じゃあラウラ！　何か言ってよ！」

「む、ここで夫婦の中を深めるためにツイスターを……」

「それも却下」

黒板の方を見ると一夏は山田先生を必死で説得していた。

「え、えーと。私はポッキーのがいいと思いますよ……？」

何言ってるんですか！　先生は信じていたのに……

「じゃなくて、もっと、普通の。普通の意見を！」

「やれやれ仕方ないな。嫁のためだ」

そう言って意見を言おうとしたのはラウラ。俺のことを嫁って呼ぶことを訂正するのを忘れるほど頼もしく見えたのだった。

「メイド喫茶なんてどうだ」

え？

「客受けもいいし、飲食店では経費の回収ができる。確か、招待状の外部からの受け入れがあるのだろう？　それなら、休憩所としての需要があるはずだ」

理由もしっかりしていて確かにって納得もできるんだけど、何でメイド喫茶なんだ？

「ラウラ、衣装はまさか！」

隣のシャルが何かに気づいたみたいだけど、一体何だ。それよりもこの文化祭、不安でしかないなぁ……

ペアと全校集会と争奪戦（後書き）

カオスになりそうな原作5巻スタート。ちゃんと描き切れるかな……

アンケートですが、本話の投降をもって締め切ります。投票してくれた方、協力ありがとうございます。

ちなみに結果ですが、今日の夜１０時までに活動報告に載せようと思いますので、興味のある方はどうぞ。

それでは感想等お待ちしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3977v/

欲望の王と無限の空

2012年1月10日08時48分発行